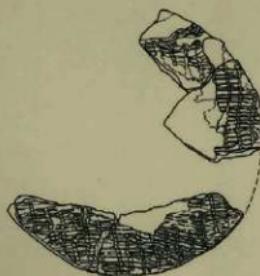


信濃町の埋蔵文化財

# 市道遺跡

## 発掘調査報告書

押型文土器と諸磽 b 式・c 式併行期の遺跡  
— 信濃ゴルフ俱楽部用地内の遺跡 —



2001

長野県信濃町教育委員会

信濃町の埋蔵文化財

# 市道遺跡

## 発掘調査報告書

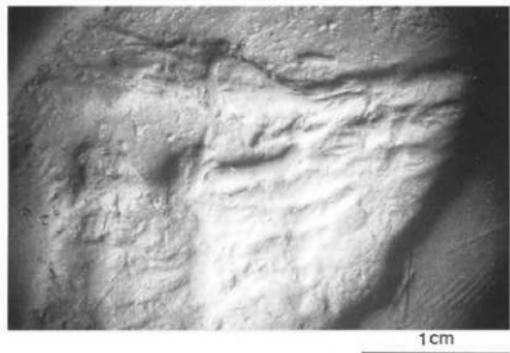
押型文土器と諸磯b式・c式併行期の遺跡  
—信濃ゴルフ俱楽部用地内の遺跡—

2001

長野県信濃町教育委員会



市道遺跡の繩文土器 (717) 桶文時代前期後半 (諸磯 b 式併行)



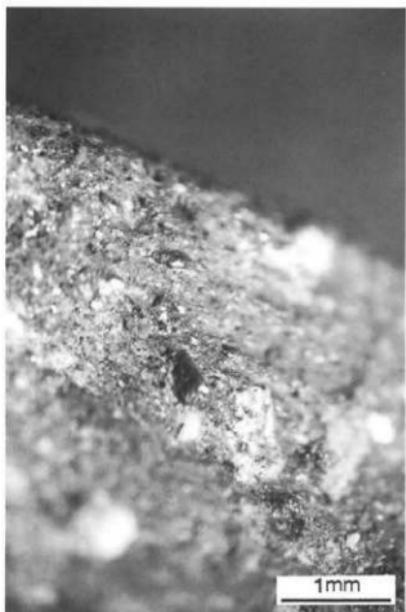
編布（モデリング）上部「布の端部」の顕微鏡写真



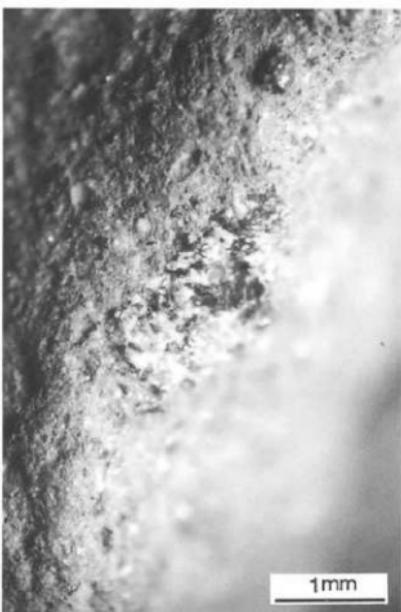
編布（モデリング）下部「織い部」の顕微鏡写真



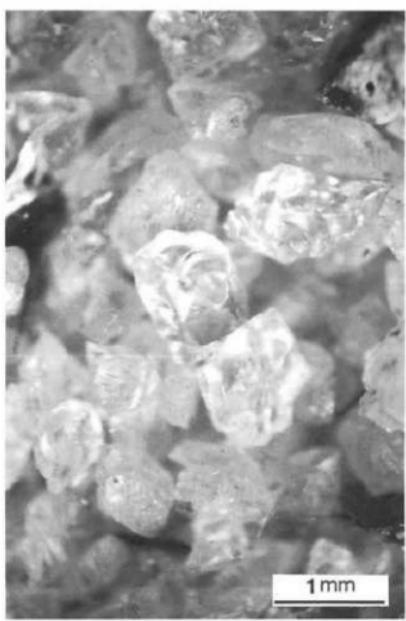
編布压痕の粘土によるモデリング



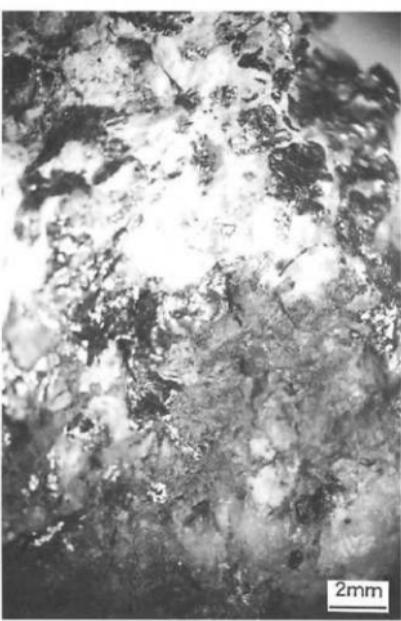
沢式土器（97）中の黒鉛（石墨）



沢式土器（99）中の飛騨片麻岩類



火山灰層中の水晶（高温型石英）  
長野県上水内郡三水村東柏原QB火山灰



飛騨片麻岩中の黒鉛（石墨）  
岐阜県吉城郡河合村天生鉱山



表裏縄文土器（367）中の水晶



格子目文土器（235）中の水晶



沢式土器（99）中の黒鉛（石墨）



沢式土器（18）中の飛騨片麻岩（黒雲母片麻岩）

# 序

信濃町は長野県の北の端にあり、黒姫山や野尻湖の豊かな自然に恵まれた高原の町です。江戸時代には北国街道の宿場町として栄え、俳人小林一茶のふるさととしても知られています。

野尻湖底では、昭和37年から40年間にわたって、ナウマンゾウとそれらを狩りしていた旧石器人類の遺跡の発掘が、全国から集まつた野尻湖発掘調査団の方々の手で進められてます。信濃町には173か所という大変多くの遺跡があり、高速道をはじめとする道路、建物などの建設にあたり、平成元年以降、毎年、多くの遺跡の発掘調査をしてまいりました。

さて、市道遺跡は、当町に計画、建設されることになりました信濃ゴルフ俱楽部の造成工事に先立つ事前調査によるものです。南隣の牟礼村とまたがる山地を開発する事業でしたが、この中に7か所の遺跡の存在がわかり、その内の3遺跡で信濃町が発掘調査をおこなうこととなりました。平成6年、7年の実質1年間という限られた日数の中で、膨大な面積がありましたので、信濃町としてはかってない大変な発掘作業となりました。

この結果、2万9千点近くの出土品があり、なかでも縄文時代の約8千年前の土器としては、長野県内でも代表的な遺跡の1つになるものです。また、熬漬作業の中で縄文時代前期の約5千年前以上の土器の底に、たいへん珍しい縞布（アンギン）の跡が付いているものが確認されました。わが国の布の起源をさぐる上でも、たいへん重要な資料となるものです。今回の調査、研究結果が、当町だけにとどまらず、全国の考古学研究や歴史の解明に役立つことがあれば幸いに存じます。

なお、この発掘調査および本報告書の刊行にあたりまして、多大なご協力、ご指導を賜った長野県教育委員会、長野県埋蔵文化財センター、牟礼村教育委員会、ならびに発掘調査に対し深いご理解とご協力を賜りました信濃ゴルフ俱楽部をはじめとする関係の皆様方に対し、心からお礼申し上げます。

信濃町町長  
大草 忠和

# 例　　言

1. 本書は平成6年度・7年度の信濃ゴルフ俱楽部建設工事にかかる市道遺跡ほかの発掘調査報告書である。

2. 調査は、(株)野尻レイクサイドリゾートから委託をうけた信濃町教育委員会が、平成6年10月3日から平成7年10月3日にかけて実施した。

整理作業は、平成6年12月よりはじめ、平成13年3月31日までにおこなった。

3. 本書は、調査によって確認された遺物とその出土状況を中心に、基礎資料を提示することに重点をおいた。

4. 本書は、信濃ゴルフ俱楽部建設にともなう信濃町分の報告書である。調査全般の経過等と信濃町分の調査の大部分を占める市道遺跡については、本書でとりあつかう。高山遺跡・清水久保遺跡・長山遺跡の遺構・遺物については、別冊で報告する。

5. 本書の図集・挿筆は、中村由克がおこなった。図集にあたっては、佐藤ユミ子の補助をうけた。

6. 調査によってえられた諸資料は、野尻湖ナウマンゾウ博物館で保管している。

出土資料の注記番号は、次のとおりである。

市道遺跡 94IT・95IT　　高山遺跡 94TK

清水久保遺跡 95SK　　長山遺跡 95NG

7. 発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関にご指導・ご援助いただいた。記して謝意を表する次第である（敬称略、五十音順）。

発掘調査：横山かよ子

長野県教育委員会文化課

幸札村教育委員会

純文土器：会田進、石原正敏、小笠原永隆、山口明、

綿田弘実

縷布压痕土器：尾関清子

## 図版縮尺

土器 1 : 2

剥片石器など 1 : 2

繊素材の石器など 1 : 2

## 写真図版縮尺

土器  $\frac{1}{2}$  ページもの 1 : 2

$\frac{1}{4}$  ページもの 1 : 3 ~ 1 : 4

剥片石器など 1 : 2

繊素材の石器など 1 : 5

# 目次

## 口絵写真

## 序

## 例　言

I 調査の経過と環境	1
1. 市道遺跡の発掘調査	1
1) 調査にいたる経過	1
2) 調査体制	2
3) 調査経過	3
4) 調査方法	5
A 調査区の設定と発揮方法	5
B グリッドの設定と呼称法	5
2. 遺跡の環境	10
1) 地質・地理的環境	10
2) 歴史的環境	10
II 市道遺跡の地形・地質と出土状況	17
1. 発掘地	17
1) 発掘地の状況	17
2) 発掘地の地形と地質	17
2. 遺物の出土状況	17
1) 調整池東斜面	17
A 遺物の出土状況	17
B 連構	21
2) 調整池のその他の場所	26
A 遺物の出土状況	26
B 連構	26
3) 管理道路部分	26
A 遺物の出土状況	26
B 連構	26
4) 17番ホール部分（ゴルフコース）	26
A 遺物の出土状況	26
3. 調整池東斜面における遺物の詳細分布	26
III 繩文土器	78
1. 繩文時代早期、押型文土器とそれに伴う土器	78
1) 押型文土器：山形文土器	78

A 縱位密接施文されるもの（立野式土器）	78
B 楠沢式土器・洪式土器	78
C 横位に帯状施文するもの、および横位に密接施文するもの	79
D 重複構成で密接施文するもの	79
2) 押型文土器：楕円文土器	79
A 楕円文を縦位密接施文するもの	79
B 織維を含む土器で、楕円文を縦位密接施文するもの	79
C 帯状施文するもの	80
D 横位に密接施文し、刺突文をともなうもの	80
E 横位密接施文するもの	80
F 重複構成で密接施文するもの	80
3) 無縫文様並列構成の押型文土器（異型押型文土器）	81
A 山形文と沈線文を組み合わせたもの	81
B 楕円文と山形文を組み合わせたもの	81
C 楕円文と複合鋸齒文を組み合わせたもの	81
D 楕円文と格子目文を組み合わせたもの	81
E 楕円文と沈線文を組み合わせたもの	81
F 楕円文と台形文を組み合わせたもの	81
G 楕円文に刺突文を組み合わせたもの	81
H その他	82
4) 格子目文土器	82
A 表裏に格子目文を施文するもの	82
B 帯状施文するもの	82
C 密接施文するもの	82
D 市松文が施されるもの	83
E 長方形の格子目文が施されるもの	83
F 格子目文で口縁部に刺突文を施すもの	83
5) 平行線文土器	83
A 表裏施文のもの	83
B 縱位を主体とした平行線文を密接施文する土器	83
6) 平行線文土器（いわゆる横状文）	84
7) 無文土器	84
8) 表裏繩文土器	84
A 単節繩文によるもの	84

B	無節縄文によるもの	85	2) 紋織文の土器	92	
C	異なる縄を組り合わせた原体を用いるもの	86	A	単節の縄文を原体とするもの	92
9)	縄文のみの土器	86	B	無節の縄文を原体とするもの	92
A	無節縄文によるもの	86	C	異なる縄を組り合わせた原体を用いるもの	93
B	単節縄文によるもの	86	D	底部に圧痕をもつ土器	93
C	異なる縄を組り合わせた原体を用いるもの	86	6.	縄文時代前期、諸磯 c 式併行の土器	93
10)	撚糸文土器	87	1) 大きめの棒状貼付文をつける土器	93	
A	表裏施文の撚糸文土器	87	2) やや細めで長い棒状張貼付文をつける土器	94	
B	縦位、斜位に施文した撚糸文土器	87	3) 結節浮線文を用いる土器	95	
C	網目状撚糸文で表裏施文のもの	88	4) 結節浮線文で渦巻文を描く土器	96	
D	網目状撚糸文土器のもの	88	5) 結節浮線文でレンズ状文を描く土器	96	
E	細密な撚糸文土を異方向に網目状に(?)		6) ヘラ切り浮線文を用いる土器	96	
施文のもの		88	7) 半隆起線文で渦巻文を描く土器	96	
11)	条文土器	88	8) 半隆起線文で平行線文を描く土器	97	
3.	縄文時代前期前半の土器	88	9) 結節沈線文を用いる土器	97	
1)	羽状縄文土器、斜縄文の土器	88	10) 集合沈線文を用いる土器	97	
4.	縄文時代前期、諸磯 b 式併行の土器	88	11) その他	97	
1)	沈線文系の土器	88	7.	縄文時代前期末～中期初頭の土器	98
A	弧線文が描かれるもの	88	1) 前期末の土器	98	
B	格子目文が描かれるもの	89	A	ヘラ切り沈線でレンズ状文を描く土器	98
C	木の葉文を描くもの	89	B	ヘラ切り沈線で渦巻文を描く土器	98
D	レンズ状の文様を描くもの	89	C	三角印刻文を用いる土器	98
E	平行沈線による横位及び縦位の区画中に		D	結節浮線文で爪形文を描く土器	98
曲線文を描くもの		E	平行沈線文で三角形の文様を描く土器	98	
2)	浮線文を凸線状に貼り付けた土器	90	2) 中期初頭の土器	98	
3)	縫孔土器	90	A	そうめん状の粘土紐を貼りつける土器	98
A	文様の施された縫孔土器	90	B	ヘラ切り沈線文を用いる土器	98
B	無文の縫孔土器で、丁寧なナテ調整によ		C	平行沈線文を用いる土器	98
り光沢をもつもの		IV	縄文時代の石器	99	
4)	他の土器	91	1. 剥片石器	99	
A	指頭圧痕や刺突による点列文が描かれる		1) 石薙	99	
土器		2) 石槍	99		
B	太い隆線を貼り付けた土器	91	3) 石匙	99	
C	細い隆線を作り羽状縄文土器	91	4) スクレイパー	99	
5.	縄文時代前期、諸磯 b 式併行の縄文の		5) クサビ形石器	99	
みの土器		6) ヘラ形石器	99		
1)	羽状縄文土器	91	7) 石鎌	100	
A	単節の縄文を原体とするもの	91	8) 石斧	100	
B	無節と単節の縄文を原体とするもの	92	2. 装飾品	100	
C	無節の縄文を原体とするもの	92			

<b>V 成果と課題</b> .....	102	
1. 市道遺跡の遺物出土状況からみた土器 の層位区分と遺跡の性格 .....	102	
2. 縄文時代早期押型文系土器群の様相 .....	102	
1) 文様、胎土による区分 .....	102	
2) 「立野式土器」にともなう土器群 .....	115	
3) 押型文系土器群の4段階区分 .....	115	
4) 地質学と考古学の両面から見た沢式土器の 確認 .....	116	
5) 縄文保式土器と「森ノ神式土器」の区分 .....	119	
3. 縄文時代前期の土器群の様相 .....	120	
1) 諸縄b式併行の土器群 .....	120	
2) 諸縄c式併行の土器群 .....	121	
<b>3. 磚素材の石器</b> .....	100	
1) 特殊磨石 .....	100	
2) 磨石 .....	100	
3) 凹石 .....	100	
4) 扱石 .....	101	
5) スタンプ状石器 .....	101	
6) 石皿 .....	101	
<b>4. 編布圧痕の存在</b> .....	126	
<b>VI まとめ</b> .....	130	
<b>引用文献</b> .....	132	
<b>SUMMARY</b> .....	134	
<b>図版</b> .....	135	
市道遺跡の縄文土器	図版1～図版92 .....	136
市道遺跡の石器	図版93～図版106 .....	228
市道遺跡出土の縄文土器一覧 (1)～(20) .....	242	
市道遺跡出土の石器一覧 (1)～(3) .....	262	
<b>写真図版</b> .....	265	
遺跡・発掘	P L 1～P L 9 .....	266
土器	P L 10～P L 41 .....	275
石器	P L 42～P L 45 .....	307
<b>報告書抄録</b> .....	312	

## 図 目 次

図1 信濃ゴルフ俱楽部裏塗跡・位置図	6
図2 市道遺跡・高山遺跡の調査地の地形	7
図3 市道遺跡の調査地の地形	8
図4 市道遺跡・高山遺跡の調査位置図	9
図5 市道遺跡・高山遺跡付近の「事計町」と調査区画	9
図6 信濃町中央部の地質図	11
図7 信濃町の遺跡分布図	13
図8 市道遺跡調整池東斜面における地質柱状図	18
図9-1 信濃町福附市道における地質柱状図（信濃ゴルフ俱楽部E調整池南壁）	19
図9-2 信濃町福附市道における地質柱状図(2)	20
図10 市道遺跡調整池東斜面におけるグリッドごとの出 土点数	21
図11 市道遺跡調整池東斜面における遺物分布図（全点 プロット）	22
図12 市道遺跡調整池における遺構(1)	23
図13 調整池における遺構(2) 落し穴	23
図14 高山遺跡(18番ホール；左), 市道遺跡(17番ホー ル；右)の試掘位置図	23
図15 市道遺跡管理道路における遺構分布図	24
図16 市道遺跡管理道路における遺物分布図	24
図17 市道遺跡管理道路における遺構 落し穴	25
図18 繩文上器の分布(1) 早期の土器(押型文・無文・ 表裏縄文をあわせた、平行線文は入ってない)	28
図19 繩文土器の分布(2) 早期・押型文土器(山形文)	28
図20 繩文土器の分布(3) 早期・押型文土器(縦円文)	29
図21 繩文土器の分布(4) 早期・押型文土器(格子目文)	29
図22 繩文土器の分布(5) 早期・押型文土器(平行縞文)	30
図23 繩文土器の分布(6) 早期・表裏縦文土器	30
図24 繩文土器の分布(7) 早期・縄文土器	31
図25 繩文土器の分布(8) 早期・撚糸文土器	31
図26 繩文土器の分布(9) 早期・無文土器	32
図27 繩文土器の分布(10) 前期・諸磯b式併行の土器 (縁孔土器をのぞく)	32
図28 繩文土器の分布(11) 前期・諸磯b式併行の土器, 縁孔土器	33
図29 繩文土器の分布(12) 前期・諸磯b式併行の縄文 のみの上器	33
図30 繩文土器の分布(13) 前期・諸磯c式併行の上器	34
図31 繩文土器の分布(14) 前原末～中期初頭の土器	34
図32 石器の分布(1) 石鏃、石槍、石砲、スクレイバー、 クサビ形石器、ヘラ形石器、石錐、石斧、装飾品	35
図33 石器の分布(2) 特殊磨石、磨石、凹石、延石、ス タンプ状石器、石皿	35
図34 石器の分布(3) 石核・裂片	36
図35 市道遺跡調整池東斜面におけるグリッド別遺物分 布図の配置	36
図36 グリッド別の遺物分布図(1.2)	37
図37 グリッド別の遺物分布図(3)	38
図38 グリッド別の遺物分布図(4)	39
図39 グリッド別の遺物分布図(5)	40
図40 グリッド別の遺物分布図(6)	41
図41 グリッド別の遺物分布図(7)	42
図42 グリッド別の遺物分布図(8.9)	43
図43 グリッド別の遺物分布図(10)	44
図44 グリッド別の遺物分布図(11)①	45
図45 グリッド別の遺物分布図(11)②	46
図46 グリッド別の遺物分布図(12.13)	47
図47 グリッド別の遺物分布図(14)	48
図48 グリッド別の遺物分布図(15)①	49
図49 グリッド別の遺物分布図(15)②	50
図50 グリッド別の遺物分布図(16)	51
図51 グリッド別の遺物分布図(17)①	52
図52 グリッド別の遺物分布図(17)②	53
図53 グリッド別の遺物分布図(18)①	54
図54 グリッド別の遺物分布図(18)②	55
図55 グリッド別の遺物分布図(19)①	56
図56 グリッド別の遺物分布図(19)②	57
図57 グリッド別の遺物分布図(20.21)	58
図58 グリッド別の遺物分布図(22)①	59
図59 グリッド別の遺物分布図(22)②	60
図60 グリッド別の遺物分布図(23)①	61
図61 グリッド別の遺物分布図(23)②	62
図62 グリッド別の遺物分布図(24)	63
図63 グリッド別の遺物分布図(25)	64
図64 グリッド別の遺物分布図(26)①	65

図65 グリッド別の遺物分布図(26)②	66
図66 グリッド別の遺物分布図(26)③	67
図67 グリッド別の遺物分布図(27)	68
図68 グリッド別の遺物分布図(28)	69
図69 グリッド別の遺物分布図(29)①	70
図70 グリッド別の遺物分布図(29)②	71
図71 グリッド別の遺物分布図(30)	72
図72 グリッド別の遺物分布図(31)①	73
図73 グリッド別の遺物分布図(31)②	74
図74 グリッド別の遺物分布図(32)	75
図75 グリッド別の遺物分布図(33)	76
図76 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(1)	103
図77 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(2)	104
図78 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(3)	105
図79 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(4)	106
図80 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(5)	107
図81 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(6)	108
図82 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(7)	109
図83 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(8)	110
図84 上器の接合関係	111
図85 市道遺跡の主な土器(1) 繩文時代早期	113
図86 市道遺跡の主な土器(2) 繩文時代中期	114
図87 脱土に含まれる砂粒と組織の混入量の比較	118
図88 飛騨片麻岩と黒鉛鉱床の分布	118
図89 市道遺跡の主な土器(3) 繩文時代前期	122
図90 市道遺跡の主な土器(4) 繩文時代前期	123
図91 市道遺跡の主な土器(5) 繩文時代前期	124
図92 古道遺跡の主な土器(6) 繩文時代前期	125
図93 麻布压痕の実測図(717)	128
図94 麻布压痕の粘土モデリングの実測図	129
図版1 市道遺跡の縄文土器(1)	136
図版2 市道遺跡の縄文土器(92)	227
図版3 市道遺跡の石器(1)	228
図版106 市道遺跡の石器(14)	241

## 表 目 次

表1 信濃町における遺跡調査の歴史(1)	3
表2 信濃町における遺跡調査の歴史(2)	4
表3 信濃町の遺跡一覧(1)	14
表4 信濃町の遺跡一覧(2)	15
表5 信濃町の遺跡一覧(3)	16
表6 市道遺跡の出土品数	77
表7 市道遺跡出土の土器点数	77
表8 市道遺跡出土の石器点数	77
表9 市道遺跡のグリッド別出土品数	77
表10 土器胎土中の砂粒・繊維の混入量	112
表11 縄文前期以降の土器胎土の砂粒と繊維の混入量	112
表12 市道遺跡出土の縄文土器一覧(1)	242
表31 市道遺跡出土の縄文土器一覧(20)	261
表32 市道遺跡出土石器一覧(1)	262
表34 市道遺跡出土石器一覧(13)	264

# I 調査の経過と環境

## 1 市道遺跡の発掘調査

### 1) 調査にいたる経過

信濃ゴルフ俱楽部は信濃町大字大井から牛丸村大字古町にかけての駒籠山麓の丘陵地を活用して計画されたゴルフ場である。

平成3年11月14日にゴルフ場予定地内の埋蔵文化財の保護を目的として、長野県教育委員会・牛丸村教育委員会、および信濃町教育委員会による現地踏査をおこなった。その結果、信濃町内では5地点、牛丸村で8地点の合計13地点について平成4年度に試掘確認調査を実施することが決定した。

平成4年12月には、牛丸村教育委員会と信濃町教育委員会の共同で、埋蔵文化財の有無を調べる試掘確認調査を実施した。調査は13地点で合計138か所の試掘グリッドをすべて手掘りでおこなった。その結果、7地点が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）であることが判明した。

信濃町では、市道遺跡（縄文）、高山遺跡（縄文・平安）、長山遺跡（縄文）、清水久保遺跡（縄文・平安；一部牛丸村にまたがる）、牛丸村では、西郷川遺跡（縄文・中世以降）、宮浦A遺跡（旧石器）、宮浦B遺跡（旧石器）が、新発見の遺跡あるいは範囲が拡大することが確認された。

平成6年5月25日には、野尻レイクサイドリゾート株式会社と長野県教育委員会文化課、牛丸村教育委員会、および信濃町教育委員会の4者で、ゴルフ場建設にあたっての遺跡保護協議をおこなった。発掘調査は、平成6年度からおこなうこと、市道遺跡の調整池と作業用道路などを優先して着手することなどが話し合われた。

平成6年10月3日付で野尻レイクサイドリゾート（株）と信濃町が2500m<sup>2</sup>の平成6年度埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結した。

信濃町教育委員会では、ただちに発掘調査の準備に着手し、10月11日には道路部分の発掘調査を開始した。10月27日には、市道遺跡の調整池予定地の本格的な発掘調査に着手した。

平成7年2月24日には、4者で平成7年度の事業予定の協議をおこなった。6年度の調査結果をふまえて、会

社集では多くのコースの掘削等ができるだけ避け、許容範囲内での盛土施工と変更すること、盛土施工部分についても試掘調査はおこなうこと、縄文時代前期より新しい遺跡については、遺構確認をおこなって発掘地点をしほり込み、調査面積の軽減をはかること、発掘調査は平成7年度中に終了するよう県、両町村で連絡を密にして努力することなどが話し合われた。

平成7年4月1日付で、調査面積10,000m<sup>2</sup>の平成7年度発掘調査委託契約を締結した。旨解けを待って、4月から調査を再開し、同年10月3日にはすべての現場作業を終了した。

平成6年・7年度は、信濃町では高速道建設をひかれアクセス道路等の公共事業があいつぎ、町教育委員会が担当する埋蔵文化財の発掘調査は膨大な量を抱えていた時期であった。このため、信濃ゴルフ俱楽部用地内の遺跡調査は、大変な困難を極めたが、長野県教育委員会文化課の指導のもと、なんとか市道遺跡をはじめとする大規模な遺跡調査を遂行することができた。

整理作業は、平成6年度から冬期間にすすめられたが、本格的に着手したのは、平成8年度から10年度までである。その後、遺物の検討および報告書作成を平成11年度から13年度にかけて実施した。

### 2 調査体制

市道遺跡等の信濃ゴルフ俱楽部用地内の発掘調査は、信濃町教育委員会の直営事業とし、組織は以下のとおりである。

#### 発掘調査（平成6年・7年度）

調査主体者 信濃町教育委員会

教育長 片山 幸威

事務局 総務教育課

課長 水井 久（6年度）

若月 美雄（7年度）

係長 松木 武夫

係 高橋 哲

文化財担当者 渡辺 哲也

調査担当者 中村 由克  
 担当職員 高橋 哲  
 調査参加者 池田か己子 池田せい子 井沢キヨエ  
     石田 尋子 石田 正則 今井美枝子  
     梅木 晓久 梅木ちかえ 大草あや子  
     岡田 京子 小日向キヨ子 小日向 一  
     片山 トヨ 木下 繁栄 木下 浩一  
     木村キミ子 小坂義み江 小林 孝子  
     小林 正道 五味澤敦子 佐藤 清子  
     佐藤 正義 佐藤 秀子 佐藤ユキ子  
     佐藤ユミ子 佐藤 義信 篠田 正枝  
     渋沢ユキ子 関塚 恒 高野 司  
     竹内 功 竹内 晴江 竹内 モト  
     竹内ユキ子 横崎千代子 玉井 真生  
     戸田 秀則 戸谷田千代子 永原シズエ  
     永原 忠利 中村 和江 中村フサ子  
     畠山瑞美子 万場 弘美 東 黃  
     藤原伊久栄 松岡さとみ 松沢 友二  
     丸山 修 丸山 篤夫 水澤 長元  
     宮下 和也 宮下 博文 森 弘美

遠跡測量業務 (有)写真測図研究所  
 調査協力 柳沢 久基 花岡 佳二 総貢 善大  
     小池 美治

整理作業・報告書作成 (平成 8 年~13 年度)  
 調査主体者 信濃町教育委員会  
 教育長 片山 幹威 (8 年 10 月~)  
     小林 一盛 (8 年 10 月~11 年 1 月)  
     小林 豊雄 (11 年 2 月~)  
 事務局 総務教育部課  
 課長 北村 敦博 (12 年 3 月)  
     佐藤謙一郎 (12 年 4 月~)  
 係長 松木 武夫 (9 年 3 月)  
     北村 恭一 (9 年 4 月~13 年 4 月)  
     丸山佳代子 (13 年 4 月~)  
 係 高橋 哲 (9 年 3 月)  
     池田 昭博 (9 年 3 月~12 年 3 月)  
 文化財担当者 渡辺 哲也  
 調査担当者 中村 由克  
 担当職員 高橋 哲 (現場、会計、トレース)  
     池田 昭博 (会計、リスト)

整理作業参加者  
 佐藤ユミ子 (土器、石器実測、図版作成、編集補助)  
 今井美枝子 (土器、石器、トレース、図版作成)  
 万場 弘美 (土器折本、石器、リスト作成)  
 長谷川悦子 (土器、石器、図版作成)  
 横山真理子 (土器、石器、リスト作成)  
 川端 純花 (土器実測)  
 なお、石器実測の一部は(株)アルカに委託した。

発掘調査、整理では、例言でお名前をあげた皆様のほか、の方々より多大なご指導、ご援助をいただいた。赤塙 仁、阿部恭平、荒井村江、石井陽子、市川桂子、市村勝巳、上原真昭、大竹憲昭、岡本東三、織笠 昭、角張淳一、黒岩 隆、近藤 祐、近藤洋一、小林 孝、竹内俊道、澁沢秀一、谷 和隆、堤 隆、德永哲秀、中沢道彦、中島英子、中村敦子、野澤就一、八賀哲夫、鶴口昇一、松井 朗、翠川泰弘、宮下健司、百瀬新治、吉朝則富、渡辺哲也、岐阜県文化財保護センター、長野県埋蔵文化財センター、清見村教育委員会、古川町教育委員会、十日町市博物館、十日町市アンギン伝承会

### 3) 調査経過

#### 高山・市道遺跡

##### 平成 6 年度

10月 7 日 高山遺跡の道路部分 表土剥ぎ開始  
 10月 11 日 高山遺跡の道路部分 発掘調査着手  
 10月 14 日 重機による表土剥ぎ  
 10月 17 日 5 か所試掘  
 10月 18 日 遺構 (落し穴) 発掘、調査  
 10月 24 日 遺構の実測・記録  
 10月 27 日 市道遺跡の調整池部分 発掘着手  
 10月 28 日 調整池部分 重機による表土剥ぎ  
 11月 1 日 道路・調整池の斜面部分 発掘開始  
     繩文土器・石器が大量出土  
     調整池の斜面部分 重機による表土剥ぎ  
     牟礼村西博川遺跡の縄文記録 (実測の応援)  
 11月 8 日 5 m × 5 m の杭打ち  
 11月 9 日 信濃町教育委員 市道遺跡の視察  
 11月 11 日 遺物測量開始  
 11月 21 日 斜面下部 発掘開始  
 11月 27 日 初雪作業難航

表1 信濃町における遺跡調査の歴史(1)

年 度	野尻湖の発掘	信濃町の発掘	高遠道関連の発掘	おもなできごと
1948(昭23)	ナウマンゾウの化石発見			
1953(昭28)	杉久保遺跡の石器、旧石器と判断			
1958(昭33)	仁之倉遺跡(開墾)			
1962(昭37)	古野尻湖発掘始まる 第1次野尻湖発掘	杉久保遺跡		ナウマンゾウ、オオツノシカ化石を発見
1963(昭38)	第2次野尻湖発掘	伊勢見山遺跡(国学院大学) 杉久保遺跡		野尻湖発掘 C14年代測定と花粉分析による ウルム水期の確認
1964(昭39)	第3次野尻湖発掘	杉久保遺跡		はじめて石器(薄片)を発見
1965(昭40)	第4次野尻湖発掘	杉久保遺跡、琵琶島遺跡		ナウマンゾウの頭骨の一部を発見
1966(昭41)		杉久保遺跡(駐車場)		
1967(昭42)		杉久保遺跡(町道)		
1973(昭46)	第5次野尻湖発掘			「月と星」の発見
1974(昭49)	74年3月湖底調査 74年10月仲町調査			
1975(昭50)	第6次野尻湖発掘			ビーナス像(?)の発見
1976(昭51)	第1回陸上発掘(仲町)			
1977(昭52)		仲町(水道工事)		
1978(昭53)	第7次野尻湖発掘			ナウマンゾウの頭骨を発見
1979(昭54)	第2回陸上発掘(仲町)			黒姫駅でナウマンゾウの牙を発見 仲町遺跡で幾文草創期の土壙発掘 台形形状のナイフ形石器発見
1981(昭56)	第8次野尻湖発掘			「ヤリ状木器」骨製クレイバーの発見 2.4mのナウマンゾウの牙発見
1982(昭58)	萬3回陸上発掘(仲町向新田)			陸續文士跡の発見
1984(昭60)	第9次野尻湖発掘			キルサイトの確認
1985(昭60)	第4回陸上発掘(仲町向 新田、萬月台、賀ノ木)	大久保南遺跡(土取り)		向新田遺跡で椎石層文化確認
1987(昭62)	第10次野尻湖発掘			骨製クリーヴァー発見
1988(昭62)	第5回陸上発掘(賀ノ木)			糠群と配石を伴う生活面を確認
1989(平1)		☆教育委員会の調査始まる 丸谷地遺跡(町道) 大通下遺跡(町道)		丸谷地遺跡で平安時代の住居址を発掘 灰軸陶器、錫などが出土
1990(平2)	第11次野尻湖発掘	大道下遺跡(会社事務所) 上ノ原遺跡(開拓) 杉久保遺跡(町営トレイ) 一里塙遺跡(町道) 丸谷地遺跡(町道)		大道下遺跡でナウマンゾウの足跡化石を確認 上ノ原遺跡で5基が並ん石圓炉を発見
1991(平3)	第6回陸上発掘	賀ノ木遺跡(保養所) 東裏遺跡(町道) 役屋敷遺跡(古跡) 赤川遺跡(国道18号) 辻尾遺跡(工場)		陸上発掘でナウマンゾウの化石発見
1992(平4)		賀ノ木遺跡(保養所) 東裏遺跡(町道) 役屋敷遺跡(古跡) 赤川遺跡(国道18号) 辻尾遺跡(工場)		賀ノ木遺跡で馬鹿垂製石斧4点や特異な尖頭器を発見
1993(平5)	第12次野尻湖発掘	東裏遺跡(特別養護老人ホーム) 東裏遺跡(宅地造成) 上ノ原遺跡(町道) 寺無遺跡(町道) 西岡B遺跡(宅地造成) 七ツ原遺跡(農道)	古高遠道建設に伴う発掘調査始まる 日向林B遺跡 七ツ原遺跡 東裏遺跡 賀ノ木遺跡 普光田遺跡	日向林B遺跡で石斧41点出土 上ノ原遺跡で杉久保型ナイフ形石器多数出土 東裏遺跡(可) 猿戸内系の石器群が出土 東裏遺跡(係) で「裂片尖頭器」出土
1994(平6)	第7回陸上発掘	東裏遺跡(町道) 七ツ原遺跡(農道) 三向林B遺跡(宅地) 四ノ木遺跡(宅地) 北ノ原B遺跡(町道) 山根遺跡(広域農道) 高山遺跡(ゴルフ場) 市道遺跡(ゴルフ場)	七ツ原遺跡 日向林B遺跡 大平B遺跡 裏の山遺跡 東裏遺跡 上ノ原遺跡 賀ノ木遺跡 西岡A遺跡	陸上発掘で野尻湖文化の石器多数発見 賀ノ木遺跡(廣) で砾石8点出土 山根遺跡で赤土器が多数出土

表2 信濃町における遺跡調査の歴史（2）

1995(平7)		大久保南遺跡(県道) 上ノ原遺跡(ガソリンスタンド) 上ノ原遺跡(消防署) 後屋敷遺跡(急斜面対策) 山根遺跡(広域農道) 市道遺跡(ゴルフ場) 清久保遺跡(ゴルフ場) 上ノ原遺跡(県道) 上ノ原遺跡(宅地)	七ツ堀遺跡 日向林B遺跡 東高遺跡 大久保南遺跡 上ノ原遺跡 黒ノ木遺跡 西向A遺跡 鹿光山B往瀬跡	大久保南遺跡(県)で黒摩石の石核がまとまって出土 市道遺跡で縄文土器など24,000点以上出土 星光山莊遺跡で御子奉型石斧など出土 上ノ原遺跡(町)で、潟戸内系の石器が多数出土
1996(平8)	仲町遺跡、立ヶ鼻遺跡で地質調査	上ノ原遺跡(県道) 吹野原遺跡(広域農道) 山根遺跡(広域農道) 大久保南遺跡(県道) 七ツ堀遺跡(県道) 大庭下遺跡(埋め立て) 東高遺跡(町道)	黒ノ木遺跡	上ノ原遺跡で潟戸内系石器群が2つの地層から出土 次野原A遺跡で敲石群出土 山根遺跡で発生中期の住居址が出土 大道下遺跡で縄文早居の石器が多数出土
1997(平9)	第13次野尻湖発掘 仲町遺跡、立ヶ鼻遺跡で地質調査	吹野原 A 遺跡(広域農道) 上ノ原遺跡(県道) 黒ノ木遺跡(ガスパイプ) 東高遺跡(町道) 上ノ原遺跡(町道) 雁月台遺跡(店舗) 後屋敷遺跡(駐車場)		上ノ原遺跡で砾石と石斧等がおかれた状態で出土 東高遺跡で船戸内系の石器群が出土 照月台遺跡で古手の杉久保型ナイフと小形の石器群が出土 吹野原 A 遺跡で大型の石核が出土
1998(平10)	第8回海上発掘	大久保南遺跡(個人住宅) 上山島 A 遺跡(県道) 針ノ木遺跡(町道) 丸谷寺(工場)		大久保南遺跡で基部加工のナイフ形石器が出土 丸谷寺遺跡で平安時代の集落を複数発掘、縄文早居土器が多数出土
1999(平11)		仲町(個人住宅) 吹野原 A 遺跡(広域農道) 仲町遺跡(県道18号) 東高遺跡(町道)	☆国道18号バイパスに伴う発掘調査始まる 黒ノ木遺跡 照月台遺跡 川久保遺跡	照月台遺跡で墓の可能性のある土壙を複数発掘 吹野原 A 遺跡と仲町遺跡で石刃製石器群が出土 川久保遺跡で弥生土器が多数出土
2000(平12)	第14次野尻湖発掘	吹野原 A 遺跡(広域農道) 仲町遺跡(県道18号) 仲町遺跡(店舗)	仲町遺跡	仲町遺跡で細石刃文化の生活面、オオツノシカの足骨化石を複数、縄文草創期の土器が多数出土
2001(平13)		仲町遺跡(国道18号) 後屋敷遺跡(史跡整備)	仲町遺跡 吹野原遺跡(県道)	仲町遺跡でナウマンゾウの足跡を多数確認、石器出土 オオツノシカの臼齒化石とナイフ形石器が出土

11月29日 調整池斜面北側 発掘開始

5月31日 調整池底部 重機による深掘り

12月14日 6年度作業終了

地層観察

発掘面をブルーシートで保護。

斜面南側 重機による表土剥ぎ

## 平成7年度

4月10日 7年度現場作業開始

6月1日 18番ホール(高山遺跡) 試掘トレンチ

市道遺跡調整池斜面下部 発掘調査

発掘開始

4月13日 調整池斜面南部 発掘調査

6月14日 17番ホール(市道遺跡) 発掘終了

4月21日 県教委市村勝巳指導主事の現地指導

6月16日 17番ホール 遺物・地形測量

4月25日 運搬調査及び杭打ち開始

17番ホール 引渡

4月28日 調整池斜面北側 地形測量

6月21日 南側の沢掘上げ

斜面下部及び南部・北部 発掘調査

遺構発掘完了 写真撮影

5月10日 18番ホール(高止遺跡)

6月23日 18番ホール(高山遺跡) 試掘トレンチ

重機による1.5m幅の試掘

発掘終了 引渡

5月16日 18番ホール道路8m分 試掘終了

6月27日 調整池斜面抜幅部分 重機による表土剥ぎ

17番ホール(市道遺跡) 試掘開始

発掘開始

5月17日 17番ホール 試掘終了

市道遺跡の人員縮小 清水久保遺跡に移動

6月30日 調整池斜面抜幅部分 壁面清掃 観察

7月1日 調整池斜面抜幅部分 調査終了

- 7月6日 調整池壁面の地質柱状図 完成
- 7月7日 調整池の地形・範囲測量 調査終了  
調整池引渡し、市道遺跡現場事務所を一時閉鎖
- 9月14日 市道遺跡現場事務所を再開
- 9月18日 市道遺跡の発掘開始
- 9月20日 調整池南壁の地質柱状図作成（信州大学理学部石井陽子さん）
- 9月25日 市道遺跡の管理道路部分 重機による表土剥ぎ 発掘着手
- 10月3日 遺構（落し穴）の清掃 写真撮影  
発掘作業終了 管理道路引渡  
ゴルフ場関連の発掘現場作業をすべて終了

#### 清水久保遺跡・長山遺跡

平成7年度

- 6月5日 長山・清水久保遺跡重機による表土剥ぎ  
長山遺跡の発掘作業は牛丸村に委託  
清水久保遺跡の牛丸村部分については信濃町で分担することを決定
- 6月28日 清水久保遺跡 発掘着手
- 7月19日 焼土を確認、遺構の分布を確認
- 7月24日 平安時代の堅穴住居址 発掘開始  
トレンチ試掘 拡張部分発掘（住居址）
- 8月9日 住居址2の発掘（ベルト）  
牛丸村長山遺跡 発掘現場の見学
- 8月11日 杭打ち
- 8月26日 住居址確認作業
- 8月30日 遺物測量 自然礫集中部 杭打ち  
遺構周辺 自然礫周辺の写真撮影
- 9月2日 地形測量 焼土範囲測量
- 9月5日 北側頂上の住居址（1号住居址）発掘完了
- 9月6日 焼土部分トレンチ調査開始  
1号住居址 遺構測量
- 9月8日 1号住居址 遺構実測 炉部分の発掘  
2号住居址 写真撮影 测量  
3号住居址 空堀
- 9月12日 1号・2号・3号住居址及び各試掘溝の写真撮影  
調査終了 清水久保遺跡の引渡

#### 4) 調査方法

##### A 調査区の設定と発掘方法

平成4年度の信濃町教育委員会による試掘調査の結果、市道遺跡の範囲が確認された。それに基づき、遺跡中心部の高台は緑地として工事範囲からははずされたが、南側にゴルフコースと管理用道路が、また西側の谷地に調整池が設置されることになった。これらの場所が発掘対象地となった。

また、高山遺跡についても、同様に遺跡の範囲が推定され、その中に含まれるゴルフコースと管理用道路の部分が、発掘対象地となった。

市道遺跡の調整池は最初の試掘によって、縦文時代の遺物が大量に出土する東側斜面部分は全面発掘とし、その他の部分は試掘確認をおこなうこととした。市道遺跡の管理用道路については、試掘調査で遺物遺構が多かったので、全面発掘とし、それ以外の部分は試掘確認となつた。試掘確認をおこなう場所は、重機のバケット2つ分で、約1.5m幅を基準に、コース、道路の延長方向に溝をほり、遺物包含層準は手掘りで調査をおこなつた。

なお、各地点ごとの発掘面積は以下のとおりである。

調整池	1310m <sup>2</sup>	調整池内試掘	190m <sup>2</sup>
管理道路	600m <sup>2</sup>	17番ホール試掘	540m <sup>2</sup>
（低地）	360m <sup>2</sup>	（合計）	3,000m <sup>2</sup>

##### B グリッドの設定と呼称法

グリッドの設定にあたっては、国家座標を基準として、長野県埋蔵文化財センターによるグリッド設定と整合性をもたせる意味で、大区分をおこなつた。市道遺跡、高山遺跡の全体がカバーできる400m×600mの範囲を、200m×200mの1区画としてI~VI区を設定した。

200mの大区画は、40m×40mの25区画に分割し、北西から南東へAからYまでの大文字アルファベットを用いた。さらに、40mの中区画は、5m×5mの64区画に細分し、西から東にAからH、北から南に1から8の番号を付し、「A1」といった小区画名をつけた。

したがって、市道遺跡の中心的な調査地となった調整池東壁部分は、II H、II M、II R、II G、II L、II Q区に属す合計68グリッドである。

なお、発掘現場において5m単位の小区画で杭打ちして発掘・記録・測量したのは、遺物の集中地で、それ以外の地域は大ないし中区分の杭を基に調査をすすめた。

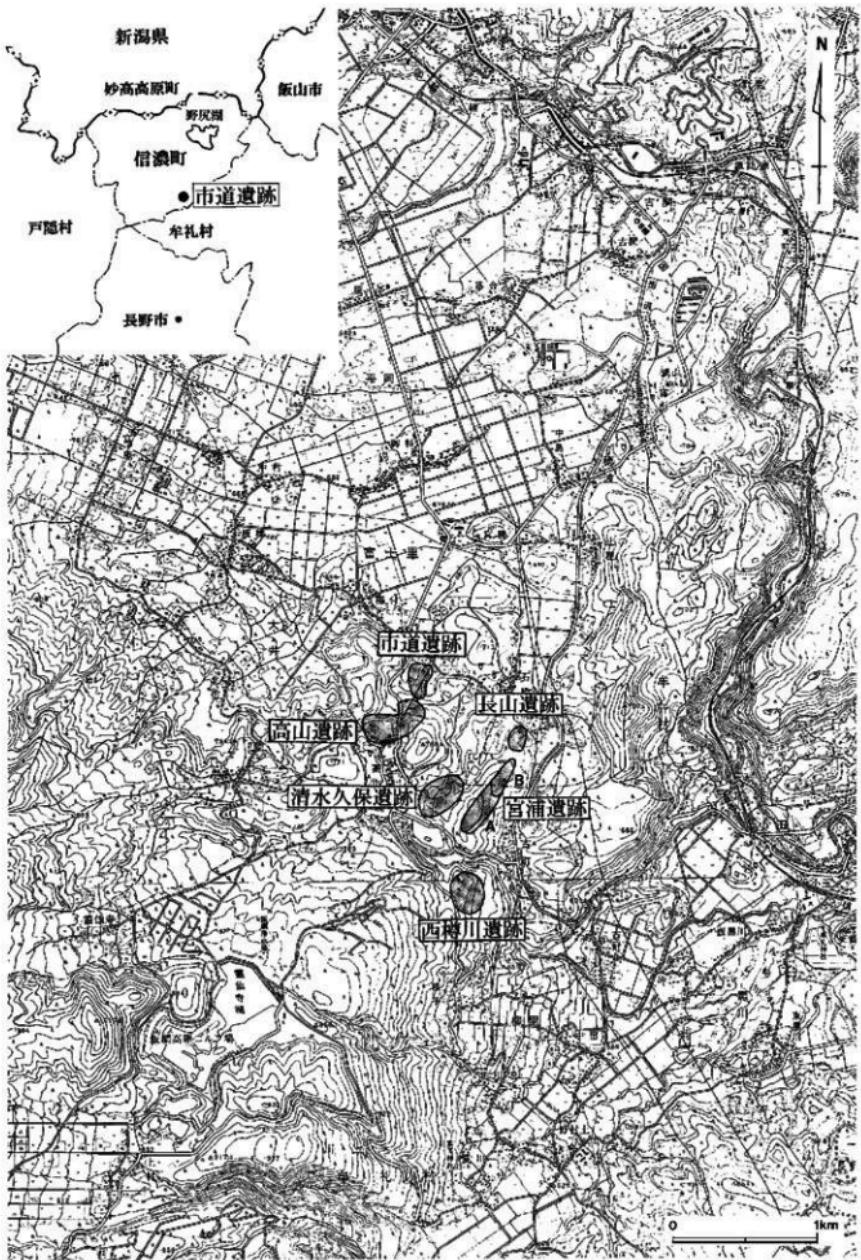


図1 信濃ゴルフ俱楽部関連遺跡・位置図

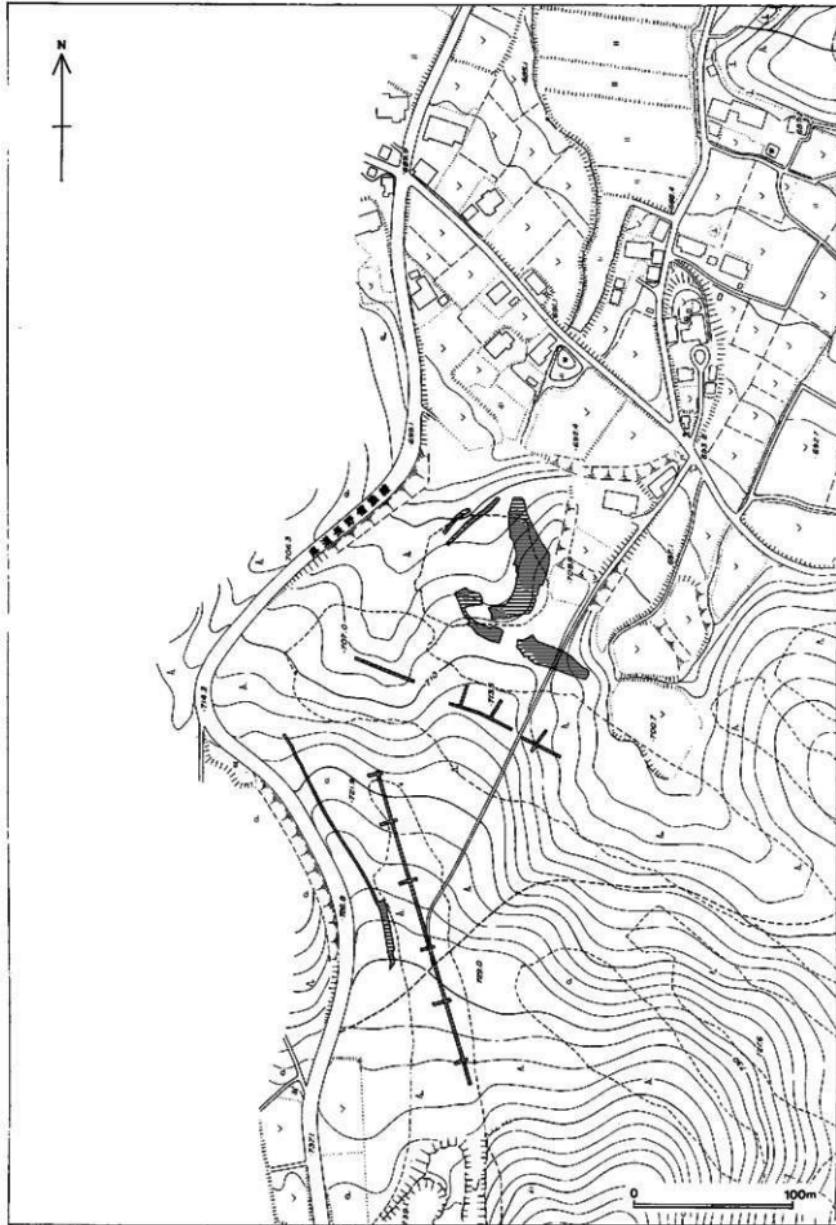


図2 市道遺跡・高山遺跡の調査地の地形

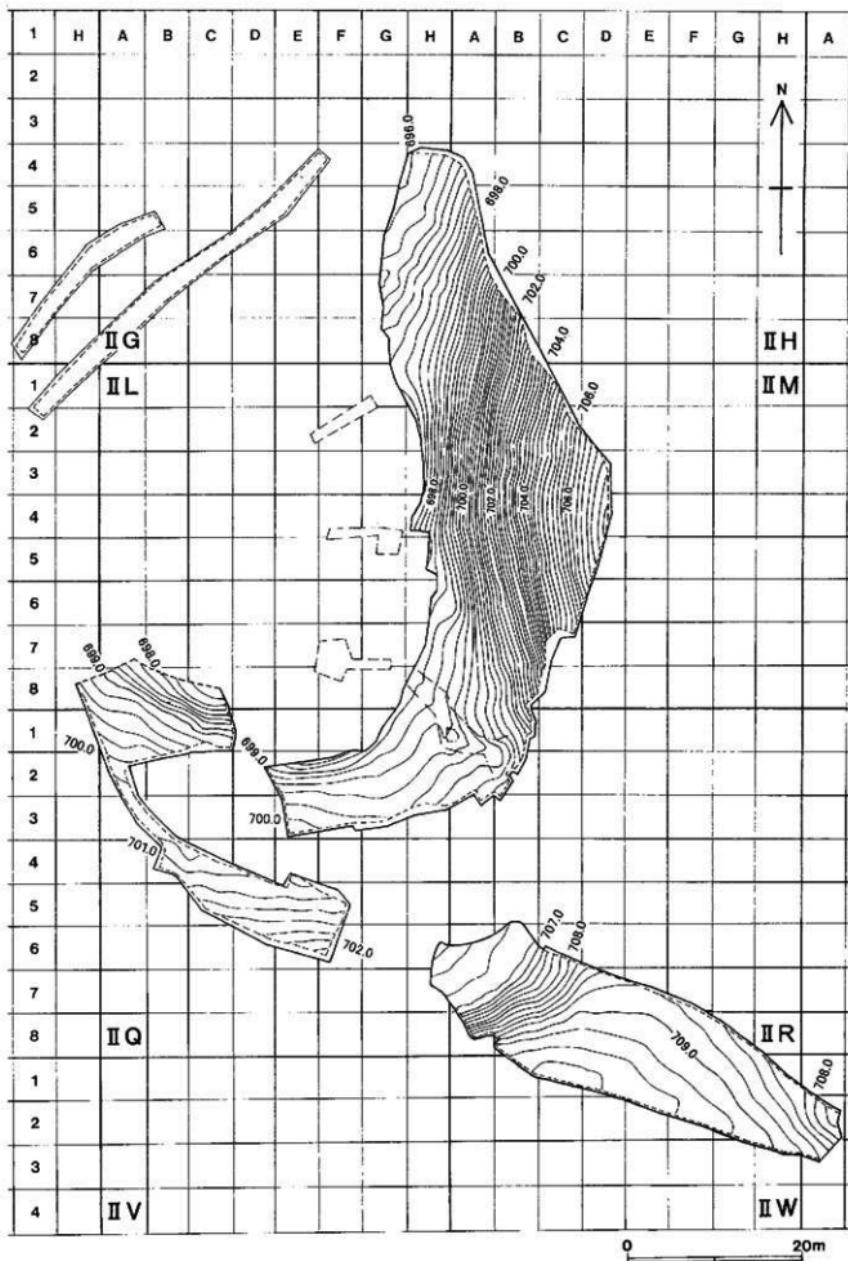


図3 古道遺跡の調査地の地形

図 5 市道沿跡・高山道路付近の工事計画と調査区域

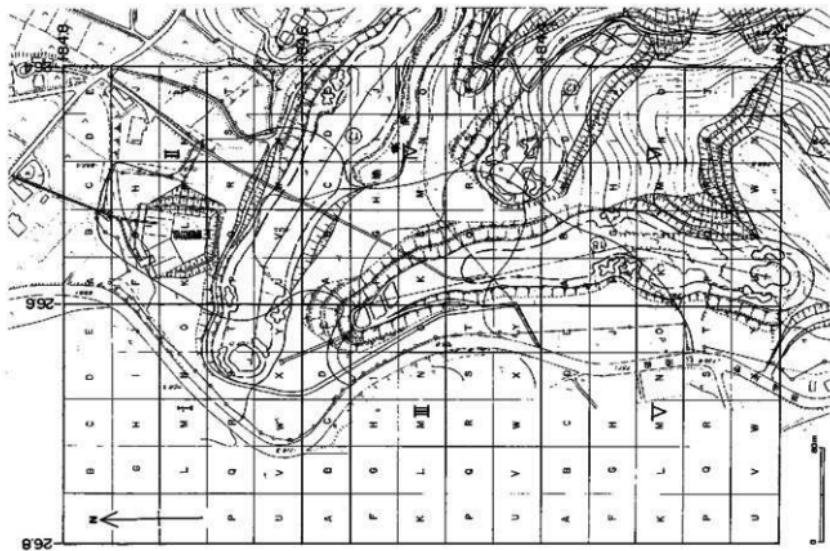
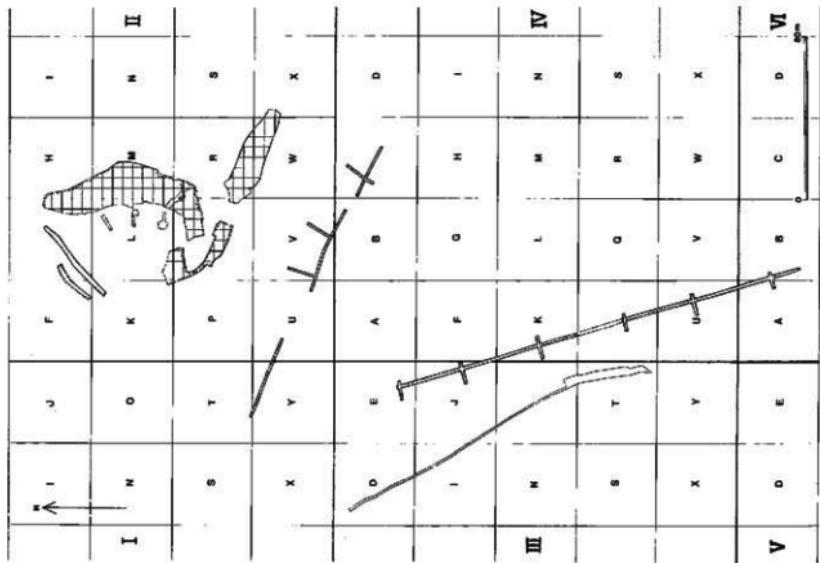


図 4 市道沿跡・高山道路の調査位置図



## 2 遺跡の環境

### 1) 地質・地理的環境

信濃町は長野県北部にあり、新潟県境に接する。町域は東西に3つの地形に区分される。東部は、第三紀鮮新世～前期更新世の砂岩・泥岩などの堆積岩が分布するならかな基盤山地である。これらの上位を斑尾山起源の安山岩類が被っている。野尻湖はこの基盤山地の中に位置している。

西部には、中・後期更新世の飯縄山、黒姫山の火山岩類がつくる火山地形が分布している。飯縄山の東麓から野尻湖の南方には、緩やかな地形の丘陵地がひろがる。これらの丘陵地は、上述の野尻湖のまわりの小起伏面とあわせて、鼻見面（井上, 1962）ないし鼻見面群（豊野団研, 1969）とされたもので、中期更新世の飯縄山・黒姫山等の火山活動以前に形成されていた侵食平坦面であると思われる。

これら東西の山地に挟まれた中央部には、水田や集落が分布する低地帯がひろがっている。丘陵は後期更新世の泥炭堆積物などからなり、段丘は後期更新世の湖沼・河川堆積物からなり、低湿地は後期更新世末から完新世にかけての湖沼・河川堆積物からなっている。

黒姫山東麓と野尻湖を源とする信濃町北部の赤渕川、池尻川は関川水系に属し、北方に流下して上越市で日本海に注ぐ。一方、戸隠村を源とする鳥居川は、黒姫山と飯縄山の間を東に流れ、信濃町古間で南東から東に向かって変えて、豊野町で千曲川に合流する信濃川水系に属す。これら河水系の分水嶺は、信濃町柏原の低地ないし丘陵地の中に位置するため、信濃町の中央部にはならかな高原地形がひろがっている。

信濃町南部の平岡、穂波、大井などの地区（富士里地区）には、上水内郡の北山部や西郡ではめずらしく、広い平坦地があり、水田地帯となっている。この平坦地は、後期更新世の後半の野尻湖層相当層や一部には完新世の湖沼・河川堆積物の堆積面となっており、ごく新しい地質時代まで水域であったことがわかる。この平坦地の西側は、鳥居川による扇状地に被われて、また、東部や南部には島状、半島状に丘陵が接している。これらの丘陵地は、おもに中期更新世の飯縄山起源の火山沈下物（火砕流など）から構成されている。

牛込村側では、北東～南西方向に牛込の盆地が形成されている。

信濃ゴルフ俱楽部は、信濃町南部の大井地区から牛込村北部の古町地区の丘陵状の山地に計画されたもので、おもに中期更新世の飯縄山起源の火山流下物が分布する。これらの山地には、信濃町ローム層以上の厚い風化火山灰層が堆積している。

市道遺跡は、富士里地区の水田となっている低湿地にのむ丘陵の先端部に位置している。遺跡の中心は、この丘陵の頂部にあるが、今回の調査の中心地となった調整池は、丘陵の中に入り込んだ稻附からさかのぼる小さな沢の先端部にある。

高山遺跡と長山遺跡は、丘陵の頂部にひろがっている。一方、清水久保遺跡は石橋からさかのぼる川の最上流にあたる窪地に位置する。

牛込村側が調査した宮浦A、宮浦B、西導川遺跡は、いずれも飯縄火山流下物のつくる丘陵の頂部に位置する。

### 2) 歴史的環境

信濃町は長野県から新潟県にむける主要な交通路に位置し、近年では北国街道や信越本線、国道18号線、上信越自動車道といった内陸側と日本海側をむすぶ主要な幹線が通過している。このような交通の要所となつた背景には、黒姫山などの第四紀火山と野尻湖のまわりの基盤山地とのあいだに形成された、山間地では比較的珍しい平坦地が高原状に続く地形的特徴によるものである。このため、起伏の少ない峰越えの通路となつておらず、また、信州の中心地である長野盆地や上田盆地から最短距離で日本海（上越市）に通じる路線として、古くから利用されてきた。

信濃町には現在、173か所の遺跡が知られている。この大半が、信濃町中央部の低地帯と東部の基盤山地の中の丘陵上や谷沿いに分布する。これらの遺跡は、旧石器時代中期から中世・近世に至るものであるが、その時代には大きな特徴がある。

第1は、旧石器時代の遺跡が野尻湖の西岸から東方の丘陵地を中心にならかに分布することである。野尻湖を中心とする旧石器時代の遺跡群は、野尻湖遺跡群と呼称されている。



図6 信濃町中央部の地質図（中村、1988）

- 1 : 汗積層
- 2 : 野尻ローム層の水成層（野尻湖層・古間層）
- 3 : 同層準の泥流など
- 4 : 神山ローム層の水成層（貫ノ木層・穂波層）
- 5 : 同層準の泥流（池尻川泥流）
- 6 : 信濃町ローム層中部II・上部の水成層（富上甲羅層）
- 7 : 同層準の泥流・火碎流
- 8 : 信濃町ローム層下部の泥流・火碎流
- 9 : 基盤（第三系）

現在までに、信濃町では約40か所の遺跡が知られている。

野尻湖立が鼻遺跡は、中期旧石器時代末の約4.8～3.3万年前の遺跡で、大量のナウマンゾウ、ヤベオオツノシカなどの大型の哺乳動物化石とともに石器や骨器が出土することで有名である。一般的な住居跡（集落）の要素がみられないことから、狩猟解体場遺跡（キル・ブッチャーリング・サイト）と考えられている。

仲町遺跡は、中期旧石器時代の末から後期旧石器時代、さらに縄文時代以降へとつながる野尻湖遺跡群のなかでの中核的な遺跡である。

これに対して、上ノ原遺跡、貫ノ木遺跡、東裏遺跡、日向林B遺跡、黒月台遺跡などの主要な後期旧石器時代の遺跡は、ほとんどが丘陵地に分布し、約3万年前のナイフ形石器文化初期以降に遺跡が形成されたものである。

第2に、信濃町域では、旧石器時代から引き続いて縄文時代前期までは多く遺跡が分布するが、中期になると遺跡数は急激に減少する。この傾向は、弥生時代、古墳時代、奈良時代へと続く。

第3に、ふたたび信濃町域に遺跡が増えるのは、平安時代以降である。現在、信濃町の集落のある場所の多くは、平安時代の遺跡と重なっている場所が多く、平安時代以降、町内の各地に集落が形成され続けてきたことが推測される。

以上のような遺跡分布の特徴がみられるが、近隣の市町村と比較すると、旧石器時代の遺跡が多いこと、縄文時代中期以降の遺跡が少ないと、そして遺跡数とその密

度は近隣地区にくらべてかなり高いことが特筆される。

最初に記した信濃町の交通路の要所としての特徴は、平安時代以降、顯著になったものと思われる。延喜式に記録されている東山道の支路は、信濃町を通り、沼辺駅（ぬへのへのうまや）は、仲町遺跡が有力と考えている。町内の主要部（野尻新町、柏原、古間、穂波の間）は、現在の国道18号線におおむね沿って、江戸時代の北国街道が通じているが、東山道も北国街道に近い場所を通っていたと推定される。

信濃町南部の富士里地区には、縄文時代早期以降の遺跡が分布する。穂波の大道下遺跡は、4次にわたる発掘調査によって、縄文時代早期の押型文土器、沈線文系土器の時期の多数の遺物が出土している。湧水地のまわりの小高い丘陵の上と、小川沿いの低地に遺物があり、市道遺跡に近い遺跡のあたり方がみられる。丸谷地遺跡は、大道下遺跡のとなりの丘陵上にあり、4次にわたる発掘調査で表裏縄文土器、押型文土器の時期の遺物が多く出土している。

大井の宮ノ原遺跡、穂波の落影（五厘山）遺跡、大道下遺跡、丸谷地遺跡などは、平安時代の代表的な遺跡である。

なお、押型文土器の標式遺跡の1つとして知られる富ノ神遺跡は、市道遺跡から約4.5km北東方の丘陵地に位置している。

高山遺跡より約2km南西方には、鎌倉時代創建とされる寧仙寺遺跡があり、真言宗の修験道場として栄え、県指定の史跡となっている。

図7 信濃町の震波分布図



表3 信濃町の遺跡一覧 (1)

遺跡番号	遺跡名	種別	所在地	立地	旧石器	開文				縄文		绳弥生		平成・奈良		平安世	
						草	早	前	中	後	縄	文	草	生	山	世	
						章	●	●	●	●	縄	文	草	生	山	世	
1	鹿沢 A 遺跡	散布地	吉海、奥沢	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
2	鹿沢 B 遺跡	散布地	吉海、鹿屋	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
3	浜原 A 遺跡	散布地	吉海、浜原	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
4	津屋 B 遺跡	散布地	吉海、津屋	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
5	津屋 C 遺跡	散布地	吉海、津屋	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
6	津屋 D 遺跡	散布地	吉海、津屋	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
7	林畔 遺跡	散布地	吉海、林畔	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
8	花ヶ入 遺跡	散布地	吉海、花ヶ入	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
9	古海 城跡	城跡	吉海、城跡	尾根	山頂	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
10	魯倉 城跡	城跡	吉海、魯倉	尾根	山頂	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
11	雪川 A 遺跡	山	雪川	山頂	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
12	雪川 D 遺跡	散布地	吉海、雪川	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
13	寺庭 遺跡	散布地	吉海、寺庭	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
14	舟瀬 遺跡	散布地	野尻、舟瀬	尾根	半地、河原	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
15	船久保 遺跡	散布地	吉海、船久保	尾根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
16	丸木舟出土地	散布地	吉海、丸木舟出	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
17	山王城 遺跡	散布地	吉海、山王城	尾根	丘	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
18	赤川城跡	城跡	赤川城跡	野尻、赤川	山頂、台地	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
19	大木道 A 遺跡	散布地	野尻、大木道	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
20	大木道 B 遺跡	散布地	野尻、大木道	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
21	大木道 C 遺跡	散布地	野尻、大木道	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
22	小本道 遺跡	散布地	野尻、小本道	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
23	野尻城跡	城跡	野尻、城跡	尾根	山頂	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
24	家老城 遺跡	城跡	野尻、家老城	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
25	城堀り A 遺跡	散布地	野尻、城堀り	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
26	城堀り B 遺跡	散布地	野尻、城堀り	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
27	城堀り C 遺跡	散布地	野尻、城堀り	尾根	根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
28	旧野尻湖中学校遺跡	散布地	野尻、旧野尻湖中	尾根	山麓、湖畔	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
29	杉久保 遺跡	散布地	野尻、杉久保	尾根	山麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
30	豆島 遺跡	散布地	野尻、豆島	尾根	山麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
31	立が岬 遺跡	散布地	野尻、立が岬	尾根	山頂	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
32	海岸 遺跡	散布地	野尻、海岸	尾根	海岸	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
33	川久保 遺跡	散布地	野尻、川久保	尾根	山麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
34	土橋 稲荷 遺跡	散布地	野尻、土橋	尾根	山麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
35	小丸山・十代城跡	散布地	野尻、小丸山・十代	尾根	山麓、台地	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
36	向新田 A 遺跡	散布地	野尻、向新田	尾根	山麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
37	向新田 B 遺跡	散布地	野尻、向新田	尾根	山麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
38	西池 遺跡	散布地	野尻、西池	尾根	山麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
39	沼明合 遺跡	散布地	野尻、沼明合	尾根	山麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
40	仲町 遺跡	散布地	野尻、仲町	尾根	山麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
41	神白城跡	散布地	野尻、神白城	尾根	山麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
42	箕久保 遺跡	散布地	野尻、箕久保	尾根	半地、上麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
43	神山 A 遺跡	散布地	野尻、神山	尾根	山麓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
44	神山 B 遺跡	散布地	野尻、神山	尾根	山丘	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
45	神山 C 遺跡	散布地	野尻、神山	尾根	山丘	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
46	黒月合 遺跡	散布地	野尻、黒月合	尾根	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
47	貫ノ木 遺跡	散布地	野尻、貫ノ木	尾根	丘	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
48	星光山 A 遺跡	散布地	野尻、星光山	尾根	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
49	下山桑 A 遺跡	散布地	野尻、下山桑	尾根	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
50	下山桑 B 遺跡	散布地	野尻、下山桑	尾根	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
51	下山桑 C 遺跡	散布地	野尻、下山桑	尾根	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
52	下山桑 D 遺跡	散布地	野尻、下山桑	尾根	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
53	蟹爪 遺跡	散布地	野尻、蟹爪	尾根	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
54	上山桑 A 遺跡	散布地	野尻、上山桑	尾根	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
55	上山桑 B 遺跡	散布地	野尻、上山桑	尾根	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
56	瑞穂 A 遺跡	散布地	野尻、瑞穂	尾根	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
57	瑞穂 B 遺跡	散布地	野尻、瑞穂	尾根	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

表4 信濃町の遺跡一覧 (2)

遺跡番号	遺跡名	種別	所在地	立地	旧石器	國文					稱	源生	古墳	平安	中世	近世
						早	中	後	晚	義						
58	大久保 A 遺跡	散布地	柏原、日向	山麓	○	○	○				○	○				
59	大久保 B 遺跡	散布地	柏原、日向	山麓							○	○				
60	大久保 C 遺跡	散布地	柏原、中山	山麓	○		○									
61	大久保南遺跡	散布地	柏原、向山	丘陵	○											
62	西門 A 遺跡	散布地	柏原、西武	丘陵斜面	○						○	-				
63	西門 B 遺跡	散布地	柏原、西武	丘陵斜面	○						○					
64	毛無遺跡	散布地	柏原、毛無	丘陵斜面							○					
65	二ノ原遺跡	散布地	柏原、上ノ原	丘陵	○	○	○									
66	野尻湖周辺遺跡	散布地	柏原、小丸山	丘陵	○						○					
67	小火止公道跡	散布地	柏原、小丸山	丘陵	○						○					
68	役屋敷遺跡	散布地	柏原、役屋敷	丘陵	○						○					
69	東坂遺跡	散布地	柏原、東坂	丘陵	○	○	○				○					
70	裏ノ山遺跡	散布地	柏原、裏ノ山	山頂	○						○					
71	伊勢見山遺跡	散布地	柏原、裏ノ山	山頂	○						○					
72	東裏城跡	城	柏原、東裏	丘陵	○						○					
73	東裏山遺跡	散布地	柏原、東裏	丘陵	○						○					
74	東裏窓	散布地	柏原、東裏	丘陵	○						○	○				
75	熊糸通遺跡	散布地	柏原、櫻下	丘陵	○						○	○				
76	新田川遺跡	散布地	柏原、新田川	丘陵	○						○					
77	五輪堂遺跡	散布地	柏原、五輪堂	丘陵	○						○	○				
78	仁之倉 A 遺跡	散布地	柏原、仁之倉	丘陵	○	○	●	○	○		○	○				
79	仁之倉 B 遺跡	散布地	柏原、仁之倉	丘陵	○	●	●	●	●		○	○				
80	仁之倉丙遺跡	散布地	柏原、仁之倉	丘陵	○	●	●	●	●		○	○				
81	長水 A 遺跡	散布地	柏原、長水	丘陵	○	○					○	○				
82	長水 B 遺跡	散布地	柏原、長水	丘陵	○	○					○	○				
83	馬因川第二発電所遺跡	散布地	柏原、馬因川	丘陵	○						○					
84	上島遺跡	散布地	吉原、上島	丘陵	○						○					
85	柳原遺跡	散布地	吉原、柳原	丘陵	○						○					
86	黒原遺跡	散布地	吉原、黒原	丘陵	○						○					
87	猪場 A 遺跡	散布地	吉原、猪場	丘陵	○						○					
88	猪場 B 遺跡	散布地	吉原、猪場	丘陵	○						○					
89	小古間遺跡	散布地	吉原、久坂	丘陵	○						○					
90	清水東遺跡	散布地	吉原、清水東	丘陵	○	○					○					
91	清水北遺跡	散布地	吉原、清水北	丘陵	○						○					
92	次野原 A 遺跡	散布地	吉原、次野原	丘陵	○	○					○					
93	次野原 B 遺跡	散布地	吉原、次野原	丘陵	○	○					○					
94	山根遺跡	散布地	吉原、山根	丘陵	○						○					
95	古尚义曾處遺跡	散布地	吉原、下島	丘陵	○						○					
96	大平 A 遺跡	散布地	吉原、大平	丘陵	○						○					
97	大平 B 遺跡	散布地	吉原、大平	丘陵	○						○					
98	針ノ木遺跡	散布地	吉原、針ノ木	丘陵	○						○					
99	砂同遺跡	散布地	吉原、砂同	丘陵	○						○	○				
100	蛇ヶ崎遺跡	散布地	吉原、蛇ヶ崎	丘陵	○	○					○	○				
101	岩沢遺跡	散布地	吉原、岩沢	丘陵	○						○					
102	諫訪ノ原遺跡	散布地	吉原、諫訪ノ原	丘陵	○	○	●				○	○				
103	芙蓉里遺跡	散布地	吉原、芙蓉里	丘陵	○						○					
104	日向林 A 遺跡	散布地	吉原、日向林	丘陵	○	○	○				○	○				
105	日向林 B 遺跡	散布地	吉原、日向林	丘陵	○	○	○				○	○				
106	七ツ森遺跡	散布地	吉原、七ツ森	丘陵	○	○	○	○	○		○	○				
107	音光正遺跡	散布地	吉原、音光正	丘陵	○						●					
108	音中遺跡	散布地	吉原、音中	丘陵	○						○					
109	西久保遺跡	散布地	吉原、西久保	丘陵	○						○					
110	水穴遺跡	散布地	吉原、水穴	丘陵	○						○					
111	大日向 A 遺跡	散布地	吉原、大日向	丘陵	○						○					
112	大日向 B 遺跡	散布地	吉原、大日向	丘陵	○						○					
113	富貴原遺跡	散布地	吉原、富貴原	丘陵	○						○	○				
114	京ヶ岳城跡	城	吉原、京ヶ岳	山	○						○					
115	荒沢遺跡	散布地	吉原、荒沢	山	○						○					

表5 信濃町の遺跡一覧 (3)

遺跡番号	遺跡名	種別	所在地	立地	旧石器	縄文					縄文	外生	占據	平安世	中世	近世	
						早	前	中	後	後							
116	東原遺跡	散布地	富士、東原	山麓、丘陵地				○							○		
117	西沢遺跡	散布地	富士、鳴沢	山麓											○		
118	南原A遺跡	散布地	吉武、南原	山麓											○		
119	南原B遺跡	散布地	富士、南原	山麓											○		
120	乙原遺跡	散布地	富士、南原	丘陵地			○								○	○	
121	中村遺跡	散布地	富士、中村	山麓											○		
122	日和A遺跡	散布地	吉武、日和	山麓											○		
123	日和B遺跡	散布地	吉武、日和	山麓											○		
124	高野寺城跡	散布地	富士、高岳山	山麓											○		
125	戈岳遺跡	散布地	富士、或佐	山麓											○	○	
126	向ノ原遺跡	散布地	吉武、向ノ原	台地											○		
127	窓ノ神遺跡	散布地	富士、窓ノ神	山麓			○								○		
128	勘森遺跡	散布地	富士、勘森	山麓											○		
129	戸塚城跡	散布地	富士、福沢	丘陵											○		
130	戸塚遺跡	散布地	高崎、清水	山麓			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
131	正塙寺遺跡	散布地	足利原、王笠寺	山麓			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
132	荒瀬原遺跡	散布地	荒瀬原、原	山麓	原生地		○								○	○	○
133	大原遺跡	散布地	荒瀬原、大原	山麓	原生地										○		
134	則心院裏遺跡	散布地	荒瀬原、山神	山麓	原生地										○		
135	石原遺跡	散布地	足利原、石原	丘陵地		○	○	○							○	○	
136	落葉遺跡	散布地	吉原、荒瀬原	台地													
137	月影遺跡	散布地	吉原、月影	山麓											○		
138	北ノ原A遺跡	散布地	甲斐、北ノ原	丘陵											○		
139	北ノ原B遺跡	散布地	甲斐、北ノ原	丘陵											○		
140	宮原遺跡	散布地	平岡、宮原	丘陵											○		
141	丸山遺跡	散布地	平岡、丸山	丘陵											○		
142	北山遺跡	散布地	平岡、北山	丘陵											○		
143	御料遺跡	散布地	甲斐、幕原	丘陵											○		
144	向原遺跡	散布地	平岡、向原	丘陵											○		
145	丸谷地遺跡	散布地	總社、丸谷	丘陵			○								○		
146	人道下遺跡	散布地	總社、人道下	丘陵、低地			○	○	○	○					○		
147	落石(五星山)遺跡	散布地	總社、五星山	山麓	遺跡										○	○	
148	上の山遺跡	散布地	總社、上の山	山麓											○		
149	北半島遺跡	散布地	總社、北半島	丘陵											○		
150	中島遺跡	散布地	總社、中島	丘陵											○	○	
151	辻尾溝遺跡	散布地	總社、辻尾	丘陵											○	○	
152	宮ノ腰遺跡	散布地	總社、宮ノ腰	丘陵											○	○	
153	吉ヶ原I遺跡	散布地	大井、吉ヶ原	丘陵											○	○	
154	吉ヶ原II遺跡	散布地	大井、吉ヶ原	丘陵											○		
155	吉ヶ原III遺跡	散布地	大井、吉ヶ原	丘陵											○	○	
156	吉ヶ原IV遺跡	散布地	大井、吉ヶ原	丘陵											○		
157	吉ヶ原V遺跡	散布地	大井、吉ヶ原	丘陵											○		
158	吉ヶ原VI遺跡	散布地	大井、吉ヶ原	丘陵											○		
159	吉ヶ原VII遺跡	散布地	大井、吉ヶ原	丘陵											○		
160	北唇遺跡	散布地	大井、雪舟寺	丘陵											○	○	
161	猪場遺跡	散布地	大井、猪場	丘陵											○	○	
162	七瀬遺跡	散布地	大井、七瀬	丘陵											○	○	
163	カジカガワ遺跡	散布地	大井、カジカガワ	丘陵											○	○	
164	雪舟寺遺跡	散布地	大井、雪舟寺	丘陵											○	○	
165	石橋遺跡	散布地	大井、石橋	丘陵											○	○	
166	市道遺跡	散布地	大井、市道	丘陵											○	○	
167	高山遺跡	散布地	大井、高山	山麓											○	○	
168	南木久保遺跡	散布地	大井、南木久	山麓											○	○	
169	長山遺跡	散布地	大井、長山	丘陵											○	○	
170	宮浦B遺跡	散布地	大井、宮浦	丘陵											○	○	
171	現池遺跡	散布地	柏原	原											○	○	
172	東光山B遺跡	散布地	野尻、下山	丘陵											○	○	
173	大平C遺跡	散布地	吉武、深訪原	丘陵											○	○	

## II 市道遺跡の地形・地質と出土状況

### 1 発掘地

#### 1) 発掘地の状況

市道遺跡は、信濃町富士里地区の大字大井字市道の山中に所在する。県道長野信濃線と町道の相交差点の南東側の丘陵とその中に開拓された小さな沢をかこむ凹地に遺跡が立地する。

市道遺跡は、1980年頃、地質調査のおりに縄文時代前期の土器片が林道沿いの切り取りから発見されたことにより、存在が確認された。

ゴルフ場建設計画が出てから、平成4年度に信濃町教育委員会と牟礼町教育委員会の合同で開発予定地内の試掘確認調査を実施した結果、市道遺跡は町道より南側の丘陵地の頂部にかなりひろがる遺跡であることが予測された。

平成4年12月の試掘で湊密な縄文時代早期の生活面が確認された丘陵の先端部付近の頂上は、ゴルフ場のコースから外され緑地として残されることになった。したがって、市道遺跡の発掘調査は全体の排水計画に重要な谷部の凹地地形を利用した調整池とその南側の管理道路の部分が中心となった。さらに南側にできる17番ホール（市道遺跡）と18番ホール（高山遺跡）などは、盛土工法をとることになり、試掘調査を主体とすることとなった。

#### 2) 発掘地の地形と地質

発掘地は県道と町道に二辺を境された丘陵にあり、緩傾斜の頂部から凹地では斜面になり、谷筋では低湿地になっている。基本的な地質層序は、調整池の造成後、池の南側斜面にできた大露頭で観察された。基盤は、中期

更新世の中部信濃町ローム層Ⅰの層準に位置する軽石流堆積物である。紫褐色～白色の発泡した安山岩、もしくは発泡の悪い軽石を主体とし、礫径は1～20cm、最大2mで、基質は粗粒火山灰からなる。

その上位には、約13.8mの厚さの信濃町ローム層中部～上部が厚く被っている。そのうち、中部Ⅰは3.7m、中部Ⅱは3.3m、上部Ⅰは3.4m、上部Ⅱ～Vは3.4mの層厚がある。それらの上位には、約1.3mの野尻ローム層～神山ローム層、そして50cmの柏原黒色火山灰層が堆積している。風化火山灰層はすべて風成相である。

市道遺跡の調査地の中心となった調整池東斜面では、遺物包含層となった柏原黒色火山灰層が、25～30cmの表土の下に、最大で約140cmの厚さで堆積しているのが観察された。層厚が厚いところでは、黒色火山灰層中に2層の火山灰薄層をはさんでいる。

発掘地における層序は、下位より、20cm以上の黄褐色風化火山灰層（野尻ローム層）、1～2cmの巣錐性の小礫を少しはじる10～30cmの茶褐色風化火山灰層（モヤ・漸移帶）、15～30cmの黒褐色火山灰層（下部火山灰土）、5～45cmの暗褐色火山灰層、30～75cmの黒色火山灰層（中部火山灰土）、8～9cmのレンズ状の暗褐色火山灰層、14～40cmの黒色～黒褐色火山灰層（上部火山灰土）、25～30cmの黒褐色土（表土）である。縄文時代早期から前期の主要な遺物包含層は、下部火山灰土、暗褐色火山灰層、中部火山灰土にかけてである。

市道遺跡の丘陵頂部にあたる管理道路部分やほかのゴルフコース部分では、全体的に柏原黒色火山灰層が薄くなる傾向がみられた。

### 2 遺物の出土状況

#### 1) 調整池東斜面

##### A 遺物の出土状況

市道遺跡の発掘調査の中心となったのが、調整池が造成される崖地の東斜面である。遺跡の中心部と推定され

るのは、斜面を登りきった丘陵の山頂部である。山頂は、反対側にも谷を有する狭い尾根状の地形である。

図11は、調整池東斜面の調査地における全出土遺物をプロットしたものである。これをみると、遺物は、IM

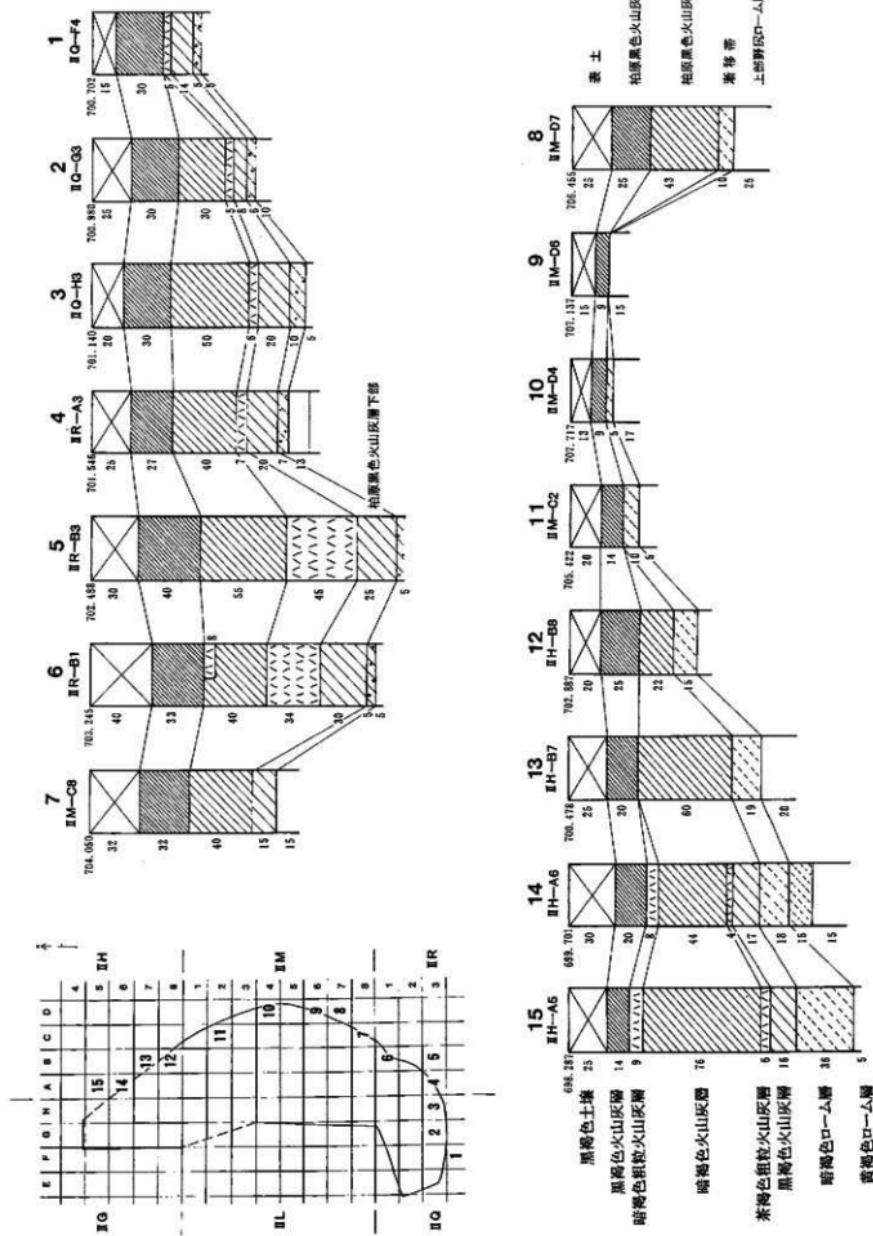


図8 市道遺跡調査池東斜面における地質柱状図



図9-1 信濃町稻付市道における地質柱状図  
(信濃ゴルフ俱楽部E調整池南壁)

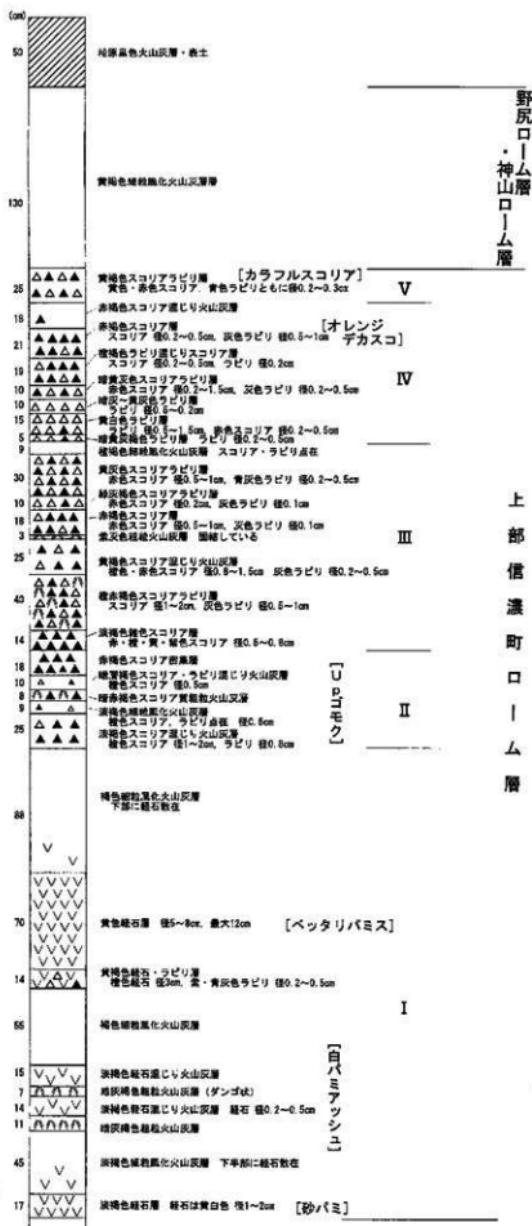


図 9-2 信濃町付市道における地質柱状図  
(信濃ゴルフ俱楽部ヒ調査池南壁)

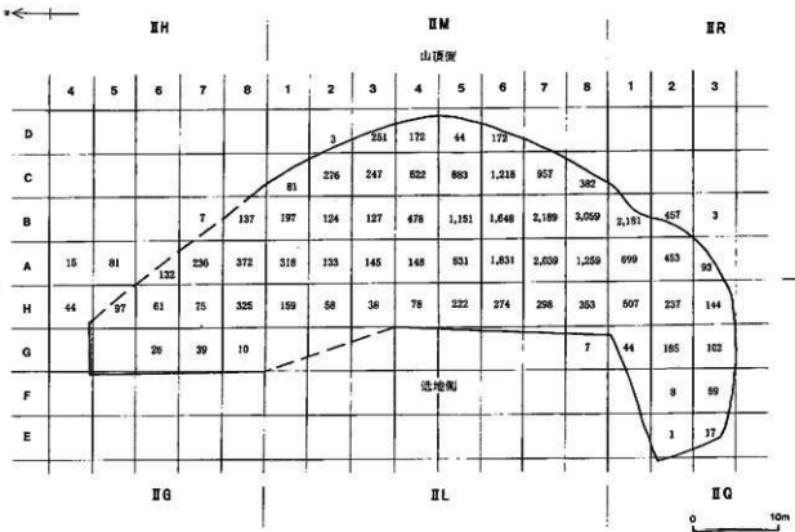


図10 市道遺跡調整池東斜面におけるグリッドごとの出土点数

の5列からII Rの1列にかけての斜面上部に集中していることがわかる。そこから離れると、遺物数は散在するようになる。概して、遺物は斜面の上部に多いことから考えて、これらの土器や石器は、丘陵の頂部を居住地としていた縄文人が廃棄した遺物が転がり落ちたものと推定される。

図18～図34は、それぞれの土器や石器ごとの分布を示したものである。縄文早期の山形文土器、楕円文土器、格子目文土器、平行線文土器、無文土器、波表縄文土器、早期縄文土器、撫糸文土器は、いづれも南北に2つの集中をもつ分布傾向を示している。II H 5列～8列からII M 1列にかけてと、もう一方はII R B 1からII M A 7を絶ぶ南京～北西方向の線を中心とした幅15mほどの範囲である。この結果、縄文早期の土器は発掘地中央部の斜面上部に遺物の空白区がみられる。

縄文前期になると、II M C 6からII R B 1の範囲を上限に斜面を北西方向に下る分布が認められる。このように、縄文時代の早期と前期では遺物分布の傾向が異なるので、丘陵上の居住地域の利用の仕方は異なっていたことが推定される。

### B 遺 売 構

市道遺跡は、大量の遺物が出土する割には、その時期の遺構がほとんど認められなかった。ほとんどすべての遺物は、散布の状態のものであった。このように、縄文時代の遺跡で、遺構がきわめてまれなことは、市道遺跡だけの特別な状況でなく、これまで信濃町教育委員会、長野県埋蔵文化財センターが調査してきた信濃町の縄文時代遺跡すべてに共通した特徴である。たまに落し穴、集石や焼土塊が認められる程度である。

今回の調査地では、斜面の一一番下の低地で、小川のすぐ近くの低地に位置するII G H 8グリッドで集石が1基、検出された。東西、南北それぞれ約1mの大きさで、三角形に近い椭円の平面形を呈する。礫は全て安山岩で、角礫ないし亜角礫で、上面はほぼ平坦であるが、石の上面を平にそろえたような状況ではない。礫の大きさは、平均8～10cmで、最大は34cmある。石は厚いところでは、2段ほどにのっているものもみられたが、まわりや下からは明確なピット等は確認できなかった。焼礫は含まれているが、それほど赤化していないものも含まれている。また、集石中に楕円押型文土器の破片が含まれて

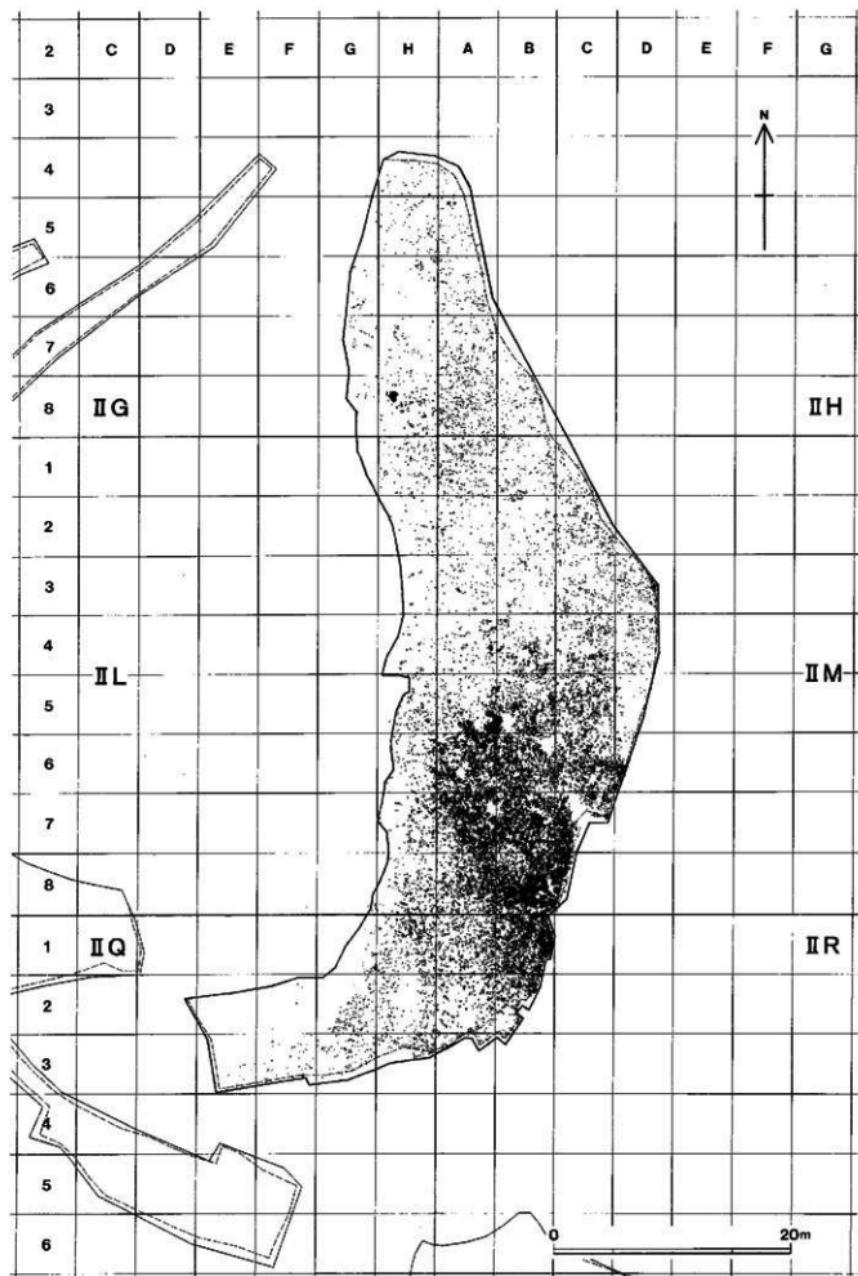


図11 市道遺跡調整池東斜面における遺物分布図（全点プロット）

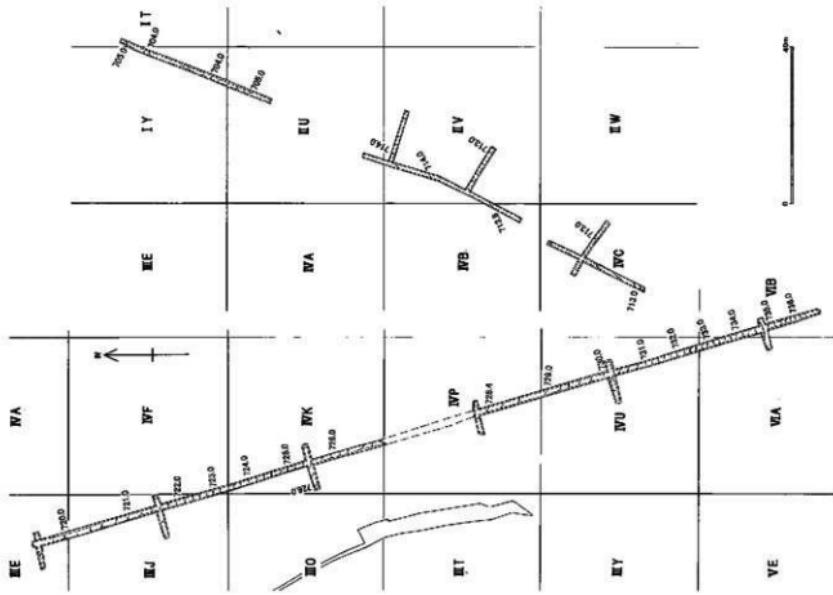


図12 市道運輸調整池における遠隔(1) 基石遺構  
(右)は(L.)の上面の礫をとりあげたさらに下位に位置している  
ものである

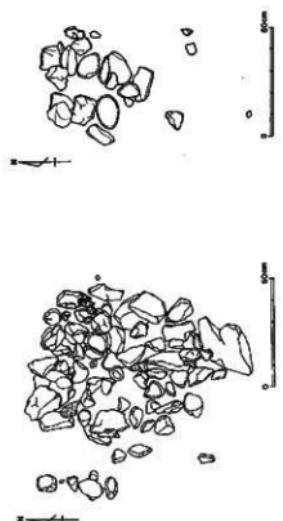


図13 調査坑における遠隔(2) 落し穴

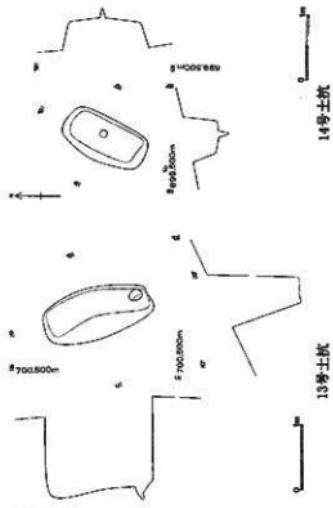


図14 高山道路(18番ホール; 左), 市道遠跡(17番ホール; 右)の試掘位置図

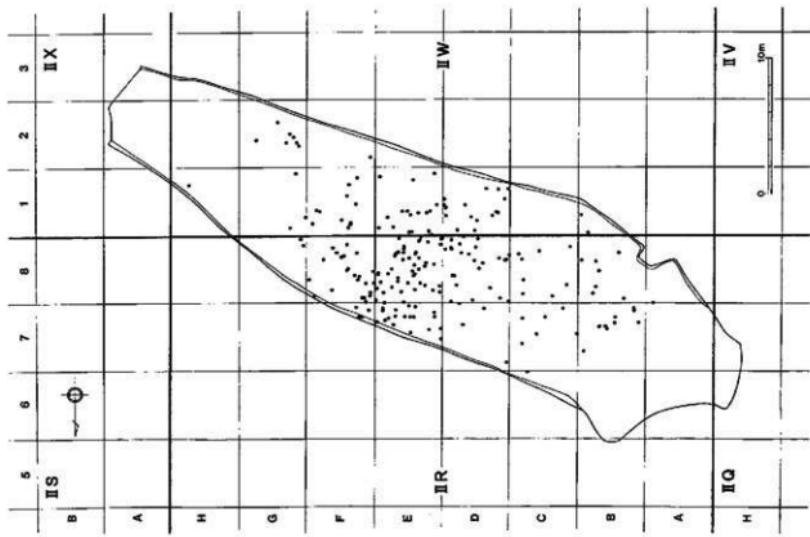


図16 市道道路における遺物分布図

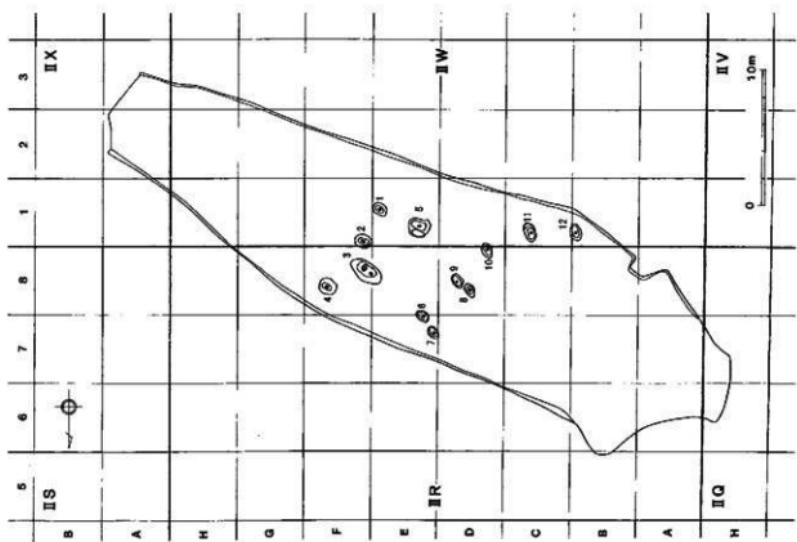
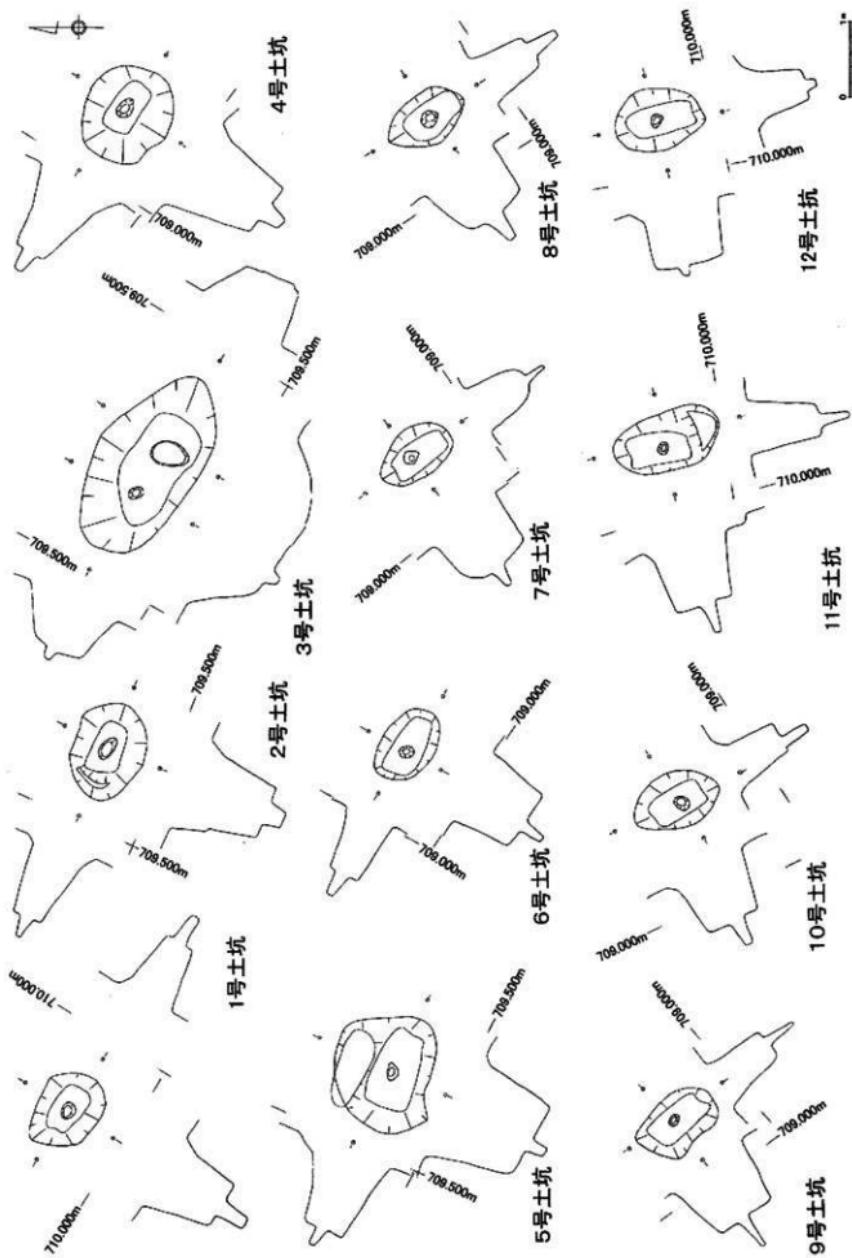


図15 市道道路における遺物分布図

図17 市道道路管理道路における道路 落し穴



いた。このことから、押奈文土器の後半期にともなう沢沿いに形成された遺構であると考えられる。

落し穴と推定される土壙が2基検出された。13号土壙は、斜面下部のII M-A 5グリッドにあり、170cm×82cmの楕円形の平面形で、確認面からの深さは128cmであり、南端付近に杭跡とみられる深さ11cmの小ビットが確認された。

14号土壙は、13号の南方向に9.5m離れて並んで存在したものである。135cm×710cmの隅丸長方形の平面プランで、深さ47cmで、中央に深さ15cmの小ビットをもつ。

## 2) 調整池のその他の場所

### A 遺物の出土状況

低地の中央部に2本の試掘溝を掘削したが、出土品はみられなかった。

また、調整池東斜面のすぐ沖合の谷地中央部に3か所の試掘調査をおこなったが、遺物は確認されなかった。

### 3) 管理道路部分

#### A 遺物の出土状況

図16に管理道路部分の遺物分布図を示す。遺物は調整池東斜面と同様に縄文時代早期と前期のもの、そして若干の近現代の陶磁器であったが、遺物数はあまり多くなく、特別な集中区は確認されなかった。

#### B 遺構

丘陵の尾根方向に12基の落し穴が確認された。これらは、1号～5号土壙と6号～12号土壙との2列をなしている。いずれも円形から楕円形の平面プランをもち、中央の底部には杭跡と思われる小ビットを有するものである。

1号土壙は、107cm×81cmの円形の平面プランで、深さ88cm、さらに中央に深さ40cmの小ビットがみられる。

2号土壙は、131cm×95cmの円形の平面プランで、深

さ108cmで、中央に深さ27cmの小ビットが認められる。

3号土壙は、256cm×121cmの楕円形の平面プランで、深さ70cmで、中央よりやや離れて深さ15cmの小ビットが認められる。

4号土壙は、131cm×117cmの円形での平面プランで、深さ114cmで、中央に28cmの小ビットが認められる。

5号土壙は、158cm×130cmのややくずれた円形の平面プランで、深さ109cmで、中央に深さ24cmの小ビットが認められる。

6号土壙は、104cm×68cmの楕円形の平面プランで、深さ84cm、さらに中央に深さ33cmの小ビットがみられる。

7号土壙は、106cm×69cmの楕円形の平面プランで、深さ77cmで、中央に深さ28cmの小ビットが認められる。

8号土壙は、112cm×68cmの楕円形の平面プランで、深さ77cmで、中央に深さ38cmの小ビットが認められる。

9号土壙は、114cm×68cmの楕円形での平面プランで、深さ84cmで、中央に44cmの小ビットが認められる。

10号土壙は、119cm×78cmの楕円形の平面プランで、深さ82cmで、中央に深さ36cmの小ビットが認められる。

11号土壙は、143cm×76cmの楕円形での平面プランで、深さ94cmで、中央に40cmの小ビットが認められる。

12号土壙は、119cm×83cmの楕円形の平面プランで、深さ81cmで、中央に深さ13cmの小ビットが認められる。

### 4) 17番ホール部分（ゴルフコース）

#### A 遺物の出土状況

コースの中央部に沿って西北西～東南東方向に約147m、の区间に、41.5m、42.8m、27.5mのトレンチをあけ、またそれに直行方向に約13～16mのトレンチを3本、合計153.8m、それぞれ幅約1.3mであるので、総面積200m<sup>2</sup>を試掘調査した。遺物はきわめて少なく、多少とも遺物が密集する地点は確認されなかった。

## 3 調整池東斜面における遺物の詳細分布

図36～図75に、調整池東斜面の調査地を40枚に分けて、グリッドごとの遺物分布の様子と主な出土遺物を図示した。

1～4：出土遺物は少ない。早期の土器を中心である。

5：遺物は50～80cmの厚さで一連に出土している。出土遺物はほとんど早期の土器と四石である。

6：遺物は約100cmの厚さで出土するが、若下上下2層準のものが認められる。出土遺物には、古手の押型文

土器と前期の土器がある。

7~9: 遺物はあまり多くなく、時期は各時期のものである。

10: 遺物は50cmほどの厚さで出土しており、主に前期のものが多い。

11: 遺物は40cmほどの厚さで出土しており、前期の諸磯b式、c式併行の土器が中心で、石鎚、石匙、スクレイバー、石錐、凹石などの石器がある。石器は前期のものである。

12・13: 遺物は50~80cmの厚さで、上下2層に分かれている。早期の土器と石斧、特殊磨石などが出土している。石器は早期のものである。

14: 遺物は60cmほどの厚さで、2層に分かれて出土している。早期の前期の土器が中心である。

15: 遺物は60cmほどの厚さで、2層に分かれてたいへん多く出土している。前期の諸磯b式併行、c式併行および前期末の土器が出土している。2層準は前期の中の若干の層位の違いを反映したものと推定される。石鎚、磨石、凹石、石皿などの石器は前期のものと推定される。

16: 遺物は50cmほどの厚さで、一連にたいへん多く出土している。前期の諸磯b式、c式併行、前期末の土器および石匙、クサビ形石器などの石器がある。石器は前期のものと推定される。

17: 遺物は110cmほどの厚さで、2~3層準に分かれで多数出土している。早期の新旧の押型文土器、諸磯b式併行、c式併行の土器、スクレイバー、磨石、石皿などの石器である。

18: 遺物は90cmほどの厚さで多数出土するが、その大半は上部の層準で、わずかに少數の遺物が下位層準から出土している。早期の土器がわずかに伴うが、大半は前期の諸磯b式併行のもので、ついで諸磯c式併行の土器が少數出土している。石器には、石鎚、特殊磨石などがみられる。石器は前期のもの可能性が高い。

19: 遺物は70cmほどの厚さではば一連に多数出土している。前期の諸磯b式併行、c式併行の土器が多く、石匙、スクレイバー、ヘラ形石器、磨製石斧などの石器、および块状耳飾がある。石器は前期のものが多いと推定される。

20・21: 遺物は80cmの厚さで、2層準に分かれて出土している。早期の土器と石錐、クサビ形石器、特殊磨石、磨石、凹石、スタンプ状石器、砥石などの石器がある。

石器は早期のものが多いと推定される。

22: 遺物は110cmの厚さで2~3層準に分かれて多数出土している。早期の新旧の押型文土器に伴う土器、前期の諸磯b式併行、c式併行の土器、そして石鎚、スクレイバー、石錐、磨製石斧、特殊磨石、磨石、砥石などの石器がある。

23: 遺物は90cmの厚さで2層準に分かれて多数出土している。早期の比較的新しいタイプの押型文土器、前期の諸磯b式併行、c式併行、前期末~中期初頭の土器、スクレイバー、ヘラ形石器、石錐、磨石、凹石、砥石などの石器がある。

24: 遺物は90cmほどの厚さで一連に多く出土している。前期の諸磯b式併行、c式併行の土器、石鎚、石匙、スクレイバー、石錐、石皿などの石器がある。石器は前期のものが多いと推定される。

25: 遺物は100cmほどの厚さで2~3層準に分かれて多数出土している。早期の土器が多く、前期の土器、スクレイバー、特殊磨石などの石器もある。

26: 遺物は90cmの厚さで2ないし3層準に分かれて多数出土している。早期の新旧の押型文土器、前期の諸磯b式併行、c式併行、および前期末の土器、石鎚、石匙、スクレイバー、石錐、装飾品、特殊磨石、凹石などの石器がある。

27: 遺物は40cmの厚さで、一連に出土している。早期の土器と磨石、スタンプ状石器がある。石器も早期のものが多いと推定される。

28: 遺物は90cmほどの厚さで2層に分かれて出土している。早期の土器が中心で、若干の前期~前期末の土器、磨石、石皿などの石器がある。石器はほとんど早期のものと思われる。

29: 遺物は110cmほどの厚さで2~3層に分かれてたいていへん多く出土している。早期の新旧の押型文土器、前期の諸磯b式併行、c式併行の土器、石鎚、石匙、特殊磨石、石皿などの石器がある。

30: 遺物は少なく、早期のものである。

31: 遺物は110cmほどの厚さで2ないし3層準に分かれで多く出土している。早期の押型文土器が主体で、ほかに前期の諸磯c式土器、中期初頭の土器、スクレイバー、特殊磨石、磨石、スタンプ状石器、砥石などの石器がある。

32・33: 遺物は少なく、早期のものである。

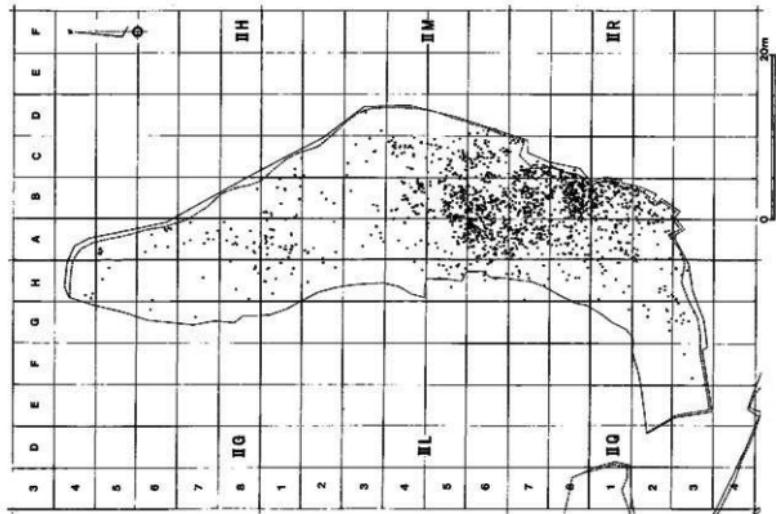


図18 繩文上器の分布(1) 早期の土器(印型文・無文・姿面彫文をあわせた、平行線文は入っていない)

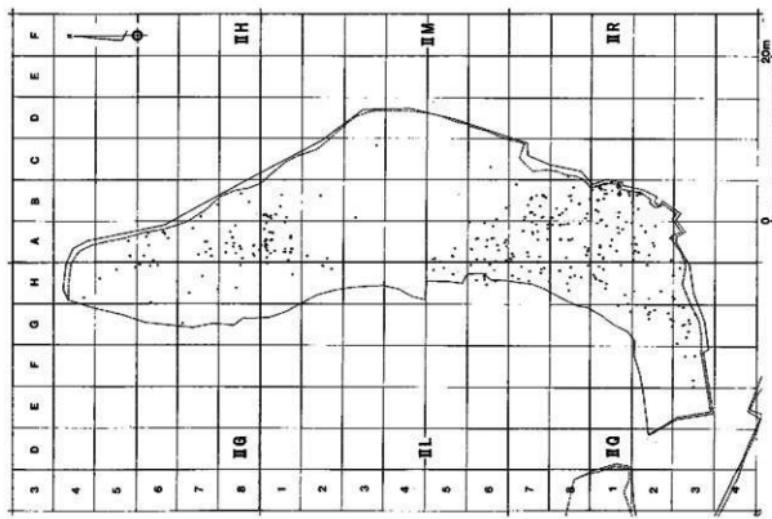


図19 繩文上器の分布(2) 早期・押型土器(山形文)

図21 繩文土器の分布(4) 早期・押型土器(格子目文)

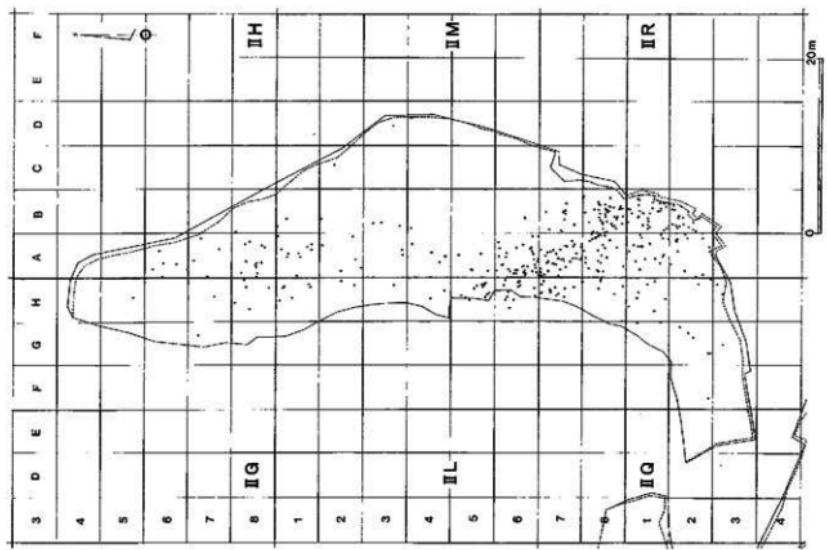


図20 繩文土器の分布(3) 早期・押型土器(横円文)

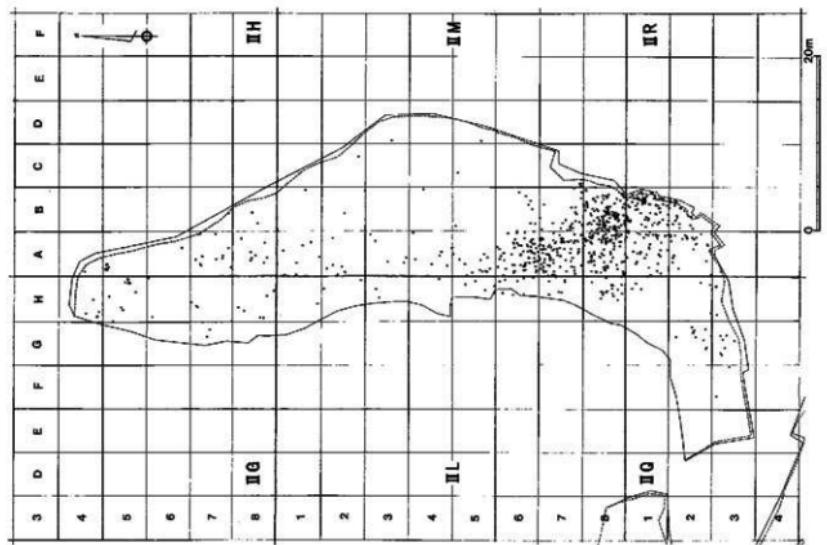


図23 繩文土器の分布(6) 早期・中期文土器 (平行線文)

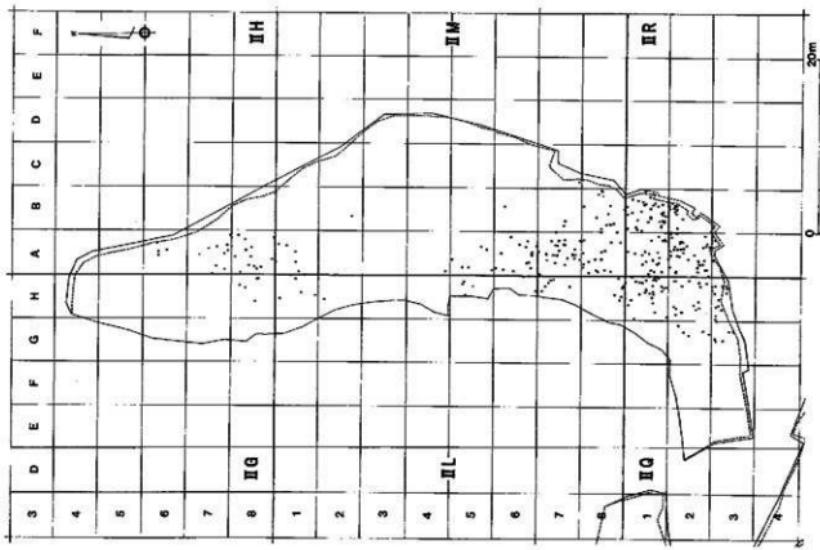


図22 繩文土器の分布(5) 早期・中期文土器 (平行線文)

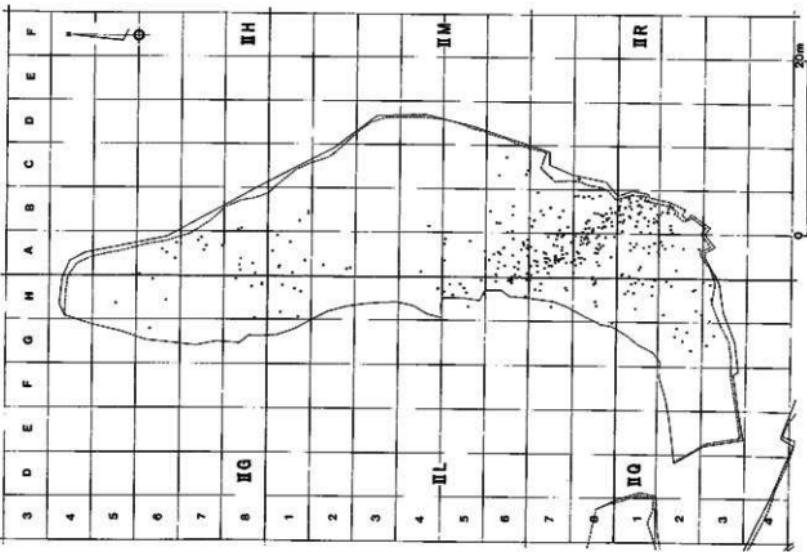


図25 繩文土器の分布(8) 早期・燃糸文土器

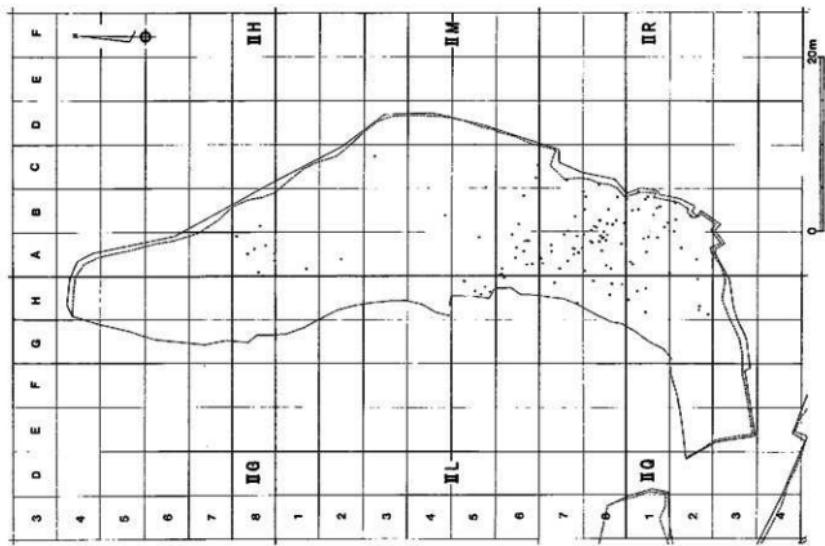


図24 繩文土器の分布(7) 早期・繩糸文土器

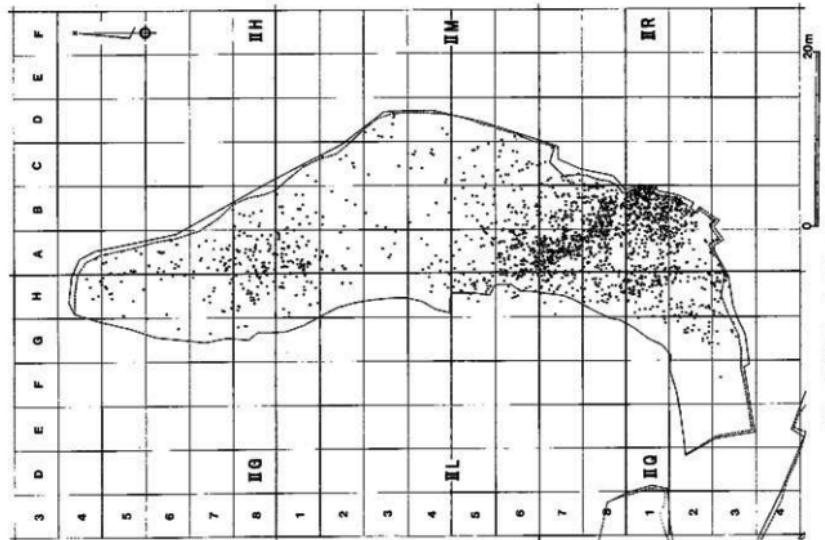
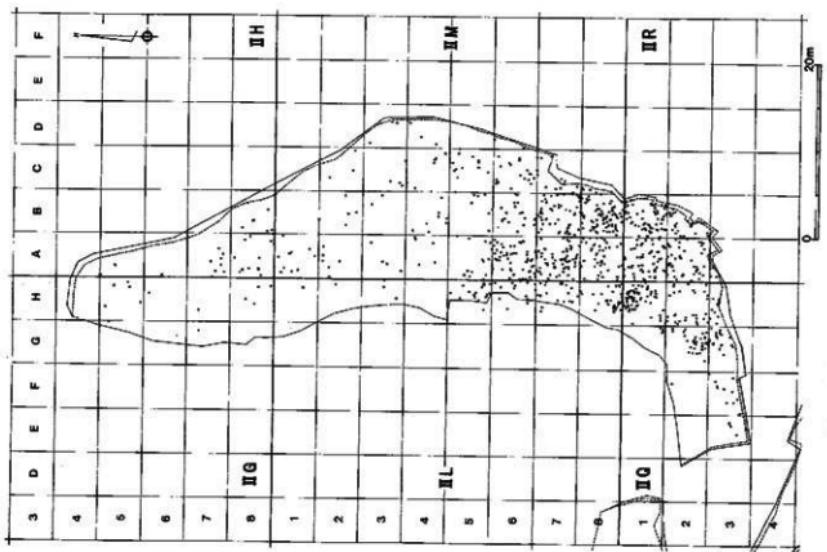
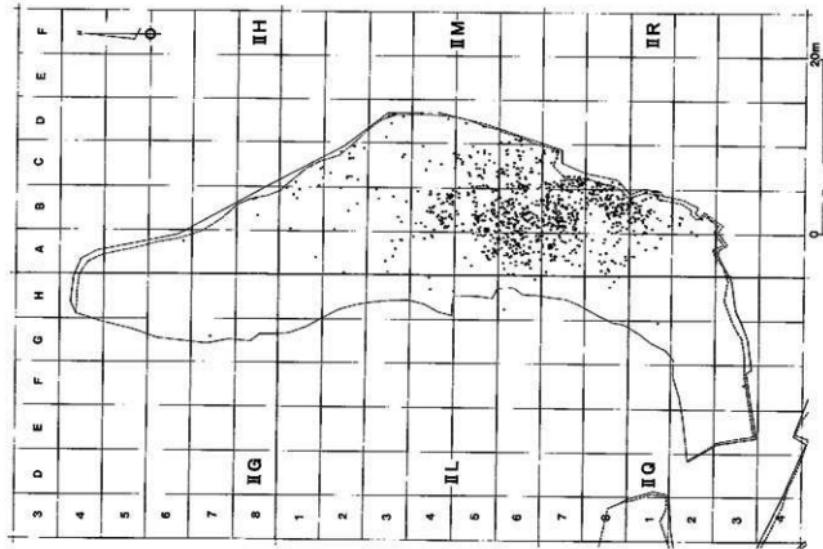


図27 繩文土器の分布⑩ 前期・精緻化式併行の土器(縄文土器をのぞく)

図26 繩文土器の分布⑨ 早期・無文土器



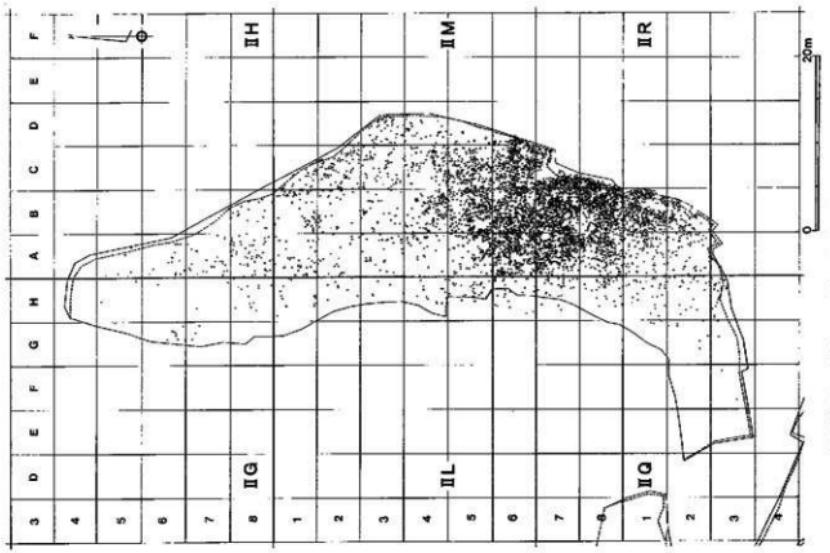


図29 縞文土器の分布① 前期・精織b式併行の土器、縞文のみの土器

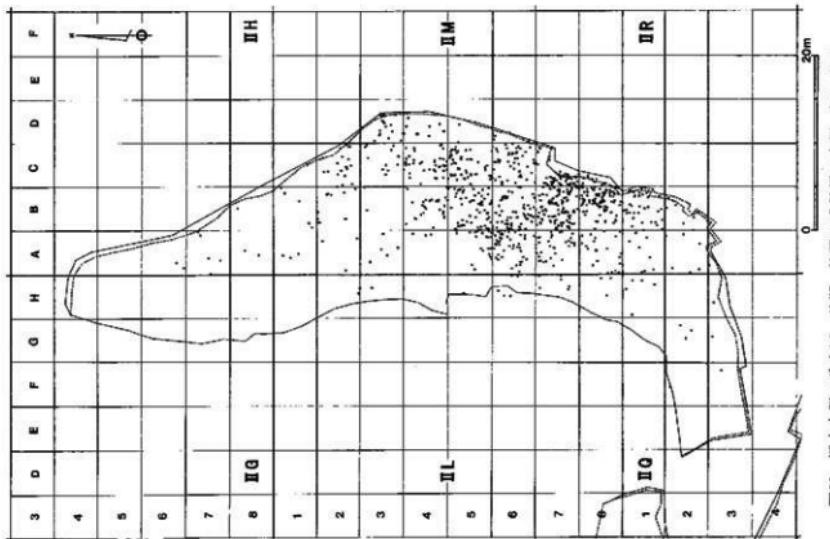


図28 縞文土器の分布② 前期・精織b式併行の土器、縞文のみの土器

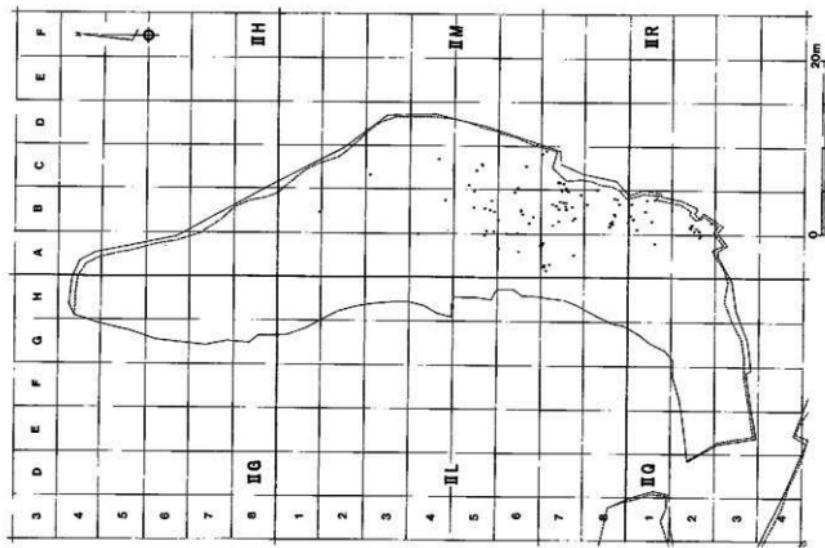


図31 繩文土器の分布04 前期末～中期初頭の土器

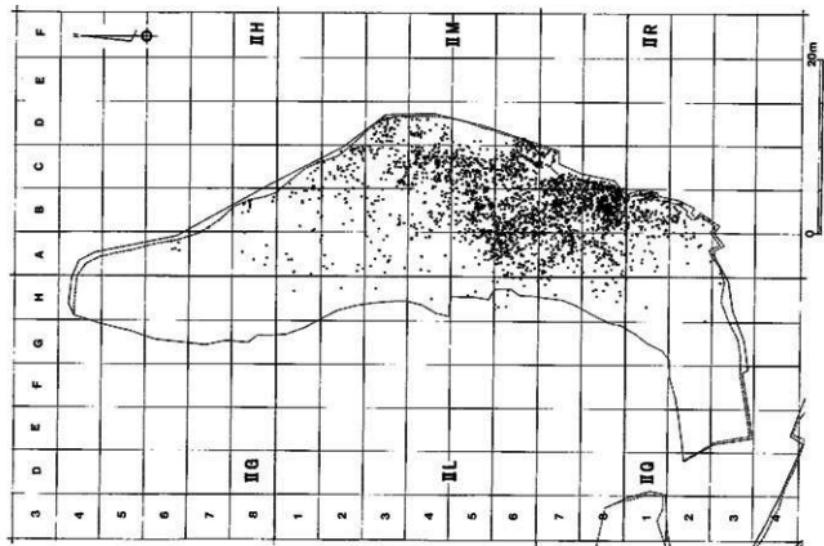


図30 繩文土器の分布04 前期・諸磯C式耕行の土器

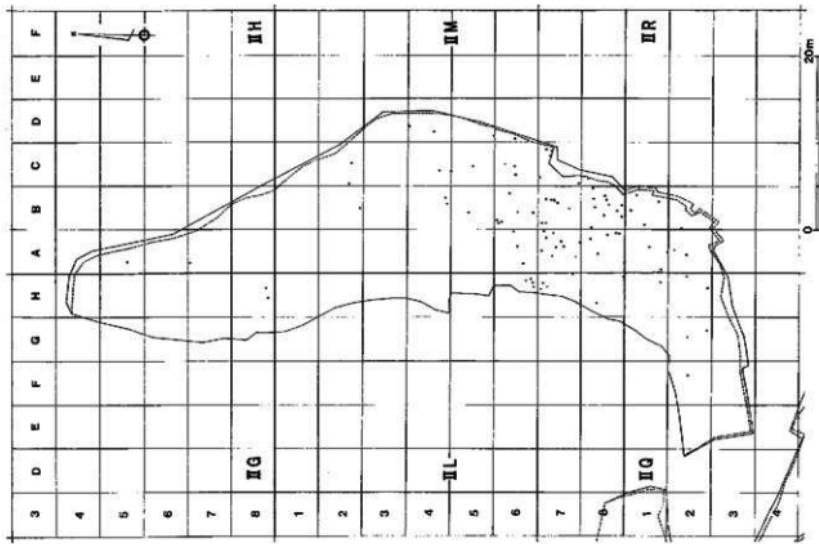


図33 石器の分布(2) 特殊磨石、磨石、凹石、砾石、スタンプ状石器、石皿

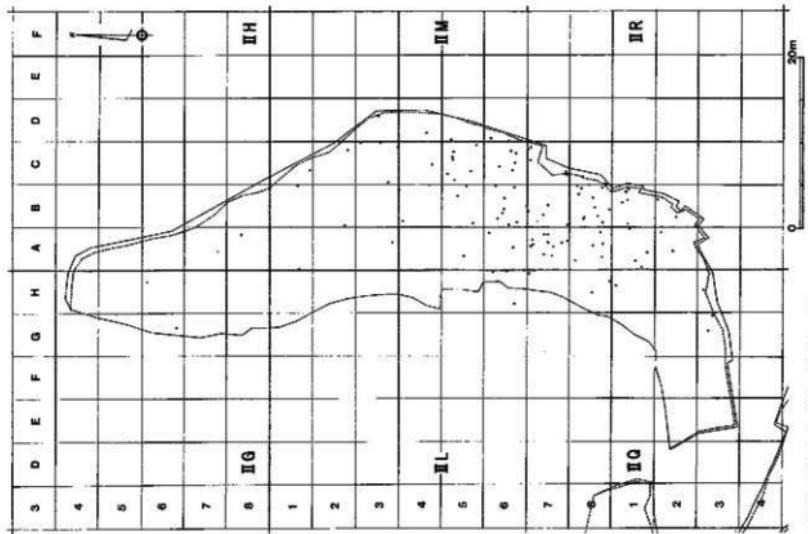


図32 石器の分布(1) 石鏃、石槍、石槍、石劍、スクレイバー、クサビ形石器、ヘラ形石器、石鍬、石斧、装飾品

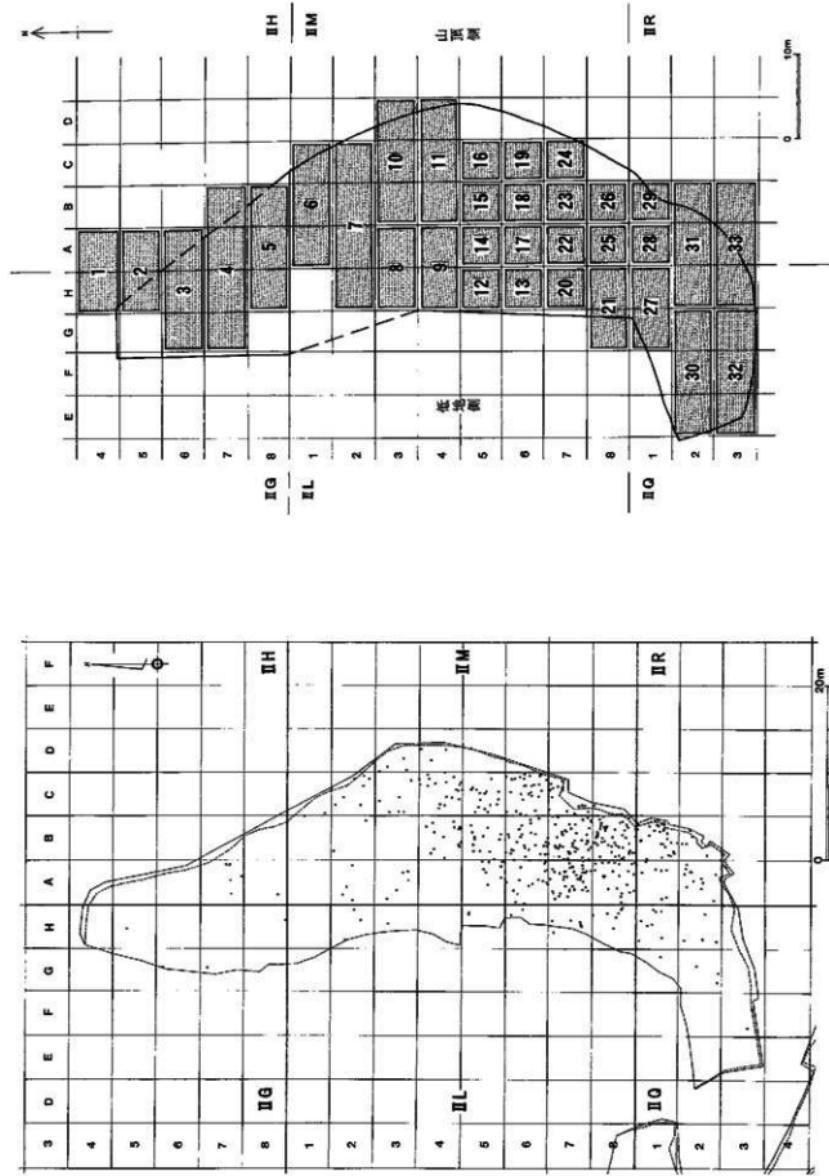


図35 市道越前調整池東斜面におけるグリッド別導物分布図の配置

図34 石礫の分布(3) 石板・刺片

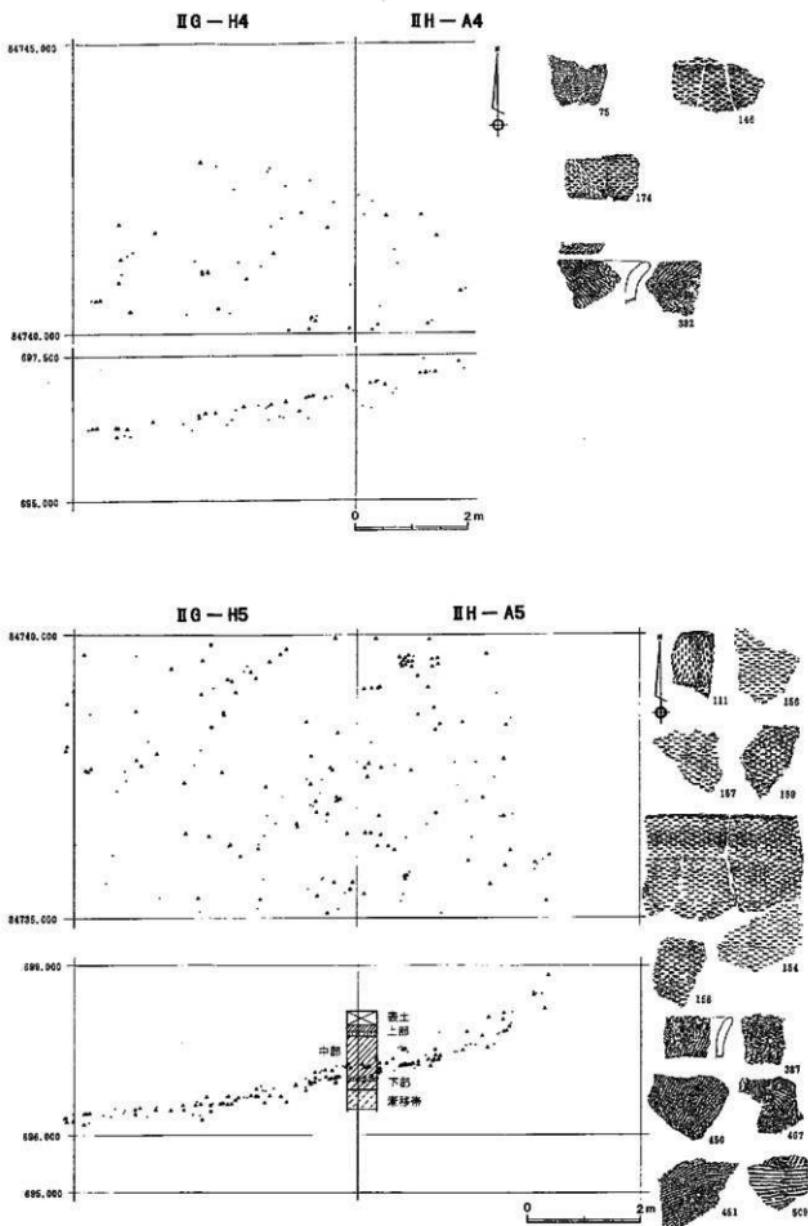


図36 グリッド別の遺物分布図(1, 2) 1:IIQH4・IIHA4 2:IIQH5・IIHA5

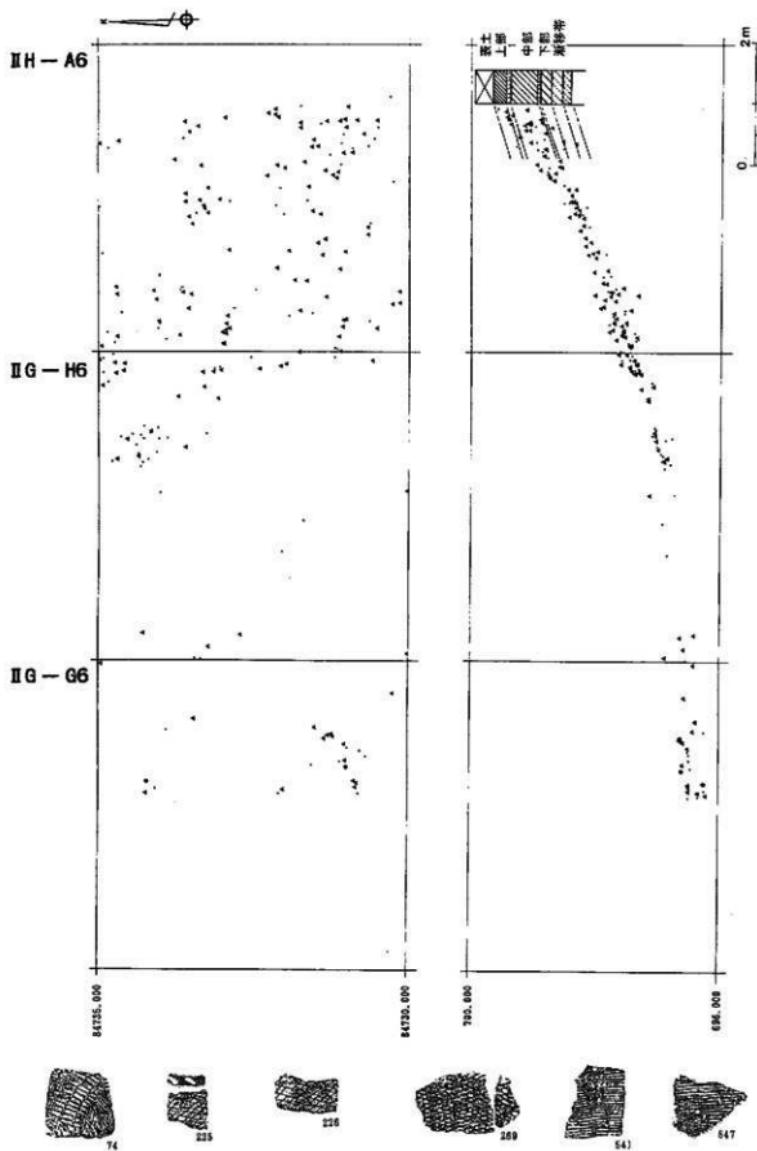


図37 グリッド別の遺物分布図(3) IIIA6・IIQH6・IIG6

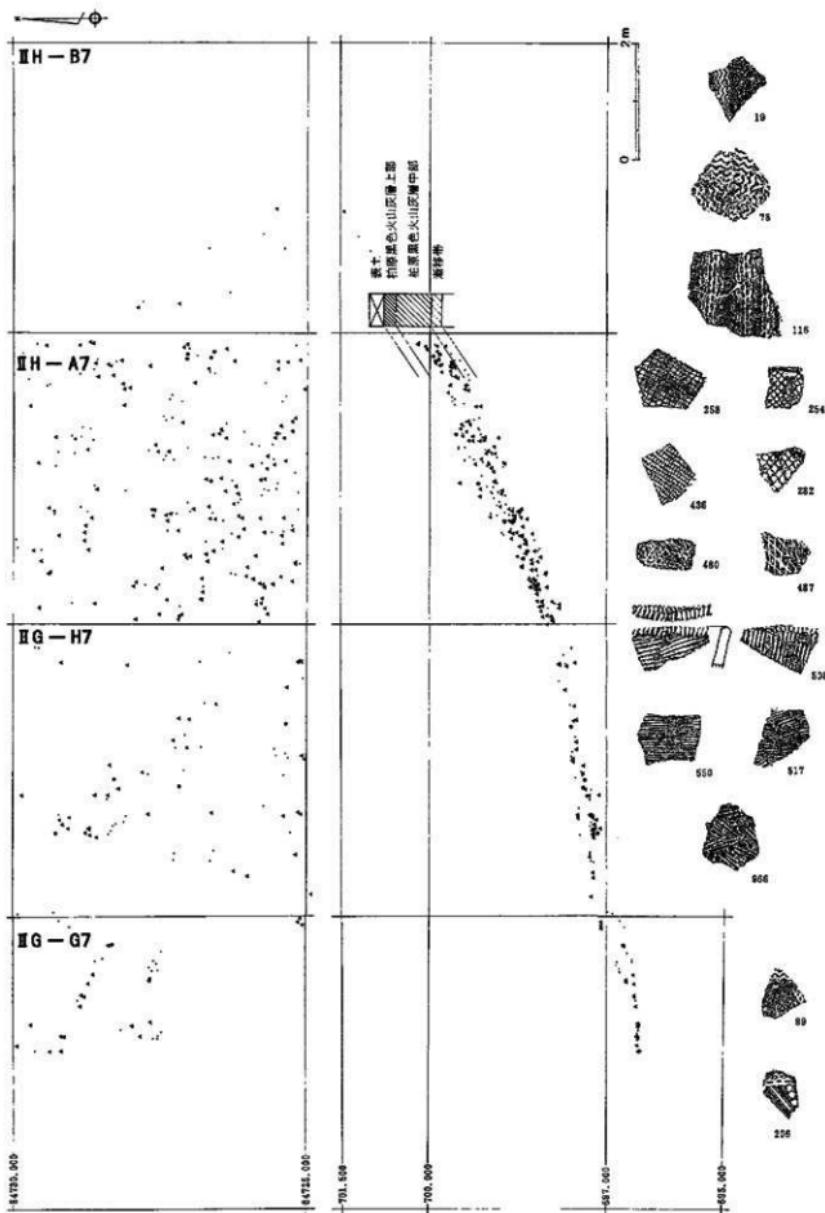


図38 グリッド別の遺物分布図(4) IIIH7・A7・IIIGH7・G7

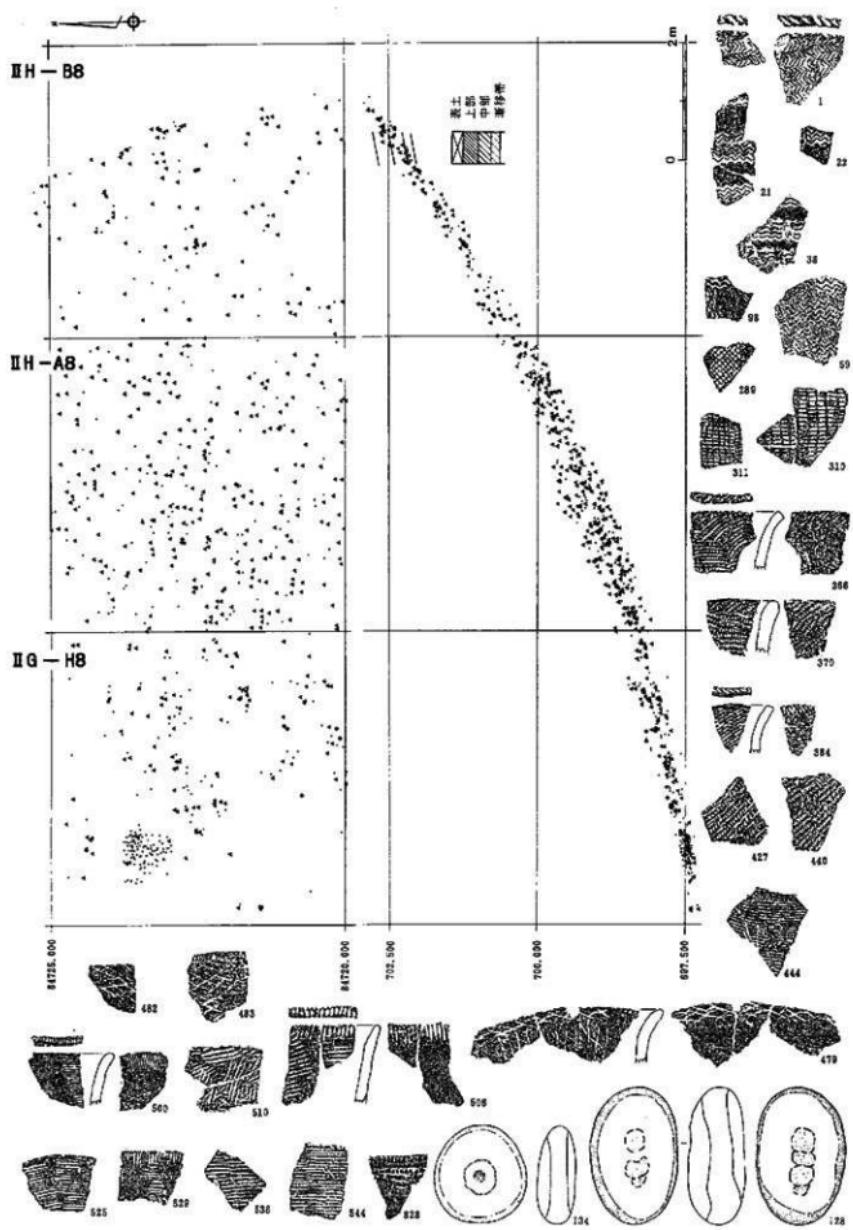


図39 グリッド別の遺物分布図(5) IIHB8・A8・IGH8

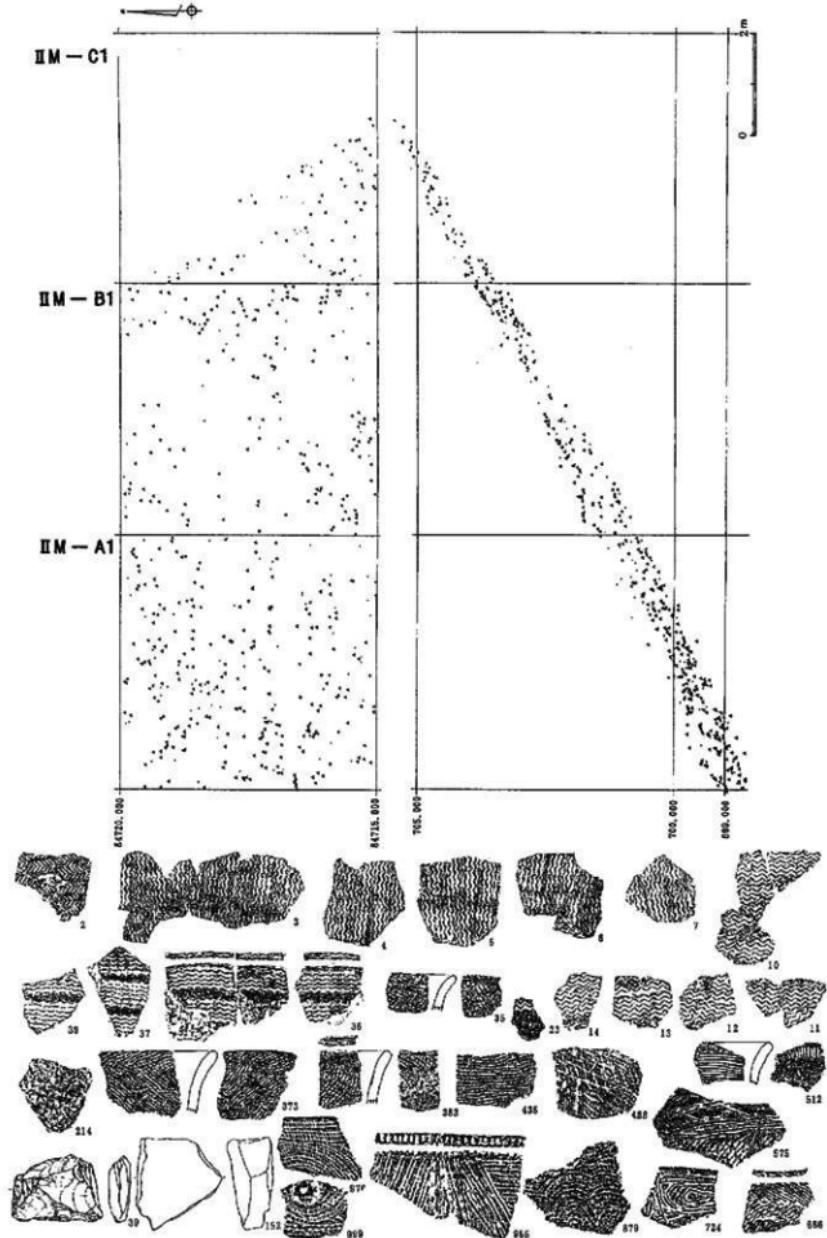


図40 グリッド別の遺物分布図(6) III-C1・B1・A1

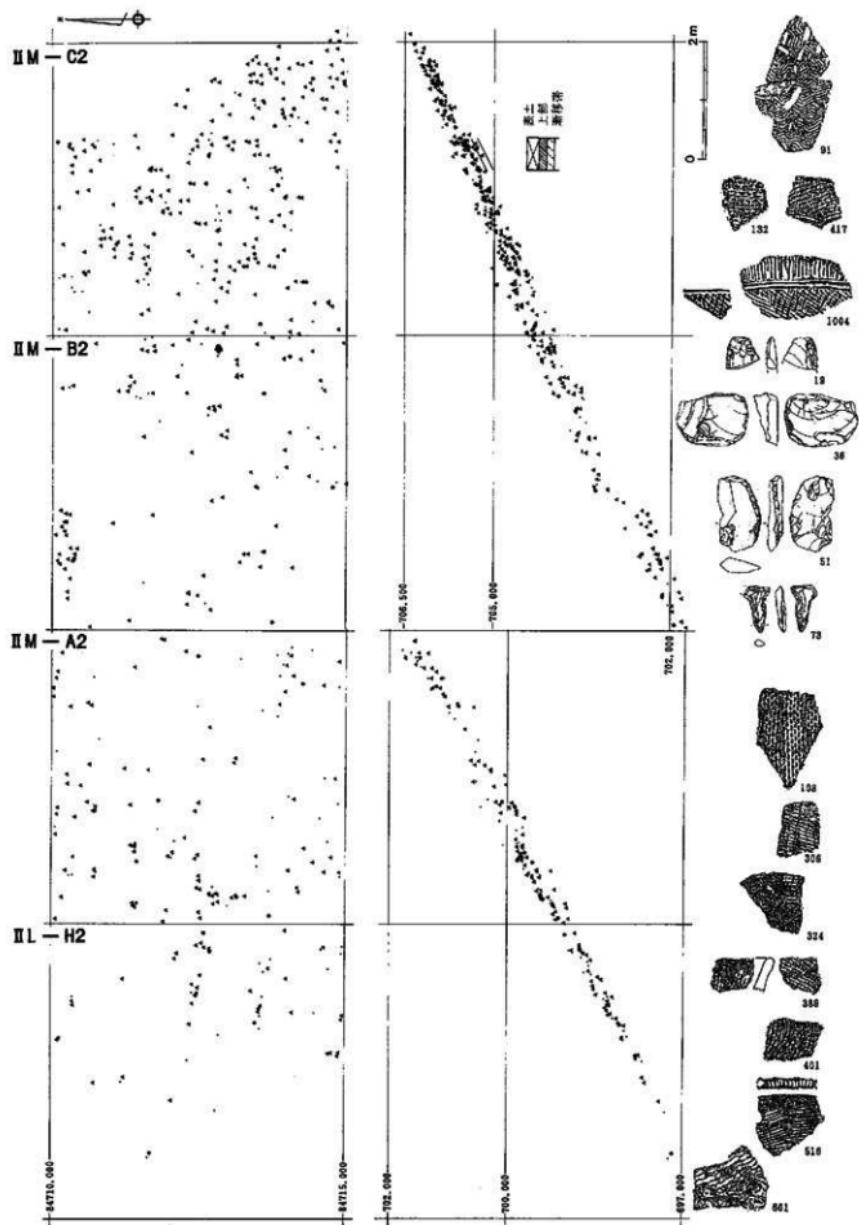


図41 グリッド別の遺物分布図(?) IMC2・B2・A2・II LH2

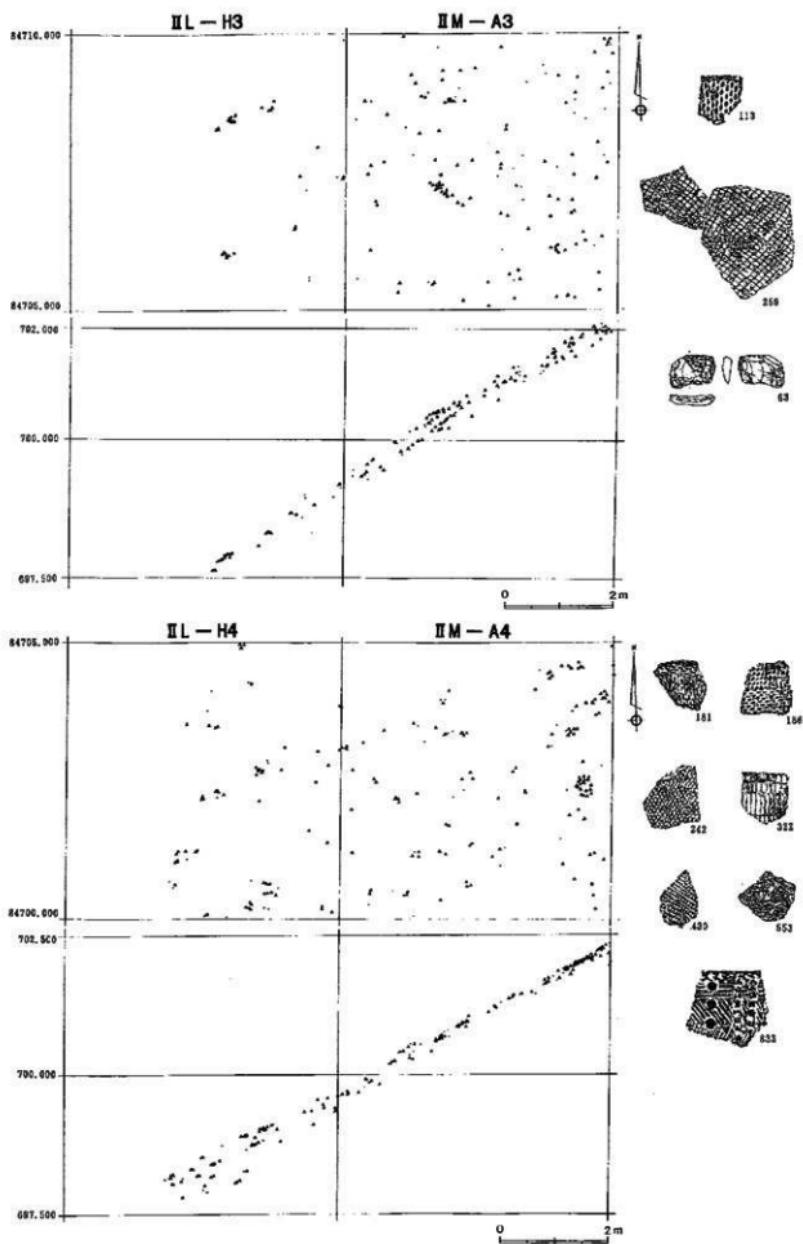


図42 グリッド別の遺物分布図(8, 9) 8 : II L H3・II M A3 9 : II L H4・II M A4

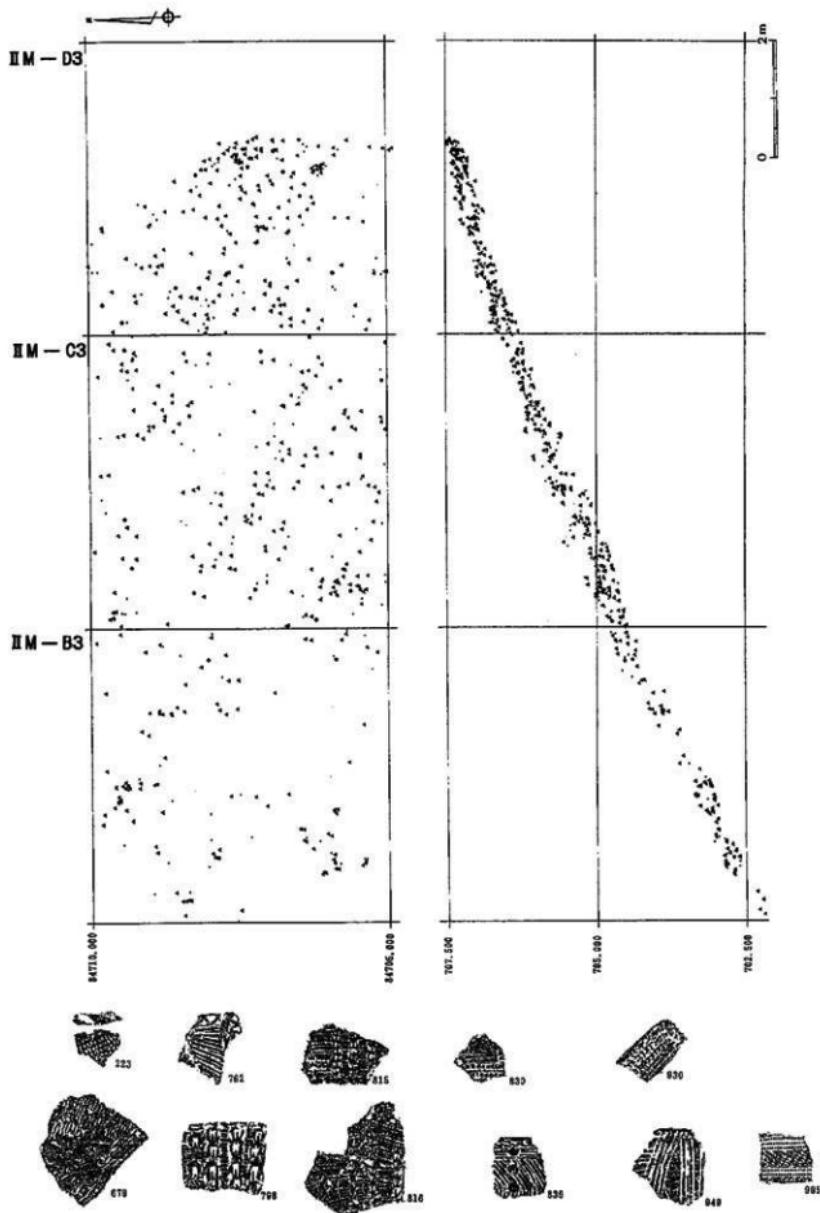


図43 グリッド別の遺物分布図III II M-D3・C3・B3

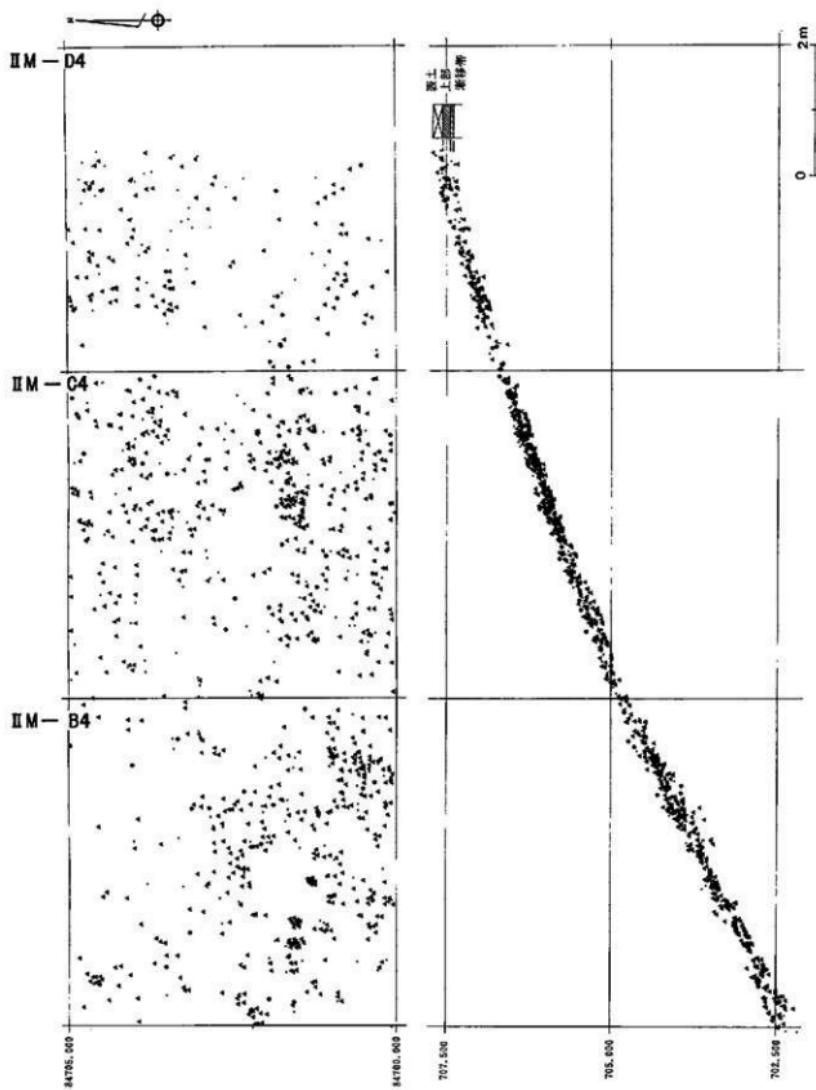


図44 グリッド別の遺物分布図⑩① III M-D4・C4・B4

IM-B4 C4 D4

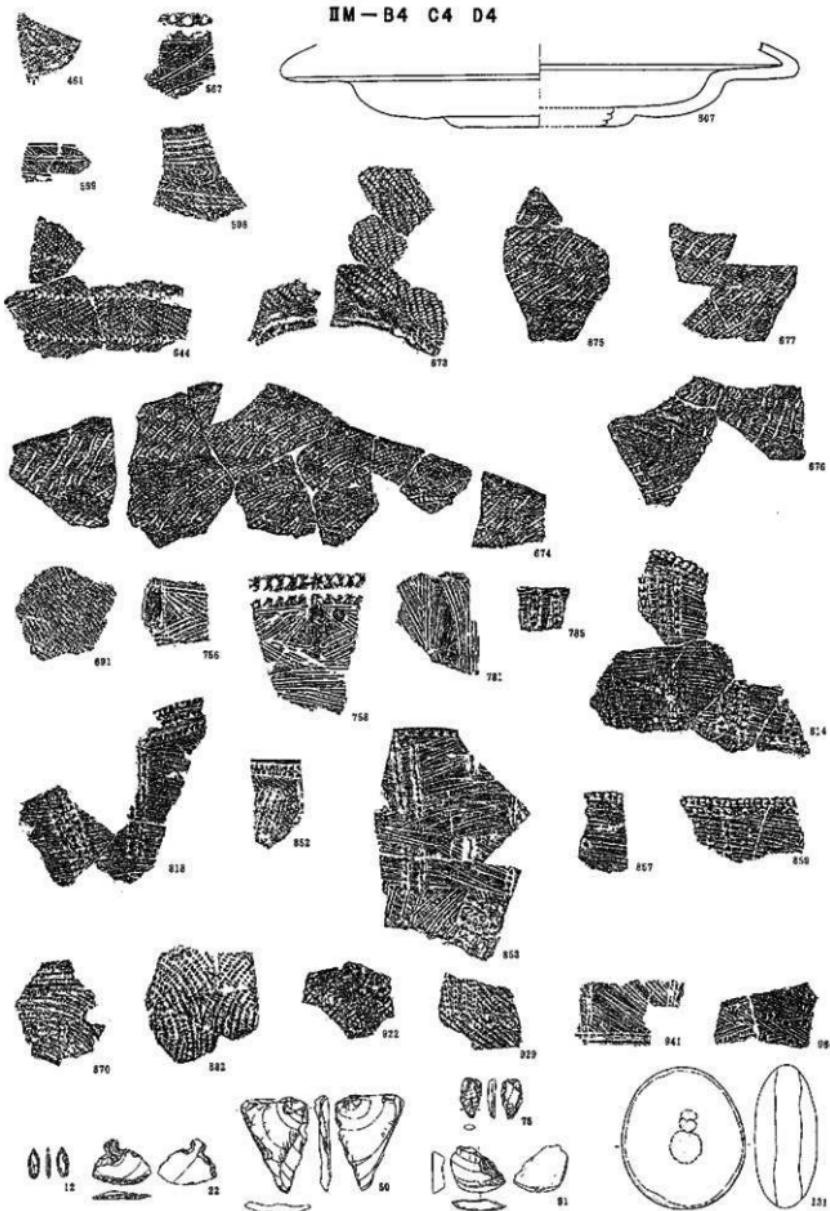


図45 グリッド別の遺物分布図(1)② IIMB4・C4・D4

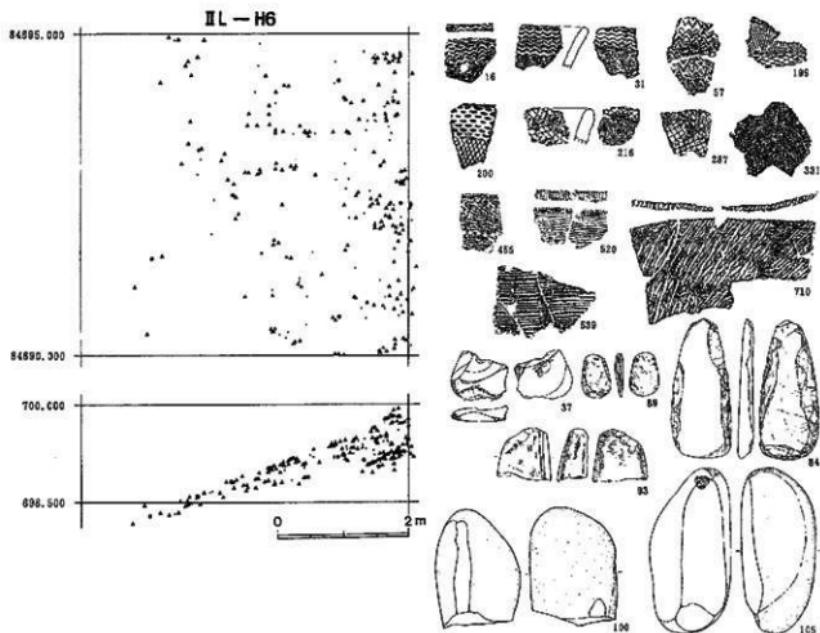
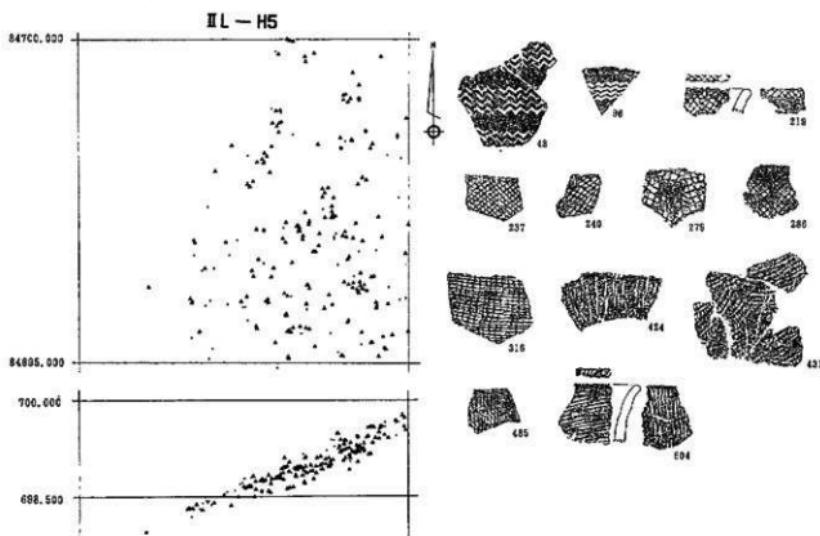


図46 グリッド別の遺物分布図(12, 13) 12: III L15 13: III H6

III-A5

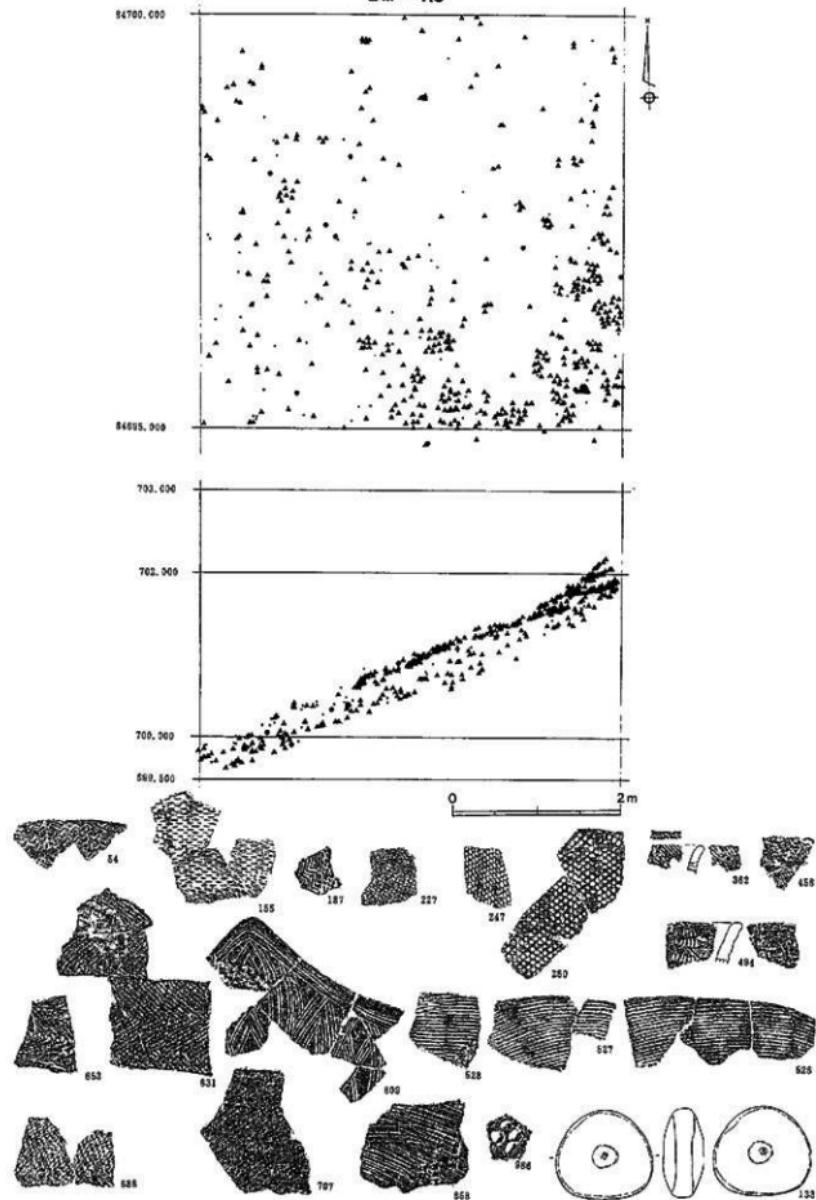


図47 グリッド別の遺物分布図(4) IIIA5

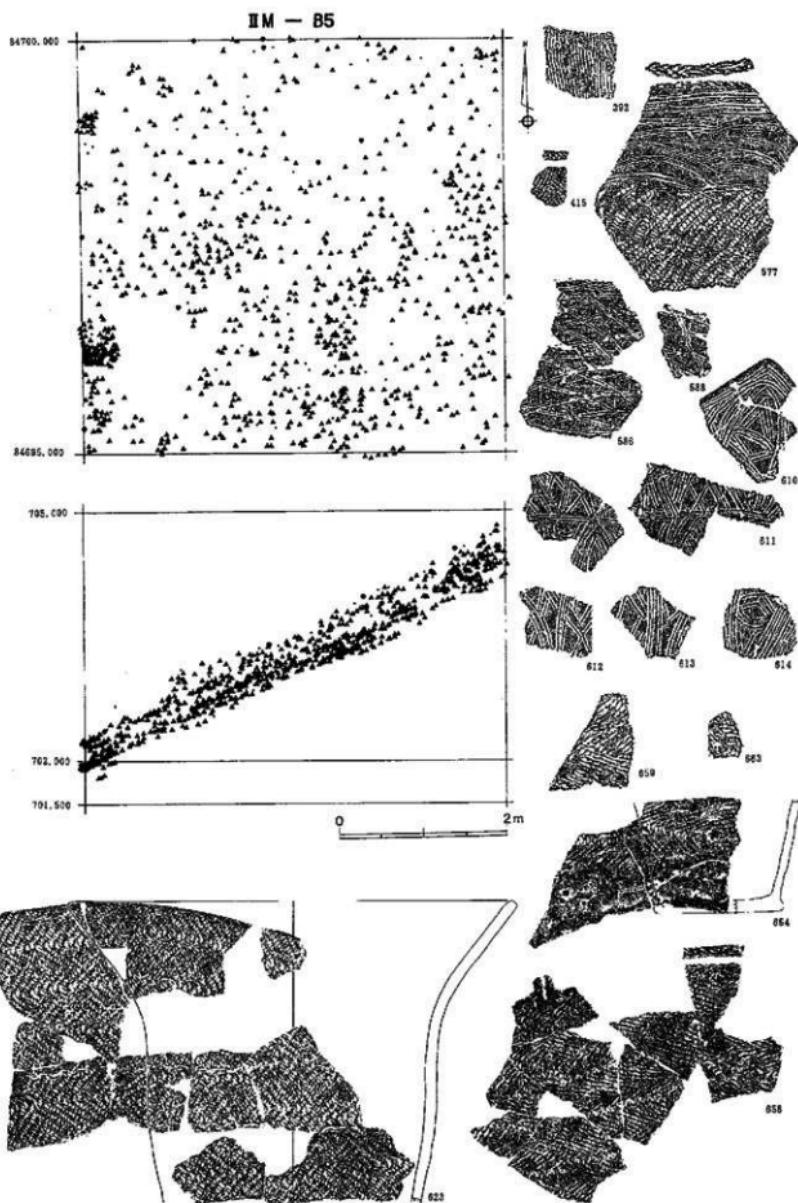


図48 グリッド別の遺物分布(図13① III MB 6)

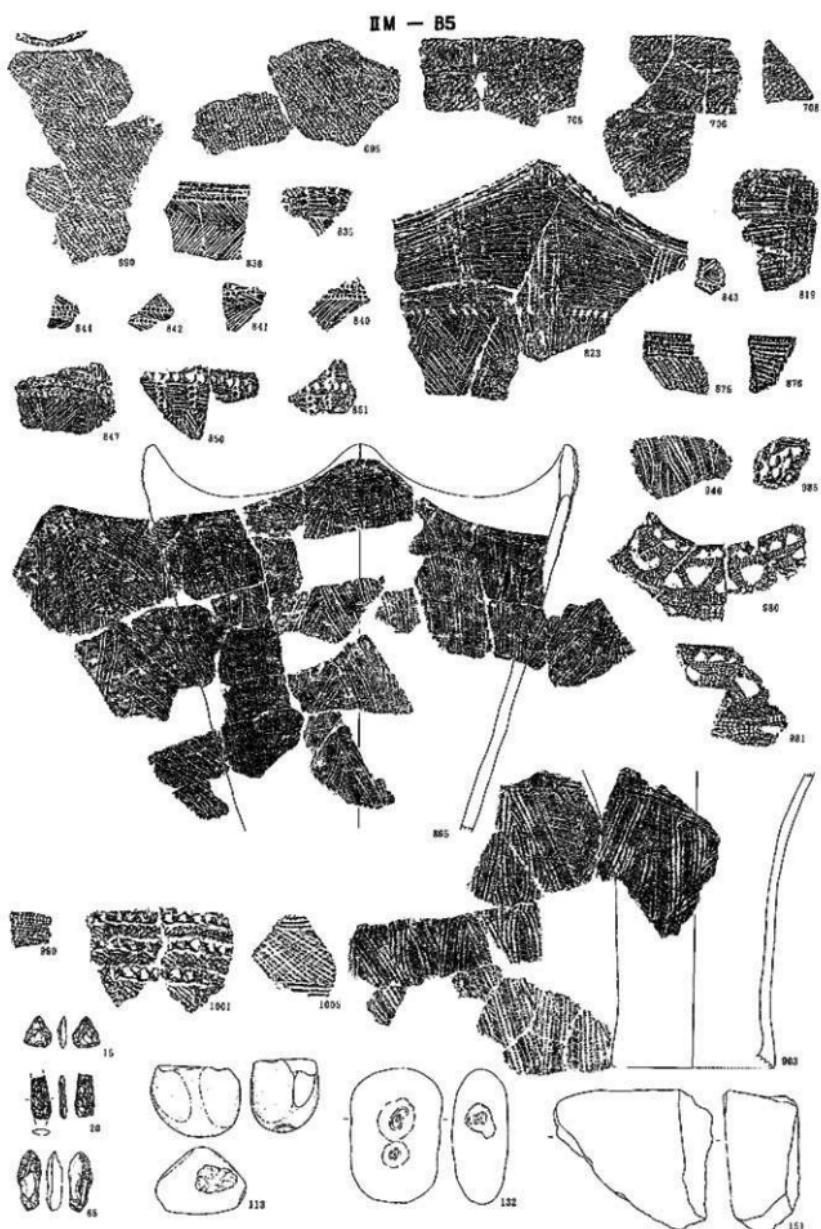


図49 グリッド別の遺物分布図(3)② III B5

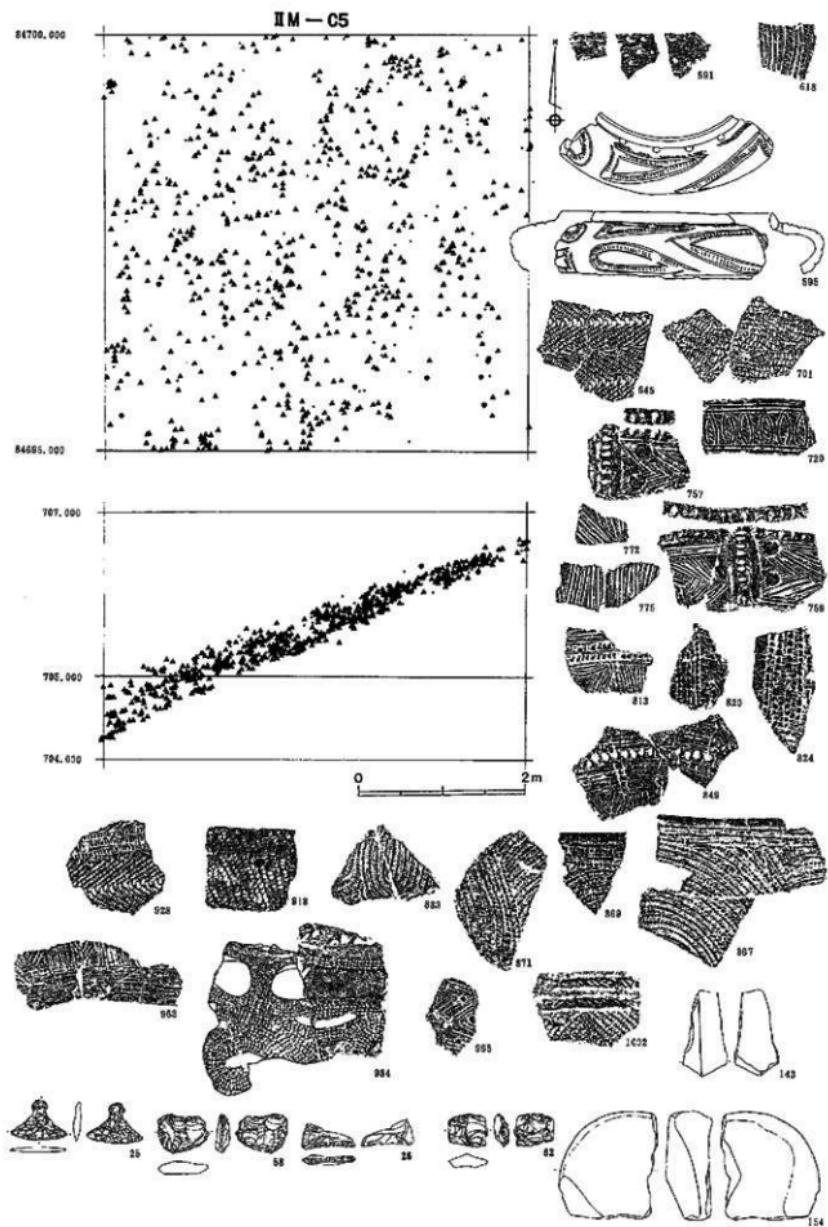


図50 グリッド別の遺物分布図(1) IIMC5

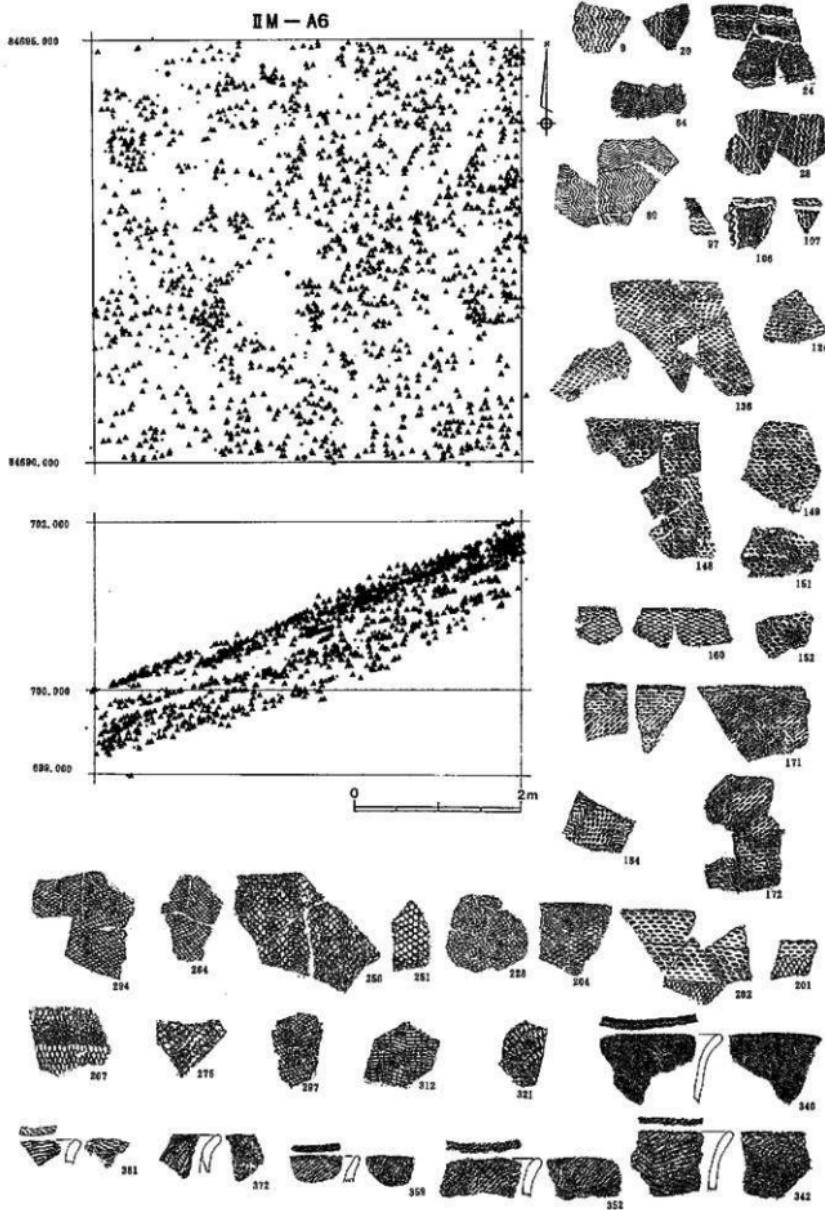


図51 グリッド別の遺物分布図(1) II M A6

III-A6

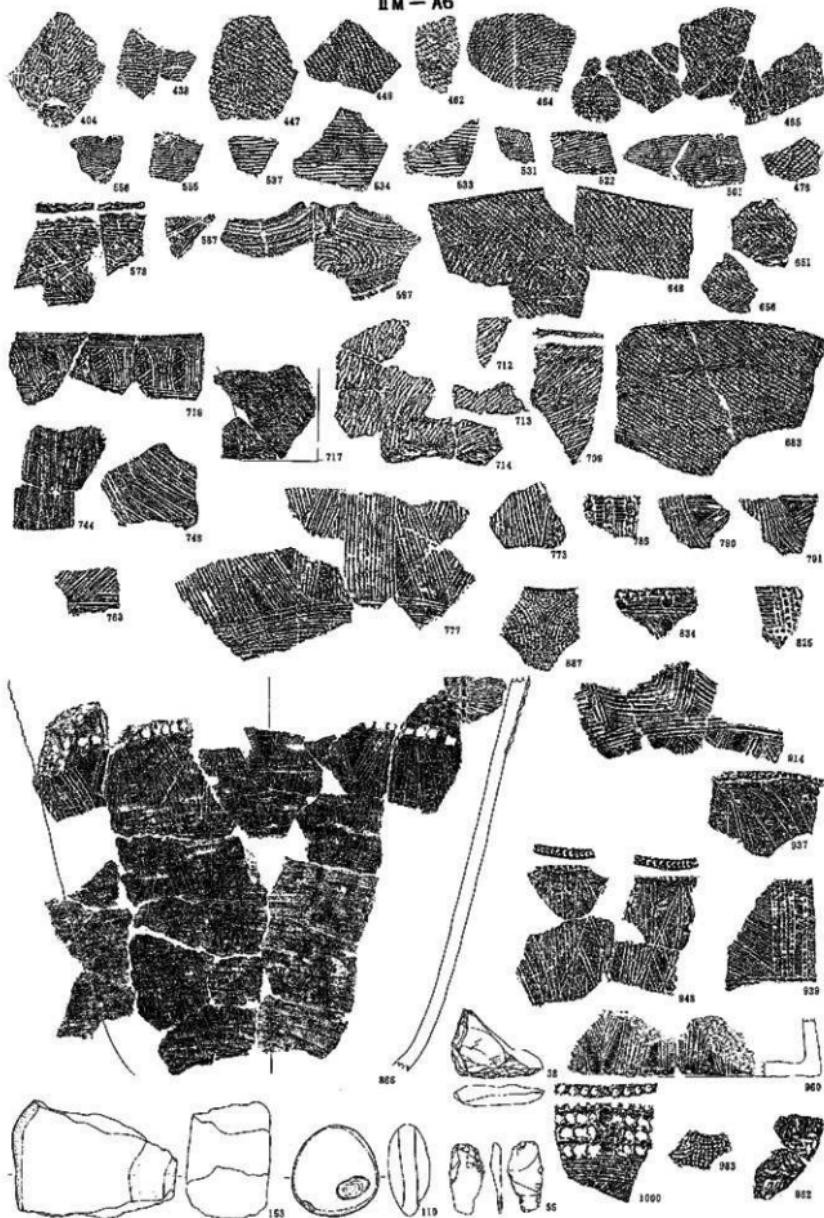


図52 グリッド別の遺物分布図(17)② IIIA6

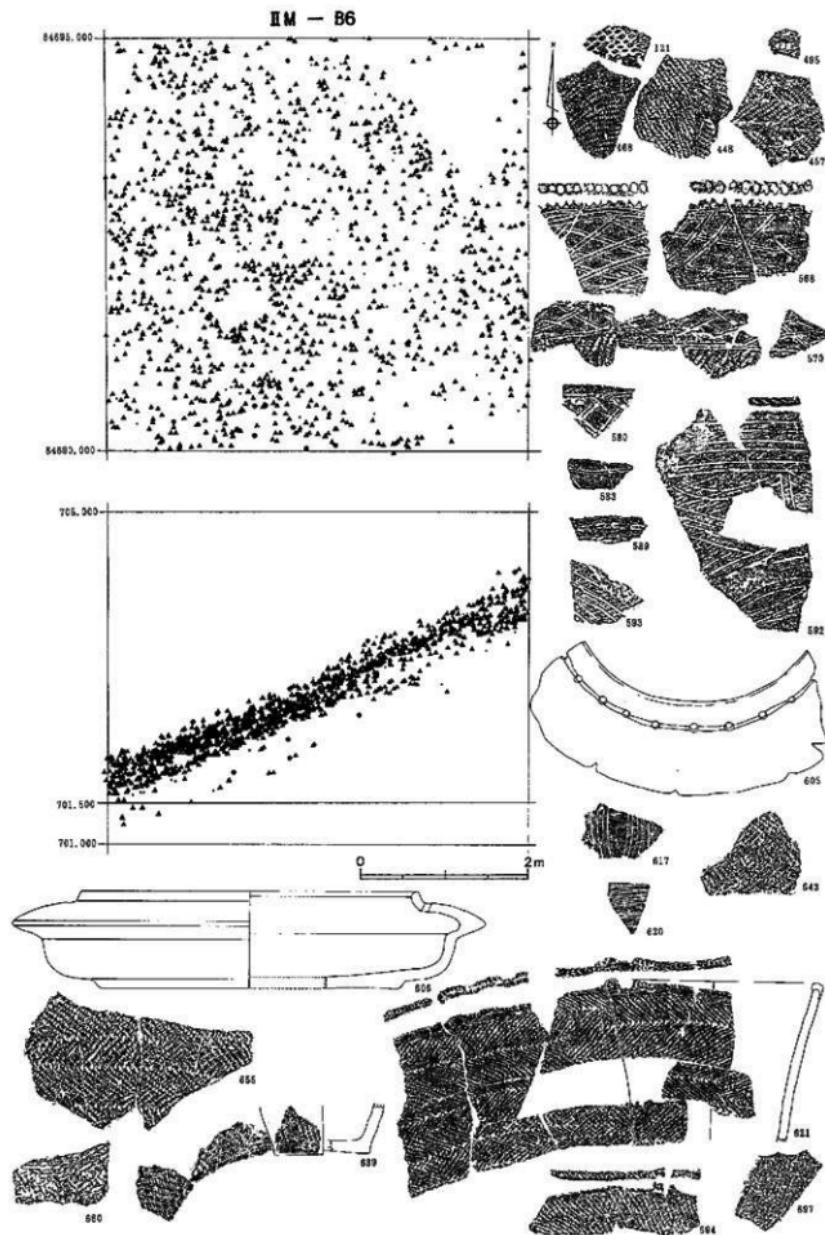


図53 グリッド別の遺物分布図(18①) IIIB 6

II M - B6

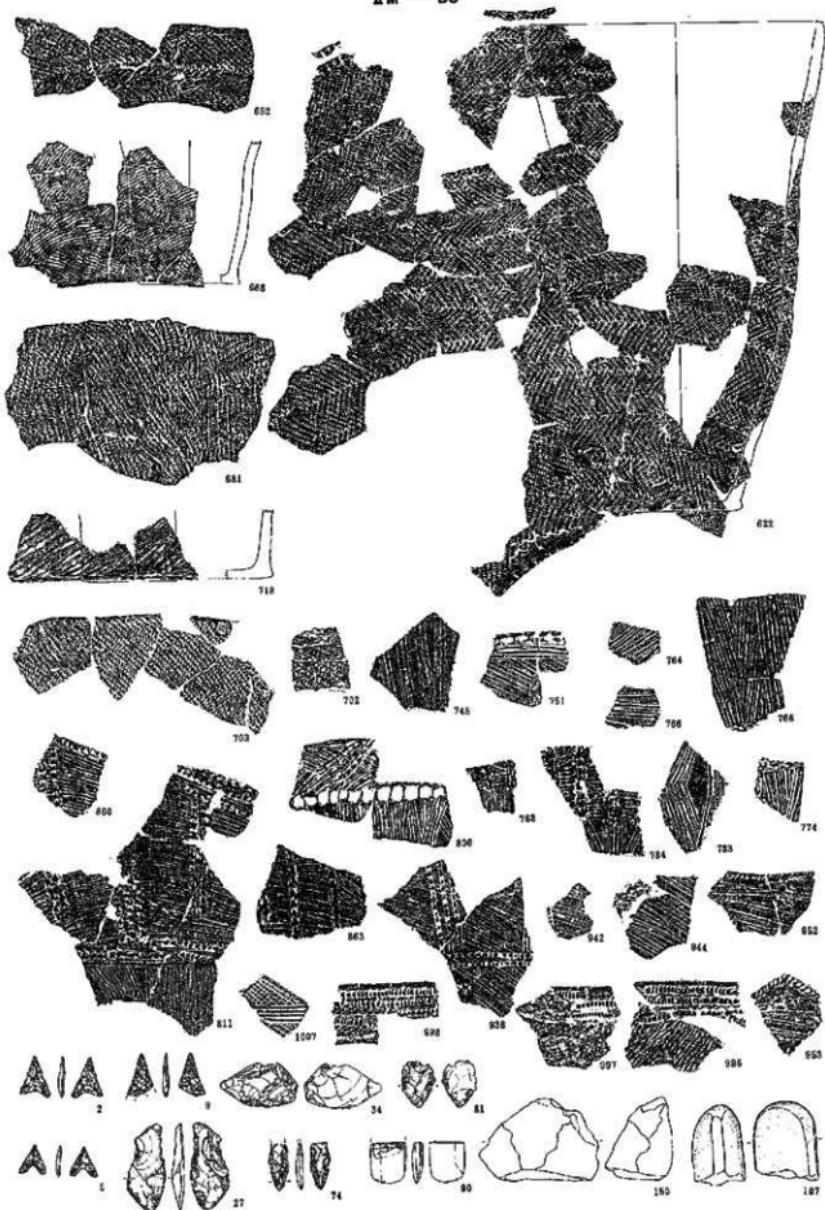


図54 グリッド別の遺物分布図(2) II M-B6

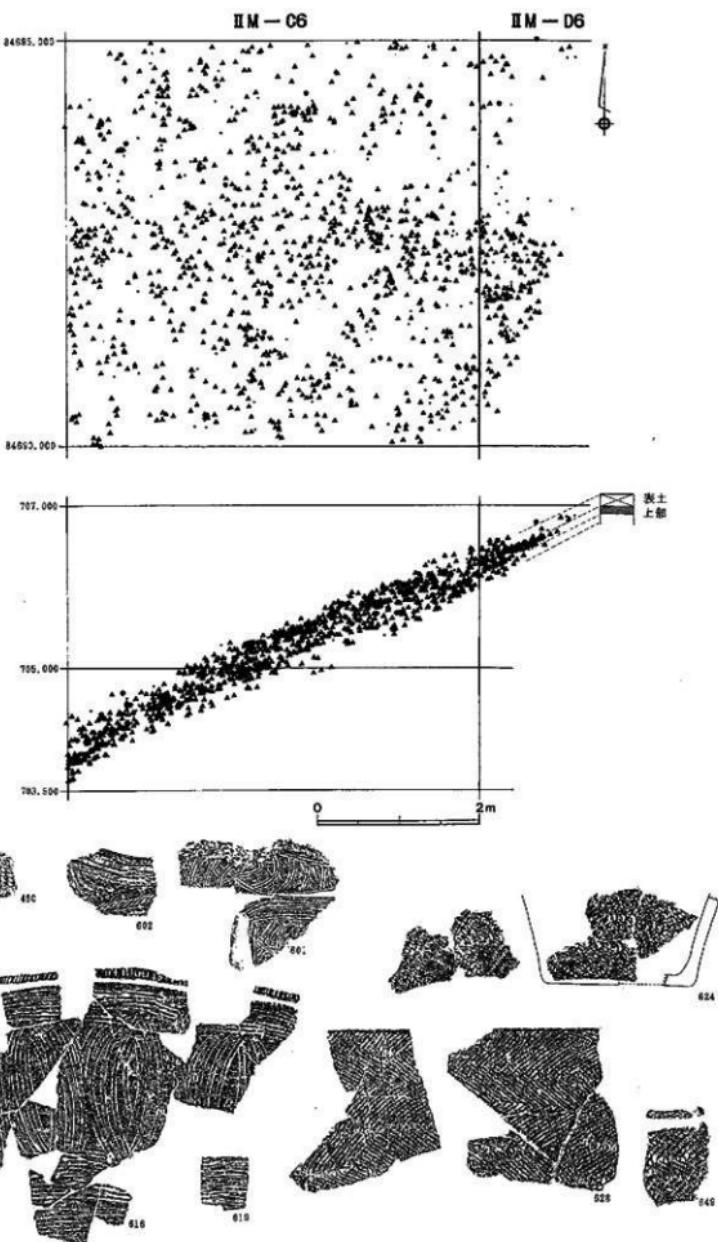


図55 グリッド別の遺物分布図① II M C6・D6

III - C6 D6

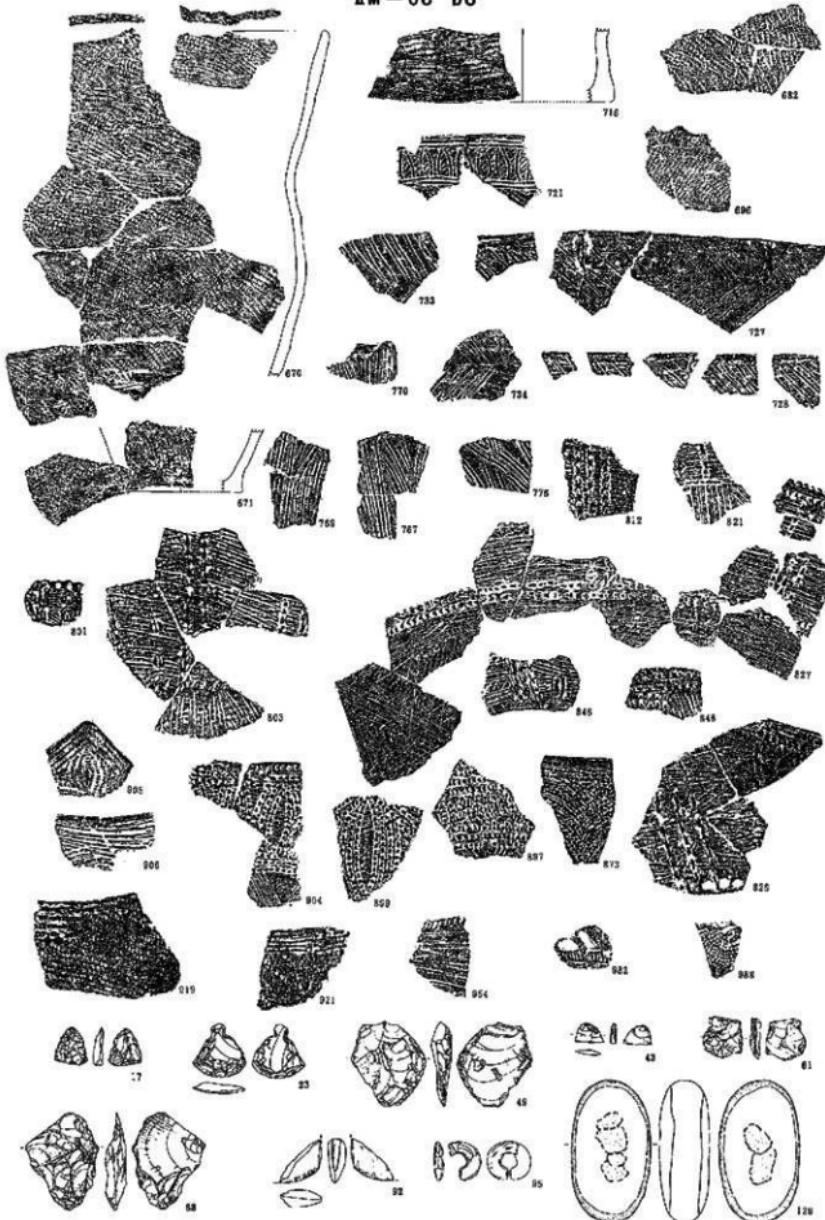


図56 グリッド別の遺物分布図(9)(2)

IIMC 6 • D6

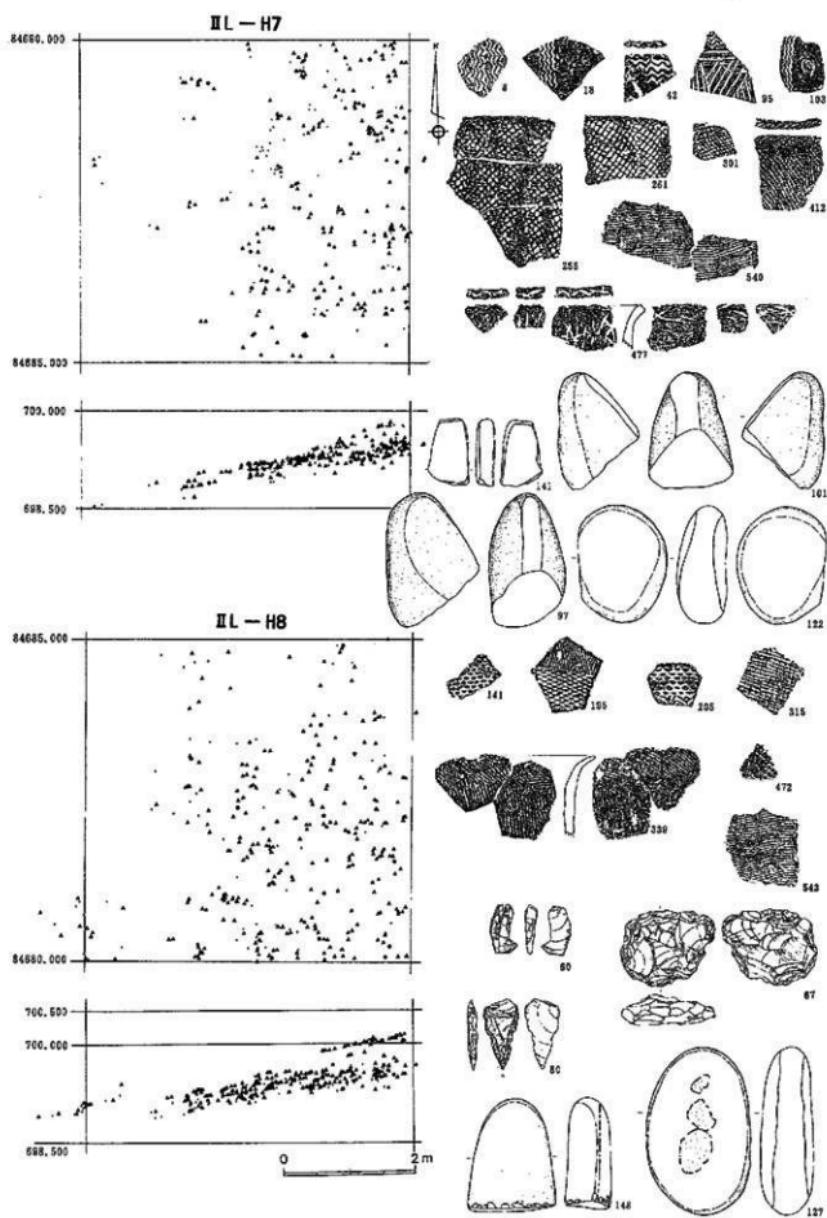


図57 グリッド別の遺物分布図(20, 21) 20: IIIH7 21: IIIH8

IM-A7

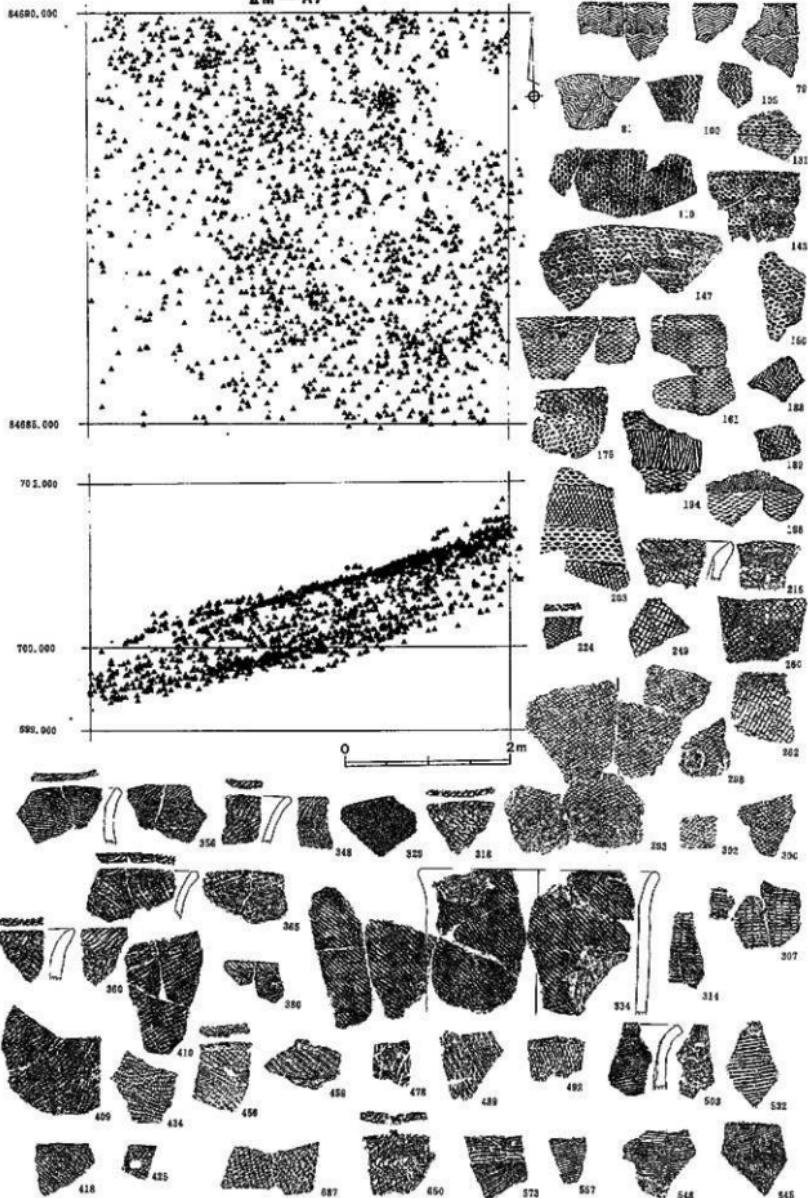


図58 グリッド別の遺物分布図(22)① JMA7

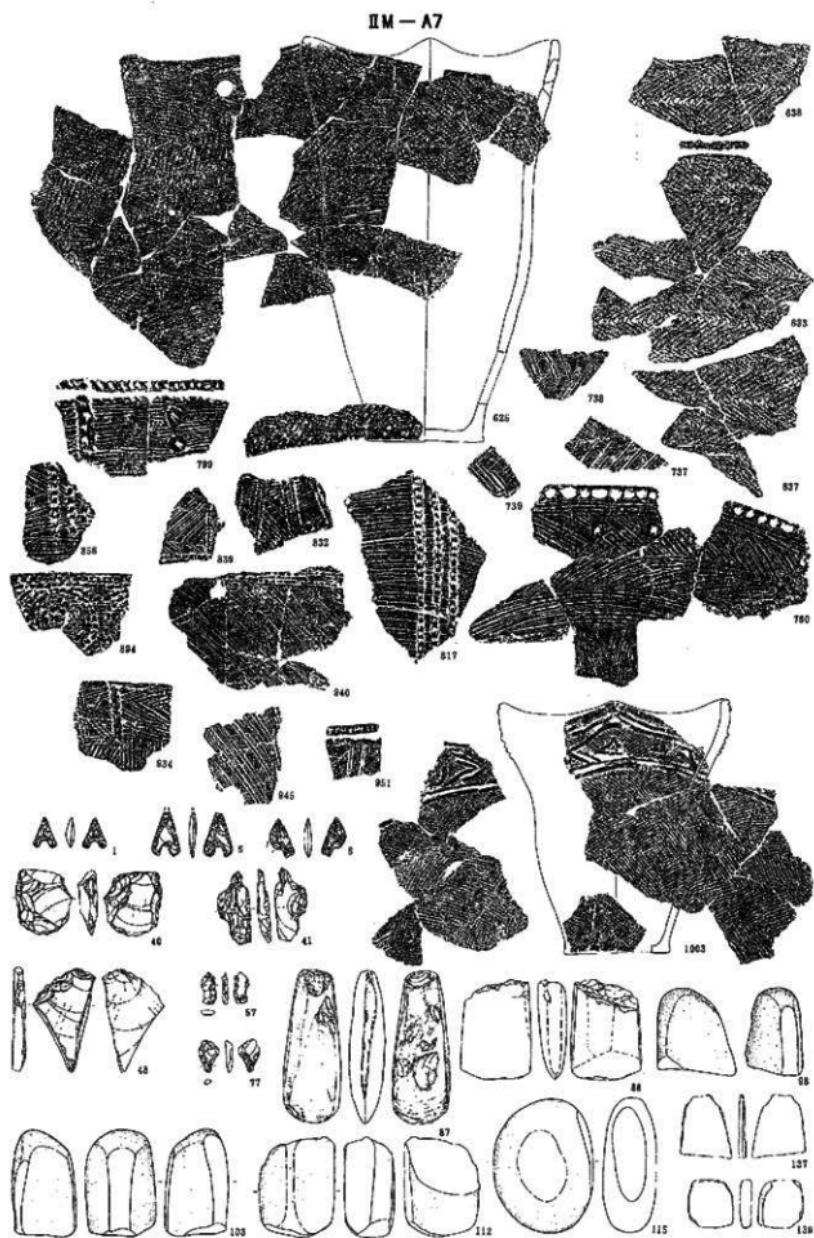


図59 グリッド別の遺物分布図(22)② II MA 7

## II M - B7

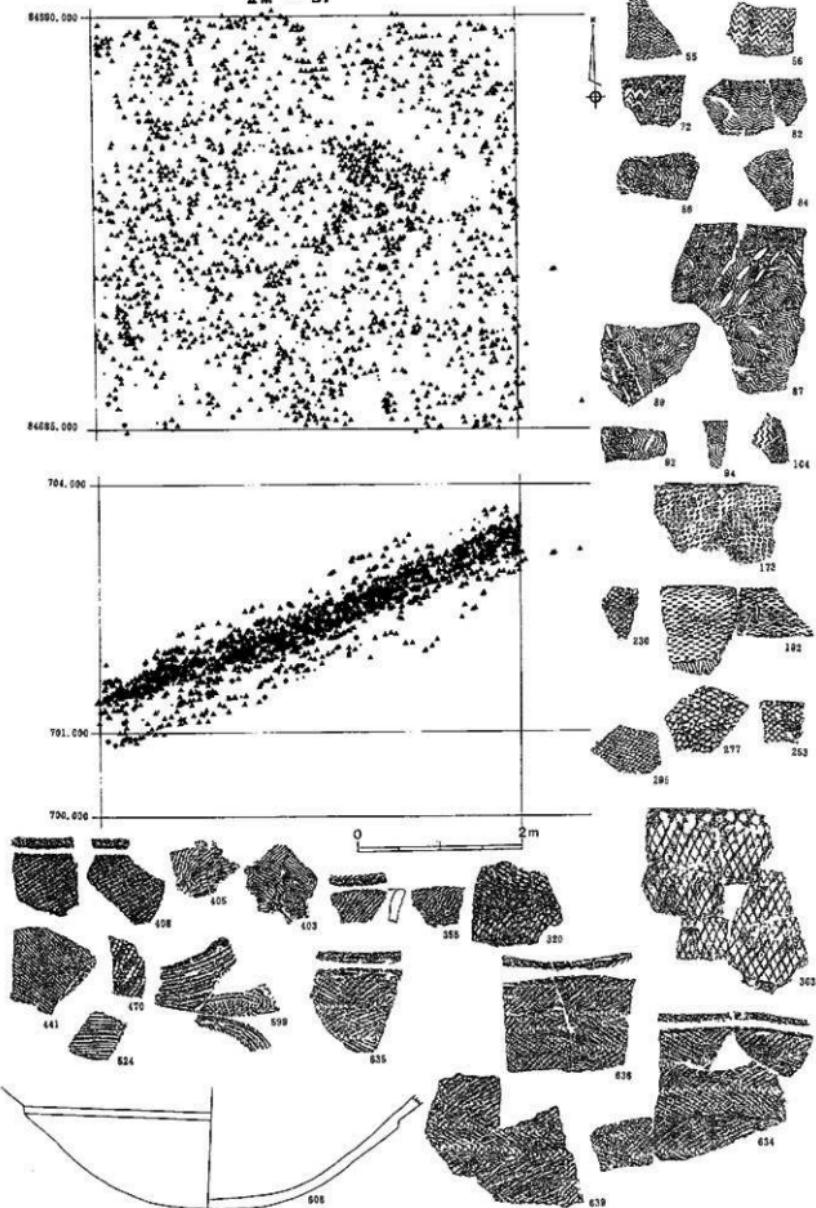


図60 グリッド別の遺物分布図(23)①

II M B7

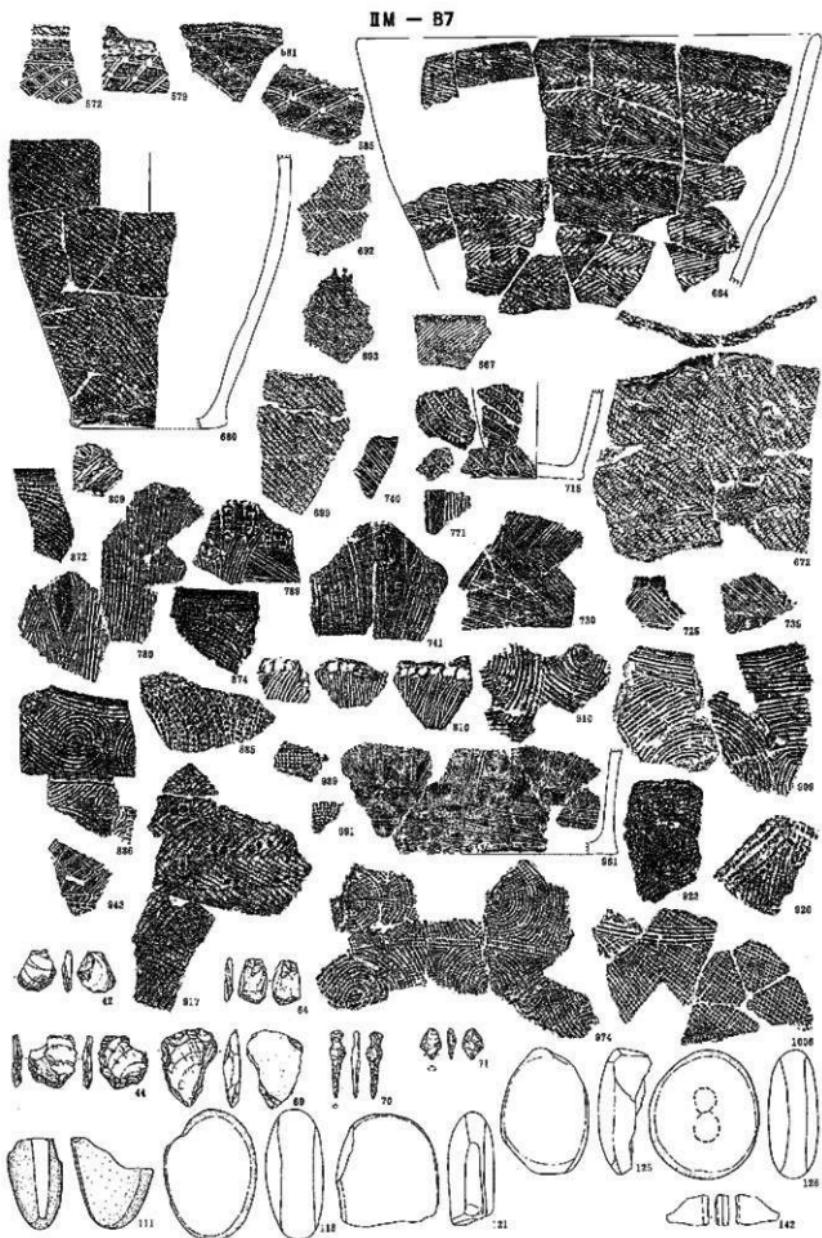
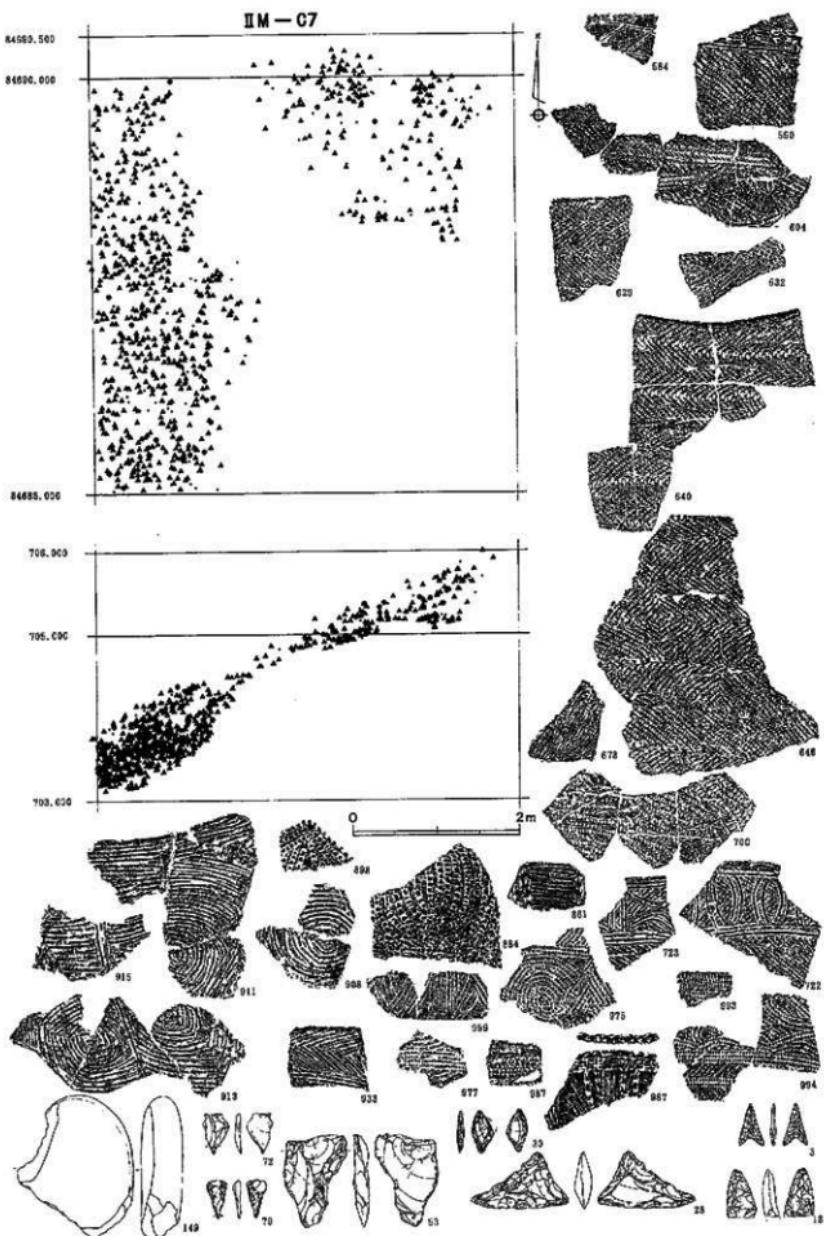


図61 グリッド別の遺物分布図(23)② III-B7



II M - A8

8485.000

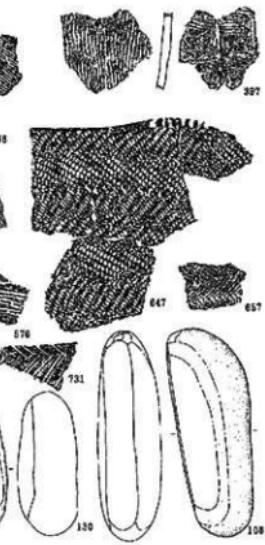
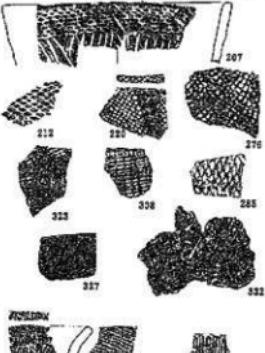
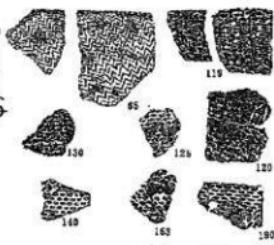
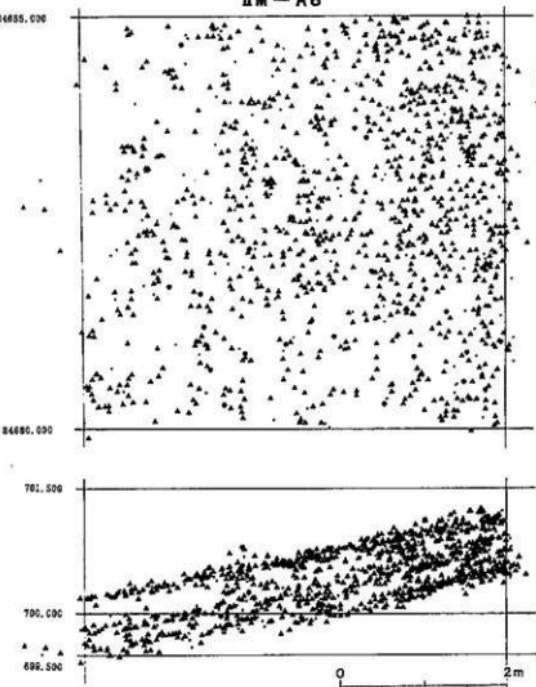


図63 グリッド別の遺物分布図(25) II M A8

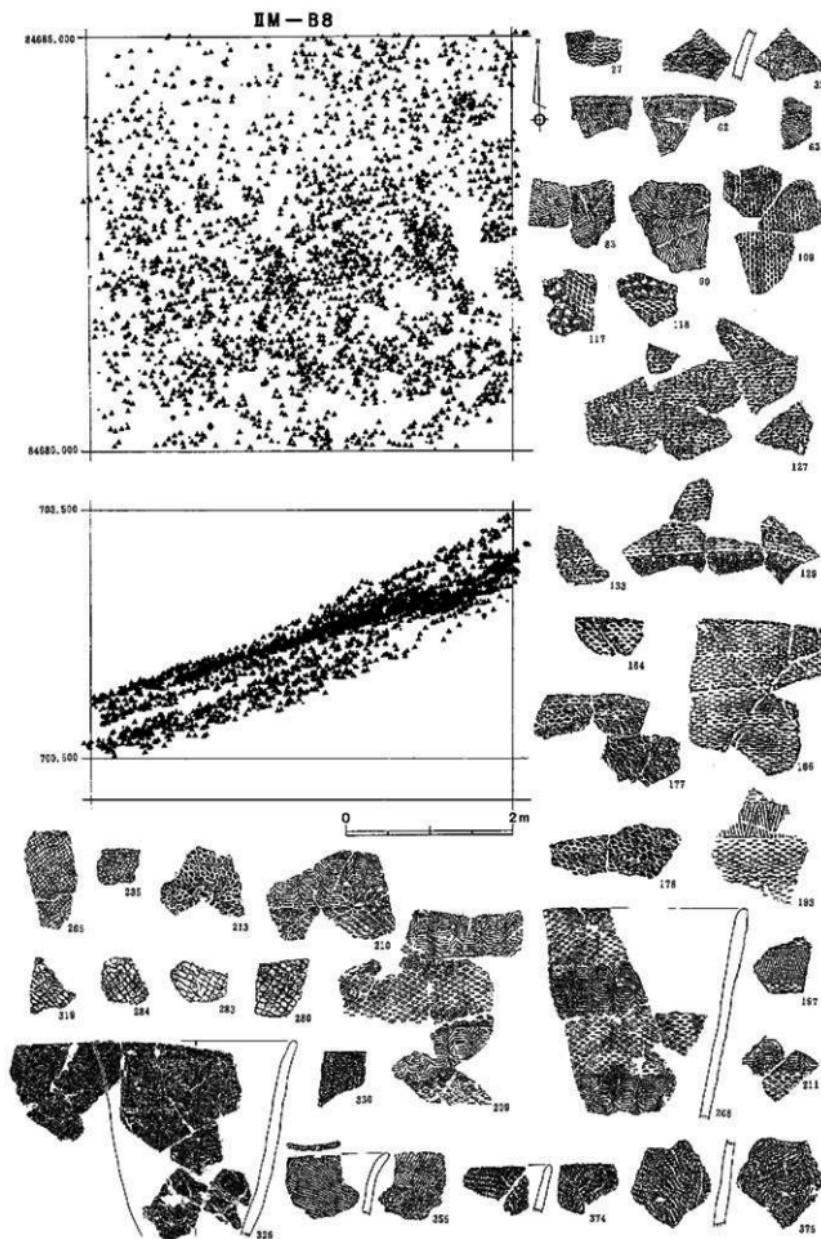


図64 グリッド別の遺物分布図(26)① IIMB8

II M - B8

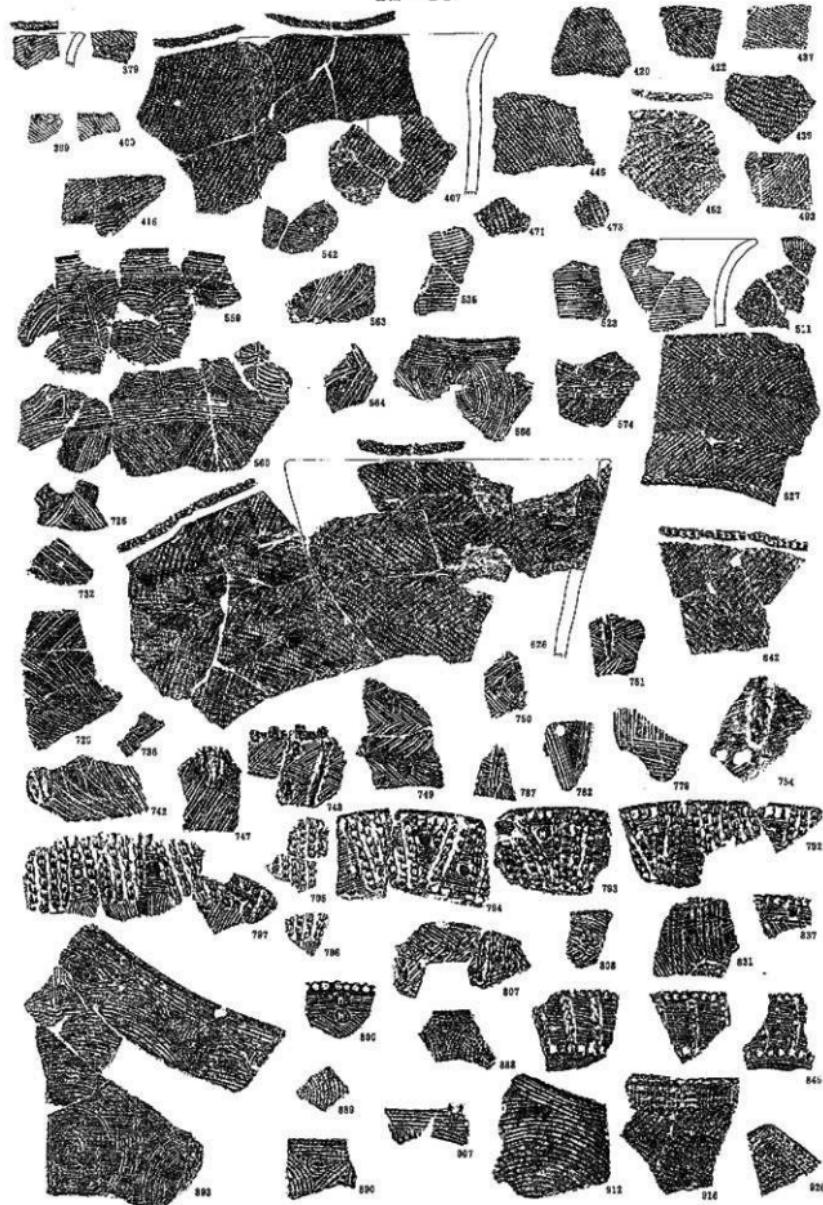


図65 グリッド坑の遺物分布図(26)② II M B8



図66 グリッド別の遺物分布図(26)③

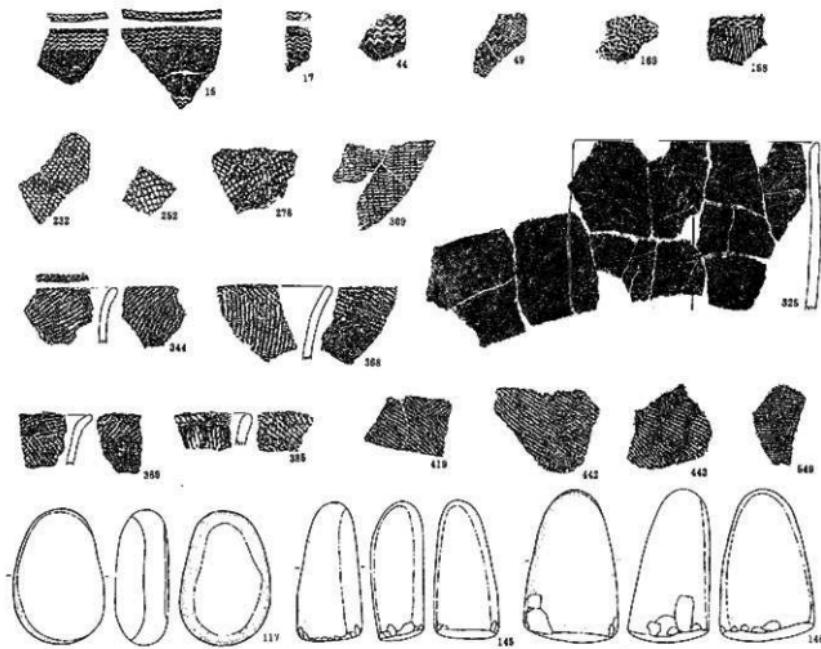
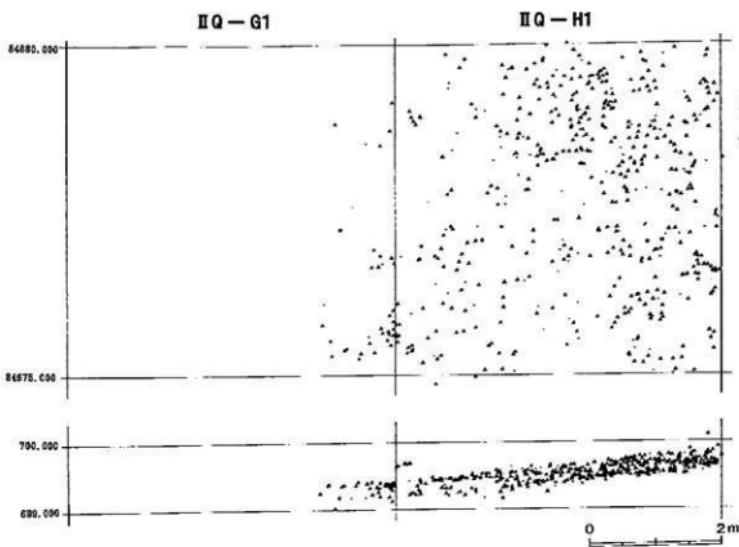


図67 グリッド別の遺物分布図(27) IIQG1・H1

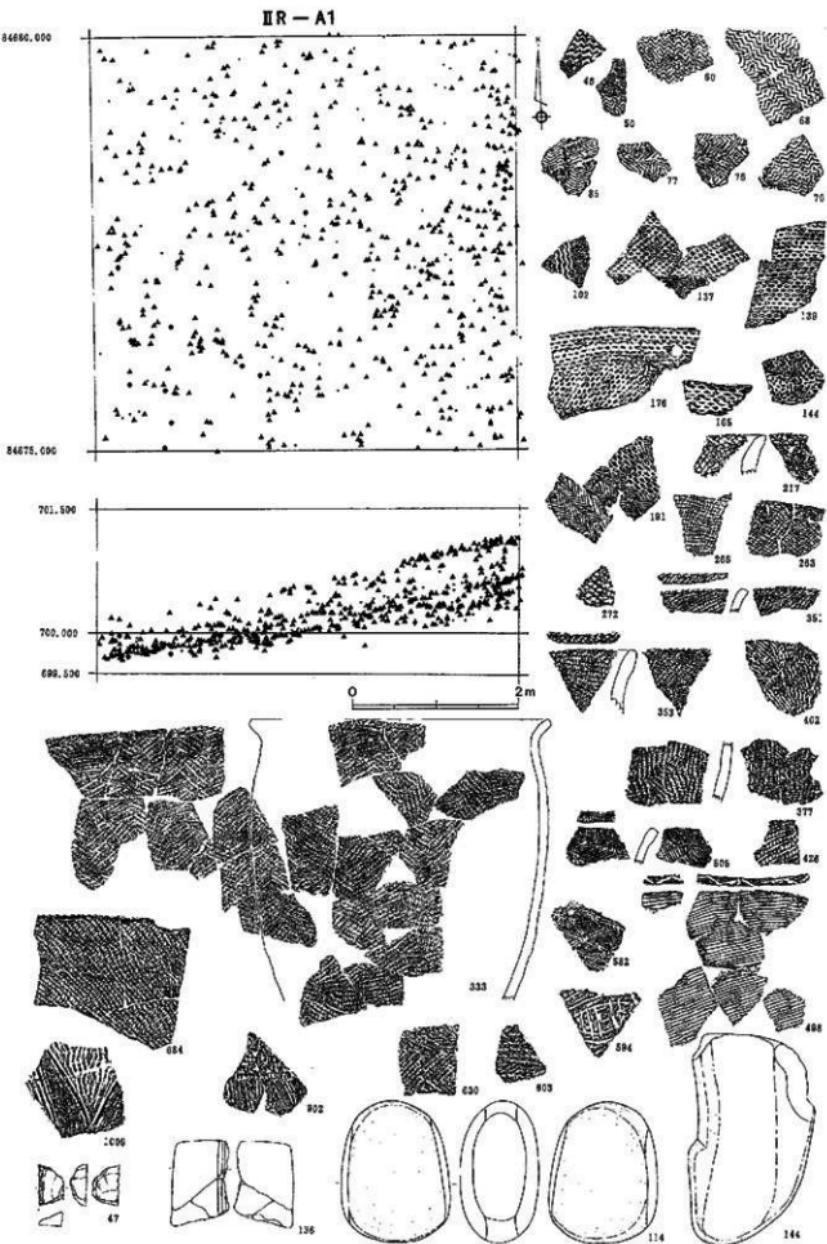
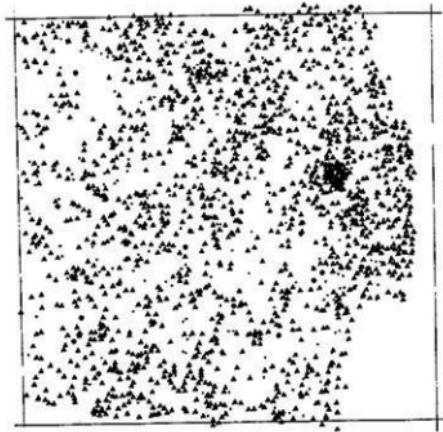


図68 グリッド別の遺物分布図(28) II R A1

## II R - B1

84680.000



703.000

700.000

0

2m

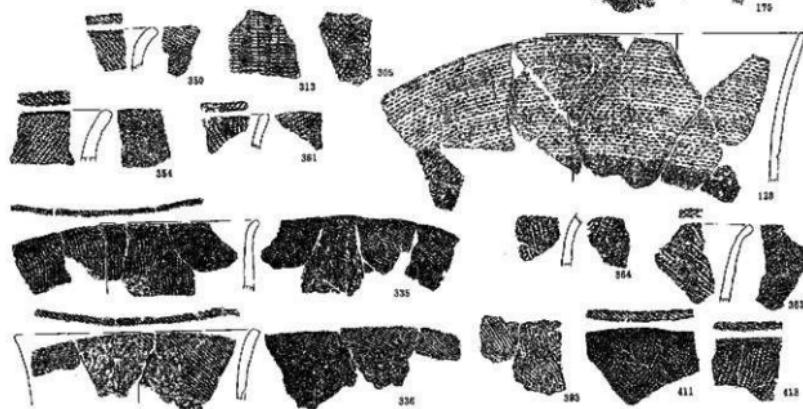


図69 グリッド別の遺物分布図(29)① II R B1

IR-B1

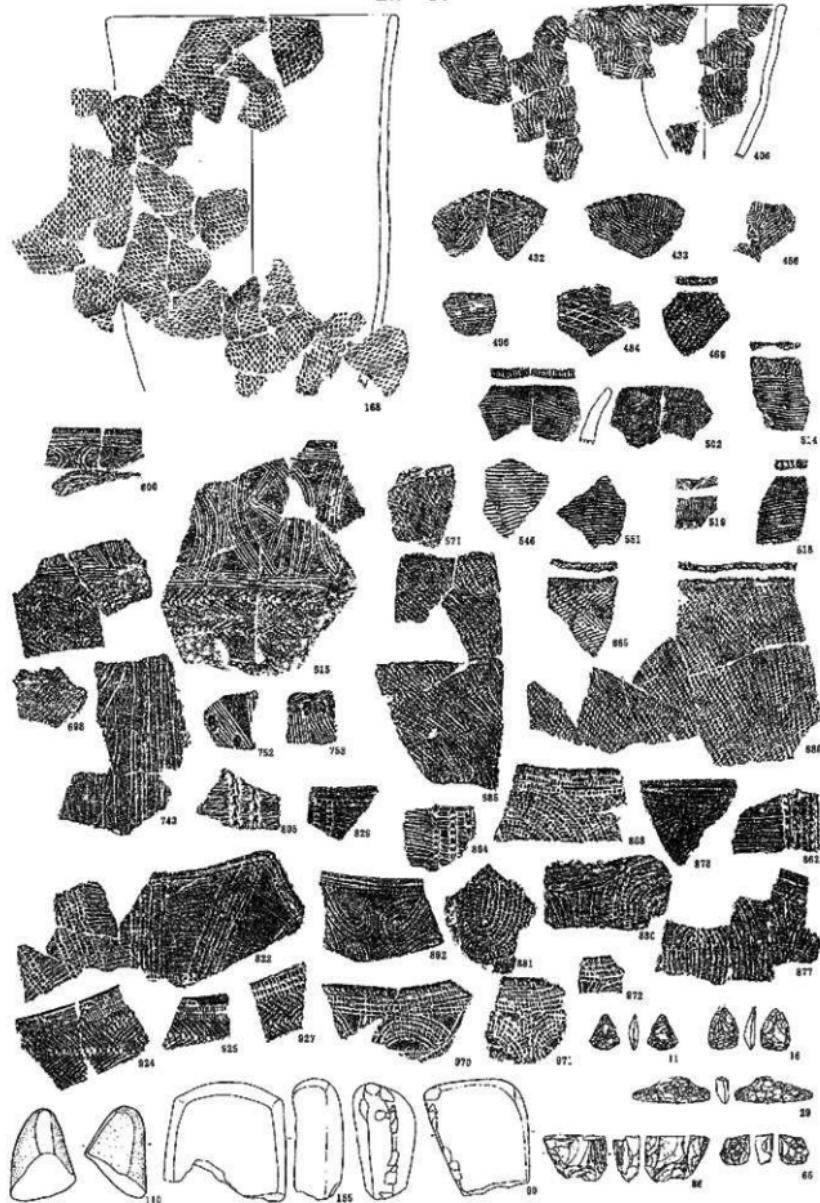


図70 グリッド別の遺物分布図(29)② JRB1

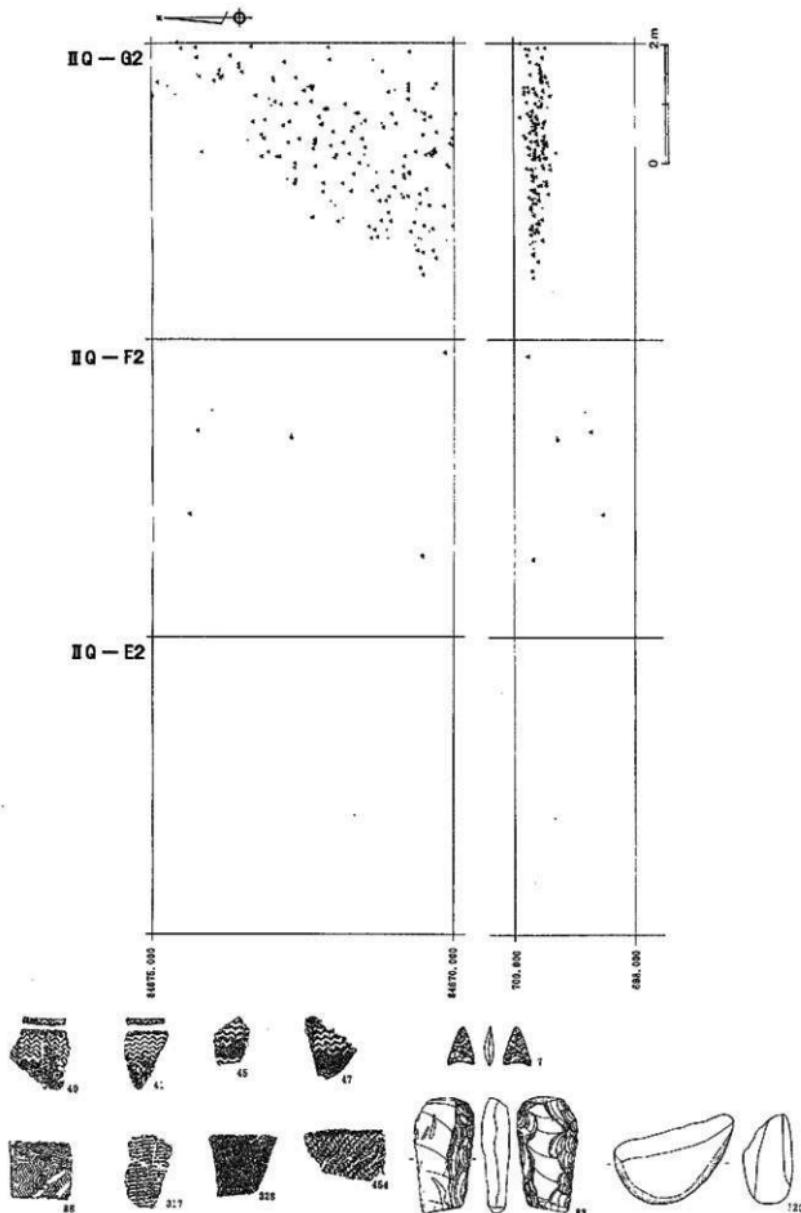


図71 グリッド別の遺物分布図(30) IIQG2・F2・E2

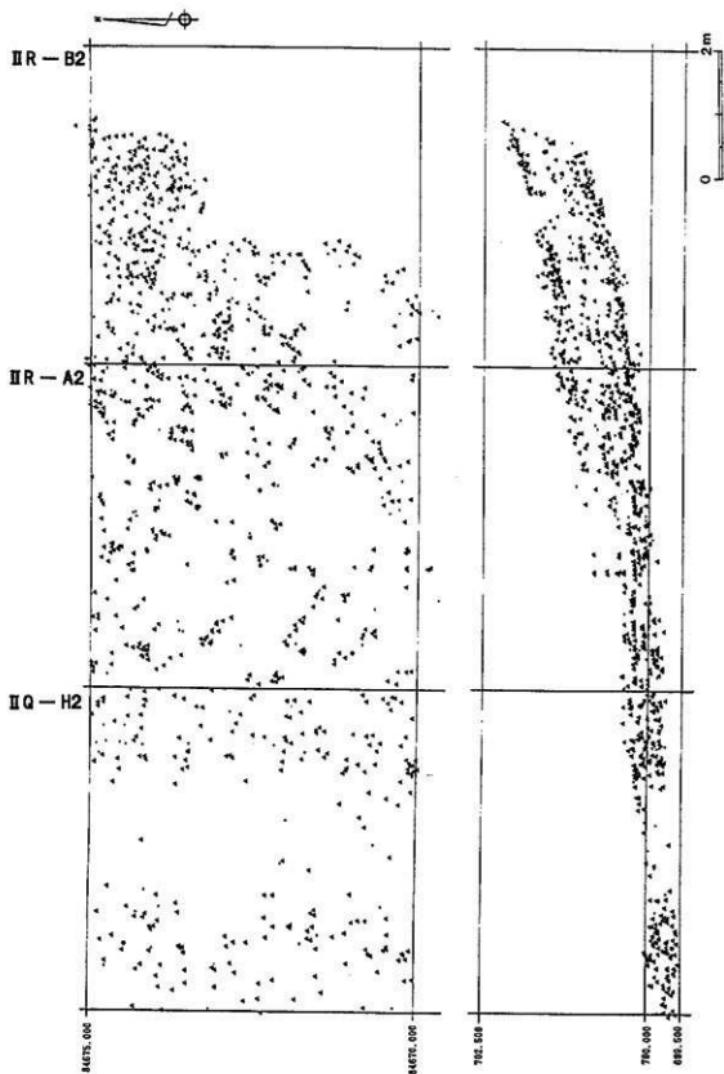


図72 グリッド別の遺物分布図(31)① IIRB2・A2・IIQH2

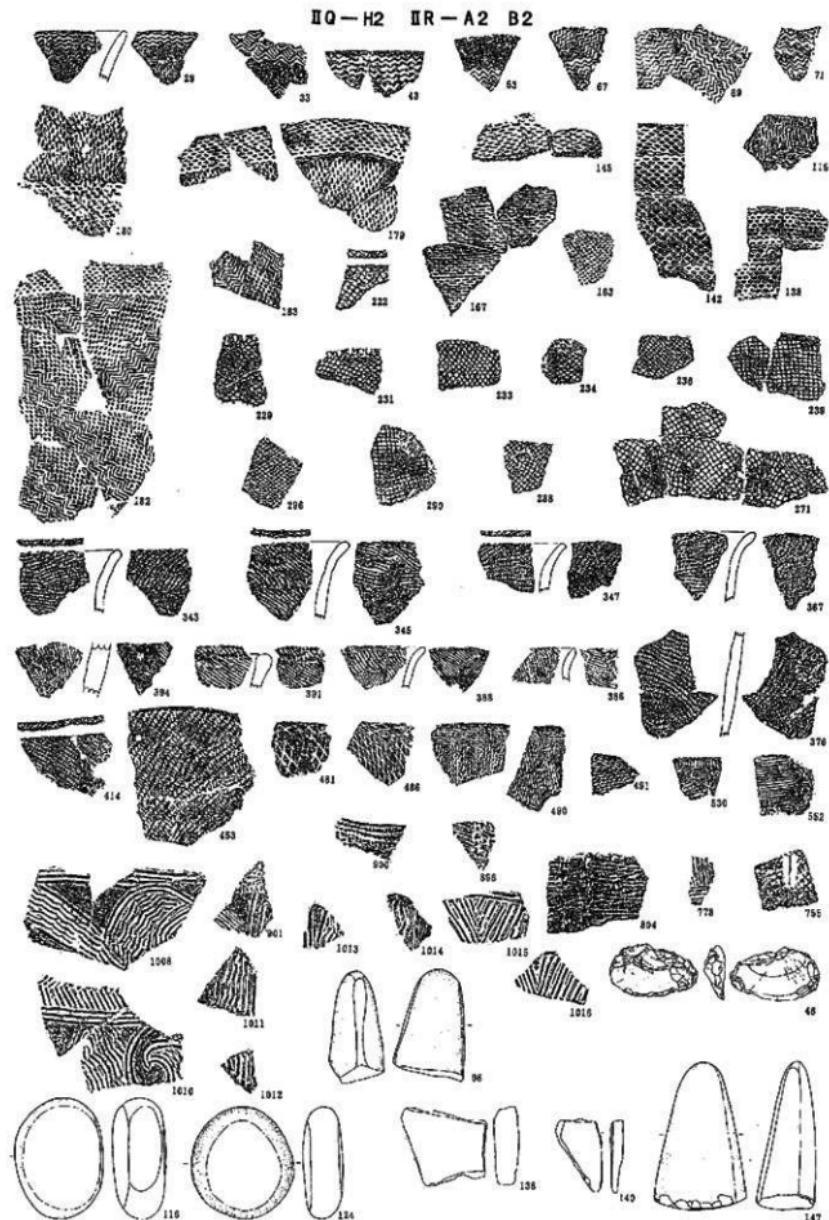


図73 グリッド別の遺物分布図(31)② IIQH2・IIRA2・B2

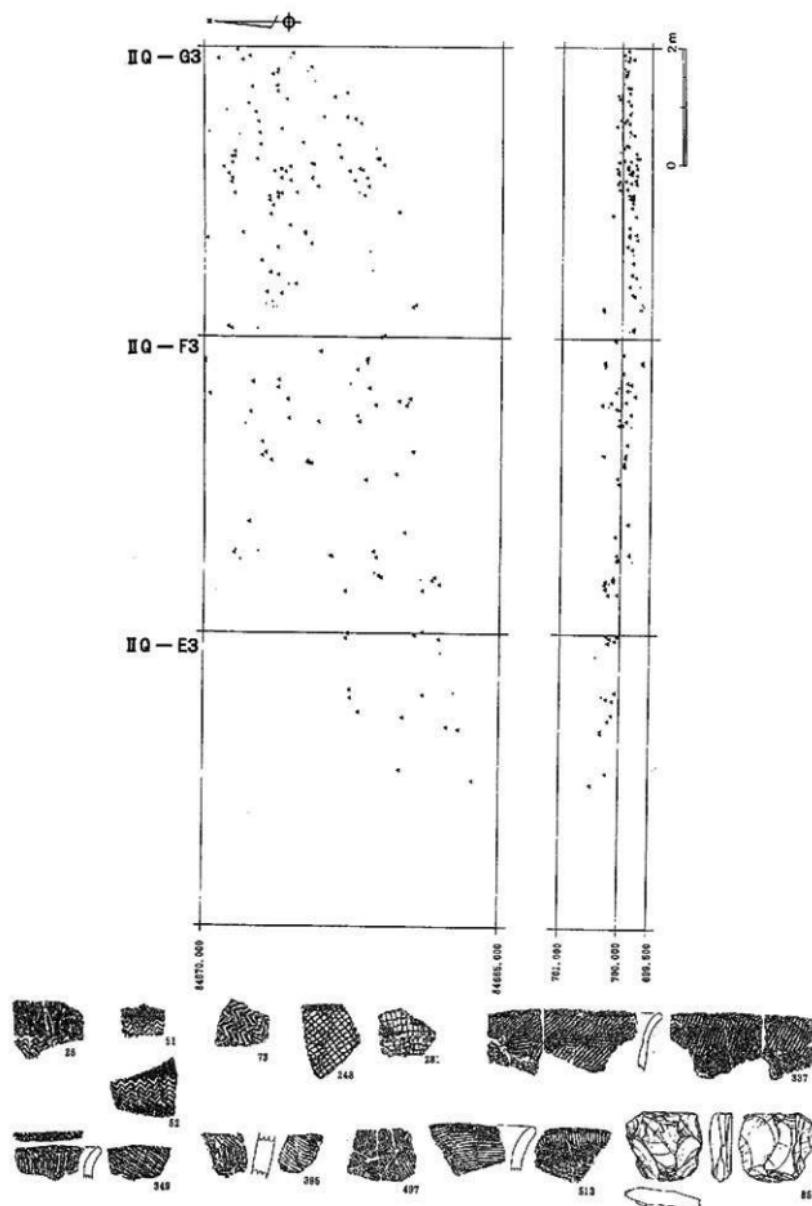


図74 グリッド別の遺物分布図(32) IIQ-G3・F3・E3

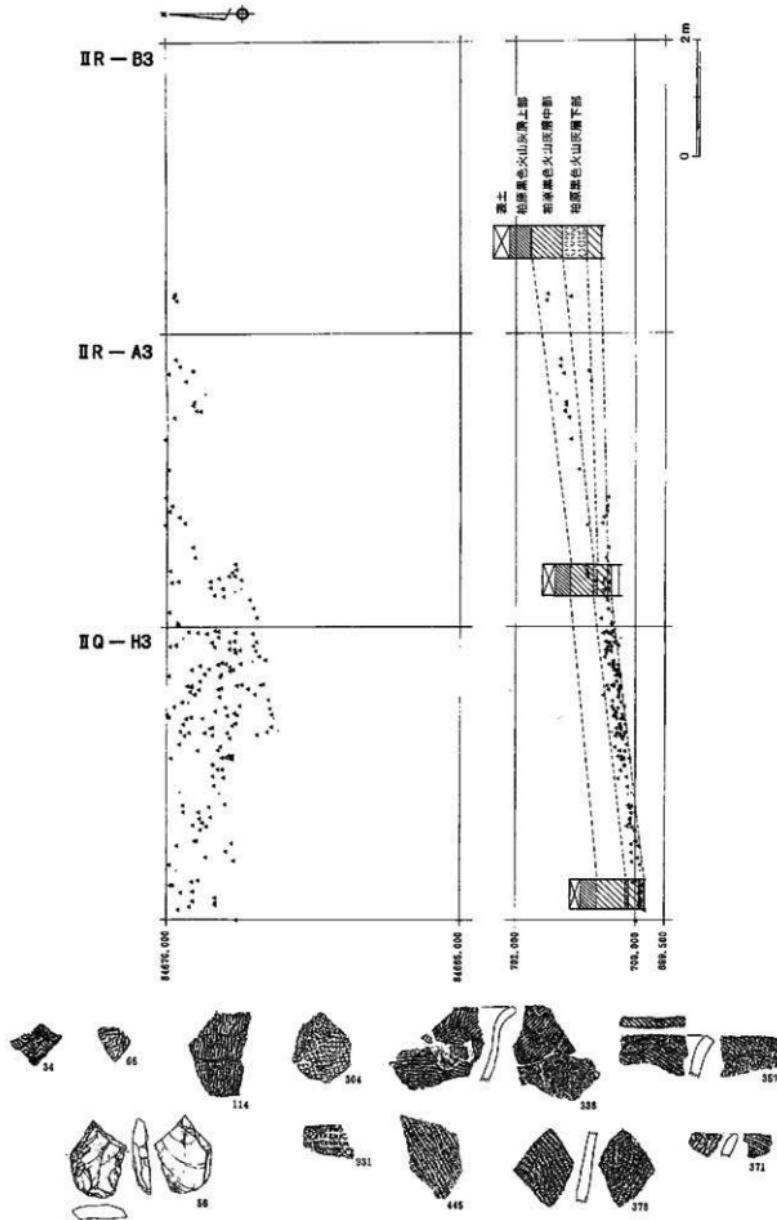


図75 グリッド別の遺物分布図(33) IIRB3・A3・IIQH3

表6 市道遺跡の出土品数

	重要品	その他	合計
土器	2,579	21,809	24,388
石器	155	1,508	1,663
礫・その他		2,870	2,870
合計	2,734	26,187	28,921

表7 市道遺跡出土の上端点数

	重要品	その他	合計
早期 拝型文土器	山形文土器	164	245
	椿円文土器	314	737
	楕子円文土器	151	352
	平行線文土器	88	379
平行線文(撲状)土器		1	1
表裏楕文土器		125	313
楕文土器		103	2,492
撲糸文土器		31	122
無文土器		36	1,160
合計		1,013	5,801
中期			6,814
前期 前期前半・水状楕文土器		7	7
諸種b式併行土器		222	1,568
楕文土器(撲糸式併行)		567	8,196
諸種c式併行土器		669	3,085
前期 木土器		66	66
中期 初頭土器		25	25
前期～中期初頭合計		1,586	12,849
合計		2,579	18,650
分類不明土器		3,159	3,159
土器総合計			24,388

表8 市道遺跡出土の石器点数

名 称	重要品	その他の	合計
石 石	鐵	18	12
	塊	2	2
	匙	9	3
ス ク レ イ バ	石器	31	47
ク サ ピ 形 石	器	7	22
ヘ ラ 形 石	器	2	3
石 石	錐	13	9
打 磨 石	斧	4	22
磨 製 石	斧	7	8
微細新穎度のある薄片	斧	4	4
装 着 素	筋	1	1
特 殊 磨	耳	1	1
四 磁	磨	18	74
ス タ ン プ	石器	12	465
石 磁	皿	10	247
敲 破 石	石	9	46
剥 剥 片	核	4	55
		7	21
		7	18
		10	10
		523	523
合 计		156	1,508
			1,663

表9 市道遺跡のグリッド別出土品数

グリッド	上 器	中 器	下 器	總 数
II H-A 4	7	0	8	15
A 5	55	1	23	79
A 6	90	0	42	132
A 7	136	6	93	235
A 8	256	3	112	371
B 7	3	0	4	7
B 8	93	7	37	137
II G-G 6	15	2	9	26
G 7	20	1	17	38
G 8	6	0	4	10
H 4	22	0	22	44
H 5	57	3	35	95
H 6	27	9	31	58
H 7	38	4	23	75
H 8	135	6	183	324
II M-A 1	239	6	71	316
A 2	92	7	34	133
A 3	110	5	28	143
A 4	124	2	22	148
A 5	548	10	72	630
A 6	1,633	30	168	1,881
A 7	1,764	74	199	2,037
A 8	1,053	35	170	1,258
II L-G 8	8	0	4	7
H 1	83	1	75	159
H 2	36	4	18	58
H 3	27	8	8	35
H 4	58	1	19	78
H 5	169	4	48	221
H 6	184	10	62	256
H 7	216	16	59	291
H 8	288	12	52	353
II R-A 1	592	22	85	689
A 2	393	15	45	453
A 3	86	2	5	93
B 1	1,877	37	268	2,182
B 2	391	6	57	454
B 3	3	0	0	3
II Q-E 2	0	0	1	1
E 3	14	1	2	17
F 2	5	1	2	8
F 3	47	1	11	59
G 1	36	1	7	44
G 2	152	4	29	185
G 3	82	2	18	102
H 1	413	11	82	506
H 2	208	2	27	287
H 3	133	1	9	143
II M-B 1	162	6	29	197
B 2	97	5	22	124
B 3	95	4	28	127
B 4	396	16	68	478
B 5	1,046	19	80	1,145
B 6	1,520	52	73	1,645
B 7	1,937	64	165	2,166
B 8	2,705	80	269	3,054
II M-C 1	57	6	18	81
C 2	229	12	26	276
C 3	163	13	60	241
C 4	424	27	71	522
C 5	772	29	82	883
C 6	1,074	41	103	1,218
C 7	845	35	75	955
C 8	389	14	28	381
II M-D 3	193	11	47	251
D 4	120	11	41	172
D 5	38	2	6	44
D 6	150	3	19	172
總 合 計	24,388	809点	3,724点	28,921点

### III 縄文土器

出土した縄文土器片の总数は24,388点である。縄文時代早期の押型文土器、表裏縄文土器、前期の諸種b式併

行～c式併行の土器が多くをしめている。他には、早期末の条痕文土器、前期末～中期初頭の土器がある。

#### 1 縄文時代早期、押型文土器とそれに伴う土器

##### 1) 押型文土器：山形文土器 図版1～4、図版13

山形文を施された押型文土器は、文様構成から次の4種に分類される。

##### A 縦位密接施文されるもの（立野式土器）1～9、35、73

1、2は縦位に密接施文する山形文土器で、山形文の波がやや大振りなもので、口唇は大きく外反する。口唇には刻み目が入れられている。土器表面は羽赤褐色で、器壁は10mmで、胎土には白色岩片・水晶・角閃石を多く混入する。

3～9は、縦位に密接施文する山形文土器で、山形文の波が小さいもので、原体の長さは15cmである。土器表面は赤褐色で、器壁は7mmである。胎土には、3～7は、白色岩片・石英・水晶・角閃石・黒雲母・小レキを多く含み、8、9はとりわけ水晶が多く、石英・白色岩片を多く混入する。

35は、縦位に密接施文する山形文土器で、山形文の波が大振りのものである。裏面には横方向に山形文が1条施されている。土器表面は褐色で、器壁は6.5mmで、胎土には水晶・石英・黒雲母・角閃石を混入する。

73は、大振りな山形文を縦位に密接施文する土器である。土器表面は羽赤褐色で、器壁は6.2～7mmで、胎土には石英・水晶・角閃石をやや多く混入する。

B 横沢式土器・沢式土器 15～32、62、96～106  
横位・縦位に帯状施文する山形文土器である。①胎土に黒鉛（石墨）を混入する沢式土器と、②混入しない横沢式土器の2種が認められる。

①沢式土器 15～20、96～106

概して、黒鉛（石墨）を混入して、灰色～黒灰色を呈し、器壁は5mm以下のたいへん薄手で、焼成のいい土器

である。

15は、土器表面がやや明るい灰色で、器壁は7mmである。胎土には黒鉛を混入するが、量は少なく、黒雲母・石英・白色岩片・水晶・角閃石を混入する。口縁部の破片で、口唇は平に整形され、山形文が施されている。押型文の原体長は14mmである。一般的な沢式土器の胎土、器壁とは異なる特徴なものである。

16～20は、土器表面が黒灰色で、器壁が3.2～4.8mmとたいへん薄手の土器である。原体長は約15mmである。16、17は口縁部で、口唇が平らに整形され、山形文が施されている。また、16には、口縁部近くに補修孔をもつ。胎土には、白色岩片・石英・黒雲母を少し混入する。18～20は縦方向に施文されるものである。

96～106は、土器表面が暗灰色で、器壁が4.2～5.1mmと薄手であり、器面は丁寧なナデ調整がおこなわれている。

胎土は2種類のものが認められる。16～20、96、102は、ベグマタイト（巨晶花崗岩）、アブライト（半花崗岩）などの小レキ・石英・黒雲母などの白色の岩片をやや多く混入する。胎土の基質は粘土からなるのでこの胎土を「粘土型」と仮称する。96には最大径1.3mmの片麻岩が、102には、最大径5.3mmの片麻岩と2.2mmの石墨が含まれている。

97～101、104～106は、胎土に小レキ・砂・石英・黒雲母・長石などの細粒の粒子を多く混入し、全体として砂質の胎土のもので、この胎土を「砂質型」と仮称する。このタイプのものには、石墨・片麻岩・ベグマタイトなどの岩片が含まれる。99の石墨は3.3mmで、ほかは1mm弱である。胎土中に小レキ（岩片）として含まれる石墨の含有量は、砂質型の方が多い。

②横沢式土器 21～32

胎土に黒鉛（石墨）を含まないものを一括した。概し

て、土器表面はナデ調整がおこなわれている。器壁は5~6mmの薄手のものと、8mm弱の普通のものの2通りがみられる。

21~23は、山形文が横位に帯状施文された土器である。土器表面が淡赤褐色で、器壁は5.3~6.0mmとやや薄手であり、土器表面はていねいなナデ調整が施されている。胎土には石英、水晶、角閃石、白色岩片をやや多く混入する。21の原体長は26mmである。

24は、山形文を横位に帯状施文する土器である。土器表面は褐色で、器壁は6.0~7.2mmとやや薄手であり、胎土には細粒の石英、水晶、角閃石をやや多く混入する。口唇は平に整形され、山形文が施されている。

25~27は、横位に帯状施文する土器の破片である。土器表面は暗褐色で、器壁は5.1~8.5mmで、胎土には25が小レキ、石英、水晶、角閃石をやや多く、26、27は白色岩片、石英、角閃石を含む。

28は、縦位に山形文を帯状施文する土器の破片である。土器表面は暗褐色で、器壁は5~6mmで、胎土には石英、白色岩片、水晶、小レキをやや多く混入する。原体長は20cmである。

29~32は、横位に帯状施文する土器で、裏面にも口縁にそって1条の施文がおこなわれているものである。土器表面は暗褐色で、器壁は7~7.8mmで、胎土には白色岩片、石英、水晶、角閃石などを混入する。原体長は、29、31が22mmである。

62は口縁にそって横位に一条、その下には縦位に密接施文されるものである。明褐色で、器壁は5mmで薄く、原体は21mmほどである。口唇は平らに整形されている。細密な山形文である。

#### C 横位に帯状施文するもの 36~54、および横位に密接施文するもの 55~57、59~61、63、64

36~54、58、63、64は横位に帯状施文するものである。無文部は約16mmとひろいもの(48)と6mmとせまいものの(54、58)および中間的なものがある。口縁部は平坦で、36、40~42には山形文が施される。とりわけ43、55は口唇が平らに整形されている。

原体の長さは36、37は16~19cmと短く、48、52、54は20~23.5cmであり、43、58は27~33cmと長い。

36~52は、土器表面は暗褐色ないし褐色で、器壁は6~7mmである。52は7.5mmである。胎土には白色岩片、

水晶、石英、黒雲母、角閃石など、火山灰起源の鉱物を多く含む。59には水晶が多く含まれている。

63、64は、細密な山形文を横位に帯状(?)に施したものである。赤褐色で、胎土には小レキ、石英を混入し、纖維をごくわずか含む。原体は23mm、器壁は5mmである。

#### D 重複構成で密接施文するもの 68、69、76~86

68、69は、山形文を重複構成で密接施文するものである。土器表面は暗褐色で、器壁は6.5~7.5mmである。山形文の原体は20~22mmである。胎土には、小レキ、白色岩片をやや多く混入し、纖維を少し含む。

76、77は、大振りな波の山形文を縦位、斜位に重複構成で密接施文する土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は5.5mmと7mmで、胎土には白色岩片、石英、黒雲母、角閃石を混入し、纖維を少し含む。

78は、波の粗い山形文を重複構成で密接施文する土器で、土器表面は褐色で、器壁は8.5mmで、胎土には小レキ、石英、水晶、角閃石を多く混入する、焼成のわるい土器である。

79~86はゆるやかな波の山形文を重複構成で密接施文したものである。器壁は6~7.5mmで、原体は19~24mmである。胎土には、80は石英、角閃石、スコリア、白色岩片などを混入し、纖維はあまり含まない。85のみ纖維を含む。

#### 2 押型文土器：楕円文土器 国版5~11、国版13

楕円文を施された押型文土器は、文様構成から、次の6種に分類される。

#### A 楕円文を縦位密接施文するもの 107~110

107~110は、原体の長さが24mm、土器表面は赤褐色で、器壁は10mmとやや厚く、胎土には石英、角閃石、水晶、磁鐵鉱、白色岩片を多く混入する。口唇は平に整形され、楕円文を施されている。立野式土器である。

#### B 繊維を含む土器で、楕円文を縦位密接施文するもの

111は暗褐色で、平に整形された口唇をもつ、縦位に密接施文した楕円文土器である。器壁は、6.5mmで、胎土には水晶(特に多い)、石英を多く混入している。

112は、暗赤褐色で、器壁は7.5mmで、胎土には水晶、

石英、角閃石、白色岩片を多く混入する。113は、褐色で、器壁が7.3mmで、胎土には白色岩片、角閃石、水晶を少し含む。

114、115は、細めの楕円文を縦位に密接施文するものである。土器表面は明褐色で、器壁は9mmで、胎土には水晶、角閃石を混入し、繊維を少し含んでいる。

胎土などから押型文の中では新しい時期のものと思われる。

#### C 帯状施文するもの 116、122、123

116は楕円文を縦位に帯状施文するものである。原体長は15.1mmで、土器表面は明褐色である。器壁は9~10mmとやや厚手である。胎土には水晶、角閃石、石英をやや多く含む。

122、123は、楕円文を横方向に帯状施文する土器である。122は、土器表面が褐色で、器壁は6mmとやや薄手で、胎土には水晶、角閃石、白色岩片を混入する。123は、土器表面が暗褐色で、器壁が6mmで、胎土には石英、水晶、白色岩片、角閃石、スコリアをやや多く混入する。繊維を少し含む。原体長は27mmである。

#### D 横位に密接施文し、刺突文をともなうもの 124 ~ 135

128~135は山線にそった上部に横位に細く小さな楕円文を密接施文し、約10cmほど下の胴中部の無文部に直径4~5mmの刺突文を施したものである。楕円文の原体は19.5mm、器壁は8mmである。土器表面は暗褐色で、口唇部は平らに整形されている。裏面はナデ調整されている。胎土には水晶、石英、スコリア、小レキ、角閃石、白色岩片を多く混入する。繊維をごくわずか含む。口径22cm、現存高12.5cmである。

124~127は横位に細く小さな楕円文を密接施文したものである。土器表面は濃褐色で、器壁は8mmである。楕円文の原体は19mmである。128の土器の下半部である可能性がある。

#### E 横位密接施文するもの 136 ~ 167

136~167は、横位に楕円文を密接施文するものである。136~141は土器表面が褐色で、器壁は6~7mm、楕円文の原体の長さは29mm、口唇部は平坦に調整されている。胎土には角閃石、白色岩片、石英、水晶、小レキをやや

多く混入し、繊維をごくわずか含む。裏面はナデ調整をしている。138の原体は21.5mm、139は24mmである。

142~146は土器表面が褐色で、器壁は7~8mmである。原体の長さは30mmで、胎土は136と同様である。

147~153は土器表面が赤褐色で、器壁は7~8mmである。胎土には白色岩片、石英、角閃石を混入し、繊維をやや多く含む。148の楕円文の原体長は20.5mmである。口唇は平らに整形されている。口径21.8cmで、現存高6cmである。

154~159は土器表面が褐色で、器壁は6~7.5mmである。胎土には白色岩片、石英、角閃石、小レキを混入し、繊維をやや多く含む。裏面はナデ調整される。楕円文の原体は31mmである。

160~167は細めの楕円文を密接施文したものである。161の器壁は8~8.5mmで、原体は25.5mmである。166の器壁は7.5mmで、原体は30mmである。160の口唇は平らに調整される。いづれも胎土には白色岩片、スコリアが多く、石英、角閃石を混入し、繊維を含む。

#### F 重複構成で密接施文するもの 168 ~ 181、213、214

168は楕円文をランダムな方向に重複して施文したものである。土器表面は褐色で、器壁は6~9mm、原体は約28mmである。胎土には白色岩片、スコリア、石英、長石、角閃石を混入し、繊維を少し含む。169は乳房状の尖底部である。口径24cm、現存高30.8cmである。

170は、胴上半に楕円文を横位施文し、その下半を斜位に密接施文している。口唇部が少し外に張り出す。土器表面は褐色で、器壁は6~7.5mmである。胎土には多量の水晶、石英をはじめとして、角閃石、小レキを混入する。口径15.6cm、現存高13.5cmである。

171は楕円文を重複構成で密接施文したものである。口唇部に1条横位に、その下は斜位に施文されている。土器表面は暗褐色で、器壁は6.5mmで、原体は25mmである。口唇部は平らに整形されている。胎土には石英、角閃石、白色岩片を多く混入する。172も171に近いものである。

173は楕円文をランダムに施文するものであり、口唇は平らに整形されている。器壁は6.5mmである。口径17.2cm、現存高6.5cmである。

176は山線部に1条横位に、その下を斜位に施文した

ものである。口縁部に補修孔をもつ。器壁は6.5mmで、原体は25mmである。いずれも土器表面は褐色で、胎土には白色岩片、スコリア、石英、角閃石、小レキを混入し、繊維を含む。口径16.4cm、現存高6.8cmである。

179は口縁に1条横位に楕円文を施文し、その下は継位に密接施文したものである。器壁は7.6mmで、原体は28mmである。胎土には石英、角閃石、白色岩片、小レキを混入する。180も同様の継位、横位に施文したものである。

181は口縁に1条横位に、その下は継位に細身の楕円文を施文したものである。土器表面は暗褐色～褐色で、器壁は11～13mmと厚手の土器である。胎土には水晶が大変多く、石英、角閃石を混入する。

213、214は楕円文が施された乳房状の尖底部である。胎土には白色岩片、水晶、角閃石などをやや多く混入する。楕円文が密に施文されるが、どのタイプのものと伴う底部なのかは判断できない。

### 3) 異種文様並列構成の押型文土器（異形押型文土器）

図版4、図版11～13

複数の押型文を組み合わせた異種並列構成の押型文土器は、模様構成から次の8種に分類される。既して繊維を多く含んでいる。

#### A 山形文と沈線文を組み合わせたもの 87～95

87～94は重複構成で山形文を密接施文し、2条の列点状沈線文を施文したものである。口縁部には横位に1条の施文をし、その下に継位、斜位に重複して施文している。土器表面は褐色で、器壁は8.5mm、胎土にはスコリア、石英、角閃石、白色岩片などを混入し、繊維をやや多く含む。沈線幅3.5～4.7mm、長さ13～18mm程度で、間隔は6～8mmである。

95は沈線文で複合鋸歯文を施したものである。沈線は幅2.0～2.5mmである。土器表面は暗褐色で、器壁は6mmである。上位には山形文が横位に施されている。

#### B 楕円文と山形文を組み合わせたもの 182～190、205

182～190は、楕円文と山形文を異方向に密接施文したものである。土器表面は褐色で、器壁は6～9.5mmである。胎土には、水晶が多く、角閃石、石英などを混入し、繊維を少し含む。原体は29～30mmである。190には補修孔

がある。

#### C 楕円文と複合鋸歯文を組み合わせたもの 191～199

191～199は楕円文と複合鋸歯文を組み合わせたもので、191以外はすべて横位である。土器表面は褐色で、器壁は8mm前後のものが多く、192のみ9～10mmである。胎土には混入物はそれほど多くないが、白色岩片、水晶、角閃石、石英などを混入し、繊維を少量含む。原体長はいづれも29～30.5mmであるが、194の複合鋸歯文は34mmである。

#### D 楕円文と格子目文を組み合わせたもの 200～204

200～203は楕円文と格子目文を横位に組み合わせたものである。土器表面は褐色で、器壁は7.5～9mmである。原体長は楕円文が29mm（202・203）、格子目文が35mm（203）である。胎土には石英、角閃石、水晶、白色岩片を混入し、繊維を少し含む。

204は格子目文が特徴なものである。土器表面は褐色で、器壁は7mmで、原体長は29.5mmである。

#### E 楕円文と沈線文を組み合わせたもの 206、207

206、207は口縁部に楕円文を横位に施文し、その下部に斜位の沈線文を施文したものである。土器表面は褐色で、器壁は7mmである。胎土には赤色岩片、白色岩片を混入し、繊維を少し含む。楕円文の原体は27mmである。口径19cm、現存高5cmである。206は沈線の間に継位の押引状突文が施されている。

#### F 楕円文と台形文を組み合わせたもの 208～211

208～211は、楕円文といわゆる台形文を組み合わせた文様のものである。土器表面は褐色で、器壁は8～8.5mmである。原体長は楕円文が48mm、台形文が43mmである。胎土には砂、小レキを少し混入し、繊維を含む。

#### G 楕円文に刺突文を組み合わせたもの 117、118

117、118は楕円文を帶状施文し、空白部に刺突文を施したものである。土器表面は褐色で、器壁は6～6.5mmである。胎土には白色岩片、水晶、石英、角閃石、スコリアを混入し、繊維を含む。

## H その他の

33、34は、山形文の中に直線を組み合わせた特殊な文様を帶状施文したものである。土器表面は赤褐色で、器壁は6.3~7mmで、胎土には小レキ（安山岩）、石英、水晶、角閃石をやや多く混入する。器面には丁寧なナデ彫整がおこなわれている。原体長は、約19mmである。

74は山形文に横状文が組み合わされたものである。土器表面は褐色で、器壁は8mmで、胎土には白色岩片、赤色岩片、普通輝石、石英を混入し、纖維をごく少し含む。

75は、重層山形文が施され、東北地方に分布する日計式押型文に類似する。土器表面は赤褐色で、胎土には白色岩片、赤色岩片、水晶、角閃石を混入し、纖維をやや多く含む。

### 4) 格子目文土器 図版14~18

格子目文を施された押型文土器は、模様構成から次の6種に分類される。

#### A 表裏に格子目文を施文するもの 215~219

215~219は口縁部の表裏に施文するものである。裏面の施文は口縁部のみで、幅1cmほどである。219は口縁部に格子目文が施されている。土器表面は褐色で、器壁は10~11mmと厚手である。胎土には水晶、石英、白色岩片、灰色岩片、小レキを混入する。

#### B 帯状施文するもの 220

220は継位に格子目文を施文するものである。12mmほどのせまい無文部は、格子目文の施文した後にナデ消されている。土器表面は暗褐色で、器壁は9~11.5mmと厚手である。胎土には水晶、石英、角閃石を多く混入する。口縁部は外反する。

#### C 密接施文するもの

格子目文を密接施文するもので、格子目の形から次の3種類に区分できる。

①細密な菱形ないし正方形を呈するもの 221~247、263~266、289~302、304、305

221~247は、比較的細かい格子目文を密接施文したものである。格子目の大きさは3~4mmである。土器表面は暗褐色~暗赤褐色で、器壁は7~9mmが多い。胎土には水晶が中心で、石英、角閃石を多く混入する。

221~225は口縁部に刻み目が施されている。口縁は外反する。263~266は同様なものであるが、12~13mmと厚手のものである。

221~223、225~236、239、289~302、304、305は小形の格子目で、菱形ないし正方形を呈するものである。

293は上器表面が褐色で、器壁が8~10mmである。削下半部である。

304、305は土器表面が濃褐色で、器壁が7~7.5mmと薄手である。胎土には白色岩片、スコリア、小レキを混入し、纖維もやや多く含む。格子目文土器は一般的に水晶の混入によって特徴づけられているが、この資料(304、305)はそれらとは区別され、新しい段階のものである。

②中位の菱形ないし正方形を呈するもの 248、249、253、257~262

248、249、253、257~262は中位の格子目文で、菱形ないし正方形を呈するものである。

262は中位の格子目で、長方形を呈するものである。

③円形ないし網目状を呈するもので、ネガティブ文との関係が問題となるものである。

格子目の形によって、③-1:格子目がやや圓丸の傾向があるもの、③-2:網目状の格子目になるものの2種が認められる。

③-1:格子目がやや圓丸の傾向があるもの 224、237、240~247、251、252、271~280

224、237、240~247、251、252は、かどが丸みを帯び、ハチの巣状に近いイメージを受けるものである。

271~280は中位の格子目で、角が丸みを帯びた正方形ないし菱形を呈するものである。土器表面は赤褐色で、器壁は9~12mmとやや厚手のものである。胎土には水晶、石英、角閃石、小レキを多く混入する。274~278は格子目文を部分的にして消している。

③-2:網目状の格子目になるもの 238、250、254~256、267、268、270

238、250、254~256、270は円形で網目状の格子目文を施文したものである。

267、268は細い稍円形の格子目文を継位に帶状施文されたものである。口縁にそって1条の施文の下に無文部をもつ。

#### D 市松文が施されたもの 269

269は口縁にそって斜めの刻み目が入れられ、その下に細い指円形の市松文がごく浅く施文されたものである。土器表面は赤褐色で、器壁は7.5mmである。口縁は著しく外反する。胎土には水晶を中心に、石英、角閃石を多く混入し、胎土と焼き具合は1~9の立野タイプの山形文土器に一致する。

#### E 長方形の格子目文を施されたもの 306~321、323、324

306~321、323、324は間隔が狭い長方形の格子目文を施文されたものである。器形に平行に施文されたものである。306、308の口縁はやや外反する。土器表面は赤褐色~暗褐色で、器壁は6~7mmのものと、9mm前後のものがある。胎土には水晶、石英、角閃石、黒雲母を多く混入する。原体は306が11.7mm、309、310、313、315が13.6~14.8mm、307、316が17~18mmである。

318~321は斜位に長方形の格子目文を施文し、部分的に文様がナアにより磨り消されている。土器表面は褐色で、器壁は7mm前後で、口縁は外反する。胎土は306と同様である。

323、324は格子目文が部分的に施文されたものである。土器表面は赤褐色で、器壁は10~11mmと厚手である。胎土は306と同様である。

#### F 格子目文で口縁部に刺突文を施すもの 303

303は、大柄な格子目文を施文したもので、口縁部には2条の丸くて大きな直径5~6mmの刺突文を施されている。土器表面は褐色で、器壁は8~10mmである。原体は49mmときわめて大きい。胎土には石英が多く、白色岩片、角閃石を混入し、繊維をやや多く含む。口径18.6cm、現存高15.5cmである。

#### 5) 平行線文土器 図版32~34

長軸に平行な直線を刻んだ原体を腹方向に回転した文様を施された平行線文土器は、文様構成、胎土から次の2種に分類される。

#### A 表裏施文のもの 498~508、511~513

498~508、511~513は、平行線文を表面に継(斜)位に施し、裏面は口縁部のみに1条横位に施文されたもの

である。いづれも繊維を含まず、焼成もいいものである。

498は、ゆるく外反する口縁から胎部が残る上器である。表面には幅1~2mmの継位の平行線文がやや斜めに密接して施されている。裏面には口縁部にのみ1条横位の平行線文が施され、幅は1cmほどである。口唇には波が大振りな山形の刻みが入れられている。土器表面は暗褐色で、器壁は7~8.5mmで、胎土には水晶、長石、角閃石、白色岩片をたいへん多く混入している。

499~503は、いづれも表面に継位、裏面には口縁部にのみ10~16mmの幅で、横位の平行線文が1条施されている。上器表面は暗褐色で、器壁は8mmであるが、502は9.5mmである。胎土には混入が多いもの(502、503)とそれほど多くないもの(499)がある。口唇には刻み目が入れられている。

504は表面は継位、裏面は横位の施文であるが、裏面の平行線文の幅が5cmにもおよぶものである。器壁は8~9mmである。508も同様のもので、器壁は7.5mmである。いづれも口唇に刻み目がつけられている。

505は表裏両面とも口縁が横位、その下が斜位にやや小振りな平行線文が施されたものである。胎土には混入物は少なく、器壁は7.5mmである。

506、507も同様の施文である。器壁は7.5~8mmである。いづれの平行線文はやや大振りのものであり、口唇には刻み目がつけられている。

514に近い施文のものとしては、509、510がある。

511~513は、口唇に刻み目をもたない表裏施文の平行線文土器である。表面は継位、裏面は口縁に1cmほどの幅で、横位に平行線文が施されている。土器表面は暗褐色で、器壁は7.5~8mmであり、胎土には水晶などをたいへん多く混入する。

#### B 継位を主体とした平行線文を密接施文する土器

##### 509、510、514~558

口唇に刻み目をもつものは、514~516、518~521である。いづれも土器表面は暗褐色で、胎土には水晶、石英、角閃石、小レキを多く混入する。

515~518、520、521は、表面に継位の平行線文が密接施文され、口唇には刻み目をもつ上器である。器壁は8~10mmである。

514、519は、口縁に横位、その下に継位の平行線文が施され、口唇には刻み目がつけられたものである。514は

器壁が9.5~10mm、519は7.5mmで、口唇の刻み目は山形を呈する。

口唇に刻み目をもたないものは、522~531である。

522~528は、縦位に平行線文を施したものである。土器表面は褐色で、胎土には水晶、石英、角閃石などをたいへん多く混入している。器壁は525が7.5mmで、その他は9.5~10mmである。

529、530は口縁に横位、その下には縦位または斜位にまばらに平行線文を施したものである。土器表面は褐色で、器壁は8~8.5mmで、胎土には水晶などをたいへん多く混入している。

531も混入物は少ないと、同様な施文で、器壁は7mmである。

532~558は、胴部の破片である。

532~539は、縦位の平行線文が施されたもので、土器表面が褐色で、器壁が9.5~11mmで、胎土には水晶などの混入が極めて多いものである。

543~552は、縦位の平行線文が施されたもので、土器表面が褐色で、胎土には水晶などの混入が多いものである。器壁は7mmのもの(554)、13mmのもの(543、551)以外は8.5~10.5mmである。

558は横位に平行線文が施されたもので、土器表面は暗褐色で、器壁は8mm、胎土には水晶などを多く混入するものである。

540~542、553~557は、土器表面が赤褐色ないし褐色で、混入物が少なく、焼成があまり良くないものである。縦位に平行線文が施されている。器壁は540~542が10~15mm、553~557が7.5~8mmである。541にはごくわずかに繊維を含む。ほかより少し新しい時期のものである可能性がある。

## 6) 平行線文土器(いわゆる柾状文) 322 図版18

322は平行線文(いわゆる柾状文)を施した押型土器である。土器表面は明褐色で、器壁は7mmである。原体は26cmである。胎土には白色岩片、スコリア、石英をわずかに混入し、繊維をやや多く含む。

## 7) 無文土器 325~332 図版19

325~332は無文土器である。325は口縁がやや内傾する器形で、土器表面は褐色で、器壁は7.5~8mmである。胎土には石英、水晶、角閃石を多く混入する。口径20cm、

現存高13.8cmである。

326は口縁がやや外傾する器形である。土器表面は褐色で、器壁は7~8mmである。胎土には小レキが多く、石英、水晶、角閃石を混入する。繊維をやや多く含む。口径16.8cm、現存高16.2cmである。

327~330は口縁部、331、332は尖底の底部である。器壁は6~9mmで、胎土には石英、水晶、角閃石を多く含む。

## 8) 表裏繩文土器 333~397 図版20~26

表裏繩文土器には、繩文の種類によって次の3種に分類される。

A 単節繩文によるもの 333~358、360~362、367  
~378

333~358、360~362、367~378は、単節繩文による表裏繩文土器である。裏面の施文はいづれも口縁部にそって1条施されているのみである。

333は口縁近くでややすばまり、先端部が外に開く器形で、口径24.8cm、現存高23.4cmの表裏繩文土器である。単節のLRの繩文を羽状に施文している。裏面には外反する口縁部にのみ繩文が施文されている。土器表面は褐色で、器壁は6~7mmである。胎土には混入物は少ないが、白色岩片、石英、水晶、輝石類、スコリアなどを混入する。

334は胴部が筒状となり、口縁がやや外に開く器形をした、口径20.1cm、現存高12cmの表裏繩文土器である。単節でRLの原体を用いた斜繩文である。裏面には口縁の上から13mmほど下に幅約16mmの1条の繩文がつけられている。土器表面は暗褐色で、器壁は8~11mmである。胎土には水晶、黒雲母、石英、角閃石、スコリアを多く混入する。

335~339は土器表面が暗褐色で、単節の原体を用いた表裏繩文土器の口縁部を含む大きめの破片である。胎土には、ほとんどのものが水晶、石英、角閃石、黒雲母、白色岩片、小レキなどを多く混入する。

335は外反する口縁部で、口径13.6cm、現存高6cmと小さいものである。単節のRLの原体を用いた繩文が縦につけられている。裏面にはRLの繩文を横位に回転して斜繩文を1条つけている。裏面の施文幅は約30mmである。口縁部にも繩文を施している。器壁は6~8mmであ

る。

336はゆるく開いた器形で、口径20.8cm、現存高6cmのものである。表面は単節でRLの原体を用いた斜縄文で、裏面は口縁に17mmの幅で横位にRLの縄文を施文している。器壁は7~8mmである。

337は表裏とも単節でLRの原体を用いた斜縄文が施されたものである。裏面の縄文は横位で幅27mmである。器壁は4.5~7mmである。

338は口縁が著しく外反するもので、表面には単節でLRの原体を縦位、斜位にランダムに回転した縄文で、裏面には横位に37mmの幅で縄文が施文されている。器壁は5~6mmである。胎土の混入物はそれほど多くはない。

339は口縁が著しく外反するもので、単節でRLの原体を用いて表面の口縁にそって横位に施文し、その下は斜位に施文している。裏面には横位に23mmの幅で縄文が施文されている。器壁は8~9mmである。

口縁部のみの小破片のものは、340~378がある。土器表面は暗褐色のものが多く、褐色や赤褐色のものも含まれる。胎土には、概して石英、水晶、角閃石、小レキ、白色岩片などを多く混入するものがあるが、少ないものもある。

単節でRLの原体を用いたものとしては、340、341、349、350、354、357、362、368、371がある。

340は器壁が6mmで、表面が斜位に、裏面は横位に施文している。裏面の縄文は4.1cmと幅が広い。口唇にも施文されている。341は同様の施文方向で、器壁は7.5mmで、口唇にも施文されている。349は同様の施文方向で、器壁は6.5~7.5mmである。口唇にも施文されている。

350は両面とも横位に縄文が施文されたもので、口唇にも施文がおこなわれている。器壁は8mmである。357は同様なもので、器壁は7.5~9.5mmである。362も同様なもので、器壁は7mmである。

354は表面が縦位、裏面が横位に縄文が施文されている。器壁は10~11mmである。

368は口縁のみ縦位で、その下を縦位ないし斜位に原体を回転し、裏面は横位に縄文を施文しており、器壁は6.5cmである。371も同様に口縁を横位、その下を縦位に、裏面は横位に原体を回転しており、器壁は6mmである。

単節でLRの原体を用いたものは多くあり、342~344、346、348、351~353、355、356、358~361、363~367、369、370、372~378である。

両面とも横位に原体を回転し斜縄文となっているのは、344、346、351、352、358、359であり、器壁は6~7.5mmである。

表面を斜位に、裏面を横位に原体を回転しているものは、342、343、348、353、356があり、器壁は6.5mmであるが、353のみは10mmと厚手である。

表面を縦位に、裏面を横位に原体を回転するものは、355、361、364があり、器壁は6~7mmである。

360は表裏にLRの原体を横位に回転し、表面にはそれに直行する方向の施文もあり、交差する文様となっている。器壁は9mmである。

表面の口縁帯に横位の施文をおこなうものには、次のものがある。369は表面の口縁に横位、その下に縦位に、裏面には横位に原体を回転するもので、器壁は6mmである。370は表面の口縁に横位、その下に斜位に、裏面には横位に原体を回転するもので、器壁は10~11mmと厚手である。373は表面の口縁に横位、その下を縦位に、裏面には横位にややランダムに原体を回転するものであり、器壁は8~9mmである。

施文がランダムなものには、次のものがある。366は表面の斜位の施文がランダムなもので、裏面は横位であり、器壁は8mmである。363、365は表面の縦位の施文がランダムなものであり、裏面は横位であり、器壁は6.5~7.5mmである。374は表面を斜位に、裏面を横位とともにランダムに原体を回転したものであり、器壁は6.5mmである。375は表面に縦位、斜位にランダムに、裏面には横位、縦位に原体を回転するもので、器壁は7.5mmである。

376は表面を斜位に、裏面を横位にランダムに原体を回転したものである。377は両面ともに斜位にランダムに原体を回転したものである。378は表面を縦位に、裏面を縦位にランダムに原体を回転したものである。いづれの器壁も8mmである。

表裏で異なる原体を用いるものには、345、347がある。345は表面を横位にRLを、裏面には斜位にLRの原体をともにややランダムに回転したもので、器壁は7.5~9mmである。347は表面を斜位にLRを、裏面には横位にRLの原体を回転したもので、器壁は7mmである。

#### B 無節縄文によるもの 379~397

379~397は無節縄文による表裏縄文上型である。裏面の施文はAと同様で1条施されるのみである。原体は全

て無節で、 $r$ の縄文を用いている。小破片が多いが382、388などはかなり外反するものである。概して土器表面が褐色のものが多く、胎土には水晶、角閃石、および小レキなどを多く混入するものが多い。

表面を縦位に、裏面を横位に原体を回転するものは、379、380、383、384であり、器壁は6~8mmである。381は表面を斜位に、裏面を横位に回転しており、器壁は6mmである。387は両面とも斜位に原体を回転している。391は両面とも横位に回転しており、器壁は9.5mmとやや厚手である。379~384は口唇にも施文がおこなわれるものである。

392~396は表面を横位ないし斜位に、裏面には口縁に横位に原体を回転している。土器表面は褐色で、器壁は9.5~15mmと厚手の土器である。胎土には水晶、角閃石、黒雲母、小レキを混入する。

397は両面とも斜位に原体を回転するもので、土器表面は暗褐色で、器壁は6mmである。

#### C 異なる縄を振り合わせた原体を用いるもの 359、363~366

359は、太さの異なる縄を振り合わせた単節LRの原体を用いたものである。土器表面は褐色で、器壁は6mmで、胎土には水晶、石英、角閃石、黒雲母を多く混入する。

363、364は、太さの異なる縄を振り合わせた単節LRの原体を用いたもので、施文はややランダムである。著しく外反する口縁である。土器表面は暗褐色で、器壁は7.5mmで、胎土には白色岩片、水晶、石英、角閃石を混入する。

365は、同様のもので、土器表面は暗褐色で、器壁は6.5mmで、胎土には石英、水晶、白色岩片を多く混入する。

366も同様のもので、土器表面は赤褐色で、器壁は8mmで、胎土には水晶、石英、スコリアを多く混入する。

#### 9) 縄文のみの土器 398~468 図版26~30

縄文の種類によって、次の3種に分類される。

##### A 無節縄文によるもの 398~406

398~406は無節縄文による純文土器である。398、401は大きく外反する口縁部である。無節で $r$ の原体を横位に回転している。398は土器表面が褐色で、器壁が8mm、胎

土には水晶、石英、角閃石、黒雲母を多く混入する。401も同様で、器壁は9mmである。399、400はともに無節で $r$ の原体を横に回転した口縁部で、土器表面は赤褐色、胎土には混入物が多い。402は無節で $r$ の原体を斜位に回転した底部付近の破片である。

403~405は乳房状の尖底部である。403は無節で $r$ の原体を横位、縦位にランダムに回転したもので、器壁は9mmである。混入物はそれほど多くない。404は $r$ の原体をランダムに回転させたものであり、器壁は10mmである。405は $r$ の原体を用いており、器壁は9mmである。

406は口径13cm、現存高12.7cmの小振りな土器である。無節で $r$ の原体を横位、斜位に、ランダムに回転している。土器表面は暗褐色で、器壁は6.5mmで、胎土には小レキ、水晶、石英、スコリアを混入し、纖維を少し含んでいる。

##### B 単節縄文によるもの 407~468

407~468は単節縄文による純文土器である。407に代表されるように、少し外に聞く縁形であるが408、411などはかなり口縁部が外反している。

407は口径21.8cm、現存高13.7cmの口縁から腹部にかけて残された土器である。R Lの原体を縦位に回転した斜縄文土器である。土器表面は赤で、器壁は8~9.5mmで、胎土には水晶、石英、角閃石を大変多く混入する。口縁部は外反し、口唇には縄文が施文されている。

411~420、425、428は単節の縄文土器の口縁部である。概して、土器表面は褐色ないし暗褐色、明褐色で、胎土には水晶、石英、角閃石、黒雲母白色岩片を多く混入するものが多いが、417、418、428は混入が少ない。411~414は口唇にも縄文が施文されている。

L Rの原体を用いるのは、次のものである。412、414、420は縦位に原体を回転したものであり、器壁は7.5~11mmである。421は横位に回転したもので、器壁は9mmである。428は斜位に回転したもので、器壁は7mmである。419は縦位、横位に回転したもので、器壁は6.5~8mmである。416は横位、斜位に回転したもので、器壁は9mmである。

R Lの原体を用いるのは、次のものである。413、417は縦位に回転したもので、器壁は7.5mmである。418は横位に回転したもので、器壁は10mmである。422は横位、縦位に回転したもので、器壁は9.5mmである。

L R、R Lの原体を縦位に回転し、羽状に施文をしているのが、411、415で、器壁は8.5mmと7.5mmである。

429、434~452は脇部の破片である。概して、土器表面は褐色のものが多く、暗褐色のものも少し含まれる(435、437、445、452)。胎土には水晶、石英、角閃石、小レキなどが多く混入されるものが多いが、434、443~445、447~449は混入が多くない。

L Rの原体用いたものは、次のものがある。縦位に原体を回転するものとしては、437、441~443、445~449があり、器壁は439が11mm、441が10mm、446が13mmのはかは7~9mmである。

斜位に原体を回転するものとしては、434、435、438、439、444があり、器壁は434と439が9.5~11.5mmと厚手であり、それ以外は6~8mmである。452は横位であり、器壁は8mmである。

R Lの原体を用いたものは少なく、次のものがある。縦位に原体を回転するものは、440、450があり、器壁は9mmと7mmである。横位に原体を回転するのは、429、436であり、器壁は8.5mmと7mmである。

432、433は底部に近い脇部の駆逐口縁をもつ破片で、R Lの原体を用いている。432は縦位にまばらに回転するもので、器壁は7mmである。433は横位に回転するもので、器壁は9~10mmである。

453~456は、口縁部の破片である。土器表面は赤褐色で、器壁は8.5~9mmであり、455のみ6.5mmと薄手である。胎土には角閃石、石英、白色岩片などを混入するが、量は多くない。453、454はL Rの原体を横位に、455は斜位に回転している。456はR Lの原体を横位に回転している。

464~468は尖底部である。L Rの原体を用いる465は、ランダムな施文で、器壁は10.5~12.5mmと厚手である。467は6.5~8mmと薄手である。R Lの原体を用いる466、468は器壁が8.5~10mmで、468はランダムな施文である。464は縦位の施文であり、器壁は7~11mmである。いづれも水晶、角閃石などを多く混入する。

### C 異なる繩を撚り合わせた原体を用いるもの

421は、太さの異なる繩を撚り合わせた単節L Rの原体を用いている。土器表面は褐色で、器壁は9mmで、胎土には水晶、石英、角閃石、スコリアを多く混入する。

422は、太い1段の撚りのRと細い0段の撚りのIを撚

り合わせた原体を用いたものである。土器表面は明褐色で、器壁は9.5mmで、胎土には水晶、白色岩片、角閃石、石英を多く混入する。

423は、太い1段の撚りのIと細い0段の撚りのIを撚り合わせた原体を用いたものである。土器表面は褐色で、器壁は10mmで、胎土には水晶、白色岩片、角閃石、石英、黒雲母を多く混入する。

424は、太い1段の撚りのRと細い0段の撚りのIを撚り合わせた原体を用いたものである。土器表面は褐色で、器壁は7~8mmで、胎土には石英、水晶、角閃石を多く混入する。

426は、太い1段の撚りのIと細い0段の撚りのIを撚り合わせた原体を用いたものである。土器表面は褐色で、器壁は8mmで、胎土には水晶、石英、黒雲母、角閃石を多く混入する。

427、430は、太い1段の撚りのIと細い0段の撚りのIを撚り合わせた原体を用いたものである。土器表面は褐色で、器壁は8mmで、胎土には水晶、石英、黒雲母、角閃石を多く混入する。

### 10) 撥糸文土器 図版31

撥糸文土器は模様構成から次の5種に分類される。

#### A 表裏施文の撥糸文土器 474、475

474、475は、撥糸文を縦位に施文したもので、口縁部にのみ裏面に1条の撥糸文が横位に施文されているものである。口縁はやや外反する。474は土器表面が暗褐色で、器壁は6.5mmで、胎土には水晶、石英、角閃石をたいへん多く混入している。475も474に似たもので、器壁は6~9mmである。

#### B 縦位、斜位に施文した撥糸文土器 469~473、476

469~473、476は、斜位ないし縦位に撥糸文を回転して施文したものである。

469、470は土器表面が暗褐色で、器壁は7.5mmで、胎土には水晶、角閃石などをわずかに混入する。撥糸文をまばらに施文している。476は器壁が9mmで、胎土には混入物が多い。

471~473は、土器表面が赤褐色で、器壁は7.5~8.5mmで、水晶などを多く混入している。

#### C 網目状撚糸文で表裏施文のもの 477、479

477、479は、欄目状撚糸文で、口縁部に表裏にも施文がされているものである。口縁部は外反する断面をもつ。

477は無筋rを網目状に施文している。表面は継位に、裏面は口縁にそって横位に回転している。口唇にも施文がおこなわれている。土器表面は褐色で、器壁は7mmで、胎土には水晶、石英、白色岩片をやや多く混入している。

479は無筋lを網目状に施文している。表面は口縁に横位に、その下には継位に回転し、裏面には口縁にそって横位に施文している。土器表面は褐色で、器壁は8.5mmで、胎土には水晶、石英、角閃石をやや多く混入している。

#### D 網目状撚糸文のもの 478、480～489

478、480～489は撚糸文を網目状に施したものである。土器表面は褐色で、胎土には石英、水晶などの混入が多いことが一般的である。

無筋lを用いるのは、480～484、486～488である。器壁は6～8.5mmである。488は、11～12.5mmである。

無筋rを用いるのは、478、485、489である。器壁は6～7.5mmとやや薄手である。

#### E 細密な撚糸文を異方向に網目状に（？）施文のもの 490～493

490～492は口縁にそって横位に施文し、その下に継位

に施文したものであり、491の下は斜位である。土器表面は褐色で、器壁は7.5mmで、胎土には混入物があまり多くない。490、492はlの原体を、491はrの原体を用いている。

493は撚糸文が異なる方向に施文されたものである。土器表面は赤褐色で、器壁は8mmで、胎土には混入物がたいへん多い。

#### 11) 条痕文土器 494～497、390 図版25、32

494～496、390は条痕文系の土器で、いづれも纖維を多く含む早期末のものである。

494、495は纖維を多く含む、胎土が粗く焼成もよくない絶対年正直文土器である。表面には条痕がつけられ、口縁付近に横位に絡条体压痕文が施されている。土器表面は褐色で、器壁は8～9mmである。胎土には石英、長石、スコリアを混入し、纖維はたいへん多い。496も同様な土器で、器壁は11.6mmである。表面に条痕がつけられている。

497は暗褐色で、纖維を多く含む条痕文土器である。器壁は6～7mmで、胎土には水晶、黒雲母をたいへん多く混入し、纖維を多く含む。表面には継位の条痕がつけられている。

390は同様な土器の底部で、器壁は11～16mmである。

### 3 繩文時代前期前半の土器

#### 1) 羽状縄文土器、斜縄文の土器 457～463 図版30

457～463は、胎土に纖維を多く含む前期前半の土器である。土器表面は褐色ないし暗褐色で、器壁は7～8mmで、胎土にはスコリア、白色岩片、角閃石、石英をやや

多く含む。

457～459、461は単節RL、LRの原体を交互に回転した羽状縄文土器である。460、462は単節L Rを、463は無筋lの原体を用いたものである。

### 4 繩文時代前期、諸磯b式併行の土器

#### 1) 沈線文系の土器 図版35～37、40～41、64

##### A 孤線文が描かれるもの 559～566、577

孤線文の形状によって①肋骨文に近いもの、②渦巻文、③連孤状文の3種が認められる。

① 559、560は、平口縁で、半裁竹管による平行沈線文

で上下区面してから、横を更に区画して、その内に肋骨文に似た弧線を描いている。調下半部の地文には半裁竹管文による練杉状文が施されている。土器表面は暗褐色で、器壁は9.5～10.5mmで、胎土には白色岩片、水晶、石英、角閃石、小礫を混入するが、量は多くない。

② 565、566は、文様帶に半截竹管による渦巻き文をえがいたものである。器壁は8.5~11mmである。561~564は、平行沈線文による文様をもち、上述の土器の削下部半分の可能性がある。器壁は約9.5mmである。いづれも土器表面は褐色~暗褐色で、胎土は559と同様のものである。

③ 577は連弧状文が描かれた土器である。頸部ですばまるが、口縁にかけて大きく外反する平口縁の深鉢で、口唇には刻み目が入れられている。口縁に半截竹管による平行線文が2~3条あり、その下の文様帶には平行沈線で連弧状文が描かれている。ふくらむ器形の削下部半分には、大柄な単節LRの斜繩文が施されている。土器表面は暗褐色で、器壁は8~11mmで、胎土には砂、小砾のほか、石英、輝石類、角閃石などをやや多く混入する。

#### B 格子目文が描かれるもの 567~576、578~591

格子目文を描く土器には、文様要素から①平行沈線のみによるもの、②押引文を併用するもの、③円形刺突文を併用するものの3種が認められる。

①半截竹管による平行沈線で格子目文を描く土器 567~570、575

567~576は、土器表面が褐色（一部暗褐色）で、器壁は7~8mmであり、平行沈線で区画された下に地文の綱文が施文されるものである。胎土には砂、小砾や石英、水晶、輝石類、磁鐵鉱などを少量混入している。

567~570、575は、口縁にそって数条の平行沈線文を施し、その下に平行沈線で格子目文を描出する。平口縁で、口唇には刻み目が入れられる。地文は570が単節LRの斜繩文である。575は、無節Iの斜繩文が施されている。

②平行線文に半截竹管による押引文が用いられる土器

571~574、576、578、589~591

574は無節rの綱文が施されている。

576、578は押引文を多用するものである。578は平行沈線文、押引文で幾何学的な区画をおこなっている。土器表面は576が褐色、578が暗褐色で、器壁は8~8.5mmで、胎土には白色岩片、小砾、輝石、角閃石を少し混入する。

589~591は、内側竹管による押引文で大振りな爪形文を描くものである。地文には単節RLの原体を横位に斜繩文が施されている。土器表面は褐色で、器壁は8~10mmで、胎土には小砾、砂、石英、角閃石をやや多く混入する。

③平行沈線による格子目文の交点に円形刺突文を施した土器 579~588

581~588は、口縁部に平行沈線文を施し、その下に平行沈線による格子目文を描き、その交点に円形竹管による刺突文を施したものである。多くは土器表面が褐色で、胎土には混入物が少ないが、585は暗褐色で、小砾、長石、石英、輝石、スコリアなどの混入物が多い。器壁は8.5~11mmである。

579、580は、口縫部の平行沈線間に爪形文列を施したものであり、器壁は8~9mmである。

#### C 木の葉文を描くもの 592~594

592~594は、口縁に半截竹管による集合沈線文をひき、その下に曲線と対位の平行沈線文で木の葉文を意識した幾何学的な文様を描いた土器である。口唇には刻み目が入れられている。土器表面は褐色~暗褐色で、器壁は8~9mmで、胎土には白色岩片、石英、黒雲母などをやや多く混入する。

#### D レンズ状の文様を描くもの 609~620、719~722

レンズ状文を描く土器は、①大振りなレンズ状文を描くもの、②小振りなレンズ状文を描くものの2種が認められる。

①609~614は、波状口縁で、半截竹管による沈線文で口縁と肩部にそった平行沈線文をひき、その間に曲線でレンズ状の入り組んだ文様を構成した土器である。表面はていねいなナナド調整がおこなわれている。土器表面は褐色ないし暗褐色で、器壁は8.5~10.5mmで、胎土には白色岩片、石英などを混入するが、量は多くない。

615~620は、平縁で半截竹管によって上下に平行沈線文を引き、間に大きなレンズ状の文様を描く土器である。レンズの内部には網状状の文様を入れている。底下半部の地文には、単節LR、RLの原体を用いた羽状繩文が施されている。616は、口唇に刻み目が入れられており、平行沈線の线条が多いものである。土器表面は褐色で、器壁は8.5~10.5mmで、胎土には小砾、砂、石英を少し混入する。615は小砾、石英、スコリア、角閃石を多く混入している。

②719~722は、半截竹管による沈線文を用い、口縁と文様帶の下端に平行沈線文を引き、その間にレンズ状文を描いた土器である。地文はいづれも単節繩文で、719がL

Rの斜縄文、720がR Lの斜縄文、721・722がL R・R Lの羽状縄文である。土器表面は赤褐色で、器壁は8~9.5mm(722のみ9.5~12mm)で、胎土には小砾、砂、角閃石を混入する。

E 平行沈線による横位及び縦位の口画中に曲線文を描くもの 723、724

723、724は、平行沈線による区画中に、曲線文を描くもので、地文には単節L R・R Lの羽状縄文を用いている。土器表面は赤褐色で、器壁は9mmで、小砾、砂を混入する。

2) 浮線文を曲線状に貼り付けた土器 596~604

図版38、39

596は、直立気味に立つ肩部から強く開いた後、口縁部で内傾する波状口縁の深鉢である。浮線文を胴上半部に曲線状に貼り付け、浮線上に矢羽根状の刻み列を施す。下半部の地文は、無筋しの斜縄文である。波頂部の下に風車状渦巻文が配され、その中心に獸面把手が加飾されている。土器表面は暗褐色で、器壁は7~8.5mmで、胎土にはスコリア、輝石類、角閃石、小砾を少し混入する。

597は、3本1組の浮線文上に矢羽根状の刻み列を入れ、さらに棒状工具による小さな刺突列が配されている。波頂部の下に風車状渦巻文が配され、その中心に獸面把手が加飾されている。土器表面は暗褐色で、器壁は7~8mmで、胎土には混入物が多い。

598は、同様な矢羽状の刻み列を密に配する土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は8.5mmで、胎土への混入物の量は普通である。599、602も同様な土器で、2本1組の矢羽状の刻み列を密に施している。土器表面は赤褐色で、器壁は8mmで、胎土には小砾、角閃石、輝石類、スコリアを多く混入する。

600は、細い浮線文を口縁にそって4条、その下に渦巻き文を描く土器の口縁部破片である。浮線文の上には小さな爪形文列がつけられている。土器表面は褐色で、器壁は6.5~6.5mmで、胎土には白色岩片、石英、角閃石をやや多く混入する。

601は、地文の単節R Lの楕文を施し、平行沈線による曲線文が区画状に描かれている。土器表面は褐色で、器壁は8~10mmで、胎土は小砾、石英、水晶、角閃石を少し混入する。

604は、横位に3本1組の浮線文に矢羽状の刻み列を入れた平行沈線で文様を反画し、その下に渦巻き文を描く土器である。地文の斜縄文が残されている。土器表面は暗褐色で、器壁は7.5mmである。胎土には小砾、石英、角閃石をやや多く混入する。

603も同様の土器であるが、細い棒状工具による刺突列をつけ、器壁は8.5mmである。

3) 線孔土器 595、605~608 図版38~40

線孔土器には、A文様を施されたもの、B無文土器の2種が認められる。

A 文様の施された線孔土器 595

595は、内湾ぎみに2段の稜をつくって開いた後、口縁にかけて強く内傾して窓形になった浅鉢である。口縁は再び外反して、短く立っている。口縁にそって、約6mmの円孔が施される。深く刻まれた平行沈線で三角形や木の葉形を描く。平行沈線の中に爪形文を浅くついている。土器表面は褐色で、器壁は9mmで、胎土には白色岩片、長石、石英、黒雲母を混入している。

B 無文の線孔土器で、丁寧なナデ調整により光沢をもつもの 605~608

605は口径22.4cmの口縁部の破片である。土器表面は褐色で、器壁は8.5~9.5mmで、孔の直径は5.5mmで、胎土には白色岩片、スコリア、輝石類、長石をやや多く混入する。

606は平底の底部から内湾気味に2段の稜をつくって開いた後、口縁にかけて強く内傾する浅鉢であり、口縁は再び外反して短く立つものである。土器表面は暗褐色~黒褐色で、器壁は6.5~7.5mmで、胎土には石英、小砾を混入する。口径27.8cm、高さ8cm、底径25cmであり、表面は丁寧なナデ調整により光沢をもつ。

607は2段の稜をもつ線孔土器である。土器表面は黒褐色で、器壁は8~9mmで、底部は15mmであり、胎土には石英、輝石類、黒雲母をやや多く混入する。高さ6.7cm+で、底径15.4cmである。

608は丸底の大型の浅鉢で、浅い稜を1段もつものである。土器表面は赤褐色で、底部は良く焦げて黒色となっている。器壁は7.2~8mmで、稜のあるところは10mmである。胎土には石英、角閃石をやや多く混入する。

#### 4) その他の土器 図版90、91

##### A 指頭圧痕文や刺突による点列文が描かれる土器

985、986、1000

985、986は、指頭圧痕文が施される土器である。土器表面は明褐色で、器壁は6.5~8mmで、胎土には小穂、水晶、石英、スコリアを少し混入する。

1000は、口縁にそって3列に中心に小さな穴のあいた細い木の棒のような工具を斜めに刺突し、指頭圧痕文に似た文様をつくっており、その下には横位、斜位に半截竹管による集合沈線文を施した上巻である。土器表面は褐色で、器壁は6.5~8mmで、胎土には小穂、砂、石英、角閃石を混入するが量は普通である。

##### B 太い隆線を貼り付けた土器 1001、1002

1001は、口縁にそって横位3列に、幅8.3mmの太い隆線を貼りつけ、その上に指頭圧痕文を加えた土器である。地文は無第1の斜繩文である。土器表面は褐色で、器壁は7mmで、胎土には小穂、白色岩片、水晶、石英、角閃

石をやや多く混入する。

1002は、口縁にそって横位2列に、幅7mmの太い隆線を貼りつけ、その上に斜めに細い刻みを入れた土器である。地文は単節LR、RLの繩文である。土器表面は黒褐色で、器壁は7.5mmで、胎土には水晶、石英、角閃石を多く混入する。

##### C 細い隆線を伴う羽状繩文土器 1003

1003は、大きな底部から少し開き気味に立ち上がり、胴部で少しきびれた後、口縁が内済気味に外へ聞く器形の繩文土器である。口縁部文様帶には、直径3.5mmの細い隆線を貼りつけ、上下に区画する平行線文の間に三角形状の文様をえがいている。地文は細めの単節RL~LRの羽状繩文である。土器表面は暗褐色で、器壁は7mmで、胎土には小穂、砂、石英、スコリア、角閃石をやや多く混入する。口径18.8cm、底径9cmで、現存高は21.2cmである。

## 5 繩文時代前期、諸磯b式併行の繩文のみの土器

#### 1) 羽状繩文土器 図版42~53

##### A 単節の繩文を原体とするもの 622~633、635、

636、638、640~647、649~657

単節のLR~RLの原体を交互に回転した羽状繩文土器であり通有のものである。

622は底部から開き気味に立ち、胴部で若干すぼまつた後、ゆるく外反する平口縁の深鉢である。単節LR~RLの原体を交互に回転した羽状繩文である。口唇には繩文が施文されている。土器表面は赤褐色で、器壁は9.5mmで、胎土には砂をこぐわざか混入する。

623、624は、頸部ですぼまつた後、口縁にかけて大きく外反する平口縁の深鉢である。大柄の単節LR~RLの原体を交互に回転した羽状繩文である。土器表面は暗褐色で、器壁は9mmで、胎土には輝石類、白色岩片、スコリアを少し混入する。

625は底部からやや開き気味に立った後、胴部は直立気味に立ち、口縁にかけて外反気味に開き、4単位のゆるい波状口縁の深鉢である。補修孔を口縁近くに有する。単節RL~LRの原体を交互に回転した羽状繩文であ

る。土器表面は赤褐色~暗褐色で、器壁は7.5~8.5mmで、胎土には小穂、砂をわずかに混入する。

626は平口縁の深鉢である。口唇には繩文が施されている。単節LR~RLの原体を交互に回転した羽状繩文である。土器表面は赤褐色~暗褐色で、器壁は9mmで、胎土には角閃石、輝石類、白色岩片をやや多く混入する。

627~632は、土器表面は赤褐色で、器壁は7~8.5mmで、胎土には石英、輝石類、角閃石、白色岩片をやや多く混入するが、627以外は量は少ない。

633、635、636、638は、口唇に繩文を施文する土器で、土器表面は赤褐色で、器壁は9~10.5mmで、胎土には小穂、角閃石、白色岩片、石英を少し混入する。

640は土器表面は暗褐色で、器壁は8.5~9mmで、胎土には小穂、水晶、石英、角閃石を混入する。

641~643は、口唇に内側竹管の刺突による爪形文列を施文し、土器表面は褐色で、器壁は8~9.5mmで、胎土には角閃石、白色岩片、スコリアをやや多く混入する。

647は、やや大柄な繩文の原体を用いるもので、土器表面は赤褐色で、器壁は9.5mmで、胎土には小穂、石英、角

閃石をやや多く混入する。

649、650は、口唇に縄文を施す土器で、土器表面は赤褐色で、器壁は7~8mmで、胎土には混入物が少ない。

#### B 無節と単節の縄文を原体とするもの 621、637、639、648

621は単節RL、無節Iの原体を交互に回転した羽状縄文を施した土器である。口唇には内側竹管の刺突による爪形文をつけ、4単位のヘビ状の装飾をおこなっている。土器表面は暗褐色で、器壁は7~7.5mmで、胎土には小砾、砂をわずかに混入する。

637、639は、無節rと単節LRの原体を交互に回転した羽状縄文土器である。土器表面は赤褐色で、器壁は8.5~9.5mmである。

648は、無節Iと単節RLの原体を交互に回転した羽状縄文土器である。土器表面は赤褐色で、器壁は8~9.5mmで、胎土には混入物がやや多い。

#### C 無節の縄文を原体とするもの 658~668

無節のIとrの原体を交互に回転した羽状縄文土器である。

658~663は、口唇に2個1対の耳状の突起をつけ、口唇に縄文を施す土器である。土器表面は褐色で、器壁は9.5mmで、胎土には小砾、石英、水晶、角閃石を少し混入する。

664は、大柄な縄文の原体を用いた土器である。土器表面は褐色で、器壁は10~11.5mmで、胎土には細粒砂、小砾、石英をやや多く混入する。口径38.6cm、現存高21cmである。

665、666は、土器表面が暗褐色で、器壁は7~7.5mmで、胎土には混入が少ない。

668は、施文がややランダムな土器で、土器表面は褐色で、器壁は7~8mmで、胎土には小砾、砂を少し混入する。底径8.4cm、現存高12cmである。667も同様なもので、器壁は6.5mmである。

#### 2) 斜縄文の土器 図版54~63

##### A 単節の縄文を原体とするもの 670~673、680、683、686~699、703、704

670、671は、底部からやや開き気味に立った後、頭部

でゆるくすぼまつた後、口唇にかけて外反気味に聞く、ゆるい波状口縁の深鉢である。単節RLの原体を横位に用いた斜縄文である。口唇には縄文を施す。土器表面は褐色で、器壁は7~9mmで、胎土にはスコリア、角閃石、砂をわずかに混入する。671の底径は10.2cmである。

672、673は、底部から開き気味に立ち、頭部は直立気味に立ち、口唇にかけて大きく外反気味にひらく、ゆるい波状口縁の深鉢である。人柄の単節RLの原体を用いた斜縄文で、口唇には縄文が施される。土器表面は赤褐色で、器壁は9~12mmで、胎土には小砾、石英、砂を混入し、やや砂質の胎土である。

680は、単節RLの原体を用いた斜縄文の土器である。底径13cmで、現存高は13cmである。土器表面は褐色で、器壁は10~11mmで、胎土には砂、石英をやや多く混入する。

683は、単節RLの原体を用いた斜縄文で、土器表面は赤褐色で、器壁は8.5~10mmで、胎土には小砾、砂を少し混入する。

686~689は、単節LRの原体を用いた斜縄文で、土器表面は赤褐色で、器壁は8~9mmで、胎土には小砾、砂、石英をやや多く混入する。底径8cmである。

690~692は、単節RLの原体を用いた斜縄文の土器で、口唇には縄文が施される。土器表面は赤褐色で、器壁は7.5~8.5mmで、胎土には小砾、砂、石英、角閃石を少し混入する。

693~696は、単節のRLの原体を用いた斜縄文の土器で、口唇には縄文が施され、向き合う2組1対の小さな突起によって装飾されている。土器表面は暗褐色で、器壁は7.5~8.5mmで、胎土には小砾、砂、角閃石を少し混入する。

696~698は、単節LRの原体を用いた斜縄文の土器で、小単位の波状口縁である。土器表面は褐色で、器壁は9mmで、胎土には小砾、角閃石、砂を少し混入する。

699は、単節RLの原体を用いた斜縄文の土器である。土器表面は赤褐色で、器壁は9.5~11mmで、胎土には小砾、砂、石英、水晶、角閃石、スコリアを混入する。

703、704は、単節RLの原体を用いた斜縄文の土器である。土器表面は赤褐色で、器壁は8.3~10.5mmで、胎土には砂を多く混入する。

##### B 無節の縄文を原体とするもの 705~714

705~708は、人柄な無節Iの原体を用いた斜縄文の土

器である。口縁はやや内済気味である。土器表面は赤褐色で、器壁は7.5~9.5mmで、胎土には小砾、砂を混入する。

709~714は、無筋Iの原体を用いた斜繩文の土器である。口唇には繩文が施文される。土器表面は赤褐色で、器差は8~9.5mmで、胎土には小砾、砂を少し混入する。

C 異なる繩を撚り合わせた原体を用いるもの 669、  
674~679、681、682、684、685、700~702、715

669は、底部から開き気味に立ち、頸部でゆくすぼまった後、口縁が外反気味にひらく深鉢である。口縁はゆるやかな波状LII縁で、口唇には繩の圧痕が押しつけられ刻み目をついている。口径は34cm、現存高46cmで、底径は12cmである。太さの異なる繩を撚り合わせた単筋RLの原体を用いた斜繩文である。土器表面は赤褐色~褐色で、器壁は9~10mmで、胎土には砂、角閃石、石英、スコリアを少し混入する。

674~679は、口縁が強く外反して開く深鉢で、ゆるい波状口縁である。細い1段のIと太い1段のRを組み合わせた撚りを原体とする斜繩文である。土器表面は赤褐色で、器壁は8~10mmで、胎土には小砾、砂、スコリア、石英などをやや多く混入する。

681、682は、太さの異なる撚りを用いた単筋RLの原体を用いた斜繩文で、ややランダムな施文である。土器表面は暗赤褐色で、器壁は7.5~8.5mmで、胎土には小砾、スコリア、角閃石を多く混入する。

684は、太さの異なる繩を撚り合わせた単筋RLの原体を用いた斜繩文である。上器表面は赤褐色で、器壁は11mmで、胎土には小砾、砂を少し混入する。

685は、太さの異なる繩を撚り合わせた単筋RLの原体を用いた斜繩文である。土器表面は赤褐色で、器壁は10~12mmで、胎土には混入がない。

700~702は、太さの異なる大柄な繩を撚り合わせた単筋RLの原体を用いた斜繩文であり、施文はややランダムである。土器表面は赤褐色で、器壁は9.5mmで、胎土には小砾、砂を少し混入する。

715は、太い1段の撚りのRと細い1段の撚りのIを撚り合わせた原体を用いた斜繩文である。土器の底部である。底径は8cm、現存高7.5cmである。上器表面は赤褐色で、器壁は8~9mmで、胎土には混入人が少ない。

D 底部に圧痕をもつ上器 716~718

716は、無筋Iの原体を用いた繩文土器の底部である。底径は15.2cm、現存高6.1cmである。底面には木の葉の圧痕がみられる。上器表面は褐色で、器壁は9.5mmで、胎土には砂、水晶を少し混入する。

717は、単筋RLの原体をまばらに回転した土器の底部である。底径は13.4cm、現存高7.7cmである。底面には網布压痕が残される。タテ糸の間隔は5.5~7mm、平均6.37mm、ヨコ糸の間隔5.0~5.5mm/cmで、かなり細かく編まれたものである。土器表面は褐色で、器壁は7.5~9mmで、底部は8.8~11mmである。胎土にはスコリア、白色岩片、角閃石、石英、小砾をやや多く混入する。

718は、無筋Iの原体を用いた斜繩文の土器の底部である。底径は16cm、現存高5.7cmである。底面には網代圧痕が残される。土器表面は褐色で、器壁は8~8.5mmで、胎土には砂を少し混入する。

## 6 繩文時代前期、諸磲c式併行の土器

### 1) 大きめの棒状貼付文をつける土器 727~783

図版64~68

727~740は、口縁に複数に棒状貼付文をつける土器である。長さは3cmである。文様帶には集合沈線で欠羽状文が描かれ、脇下半部には地文の単筋LIRの新繩文が施されている。727~728は土器表面が明褐色で、器壁は8~9.5mmである。胎土には小砾、石英、角閃石を混入する。729~740は土器表面が褐色で、器壁は8.5~10.5mmで、

胎土には小砾、砂、石英、角閃石、スコリアを多く混入する。

741~746は、長さ3cmの棒状貼付文を口縁に複数に貼り付ける土器で、地文には集合沈線を縦位に施しX字状文をえがいている。上器表面は褐色で、器壁は9~11mmで、小砾、角閃石、石英、スコリアを多く混入する。

747は、幅広の棒状貼付文の上にへこみをつけたもので、地文には斜位に集合沈線文をひいている。土器表面

は褐色で、器壁は4.5~6 mmで、胎土には白色岩片、石英、黒雲母を少し混入する。

748~753は、長さ5.8cmの細長い棒状貼付文と長さ15cmの楕円形のボタン状貼付文をはりつけた土器である。地文には集合沈線で横位の矢羽状文がつけられており、胴下部にはX字状文がつけられている。751の棒状貼付文は長さ3cm弱で短い。土器表面は暗褐色で、器壁は6~7.5mmで、胎土には白色岩片、角閃石、石英を混入する。

754は、長さ5.2cm、幅1.1cmの大きめの棒状貼付文をついた土器で、その下には大きな押引状の刺突文列がある。地文は無筋Iの繩文である。土器表面は褐色で、器壁は9~10.5mmで、胎土には小穂、水晶、石英、角閃石を多く混入する。

755は、長さ2.5cmほどの小さめの棒状貼付文をつける土器である。地文は単筋LRの繩文で器壁は9.5mmで、胎土には白色岩片、輝石類、スコリアを多く混入する。

756は、長さ4cmほどの棒状貼付文をつけ、地文には半截竹管による集合沈線で矢羽状文を横位に施している。土器表面は褐色で、器壁は9~10.5mmであり、小穂、スコリア、石英、角閃石をやや多く混入する。

757~759は、刻みを入れた大きめの棒状貼付文をつけた上器である。棒状貼付文は、長さ5.7cm、幅1.3cmである。その横に1.3cmの円形のボタン状貼付文をつける。地文は集合沈線による矢羽状文である。土器表面は褐色で、器壁は11mmで、胎土には水晶、石英、角閃石、スコリア、小穂を少し混入する。

760~762は、長さ6cmの棒状貼付文と刺突が施された長さ1.3cmの円形のボタン状貼付文を口縁にそって配置し、口縁には斜めに大きな刺突のある土器である。地文は、口縁文様帯が半截竹管の集合沈線による横位の矢羽状文で、下半部にはX字状文がつけられている。土器表面は暗褐色で、器壁は8mmで、胎土には小穂、砂、石英をわずかに混入する。760~776は裏面がよく磨かれ、焼成がいいものである。

763~766は、横位の矢羽状文、767~776はX字状文が施された土器である。土器表面は赤褐色で、器壁は8mmで、胎土には砂、石英、角閃石、小穂を多くないが混入する。760~762の土器の一部である可能性がある。

777~779は、半截竹管による集合沈線で縦位に矢羽状文を施し、その下に平行沈線文がひかれた土器である。

土器表面は褐色で、器壁は8.5~11.5mmで、胎土には小穂、石英、角閃石をやや多く混入する。

780~783は、半截竹管の集合沈線を縦位に、X字状文を施したもので、土器表面は褐色で、器壁は8mmで、白色岩片、石英、角閃石、小穂をわずかに混入する。782には直径9mmの補修孔をもつ。

2) やや細めで長い棒状貼付文をつける土器 784~810、845~851、853 図版68~70、74、75

784~791は、上2段に長さ3cmの棒状貼付文をつける土器である。上には竹管による押引で刺突をしている。地文は口縁文様帯が横位の平行沈線文で、下半部には縦位の施文がおこなわれている。土器表面は赤褐色で、器壁は8mmで、胎土には砂、石英、角閃石をやや多く混入する。裏面がよく磨かれていて、焼成がいい。

792~798は、長さ6cm、幅7~8mmの細長い棒状貼付文を寄につけ、その上に半截竹管で刺突がおこなわれた土器である。直径8mmの円形のボタン状貼付文がつけられる。地文は、上半部には横位の集合沈線文がひかれ、下半部には集合沈線によるX字状文が施される。土器表面は暗褐色で、器壁は8~11mmで、胎土には白色岩片、石英、シソ輝石、角閃石をやや多く混入する。

799~801は、口縁にそって縦位に棒状貼付文とボタン状貼付文をつけた土器である。いづれにも半截竹管による刺突がおこなわれている。地文には半截竹管による横位の集合沈線文がひかれている。土器表面は褐色で、器壁は7.5~9mmで、胎土には小穂、石英をやや多く混入する。799の混入は少ない。

802~805は、長さ8cmの細長い棒状貼付文を3本1組で貼り付け、その間にはボタン状貼付文を縦位に並べた土器である。いづれにも半截竹管により刺突がおこなわれている。また、ゆるい波状口縁には刺突がおこなわれている。地文は上半部が横位、下半部には縦位の集合沈線が引かれている。その間には刺突穴がある。土器表面は褐色で、器壁は8.5~10mmで、胎土には小穂、角閃石、石英、スコリアをわずかに混入する。

806~810は、棒状貼付文を縦位につけたものである。長さ3~4cmで、幅6~7mmで、上には半截竹管の刺突がおこなわれている。口縁には集合沈線による矢羽状文がつけられ、頭部には大きめの指頭圧痕文列が配される。その下には縦位の集合沈線が引かれている。土器表面は

暗褐色で、器壁は7~8.5mmで、胎土には白色岩片、石英、水晶、角閃石、小礫をやや多く混入しており、砂質の胎土である。

845は、刻突をおこなった棒状貼付文を縦位につけ、口縁には刺突文列、口縁文様帶下部には指頭圧痕文列をつけた土器である。地文は横位の集合沈線文である。土器表面は暗褐色で、器壁は6mmと薄く、胎土には角閃石、水晶、スコリア、石英、軽石、小礫を混入する。

849~851は、845と似た土器で、下半部には集合沈線によるX字状文が施されている。土器表面は暗褐色で、器壁は7~8.5mmで、胎土には石英、水晶、角閃石をやや多く混入する。

846~848は、長さ1.8cmの小さな棒状貼付文をつけ、結節浮線文をつけた土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は6~7mmで、胎土には角閃石、水晶、小礫をやや多く混入する。

853は、結節浮線文を縦位につけ、その間に短い棒状貼付文を縦位に並べる土器である。地文には上半部に集合沈線による矢羽状文を、下半部にはX字状文を施している。土器表面は褐色で、器壁は8.5~9mmで、胎土には小礫、スコリア、石英、角閃石を少し混入する。

### 3) 結節浮線文を用いる土器 811~844、852、854~866

#### 図版70~77

811~813は、結節浮線文が口縁に3列、頸部に2列、その間を縦位に2~3列1組に配された土器である。地文は集合沈線文により上半部には横位に、下半部には縦位につけられている。土器表面は暗褐色で、器壁は9~10mmで、胎土には角閃石、水晶、スコリア、小礫をやや多く混入する。

814~817も同様な文様構成をとる土器である。土器表面は褐色で、器壁は7.5~11mmで、胎土には白色岩片、石英、角閃石、スコリアを混入する。818~821も同様で、胎土には水晶、石英、角閃石、小礫、スコリアを多く混入する。

822は、結節浮線文が口縁に2列、縦位に4本1組に配され、地文には横位の集合沈線文が施されている。土器表面は褐色で、器壁は10mmで、胎土には白色岩片、石英、角閃石を多く混入する。

823は、822に近いが、口縁文様帶下部に刺突文列がつけられるものである。縦位の結節浮線文は3本1組であ

る。下半部には集合沈線によるX字状文がつけられている。土器表面は褐色で、器壁は8.5~11mmで、胎土には水晶、石英、角閃石、スコリア、白色岩片をやや多く混入する。

824、825は、土器表面は褐色で、器壁は7mmで、胎土にはスコリア、石英、角閃石、小礫を少し混入する。

826は、地文に矢羽状文をえがき、口縁文様帶の下部には指頭圧痕文列をつける土器である。土器表面は褐色で、器壁は11mmで、胎土にはスコリア、石英をごくわずかに混入する。

827は、口縁と文様帶下部に各2列、その間を縦位に3本1組で結節浮線文をつける土器である。地文は集合沈線を上半部は横位に、下半部にはX字状文をついている。土器表面は暗褐色で、器壁は6~8.5mmで、胎土には軽石、白色岩片、水晶、石英、角閃石、小礫をやや多く混入する。

828~830は、2本1組の結節浮線文を口縁と縦位につけた土器である。土器表面は褐色で、器壁は8mmで、胎土には水晶、軽石、角閃石、白色岩片、小礫を混入する。

831、832は、縦位に結節浮線文を密に並べ、その間に直径5~6mmの小さなボタン状貼付文をつける土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は7.5~8.5mmで、胎土には白色岩片、スコリア、石英、小礫を少し混入する。

833~837は、内湾する口縁部の破片で、口縁に刺突文列、縦位に結節浮線文を2本1組でおき、その間に円形のボタン状貼付文がつけられるものである。地文は集合沈線で、口縁にそった横位の集合沈線文の下に矢羽状文がつけられている。口唇は厚く張り出している。土器表面は褐色で、器壁は7.5~8.5mmで、胎土にはスコリア、小礫、白色岩片、水晶、角閃石がやや多く混入する。

838~844は、結節浮線文で横位、縦位を区画して、地文に矢羽状の集合沈線文をついた土器である。土器表面は褐色で、器壁は6~7mmと薄手で、胎土にはスコリア、石英をごくわずかに混入する。

852は、結節浮線文を口縁と斜位につけ、地文には単節Rの斜繩文を施文している土器である。土器表面は褐色で、器壁は7.5mmで、胎土には石英、水晶、小礫、角閃石をやや多く混入する。

854~864は、口縁にそって横位に、その下には縦位に結節浮線文を配し、集合沈線文で矢羽状文を施文する土器である。土器表面は褐色で、器壁は9~10.5mmで、胎

土には角閃石、石英、水晶、スコリアをやや多く混入する。

865は、結節浮線文を縦位におき、集合沈線により縦位の矢羽状文ないしX字状文が地文としてつけられている。口径は36cm、現存高32cmである。土器表面は暗褐色で、器壁は8~9mmで、胎土には白色岩片、スコリア、水晶、石英、角閃石が多く混入し、砂質の胎土である。

866は、縦位に結節浮線文をつけ、その下に指頭圧痕文列をおく土器である。地文は集合沈線による矢羽状文を口縁部には横位に、その下は縦位にえがいている。土器表面は褐色で、器壁は10.5mmで、胎土にはスコリア、小砾、石英を少し混入する。現存高33cmで、現存の胴径は42.8cmである。

#### 4) 結節浮線文で渦巻文を描く土器 867~885, 887~896

##### 図版78~80

867~885は、結節浮線文を口縁に平行に、その下に渦巻文を描いた七器である。土器表面は褐色で、器壁は8~10.5mmで、胎土には小砾、スコリア、石英、角閃石をやや多く混入する。

887~892は細かい結節浮線文で渦巻文を描いた土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は7~8.5cmであるが、889は6mm、892は9mmである。胎土には小砾、石英、角閃石を混入する。890、892の渦巻文はかなり変形して、省略化されたものである。

893は、細かい結節浮線文で渦巻文を描いた土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は7.5~9mmで、胎土には小砾、スコリア、石英をやや多く混入する。

894~896は、大きめの結節浮線文で渦巻文を描く土器で、口縁には爪形文列がつけられている。地文は集合沈線を横位に施文している。土器表面は暗褐色で、器壁は7mmで、胎土にはスコリア、小砾、角閃石、石英を多く混入する。

#### 5) 結節浮線文でレンズ状文を描く土器 897~904

##### 図版80~82

897~902、904は、結節浮線文でレンズ状文を描く土器である。下半部には縦位に集合沈線で矢羽状文が施されている。土器表面は暗褐色で、器壁は8~9.5mmで、胎土にはスコリア、小砾、水晶、石英、角閃石をやや多く混入する。

903は、結節浮線文で矢羽状文、レンズ状文をえがいた土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は6.5~8.5mmで、胎土には小砾、砂、石英を少し混入する。底径13.4cmで、現存高は24.5cm、現存の胴径は19cmである。

#### 6) ヘラ切り浮線文を用いる土器 886、905、916~920、924~928、930、931 図版79、82、83、84

886は、細かいヘラ切り浮線文で渦巻文を描く土器である。裏面は丁寧な筆で調整がおこなわれている。土器表面は暗褐色で、器壁は8mmで、胎土には小砾、石英、水晶、角閃石をやや多く混入する。

905は、ヘラ切り浮線文でレンズ状文を描く土器である。土器表面は褐色で、器壁は8~9.5mmで、胎土にはスコリア、小砾、水晶、石英、角閃石をやや多く混入する。

916~920は、口縁にヘラ切り浮線文で平行線をひき、小さな円形のボタン状貼付文を3死、2個1単位で横位につける土器である。胴部で開いた後、一端すばんだ後、口縁が開く器形である。916、917は地文に單節RLと無節Iの原体を交互に回転した羽状繩文である。918~920は地文に單節RLの原体を用いた繩文である。土器表面は暗褐色~褐色で、器壁は7.5~10.5mmで、胎土には小砾、水晶、石英、スコリアを多く混入する。

924~928、930、931は、ヘラ切り浮線文による平行線文が口縁につけられた土器である。924~926の地文は單節RL~LRの原体を交互に回転した羽状繩文である。土器表面は褐色で、器壁は6~9mmで、胎土には小砾、白色岩片、水晶、石英、黒雲母を多く混入する。927、928、930、931は單節LR~RLの原体を交互に回転した羽状繩文である。土器表面は赤褐色で、胎土には小砾、砂、石英を混入する。

#### 7) 半隆起線文で渦巻文を描く土器 906~915

##### 図版82、83

906~915は、半截竹管による半隆起線文で渦巻文を描いた土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は8~10.5mmで、胎土には小砾、白色岩片、水晶、石英、角閃石、スコリアを多く混入する。

### 8) 半隆起線文で平行線文を描く土器 921~923

図版84

921~923は、半截竹管による半隆起線文で平行線文をえがき、その下に小さなボタン状貼付文をつける土器である。土器表面は褐色で、器壁は8.5mmで、胎土には小穂、水晶、石英、スコリアを多く混入する。

### 9) 結節沈線文を用いる土器 929、932~947、955

図版84~87

929は、縦位に結節沈線文をつける土器で、地文は単節のLRの繩文である。土器表面は褐色で、器壁は8~9.5mmで、胎土には小穂、スコリア、石英、角閃石を混入する。

932~934は、山鱗から縦位に結節沈線文と短い結節浮線文をつけ、口縁には集合沈線で横位の矢羽状文を、下半部には縦位の矢羽状文と平行線文をえがいている土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は7.5~9mmで、胎土には白色岩片、砂、スコリア、石英、角閃石をやや多く混入する。

935~946は、結節沈線文で縦位、斜位に、そして文様帶下部の横位に区画をおこない、口縁には結節浮線文を施している。地文は全面に斜位または縦位に集合沈線文がつけられている。935は長さ3.4cmの棒状貼付文が縦位に2個つけられている。土器表面は赤褐色~暗褐色で、器壁は8~12.5mmで、胎土には小穂、水晶、石英、スコリア、角閃石をやや多く混入する。

947は、結節沈線文で口縁と文様帶下部に平行線文をひき、縦位の施文もおこなう土器である。地文は集合沈線で、上半部には横位に、下半部には縦位の矢羽状文がつけられている。土器表面は赤褐色で、器壁は8mmで、胎土には軽石、水晶、石英、スコリア、角閃石をやや多く混入する。口径39cm、現存高16.2cmである。

955は、結節沈線文を縦位に3列1組で配し、そのままわりを半截竹管による集合沈線文を施した土器である。口縁には爪形文がつけられている。土器表面は褐色で、器壁は10.5~11cmで、胎土には水晶、角閃石、石英、白色岩片を多く混入する。

### 10) 集合沈線文を用いる土器 948~954、956~963

図版87、88

948は、半截竹管による集合沈線でX字状文が描かれた

土器で、口縁には爪形文がつけられている。口径11~12cmの小さな土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は9mmで、胎土には小穂、水晶、石英、角閃石を混入する。

949~956は、同様な集合沈線文が縦位あるいは横位につけられた土器である。土器表面は褐色~暗褐色で、器壁は7.5~9mmで、胎土は948と同様である。951のみ水晶、石英、小穂、角閃石、黒雲母を多く混入する。口唇は、950、956には刺突文が、952~954には刻み目が入れられ、951には爪形文がつけられている。

957~960は、半截竹管による集合沈線でX字状文が施された土器である。957、958は土器表面が褐色で、器壁は6mm、胎土には石英、白色岩片、角閃石、黒雲母、スコリアをやや多く混入し、焼成がいい。

959、960は底部である。土器表面は褐色で、器壁は959が8mm、960が9.5mmで、胎土には小穂、水晶、石英、角閃石、スコリアをやや多く混入し、焼成はわるい。960の底径は16.4cm、現存高は4.8cmである。

961~963は、半截竹管による集合沈線でX字状文をえがき、その下の二器底部には横位の平行線文をひいた土器の底部である。土器表面は褐色で、器壁は8~9mmで、胎土には小穂、水晶、石英、角閃石をやや多く混入する。961は、底径13.2cm、現存高8.8cmである。962は、底径11.2cm、現存高3cmである。963は、底径6.8cm、現存高4.7cmである。

### 11) その他 964~968 図版88

964~966は、小さなボタン状貼付文がついた土器で、地文には集合沈線で横位の矢羽状文を施している。土器表面は赤褐色で、器壁は7.5~8mmで、胎土には白色岩片、石英、角閃石、黒雲母をやや多く混入する。

967~968は、ごく細かい粘土紐をはりつけ、その上に半截竹管で押引いいた文様を2本1組として口縁と縦位につけた小さな土器である。地文には集合沈線を縦位にひいている。土器表面は暗褐色で、器壁は7mmで、胎土には小穂、水晶、白色岩片、角閃石をわずかに混入する。

## 7 縄文時代前期末～中期初頭の土器

### 1) 前期末の土器 図版64、88～91

A ヘラ切り沈線でレンズ状文を描く上器 969～973  
969～973は、ヘラ切り沈線で波状口縁にそって平行線文とレンズ状文が構成される土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は7.5mmで、胎土には水晶、小砾、石英、角閃石をやや多く混入する。

### B ヘラ切り沈線で渦巻文を描く土器 974～979

974～977は、ヘラ切り沈線で渦巻文、平行線文を描く土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は7～8mmで、胎土には小砾、石英、スコリアを少し混入する。

978～979は、ヘラ切り沈線でレンズ状文、平行線文を描く土器である。土器表面は赤褐色で、器壁は7.5～8mmで、胎土には小砾、白色岩片、水晶、石英を多く混入する。

### C 三角印刻文を用いる土器 980～984、987～991

980～984、987～991は、波状口縁をもつトロフィー形の深鉢形土器である。口縁の肥厚部分を口縁文様帶とし、三角印刻文を2段に配している。器面全面に細かい結節沈線文を3～4本1単位として、平行線文、渦巻文を描いている。把手をもつ。土器表面は明赤褐色で、器壁は肥厚部14～16mm、ほかが7～8mmで、胎土には小砾、石英、水晶、砂をやや多く混入する。

### D 結節浮線文で爪形文を描く土器 996～998

996～998は、結節浮線文を口縁にそって平行に3本つけている。頸部で一端すぼまつた後、口縁が外反して立つ器形である。地文は单節L Rの斜絆文である。

土器表面は褐色で、器壁は8.5mmで、胎土には小砾、石英、角閃石、黒雲母、スコリアをやや多く混入する。

### E 平行沈線文で三角形の文様を描く土器 725、726

725、726は、平行沈線による三角形の文様を描いている突起部分である。土器表面は褐色で、器壁は8～10.5mmである。

### 2) 中期初頭の土器 図版92

#### A そうめん状の粘土紐を貼り付ける上器 1004

1004は、細いそうめん状の粘土紐を貼り付けた土器である。口縁には縦位の平行線、その下には格子目状文を構成する。その間に、半截竹管により半際縦線文で区画している。

#### B ヘラ切り沈線文を用いる土器 1005～1007

1005～1007は、半截竹管による平行沈線文で区画された間に、ヘラ切り沈線で格子目状文を構成する土器である。土器表面は褐色で、器壁は8.5mmで、胎土には白色岩片、角閃石、石英、スコリアをやや多く混入する。

#### C 平行沈線文を用いる土器 1008～1016

1008～1016は、半截竹管による横位、斜位、曲線、およびゆるやかな山形状の平行沈線文で充填される文様の土器である。土器表面は赤褐色で、器壁は8～10mmで、胎土には水晶、石英、角閃石、スコリアを多く混入する土器である。土器表面は暗褐色で、器壁は7～8mmで、胎土には小砾、石英、スコリアを少し混入する。

978～979は、ヘラ切り沈線でレンズ状文、平行線文を描く土器である。土器表面は赤褐色で、器壁は7.5～8mmで、胎土には小砾、白色岩片、水晶、石英を多く混入する。

## IV 縄文時代の石器

市道遺跡で、石器類は整理後の点数で、总数1663点が出土した。この内訳は、表8のとおりである。主なものは、以下のとおりである。

### 1 剥片石器

#### 1) 石 鐵 1~17、20、74 圖版93、97

石鐵の主なものは、1~17、20、74である。形態からは、無基のもの16点、有茎のもの1点である。無基石鐵は、基部の形状から凹基のもの、平基のもの、尖基のものに区分される。

1、3~6、8、9は、抉りが普通の凹基石鐵である。逆刺の形からは、丸いもの1、4、6、8、鈍いもの5、そして鋭いもの3、というように区分される。

2、7は、抉りが深い凹基石鐵である。逆刺（かえし）の形から、丸いもの2、鈍いもの7、である。黒曜石製の17は、熱を受けて表面が曇っている受熱石器である。

14~16は、基部が平で三角形に近い平基石鐵である。形はやや大形のものが多い。17は、16に近いもので、石鐵の未製品であると思われる。

12、20、74は、基部がとがる尖基石鐵である。11は、基部が丸い円基石鐵である。

#### 2) 石 槍 18、19 圖版93

18、19は、石槍の欠損品である。18は珪質頁岩製で、やや厚みのあるものである。

#### 3) 石 匙 21~29 圖版93

21は、平基石鐵の形をしており、先端部につまみがつけられたものである。22,23は、丸みを帯びた形で、素材の剥片剥離面を大きく残すものである。特に、22には自然面が残されている。

24、25は、三角形をした器形で、つまみが付けられた入念なつくりのものである。26は同様なものの破片である。28、29は、横長の石匙で、つまみは十分につくり出されていないものである。

27は、ラフなつくりの複型の石匙で、つまみは十分に

つくり出されていないが、刃部形状から石匙と判断した。

#### 4) スクレイパー 31~61 圖版93~96

各種のスクレイパーがえらべている。刃部が丸みを帯びたラウンドスクレイパーが比較的まとまっている。中~大型の34~38、40、46、49、59など、小基のもの31、32、42、61などがある。

剥片の側縁にあまり分厚くない刃部をもつサイドスクレイパー（瓶器）は、41、43、47、48、50~53、55、59、60などがある。

この他のものとしては、ノッチと凸刃が組み合わさる33、やや湾曲した刃部の39、小型で両面加工の刃部をもつ57がある。

#### 5) クサビ形石器 62~67、82 圖版96、97

上下両邊に小剥離痕のみられることが特徴のクサビ形石器には、大形のものと小形のものがある。大形のものとしては、67がある。4辺とも両面に剥離痕がみられるものである。

それ以外はすべて小形のものである。62、64、66は、上下の2辺に小剥離痕があるものである。63、67、68は、上下、左右の4辺に小剥離痕がみられるものである。

#### 6) ヘラ形石器 68、69 圖版96

ヘラ形石器は2点ある。

69は、自然面を残す幅広剥片を素材として、側縁は約90°の危角度の調整で、刃部は面的な選い調整剥離を加えて形成している。基部は薄くて鋭くしている。

68は、幅広剥片を素材として、両面に面的な調整で基部、側縁をつくりだしている。刃部は側方からの大きな剥離でできた縁刃を利用している。基部は両面からの加

上で薄く尖らせている。

### 7) 石錐 30、70~81 図版93、97

石錐は12点ある。両面加工で、つまみをもち、先端部を細身に尖らせたものは、70、73、78、79である。

棒状あるいは二等辺三角形のものは、30、71、74、75、77、80、81である。

剥片の一端に両側より調整加工して錐部をつくりだしたもののは、72、76である。このうちの74は、無茎石錐の可能性もある。

### 8) 石斧 83~93 図版97、98

打製石斧としたものは、83~86である。石斧としての典型的な形状をもつと思われるものは、84と86である。

84は、自然面をもつ大きな薄手の横長剥片を素材として、その縁辺からステップ・フレイキングで調整加工して斧形の形状を整えている。裏面の丸みをうまく刃部に利用しており、ごく一部には微弱な研磨が施されている。

86は、石斧未製品の破損品と思われる。

83は、やや厚手の縱長剥片を素材として、主剥離面の両側縁と背面の1側縁に面的な調整がおこなわれている。基部に打面を残し、先端部は欠損している。通常の石斧とは、側縁の加工、形状とも異なったもので、萬整加工の形は尖頭器のものに類似している。

85は、3辺からステップ・フレイキングで剥離がおこなわれたもので、欠損品ではない。加工の仕方から石斧としたが、本来の器種は不明である。

磨製石斧には、87~93がある。87は、断面が梢円形で頭部が細い棒状のもので、縄文時代前期中葉以降に一般化するとされている乳棒状磨製石斧である。研磨は全面に及んでいる。

88~93は、両側縁を研磨して石斧正面とのあいだに後をつくる定角式磨製石斧である。断面は隅丸長方形である。

88、91~93は、大形のもので、いづれも蛇紋岩製である。89、90は、小形のものである。89は蛇紋岩製である。87と90は閃綠岩製である。

## 2 装飾品 94、95 図版98

94は、大珠に似た装飾品である。全面が研磨され、側縁も丸く磨かれている。孔はあけられていない。灰白色で、緻密な石材であり、比重は2.950である。軟玉（透緑閃石？）と思われる。

95は、琰状耳飾である。1/2強を残存する破片である。円環状の平面形で、断面は扁平のものである。比重は2.737であり、軟玉（青長石？）と思われる。94、95はともに縄文時代前段のものと考えられる。

## 3 磯素材の石器

### 1) 特殊磨石 96~113 図版98~100

96~113は、特殊磨石である。細長い円盤を選んで、長軸にそった尖った縁部をすり減らして磨面をつくりだしている。完形のもの105、108のみで、他はすべて破損したものである。

石材には、砂岩が多く用いられていて、96、97、100、102、103、105、107~111、113がある。この他、安山岩が98、112、カコウ岩が101、アブライト（半カコウ岩）が104、カコウ閃綠岩が106、輝綠岩（？）が99などが用いられている。

### 2) 磨石 114~125 図版100~102

114~125は、磨石である。115~125は、いづれも扁平な円盤を選び、その平坦な2面を磨面としている。

114は、やや大きめの扁平な碟を用い、長軸にそったせまい側縁の2面を磨面としているものである。

石材は、123、124が砂岩、116が輝綠岩（？）であるほかは安山岩である。

### 3) 四石 126~135 図版102、103

126~135は、四石である。いづれも扁平な円盤を選び、

安定した平らな表裏の2面に、凹部をもつものである。

131、135～135は、凹部が各1か所であるが、それ以外のものは一面に複数の凹部を有する。

132以外は、いづれも扁平な面が磨面となっており、磨石、凹石併用の石器である。

石材はすべて安山岩である。

#### 4) 砥 石 136～144 圖版104

136～144は、砥石である。136は、有溝砥石である。方形に両取りされた素材の中に溝があり、そのすぐ近くで破損したものである。角閃石安山岩質の軽石を石材としている。

137～143は、薄い板状に加工された砥石の破片である。

138、140～144は、石英の砂粒を多く含むアルゴース質の硬い砂岩を石材としている。137は、苦鉄質凝灰岩（砂岩）である。139は、136と同じ軽石である。

144は、大きな扁平な礫を素材とし、その表裏両面に、長軸にそってやや僅んだ磨面を有するものである。形状

から磨製石斧用の砥石だと考えられる。砂岩製である。

#### 5) スタンプ状石器 145～148 圖版104、105

145～148は、スタンプ状石器である。細長い円錐を選び、その中央部で折り、折面には磨痕ができている。146は、全面に近く磨かれているが、ほかは折面を多く残している。折面に接する側縁下端には自然面に衝撃による剥離痕（打痕）が生じている。すべて砂岩製である。

#### 6) 石 盆 149～155 圖版105、106

149～155は、石皿である。154は、扁平な礫の1面に深くえぐれた磨面をもつ石皿である。砂岩製で、裏面は破損で剥がれている。

150は、角礫の3面に磨面を有する石皿である。

149、151～153は、大きな扁平な礫を用い、その1面を磨面として利用した石皿である。安山岩製である。

155は、凹みのある皿部をもつ石皿である。方形の皿部とその上端に明瞭な棱をもち、断面形が三角形状になるものである。安山岩製である。

# V 成果と課題

## 1 市道遺跡の遺物出土状況からみた土器の層位区分と遺跡の性格

市道遺跡の各グリッドごとの遺物分布図と主要な土器石器を図36～図75に示してあるが、とくに出土遺物が多くいた7グリッドについて、土器のみの時期別の断面プロット図を図76～図83に示す。これによれば、出土数の多かったグリッドでは、土器が柏原黒色火山灰層の主に中部から下部にかけての2ないし3層準に分かれて出土していることが読みとれる。

上部には、前期の土器が集中的にまとまっている。それより下位では、土器の垂直分布が前期のものほどは集中しないが、多くのものが散在する。中位には楕円文土器がならぶ層準が認められる。それより下位には、格子目文、平行線文の押型文土器、表裏縄文土器および山形文土器があつまっている。

したがって、縄文早期では楕円文土器を中心とする土器が、それ以外の早期土器から出土層位が分離でき、さらに早期と前期の土器は、明確に層位が離れていることが読みとれる。発掘地はかなりの傾斜地であり、遺物は斜面を滑り落ちて堆積したものとみられるが、このような状況の場所であっても、遺物は層位的に分離して出土していることが判明した。

図84には、多数の破片が接合している土器の接合関係を示した。これをみると、早期のもので333が7グリッド（最大で22mぐらいの範囲）、128が3グリッド（最大で10mぐらいの範囲）、168は1グリッド（最大で5mの範囲）、前期のもので622が8グリッド（最大で22mぐらい

の範囲）、669が13グリッド（最大で40mほどの範囲）、865が6グリッド（最大で15mほどの範囲）、903が4グリッド（最大で22mほどの範囲）などの分布範囲をもつている。

したがって、接合関係でみると、168のように1グリッド内に51点の破片に分かれているような集中度の高いものがある反面、20m以上の範囲に分散するものが多く存在する。その広がりも斜面の上下の方向だけでなく、横方向への分散傾向がみられる。このことは、これらの土器が出土中心部のグリッド付近で割れて破片が散らばったのでなく、もっと上の斜面上部あるいはその上の平坦面で割れたものがいくつかのブロックに分かれて斜面を滑り落ち、その過程でさらに細片に破れたことを意味している。

すなわち、市道遺跡の土器はほとんどが原位置状態のものではなく、異地性のものであることを意味している。このことから、今回発掘した市道遺跡の調整池東斜面は、「土器捨て場」であったことが推定される。本来の住居地は、斜面の上有る狭い尾根状の平坦地にあったものと考えられる。平成4年度の試掘調査でこの尾根部分の試掘をおこない、縄文時代早期～前期の遺物集中地を確認しているので、その周辺が居住の場であったものと思われる。ただし、この平坦部では、柏原黒色火山灰層がたいへん薄いために、遺構・遺物がどの程度保存されているかはわからない。

## 2 縄文時代早期押型文系土器群の様相

### 1) 文様、胎土による区分

縄文時代早期の土器資料は6,822点あり、その内訳は表のとおりである。この内、条痕文土器で494～497の4点に代表される鐵錐を多く混入する半期末の条痕文土器をのぞくほかすべては、押型文土器の時期のものである。これらの中から折岡で示した1～456、464～493、498～558の547点について、その文様と胎土を手がかりに時期

区分を検討した。

胎土で注目されるのは、第1に、複数の密接施文の山形文土器・楕円文土器と表裏縄文土器に特徴的なもので、水晶、石英、角閃石を大量に混入するものである。ここでは水晶型胎土とよぶことにする。胎土全体に1～2mmの粒状の鉱物が散らばってみえ、ほかとは際立った存在である。白色岩片、黒雲母も含まれる。実体双頭顎微鏡

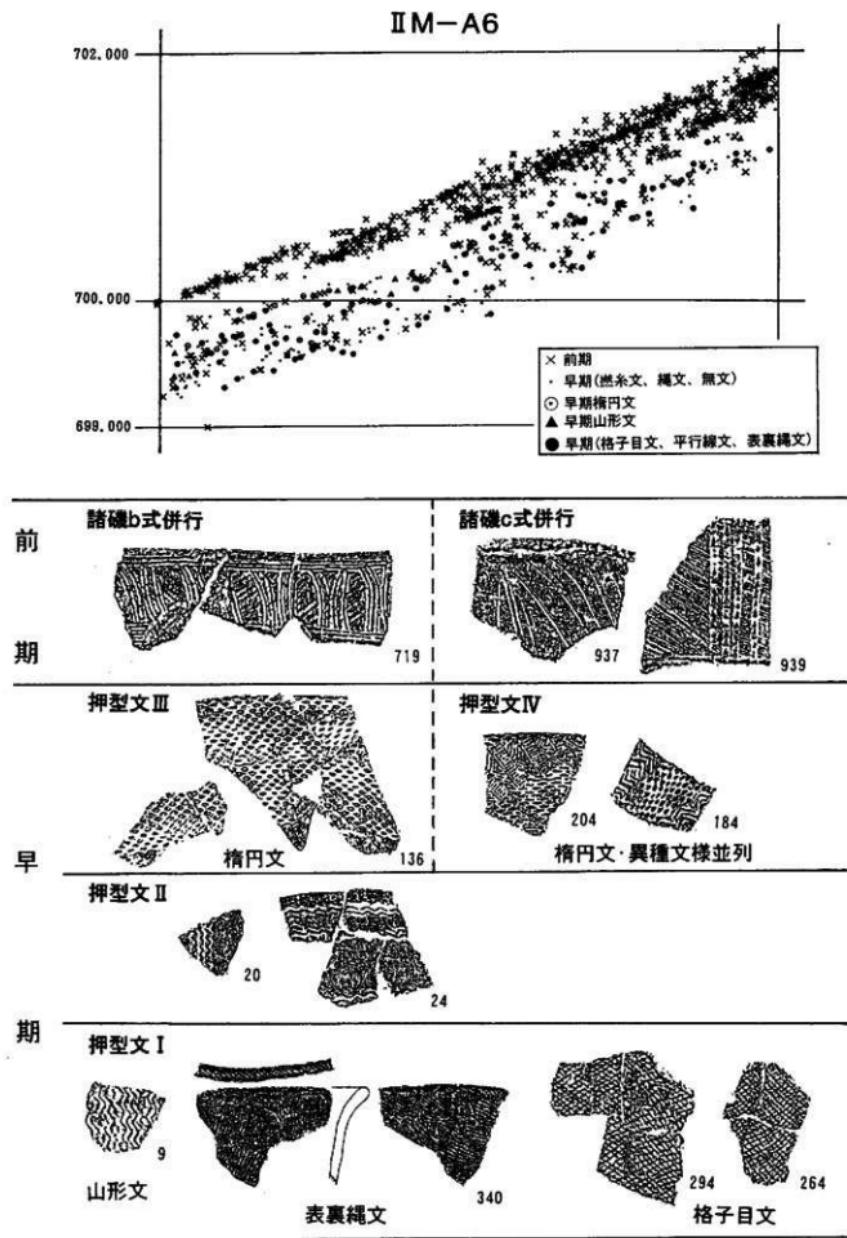


図76 市道遺跡の主なグリッドにおける上器の垂直分布(1)

II M-A7

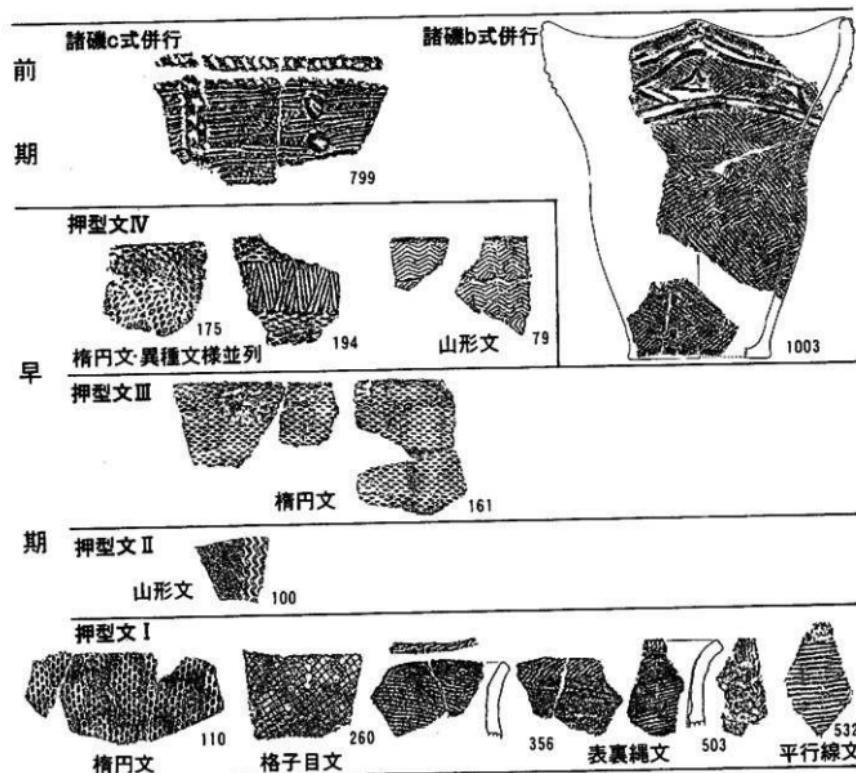
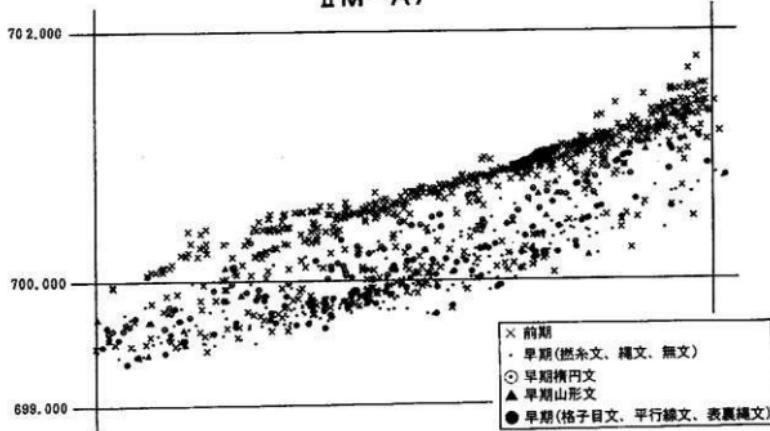


図77 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(2)

## II M-A8

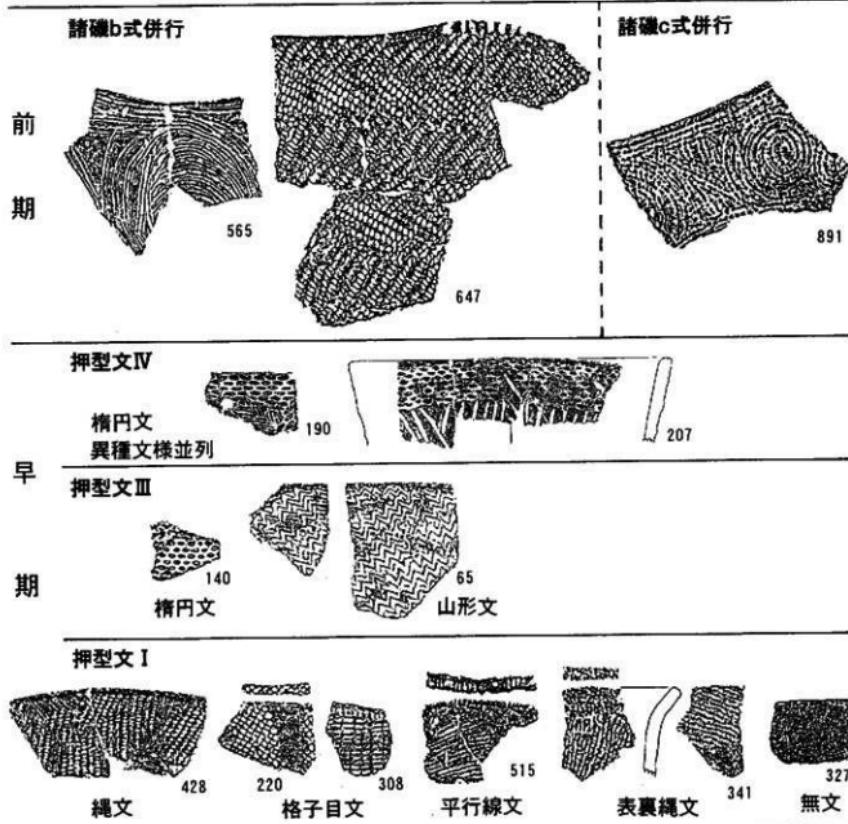
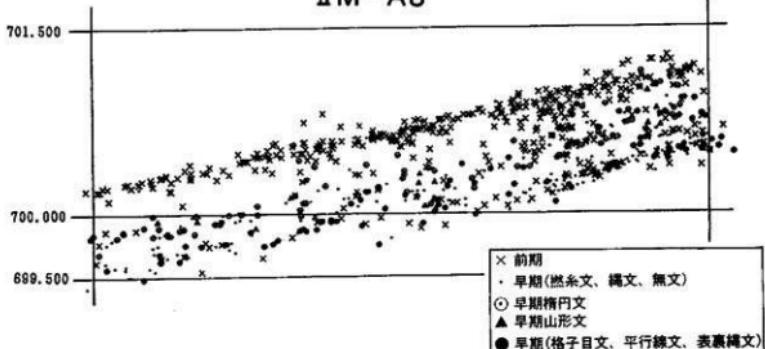


図78 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(3)

II M-B6

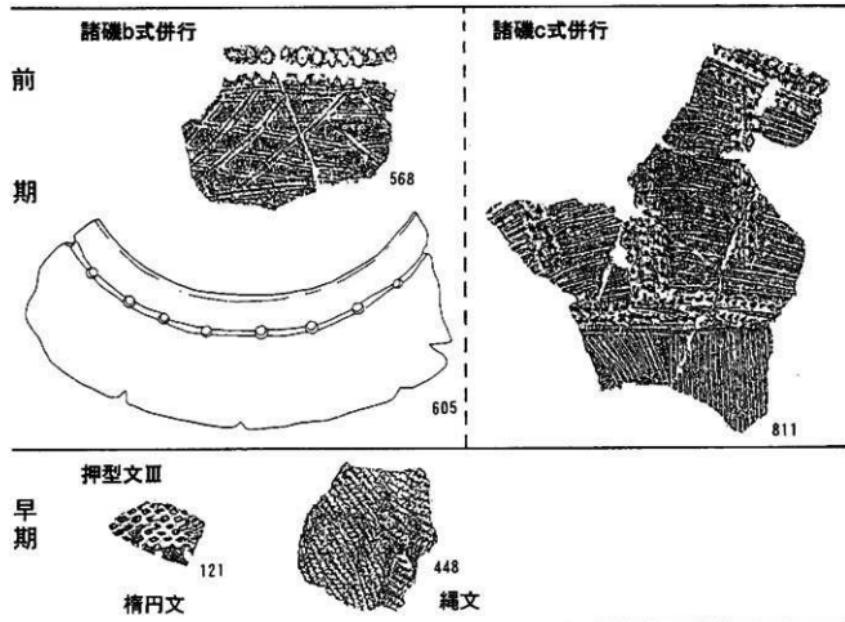
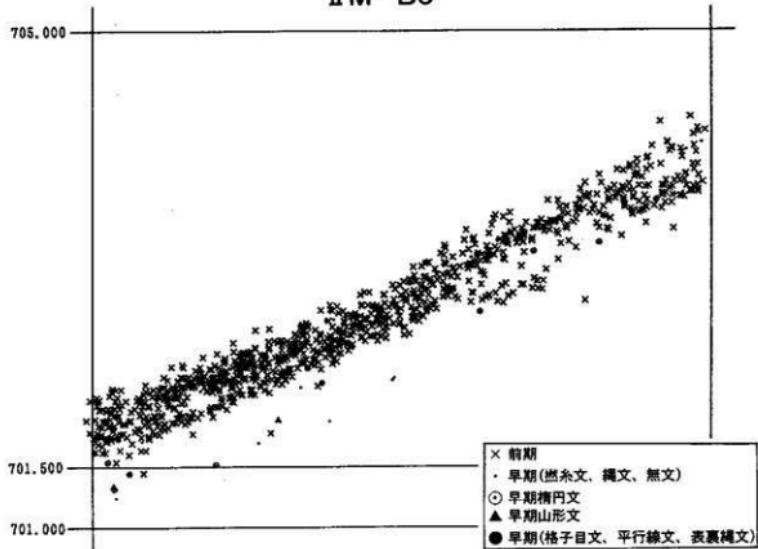


図79 市道遺跡の主なグリッドにおける上器の集積分布(4)

## II M-B7

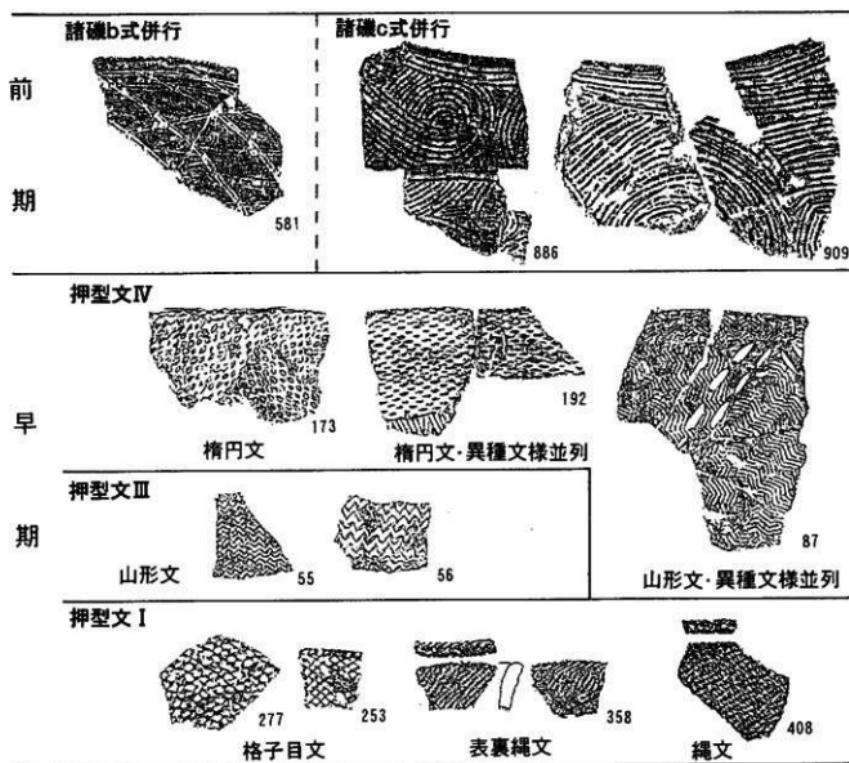
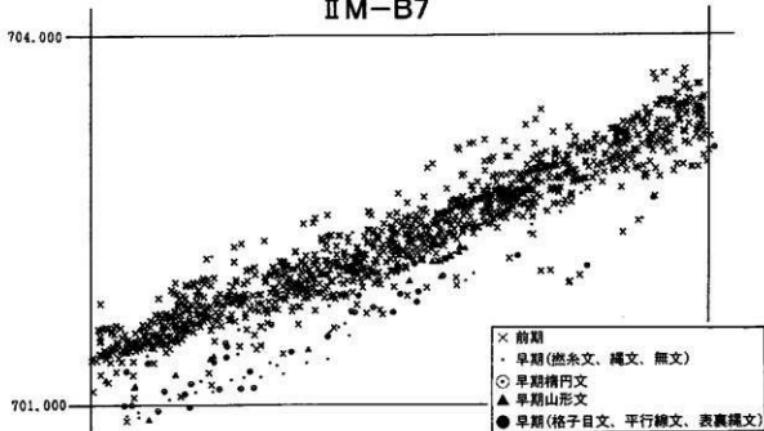


図80 市道遺跡の主なグリッドにおける上層の垂直分布(5)

II M-B8

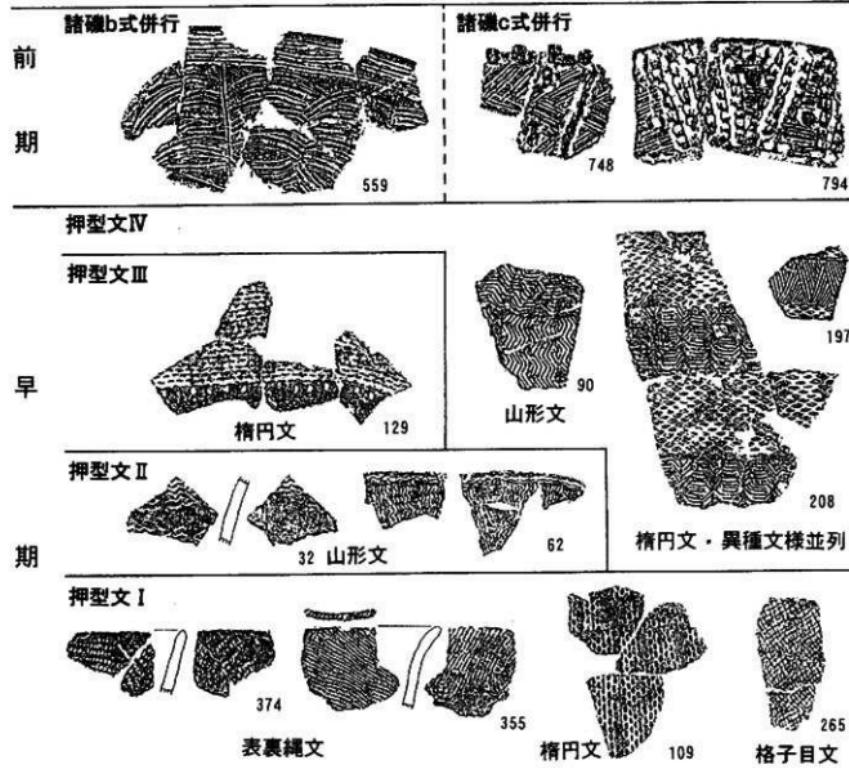
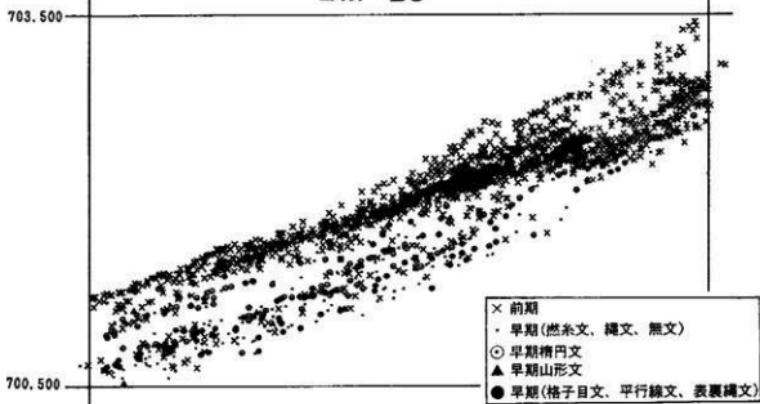
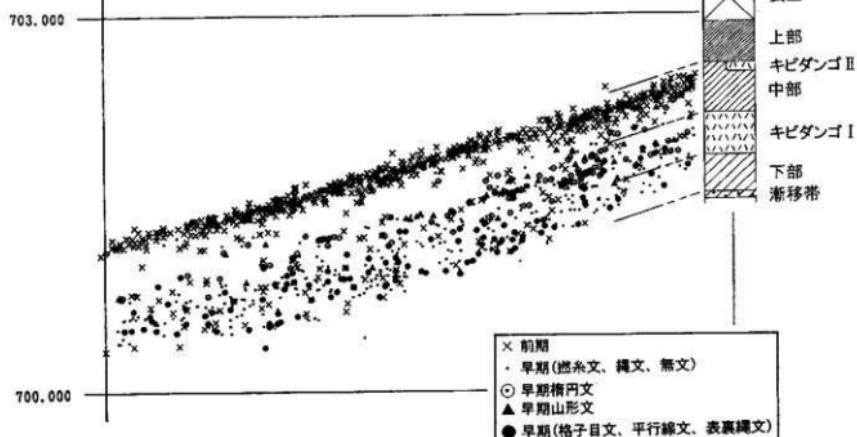
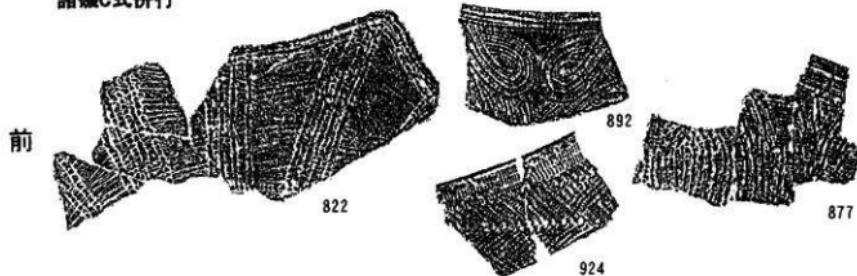


図81 市道遺跡の土なグリッドにおける土器の垂直分布(6)

II R-B1



諸磯c式併行



諸磯b式併行

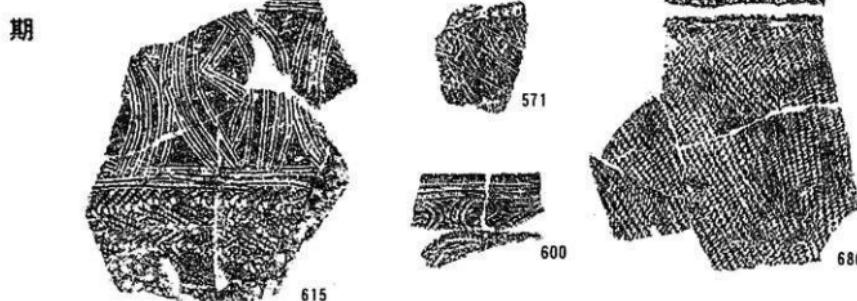
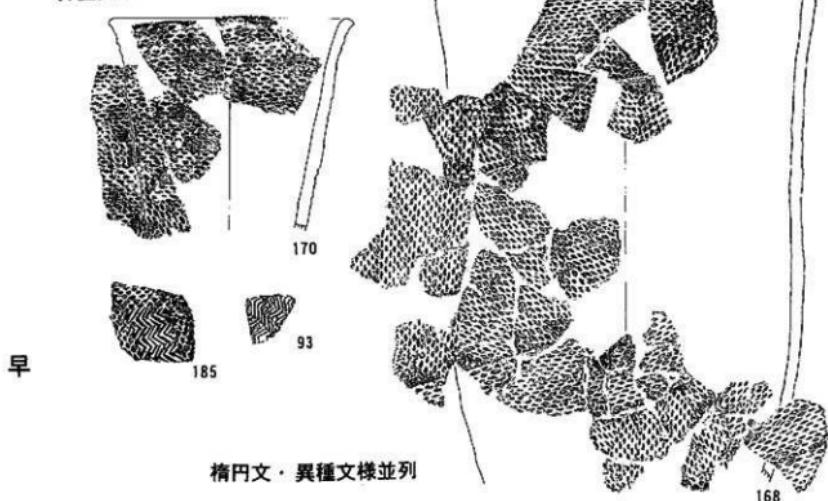
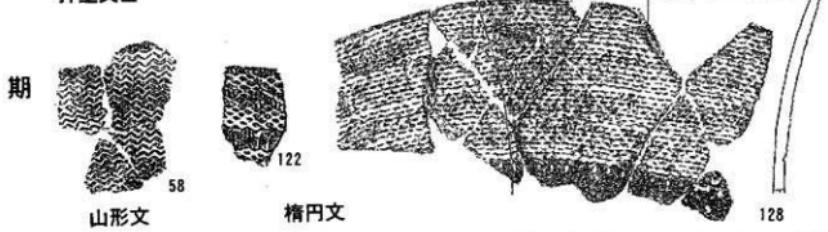


図82 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(7)

## 押型文IV



## 押型文III



## 押型文 I



図83 市道遺跡の主なグリッドにおける土器の垂直分布(8)

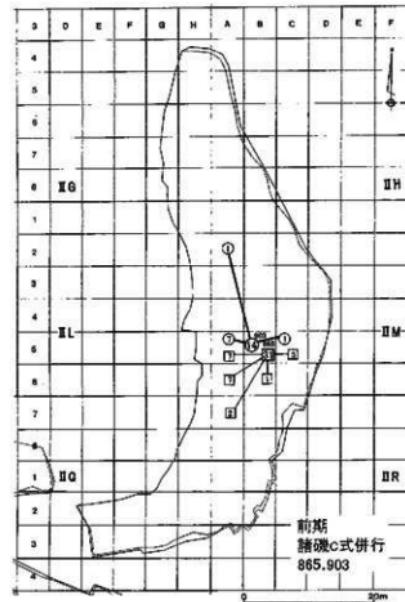
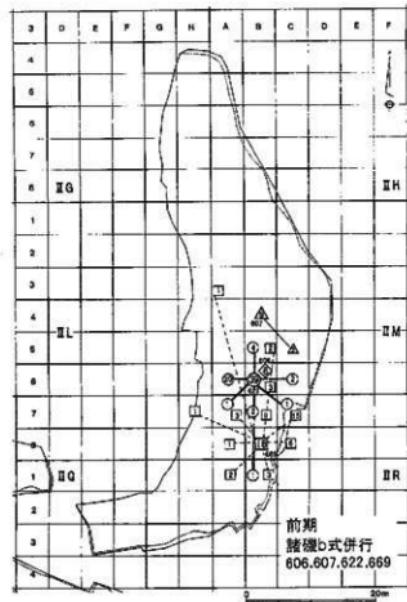
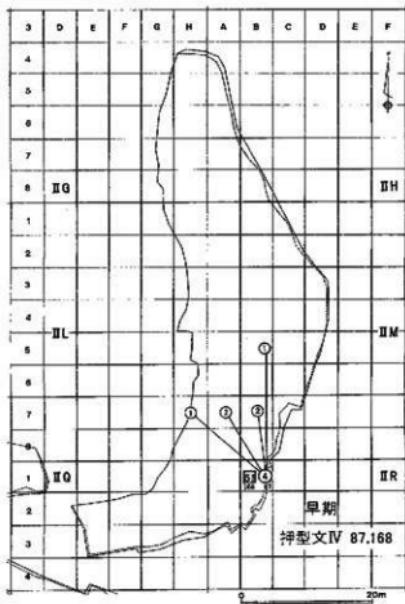
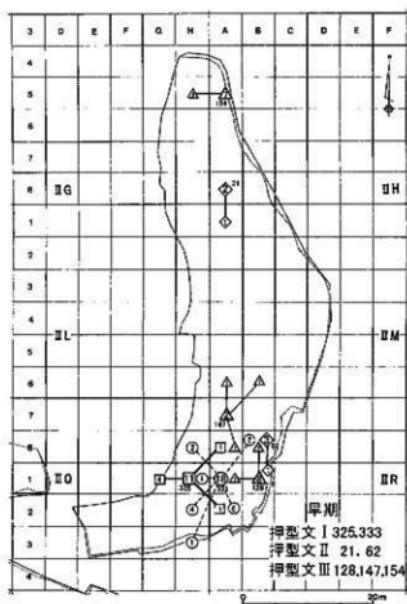


図84 土器の接合関係

ワク内の数字は破片の点数

表10 十墨胎土中の砂粒・繊維の混入量

時期	種類	種分	総数	水晶型十小レキ型	水晶型十小レキ型比率	砂粒混入量	模様混入量		繊維土器比率
							模様混入量	繊維土器比率	
I	立野式	山形十横円十市模	16	15	93.80%	3.81	0	0%	
I	格子目文土器		105	101	96.20%	3.79	0	0%	
I	平行線文土器		61	45	73.80%	3.49	0.008	1.60%	
I	撚糸文土器		22	18	81.80%	3.45	0	0%	
I	菱彌彌文土器		64	39	60.90%	3.36	0	0%	
	縹文土器		64	42	65.60%	3.25	0.16	7.80%	
	無文土器		8	5	62.50%	3.88	0.25	12.50%	
II	沢式土器	黒船混入	17	0	0%	2.76	0	0%	
II	須沢式土器		13	0	0%	2.38	0	0%	
II	II群合計		30	0	0%	2.6	0	0%	
III	細久保式土器	山形文土器	39	4	10.30%	2.56	0.28	28.20%	
III	細久保式土器	唯円文土器	56	17	30.40%	2.55	0.82	50.00%	
III	細久保式土器	合計	95	21	22.10%	2.56	0.6	41.00%	
III	平行線文土器(綱状文)		1	0	0%	1	1	100%	
IV	重複構成	山形文土器	13	0	0%	2.85	0.35	38.50%	
IV	重複構成	横円文土器	15	0	0%	2.8	0.63	53.30%	
IV	重複構成	小形	28	0	0%	2.82	0.5	45.40%	
IV	異種文様並列	山形文土器	13	0	0%	2.92	3.04	84.60%	
IV	異種文様並列	横円文土器	33	0	0%	2.09	1.02	93.90%	
IV	異種文様並列	小計	46	0	0%	2.33	1.59	91.30%	
IV	IV群合計		74	0	0%	2.51	1.18	74.30%	
IV	格子目文土器		3	0	0%	1.67	2.67	100%	
早期末	条縦文土器		5	0	0%	2.6	4	100%	
前期前	羽状縦文土器		7	0	0%	3	4	100%	

で観察すると、無色透明な水晶はそろばん玉のような白形の結晶形をしたもののがわずかと、それが壊れた貞貞形状口のみられる不定形の形のものが多く含まれる。結晶の形は、横面が小さく錐面が大きいために尖っている形である。これは、一般的な水溶液から晶出した六角柱状の低温型石英ではなく、火山灰や火山岩によく含まれる高温型石英である。

このような高温型石英を大量に混入するものは、水晶をたくさん含む火山灰を粘土にまぜて、胎土をつくっていたことが考えられる。長野県北部で高温型石英が大量に入手できる地層は、長野市の裾花凝灰岩層〔中新世後期〕(加藤慎一・赤羽真幸、1986)、豊野町川谷～三木村の水内層〔更新世前期〕(赤羽真幸ほか、1992)、三木村赤塙の北信ローム層のなかのバイオタイトローム層(QB火山灰)〔更新世中期〕(花岡邦明ほか、1985; 赤羽真幸ほか、1992)などがある。

水晶の中には表面がとけて、角が丸くなったものが高率で含まれている。このようなとけた水晶を含んでいる点や実体双眼鏡微鏡でみた鉱物の外観は、三木村赤塙のQB火山灰〔広域火山灰層のクリスタルアッシュ、大町APM〕のものによく似ている。したがって水晶型胎土に

まぜられている鉱物は、クリスタルアッシュである可能性が多い。

第2は、表裏繩文土器の一部に見られる小疊、白色岩片、石英を多く～やや多く混入するものである。この混入物自体は特別なものでないが、表裏繩文土器の中で水晶型胎土でないものでややまとまりがある胎土である。仮に、小疊型胎土としておく。

なお、小疊型胎土にも高温型石英(水晶)、石英を比較的多く含んでいるところから考へると、これらの鉱物と小疊(細疊)がまじった土をまぜている可能性がある。三木村赤塙の奈良本では、QB火山灰層が水成中にあり、そのものは細疊を多く含んでいる。したがって、小疊型胎土は、水成のQB火山灰層(クリスタルアッシュ)をまぜている可能性が考えられる。

水晶型胎土と小疊型胎土の土器の各種類ごとに占める比率を表10に示す。これによれば、山形文・横円文の継位密接施文のもので93.8%、格子目文で96.2%、撚糸文土器で81.8%、平行線文土器で73.8%、無文土器で62.5%、表裏繩文土器で60.9%、縹文土器で65.6%と、これらの種類の土器の多くは共通の胎土をもつことから、同一時期のものであることが考えられる。

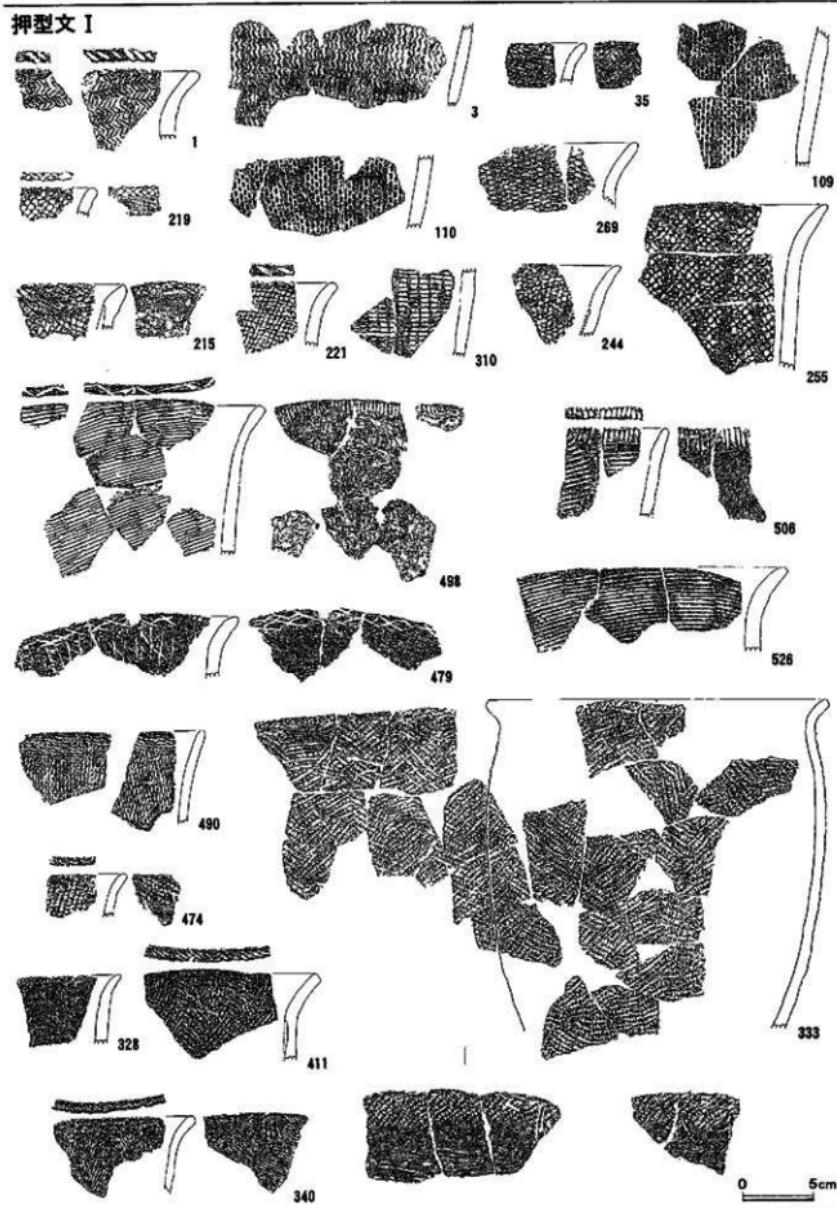
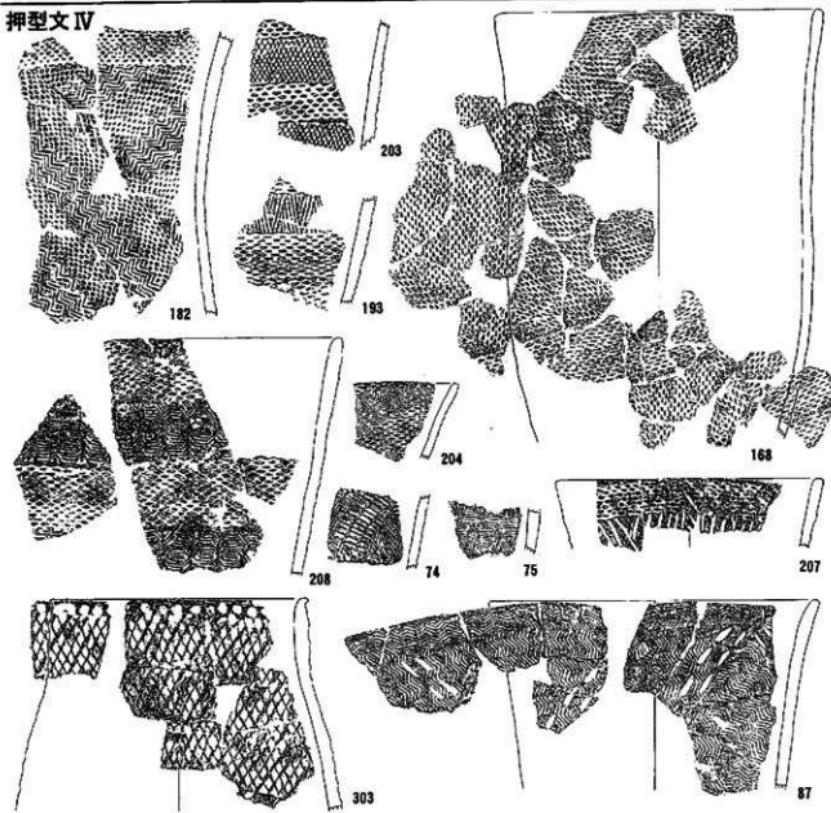
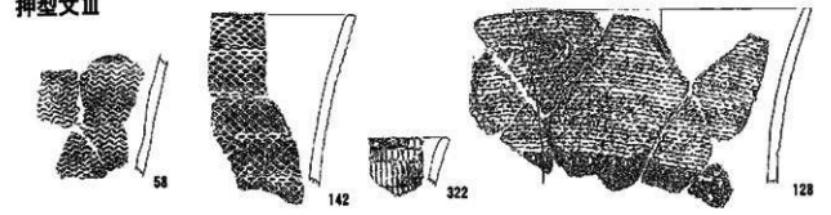


図85 市道遺跡の主な土器(1) 繩文時代早期

押型文 IV



押型文 III



押型文 II



0 5cm

図86 市道遺跡の主な土器(2) 繩文時代早期

なお、これら多くの土器胎土中に火山灰に含まれる高濃度水晶、石英などを混入していることは、これらの鉱物をほかの数ある鉱物や小礫の中から、とくに選択していることを意味している。信濃町であれば、安山岩の小礫や褐色～赤褐色のスコリアが最も一般的な砂粒であり、それらを一部に含むものの、わざわざ上述の酸性火山灰に特徴的な鉱物を選択している。このことは、現在の陶磁器の製作に際して、粘土の中に珪砂（石英）をまぜていることとも関連して、これ以外の中性ないし青鉄質の鉱物よりも石英分の多いものを選択していることは、興味深いことである。

第3に、異種文様並列の押型文土器には纖維を混入する土器が多くみられる。纖維の混入する土器の割合を、表10に示す。これによると、異種文様並列の押型文土器で91.3%、重複構成の押型文土器で46.4%という比率で、これらの多くのものは時代的により新しいものであることが考えられる。

## 2) 「立野式土器」にともなう土器群

山形文・楕円文の縦位密接施文の土器（1-9、35、107-113）は、長野県飯田市伊賀良の立野遺跡（松島透、1957）を標式とする「立野式土器」にみられる特徴である。この土器の胎土は水晶型胎土であり、表裏繩文土器、縦文土器には同時期と推定される小標型胎土のものもみられる。

①水晶型胎土と小標型胎土（砂粒を多く含む）、②口縁が著しく外反する土器、③口縁には表裏に施文される土器があること、という3つの特徴は、押型文土器でも古い要素と考えられる。これらの特徴をもつ土器には、山形文・楕円文の縦位密接施文の土器（1、3、35、109、110）、格子目文土器（219、215、221、310）、市松文土器（269）、平行線文土器（注1）（498、506、526）、網目状のものも含む撚糸文土器（474、479、490）、無文土器（328）、表裏繩文土器（333、340）、縦文土器（411）などがある。

上述の一群の土器（図8）は、立野式土器を構成するものであり、市道遺跡の押型文土器の中では最も古いものと考えられる。量的に見ても、市道遺跡の早期土器の61.2%と半数以上を占めている。胎土から見る限り、この遺跡の格子目文土器や平行線文土器はその大半が、立野式にともなうものと推定される。また、表裏繩文土器

も立野式のものに共通するものが多く、同時期のものと考えられる。

市道遺跡の立野式土器にともなう土器群を市道遺跡押型文I群とする。市道遺跡I群の土器は、立野遺跡のものと比較すると、その組成、内容がよく似ている。土器組成をみると、本来の立野式を代表する縦位密接構成の山形文土器の比率が、ほかに比べて少ないことは問題点の1つとして残される。文様の組成からみると、立野式の中でもより新しい段階のものである可能性がある。とはいって、立野式土器の分布の中心からはずれる長野県北部では小谷村林原遺跡（神村透、1999）にまとまってその存在があるが、それ以外にこの型式はほとんど知られていないかったので、立野式土器を考える上で重要な一括資料であると考えられる。

### 3) 押型文系土器群の4段階区分

市道遺跡の押型文土器は、前述のI群の土器を含めて、4つのグループに分けることができる。その区分と内容は次のとおりである。

#### 市道押型文系土器群

- I群： 押型文土器： 山形文・楕円文の縦位密接施文の土器  
格子目文土器  
市松文土器  
平行線文土器

表裏繩文土器 表面に口縁1条の施文をおこなう

撚糸文土器 織目状のものが多い

無文土器

縦文土器

- II群： 山形文の異方向帯状施文の土器（黒鉛を混入するもの）

山形文の異方向帯状施文の土器（黒鉛を混入しないもの）

山形文の横位帯状施文の土器

- III群： 山形文・楕円文土器 橫位密接施文ないし間隔が狭い帯状施文

横位1条の下に縦位密接施文する土器

- IV群： 重複構成の密接施文の土器 楕円文、山形文  
異種文様並列の押型文土器（異形押型文）  
押型文と沈線文を用いる土器

II群の土器は、I群とは胎土が異なる。黒鉛を含むものは、土器表面が灰色で、かわらのように焼きが堅く、薄手のものであり、沢式土器とされるものである。黒鉛を含まない樋沢式土器とされるものは、表面が「寧なナデ調整されて平滑になっており、薄手のものが比較的多い。胎土には水晶などの混入がそれほど多くなく、I群の水晶型ないしは小穂形の胎土をもつものはみられない。胎土からみると、I群とII群は区別できるものである。これに共通するような胎土・調整の土器は、ほかにはほとんどみられないことから、II群の資料は市道遺跡では客体的な存在だと考えられる。

立野式土器と沢式・樋沢式土器は、編年的な新旧関係にあるとされる考え方がある。市道遺跡の出土例は、胎土からは立野式と樋沢式を分離できそうであるが、樋沢式の存在が不十分なため、両者の関係をこの遺跡のみで判断することはできない。

#### 4 地質学と考古学の両面から見た沢式土器の確認

市道遺跡では、胎土に黒鉛（石墨）を混入する異方向の帶状施文の山形文土器があり、全体の文様構成には不明の点が残されるが、沢式土器と判断される破片が確認された。沢式土器は、大野政雄・佐藤達夫（1967）が岐阜県吉城郡古川町大字上気多の沢遺跡の土器をもとに提唱したものであり、現在飛騨地方では24遺跡でその存在が確認されているという（野村宗作ほか、1998）。長野県側では、岡谷市樋沢遺跡（戸沢充明・会田進、1987）、塩尻市向陽台遺跡（小林康男・会田進、1988）などにまとまって出土するほか、北相木村番原遺跡（小松慶、1976；西沢寿見、1982）、塩尻市高出遺跡（神村透、1966）、東茶遺跡（土屋横・中島英子編、2000）などに、断片的に報告されているものである。

黒鉛は、炭素からなる黒い鉱物で、鉱物名としては石墨あるいはグラファイト（graphite）と表記することが一般的である。硬度が1ときわめて軟らかいもので、鉛筆の原材料となっているもので、紙にこすると鉛筆と同じように黒色の線がかけることから、判断ができる。

石墨は、飛騨帯に分布する堆積岩起源の変成岩類の中で、花崗岩質の片麻岩（アルミニウムの角閃石黒雲母片麻岩）や結晶質石灰岩の中にしばしば含まれ、褶曲軸部や花崗岩体との接触部にあるペグマタイト（巨晶カコウ岩）・アブライト（半カコウ岩）の岩脈の周辺に濃集し

て黒鉛鉱床をつくっているという（山下昇ほか編、1988）。ペグマタイトやアブライトの岩脈は、堆積岩が広域変成作用を受けて変成岩になるときに、変成度の低い部分に濃集して片麻岩と同時に形成されたものという（野沢保、1952）。1950年代には、岐阜県北部から富山県南部の飛騨変成岩の分布域に、約20の黒鉛鉱床が知られていた。飛騨片麻岩類の分布は、山田直利ほか（1988）や野沢保ほか（1975）などの地質図で詳細に示されている。

大野・佐藤（1967）は、黒鉛がこのように産地の限られた特殊な鉱物であることから、黒鉛混入土器が交易圏の指標になることを当初より指摘していた。小杉康（1987）は、樋沢遺跡の黒鉛混入土器を沢式土器圈からの搬入としている。おなじ報告書で、上条朝宏（1987）は黒鉛混入土器の胎土にざくろ石（ガーネット）が含まれていることを報告し、「ざくろ石が岐阜県に採石されないことから、土器生産地は地元（岡谷市）に近い場所でも考えられる」という指摘をおこなっている（注2）。しかし、「ざくろ石は飛騨片麻岩の中に構成鉱物として多くのタイプで含まれるものである（小林英夫、1962；山下昇ほか編、1988）ので、上条氏の指摘はあやまりであると判断される。

今回、市道遺跡の土器を全点、実体双眼顕微鏡を用いてその胎土の地質学的な詳細な観察、記載をおこなった。観察には、非破壊で、土器表面にみられる鉱物、岩石片の鑑定をおこない、その量比を含有量の高いものから記述する方法（注3）をとった。その結果、次のような興味深い観察結果を得た。

市道遺跡の沢式土器の胎土には、3種類のタイプが確認された。

第1は、小礫、砂、石英、黒雲母、長石などの細粒の粒子が多く混入されるものであり、仮に「砂質型胎土」とする。砂質型胎土は、97~101、104~106の土器である。小礫には、大きな黒雲母、角閃石などの結晶が自形の青長石などの間隙を充たすように成長している特殊な組織を示すペグマタイト（巨晶花崗岩）、小さい石英や黒雲母などの結晶があつまつたアブライト（半花崗岩）、そして石英、角閃石、黒雲母、長石が含まれる花崗岩質の片麻岩、石墨などが含まれている。小礫（岩片）は、角礫状のものとまわりが若干でも水磨されたものの両方があるようである。基質には、上述の鉱物によって構成される砂分がたいへん多く含まれるものである。

第2は、白色の小砾を多く含み、基質には砂を含まず粘土質のものであり、仮に「粘土型胎土」としておく。粘土型胎土は、16~20、96、102、103の土器である。これらの中には、最大で1.3~4mmの白色岩片（小砾）が含まれている。その岩石は、ベグマタイト、アブライト片麻岩などである。また、1号弱の石墨も含まれている。いずれの岩片も、角礫状のものが多いようである。

第3は、胎土に黒鉛を混入するが量が少ないものである。第1・第2のものに特徴的な片麻岩、アブライト、ベグマタイト等は含まれず、黒雲母、石英、白色岩片、水晶、角閃石などが含まれているものである。15のみである。

上述の第1、第2の胎土には、石墨（黒鉛）の粒子とともに、ベグマタイト、アブライト、片麻岩といった飛騨変成帯に特有の岩石を含んでいる。このことから、市道遺跡の沢式土器は、石墨だけを産地から運搬して、消費地でそれをまぜてつくったものではなく、これらの岩石が容易に手に入る（存在する）飛騨地方で土器が生産されたものであることがわかる。図88には、飛騨片麻岩の分布と近年までに知られている黒鉛鉱床の位置、および主要な沢式土器出土地を示した。すなわち、土器胎土観察からは、市道遺跡の沢式土器は、まれもなく飛騨鉱脈からの搬入品であることが理解される。

なお、古朝則宣（1990）は、岐阜県はつや遺跡の黒鉛混入土器について、「粘土状黒鉛が河原の崖面などにおいて容易に採集でき、そのまま土器の素材として使用でき、内部に石英や長石粒を自然に含んでいたため、粘土板による焼成実験の中間所見では、黒鉛土器は“黒鉛を混入した”と言うよりは、“粘土状黒鉛を素材とした”といった方がより適切と考えられる。」という説を述べられている。沢式土器の胎土として、はじめから石墨（黒鉛）が多く含まれる粘土を採集したのか、粘土の中に黒鉛をまぜて胎土をつくったのかは、沢式土器にとって大きな問題である。

今回、古朝氏の案内で古城郡河合村天生の金山谷において、粘土状黒鉛の露頭を調査することができた。金山谷は飛騨片麻岩の中の結晶質石灰岩帶に属しており、結晶質石灰岩（大理石）の間に黒鉛が層状に入っていることが確認された。かなり良好な黒鉛の粘土であるが、中に結晶質石灰岩の小砾（岩片）が多数含まれていて、片麻岩類や石英等は確認できなかった。

ところが、市道遺跡の沢式土器の胎土には、その結晶質石灰岩は一切見られなかった。また、飛騨地方における古川町沢遺跡、清見村はつや遺跡、益田郡下呂町上ヶ平遺跡（八賀哲夫編、2000）などの沢式土器を観察させていただいたが、いずれのものも市道遺跡の第1のタイプ（砂質型）の胎土が確認され、結晶質石灰岩は含まれていなかった。そして、沢遺跡が立地する範囲に分布する船津型花崗岩、中生代の堆積岩、およびはつや遺跡が立地する範囲に分布する濃飛流紋岩類の岩片は、いずれの遺跡の土器からは1点も確認できなかった。

このことは、沢式土器の胎土観察から見る限り、沢式土器の胎土を代表する砂質型胎土のものは、飛騨地方でも飛騨片麻岩の分布域に限定された地域の胎土（粘土、混入物）を用いて生産されたものであることがわかる。そして、吉朝氏の指摘された天生の金山谷の粘土状黒鉛は使用した形跡がないことが判明した。沢遺跡、はつや遺跡は沢式土器の時期の大規模な遺跡であり、この文化を代表する遺跡であるが、土器胎土から見れば、これらの遺跡の土器はこの場所で焼かれたものでなく、より北方の河合村、宮川村を中心とした飛騨片麻岩地帯であったと推定される。沢式土器は、胎土観察から生産地の推定が可能となった。この方法は、土器の流通の研究の大きな手段となるものであるので、別の機会に方法論の詳細を記述する予定である。

なお、市道遺跡の第3のタイプの黒鉛混入量が少ないものは、はつや遺跡、上ヶ平遺跡にも確認されたが、黒鉛以外の混入物（砂粒）の組成はそれぞれ異なっており、これらの生産地については個別に検討されなければならない。

ところで、沢式土器に大量に黒鉛や飛騨片麻岩類が混入されていることをどう考えるのか、問題になるところである。黒鉛を特徴的に混入するのは他の時期にはほとんど見られないことは、沢式土器の特異性を意味する。押文土器の比較的初期に編年が考えられている立野式土器にも、同様の胎土の特徴が観察されている。すなわち、長野県南部の飯山市立野遺跡では、立野式土器の胎土に大量に黒雲母が混入されていて、これが立野式の特徴の1つとされている。今回、市道遺跡では、立野式土器およびそれと同時期と考えた押文土器や表裏繩文土器、繩文土器の胎土に火山灰由来する大量の水晶（高溫型石英）、石英などが混入されていることが確認され

### 織維土器比率

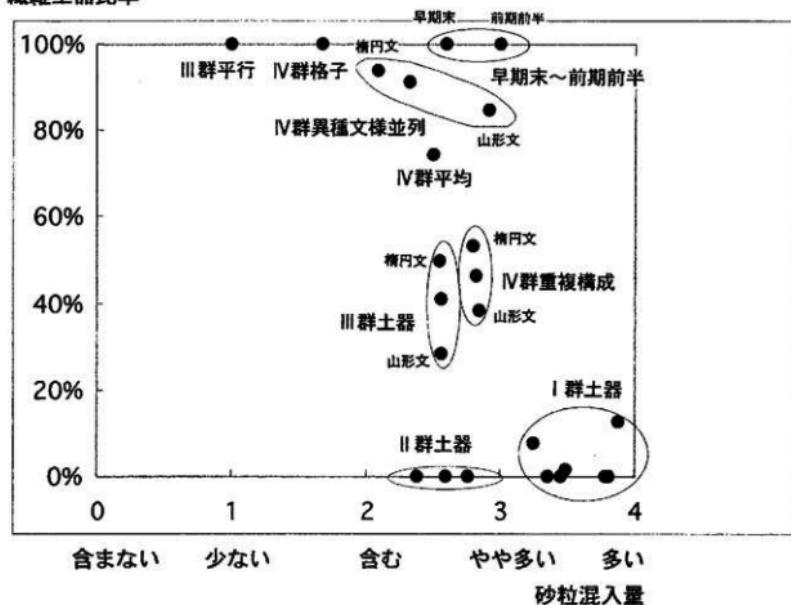


図87 残土に含まれる砂粒と組織の混入量の比較

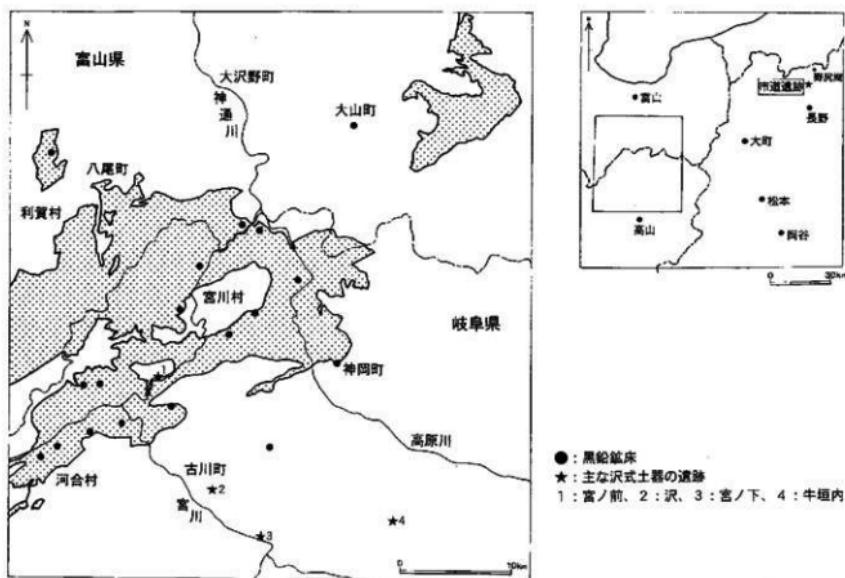


図88 飛騨片麻岩と黒鉛鉱床の分布

た。立野式土器と沢式土器は、現在、編年上は微妙にその位置づけが問題となっており、研究者によって新旧の関係がまちまちであるが、押型文土器の初期段階に流域特有の鉱物等を胎土に大量に混和することが土器製作上の手法として広まっていたとみることはできないであろうか。この問題については、このタイプの土器が多い長野県、岐阜県の押型文土器の胎土研究を今後おこなう必要があると考える。

### 5) 細久保式土器と「塞ノ神式土器」の区分

Ⅲ群の土器は、横位の密接施文が主体で、一部のものの胎土には繊維をわずかに混入するものもみられる。この点で、前述のⅠ・Ⅱ群のものとは、明らかに区別できる。また、胎土に水晶、石英などをやや多く含む土器があるが、スコリアや小砾を混入する点では、Ⅰ群に特徴的な水晶型胎土とはやや違っている。

Ⅲ群の土器は、このように積極的な特徴のない胎土であり、明確な胎土の特徴をもつⅠ群とⅣ群から分離する手順で、この群の特徴がうかび上がってくる。128のように猪円文の下に無文部をおき、そこに横位に施文原体の一端でついた刺突圧痕文をならべた土器がある。猪円文が多いこと、横位の密接施文が多いことなどあわせて、霧ヶ峰の山麓に位置する諏訪市角間新田町の細久保遺跡（松沢重生、1957）を標式遺跡とする細久保式土器の特徴をもつ。

信濃町では、大字道遺跡〔第1次調査〕（中村由克・中村教子、1994）の土器がこの時期の一括資料である。市道遺跡では、資料は95点と早期土器の約17%で、それほど多くない。

Ⅳ群の土器は、胎土に繊維を少し混入する土器である。施文はⅢ群までの規則性が薄れ、異方向、ランダムに施文がおこなわれたり、異種の文様を組み合わせる施文がおこなわれるようになる。Ⅲ群のものと比べると、繊維を混入するものの比率が41.0%から74.3%に増えている。

表10の土器胎土中の砂粒混入量と繊維混入土器の比率を見ると、Ⅲ群土器とⅣ群の重複構成の土器は、きわめて近接した値を示している。一方、Ⅳ群の異種文様並列の土器は、繊維混入率の高い早期木の土器に近づく傾向を見せている。したがって、細久保式木の特徴である横位の密接構成を主体としたⅢ群と、それがくずれたⅣ群の重複構成の土器は、土器胎土の上ではきわめて近

い位置にあるものである。今回、文様の形式分類を主眼にⅢ群から切り離したⅣ群の異種文様並列の土器と重複構成の土器は、全く同時期のものでなく、多少、時間差のあるものである可能性を残している。ただし、繊維が混入し始めてからの変化の過程は、それ以前の無繊維の時期に比べて、相対的に限られた時間であると思われる。そのため、統計的な数字上では離れて見えるが、実際の時間差はそれほど大きくなく、短い変化の時間がグラフ上では誇張されたものと考えられる。したがって、Ⅲ群とⅣ群はそれほど時間的にはへだたったものでないというのが現状だと思われる。

異種文様並列の押型文土器は、長野県北部では信濃町畠邊舟岳の塞ノ神遺跡（笛沢浩・小林学、1966）で最初に注目され、その後、「塞ノ神式土器」という名称が付けられたものである。塞ノ神遺跡の土器は、長野県の押型文土器を代表するものの1つとして知られるようになっているが、当初より細久保式土器との関係が論じられている。

市道遺跡では、Ⅳ群の土器は量的にもまとまっており、「塞ノ神式土器」との関連で、重要な資料であるといえる。細久保遺跡でも、施文方向の定まらない3類土器、異種文様並列構成の4類土器が出上している。市道遺跡のⅢ群土器とⅣ群土器が同時期のものとして細久保期におけるのか、Ⅳ群土器はⅢ群より後出のものとして区分するかは、議論の分かれることである。

今回の市道遺跡の土器で、胎土の中に繊維の混入する割合と文様がある程度、相関性が認められた。Ⅳ群の方が胎土からみればより新しい特徴をもつことを積極的に評価して、Ⅲ群土器とⅣ群土器を若干なりとも時期差のあるものとして考えたい。塞ノ神遺跡の土器は、破片資料が中心で、また点数そのものも多くなかったこと、そして、その後の再検証はおこなわれていない。このためか、「塞ノ神式土器」は細久保式土器との関係や一形式として成立するものかどうかという点について不十分な点が残されており、必ずしも多くの人に受け入れられてはいないよう感じられる（注4）。「塞ノ神式土器」に類似した土器については片岡謙（1988）が論考しており、また最近では岐阜県丹生川村西田遺跡で「塞ノ神式土器」がまとまってえられている。

市道遺跡ではこれらの点をふまえて、「塞ノ神式土器」を再検討してみて、典型的に資料がみられる市道遺跡の

IV群土器は、「塞ノ神式土器」を再定義する資料になると考えている。長野県北部から新潟県や岐阜県などでは、押型文土器の終末期に續久保式土器以降の高山寺式土器や相木式土器がそれほどみられないこともあり、續久保式土器の後を継ぐ地方的な土器形式として、「塞ノ神式土器」は存在しうる条件が集まってきたと考えたい。これに関する土器は、同じ信濃町の大道下遺跡〔4次調査; 1996年調査〕でも一括資料が出土しており、別の機会に両者を併せて、「塞ノ神式土器」の再定義について考えるこことしたい。

(注1) 平行線文土器は、一見、条痕文土器と見間違えるもので、会田進氏によって押型文土器であることをご教示いただいた。飯田市美女遺跡（馬場保之・下平博行、1998）では棒状文土器、信濃町東裏遺跡（土屋穎・中島英子編、2000）では平行線文土器、橋沢遺跡（会田進ほか、2000）では平行線文土器として報告されているものと同様の土器と考えている。

(注2) 橋沢遺跡の「黒鉛入土器」中のざくろ石の問題点については、青朝賀富（1990）、岩田修（1990）がすでに指摘している。

(注3) 土器の胎土の記載は、石器の石材と同程度に材質研究の上では重要な要素になるものと思われる。この

点で、土器の報告・記載には、中に含まれるもののが観察と記載が十分になされねばならないと考える。胎土分析は大変有効な研究方法であるが、それなりに時間と労力、さらには予算も必要となり、どの遺跡でもできるものではなく、ましてや出土品全点の分析をすることは不可能である。

今回、市道遺跡でおこなった非破壊の胎土観察法は、低倍率の双眼実体顕微鏡（ルーペでも可能）と高等学校「地学」程度の造岩鉱物・岩石の鑑定能力があれば、大筋の観察結果はだせる方法である。したがって、予算や機械がなくて土器の胎土分析ができなくても、十分な土器の胎土研究の基礎資料がえられるものである。

ただし、小さな岩片による最終的な岩石、鉱物の鑑定にあたっては、「十分な鑑定能力と地域地質に関する十分な情報を必要とすることは、いうまでもない」とある。

(注4) 塞ノ神遺跡の発掘調査を直接担当された小林学氏におうかがいしたところ、報告者である本人は「塞ノ神式」という分類を試みたことはなく、自身としてはその名称を使ったことはないとのことであった。とはいって、押型文土器の最後の一時期を代表する塞ノ神遺跡の重要性に当初より気づき、報告をされた意義は大きいと考えている。この意味で、塞ノ神遺跡の重要性を指摘された小林学氏および橋沢浩氏に敬意を表す次第である。

### 3 繩文時代前期の土器群の様相

#### 1) 諸種b式併行の土器群

前期後半の諸種b式に併行する土器が1,770点あり、このほか縄文土器が5,965点出土しており、合計で8,735点であり、土器全体に占める割合は45%である。

出土している主な土器は、次のとおりである。代表的な土器の図番号を附記する。

##### A 沈線文系の土器

1 弧線文が描かれたもの	559, 577,
2 格子目文が描かれたもの	568, 570, 586
3 押引文で爪形文が描かれたもの	590
4 木の葉文が描かれたもの	592
5 レンズ状文が描かれたもの	616, 615, 722 721, 609, 611
6 区画中に曲線文が描かれたもの	723

##### B 緑孔土器

595, 605, 606

##### C 浮線文を曲線状に貼り付けた土器

596,

##### D 指頭圧痕文や刺突による点列文が描かれた土器

1000

##### E 太い隆線を貼り付けた土器

1001

##### F 細い隆線を伴う羽状縦文土器

1003

##### G 羽状縦文土器

622, 621, 664  
623

##### H 斜縦文の土器

669, 717, 718

沈線文系の土器は、半截竹管を用いたもので、平行沈線によって各種の文様をえがいている。器形がわかる資料はとぼしいが、おおむね山線に向かって開く深鉢が多い。地文には羽状縦文・斜縦文を用いるものと、集合沈線によって梗位の文様をえがくものがある。

表 11 繩文時代前期以降の土器胎土中の砂粒と繩維の混入量

種類	砂粒混入度	繩維混入量	繩維土器比率
前期前半の土器	3	4	100%
諸磯 b 併行繩文土器	1.68	0	0
諸磯 c 併行土器	1.94	0	0
諸磯 c 併行土器	2.7	0	0
前期末の土器	2.73	0	0
中期初期の土器	3.69	0	0

この中で、A 1 弧線文、A 2 格子目文、A 5 レンズ状文、A 6 区画中に曲線文が描かれたもの、そして G 羽状繩文土器を多く伴うことは、飯山市常盤の大倉崎遺跡（高橋桂ほか、1976）の土器に共通する特徴である。大倉崎遺跡の土器は、新潟県刈羽郡刈羽村新屋敷の刈羽貝塚（宇佐美篤美ほか、1987）の刈羽式土器と諸磯 b 式土器（麻生優・白石浩之、1986；今村啓爾、1981；谷口康浩、1989）の強い影響下にあると考えられているものである（中野純、1998；百瀬新治、1993）。

大量に出土している羽状繩文や斜繩文の土器が、どの土器に伴うものかということが検討すべき点である。これらの土器には、一切、繩維が含まれていないので、諸磯期かそれ以降のものであることはまちがいない。土器の表面をみると、比較的ナデ調整がよく施されていて、混入物が少なく、器面が荒れていないという傾向がある。この視点で、ほかの土器を見てみると、諸磯 c 式併行の土器は比較的混入物が少なく、器面もよく調整されたものが多いように思われる。それに反して、諸磯 c 式併行のものは大きめの小難が含まれたり、砂分が多くたり、また器面の調整がよくないものがやや多いように感じられた。

そこで、土器胎土の中に混入物がどの程度含まれているのかを、胎土記載をもとに統計処理を試みた（表 11）。実体双頭顎微鏡と肉眼による観察でえられた混入物の量を、「含まない」0、「少ない」1、「含む（有り）」2、「やや多い」3、「多い」4という5段階に分け、それぞれを0～4に数値化し、その数値を累計し全体個数で割った数を、土器群ごとの砂粒の混入量の平均値とした。

この方法で砂粒混入度を比較すると、前期末2.73、諸磯 c 式併行2.70、諸磯 b 式併行1.94、繩文土器1.68となつた。この結果、羽状繩文・斜繩文の土器の胎土は諸磯 b

式に近いが、諸磯 c 式およびそれ以降の胎土とはかなり異なっていることが数値的にも説明される。

したがって、市道遺跡の前期の繩文のみの土器は、ほとんどが諸磯 b 式併行のものであると結論される。このことは、諸磯 c 式併行の土器には繩文がほとんど使われていないこと、また、前期末以降の資料が量的にはきわめて限られることからも支持される。

F の細い隆線を伴う羽状繩文土器（1003）は、施文の技法上は十三基式あるいは真駒式とされる土器にやや類似するものである。この点について検討したところ、土器全体の器形は、前期末にはない器形で、むしろ諸磯 b 式の時期に該当すること、器面の調整や胎土はほかの繩文施文の土器と共通性があること、そして隆線の文様が本の葉文に近いことなどから、諸磯 b 式併行のものと判断した。

縫孔土器（595、605、606）が破片数では1000点以上あり、かなり多く組成していることは、牛札村高坂の丸山遺跡（高橋桂ほか、1978）とも関連して興味深い点である。

## 2) 諸磯 c 式併行の土器群

諸磯 c 式に併行する土器は3,754点あり、土器全体に占める割合は19%である。繩文をほとんど含まないもの、有文の土器だけみれば、单一型式としてはきわだった出土量である。

出土している主な土器は、次のとおりである。代表的な土器の図番号を附記する。

### A 棒状貼付文をつける土器

#### 1 大きめの棒状貼付文

727, 759, 729, 748, 741, 743, 760

2 やや細めで長い棒状貼付文 749, 797, 806

### B 結節浮線文を用いる土器

1 直線の文様を構成するもの 823, 865

2 满巻文を描くもの 867, 891, 892

3 レンズ状文を描くもの 899, 903

### C ヘラ切り浮線文を用いる土器

905, 915

### D 半隆起線文を用いる土器

1 满巻文を描くもの 911

2 平行線文を描くもの

### E 結節沈線文を用いる土器

947, 935

### F 集合沈線文を用いる土器

諸磯b式併行

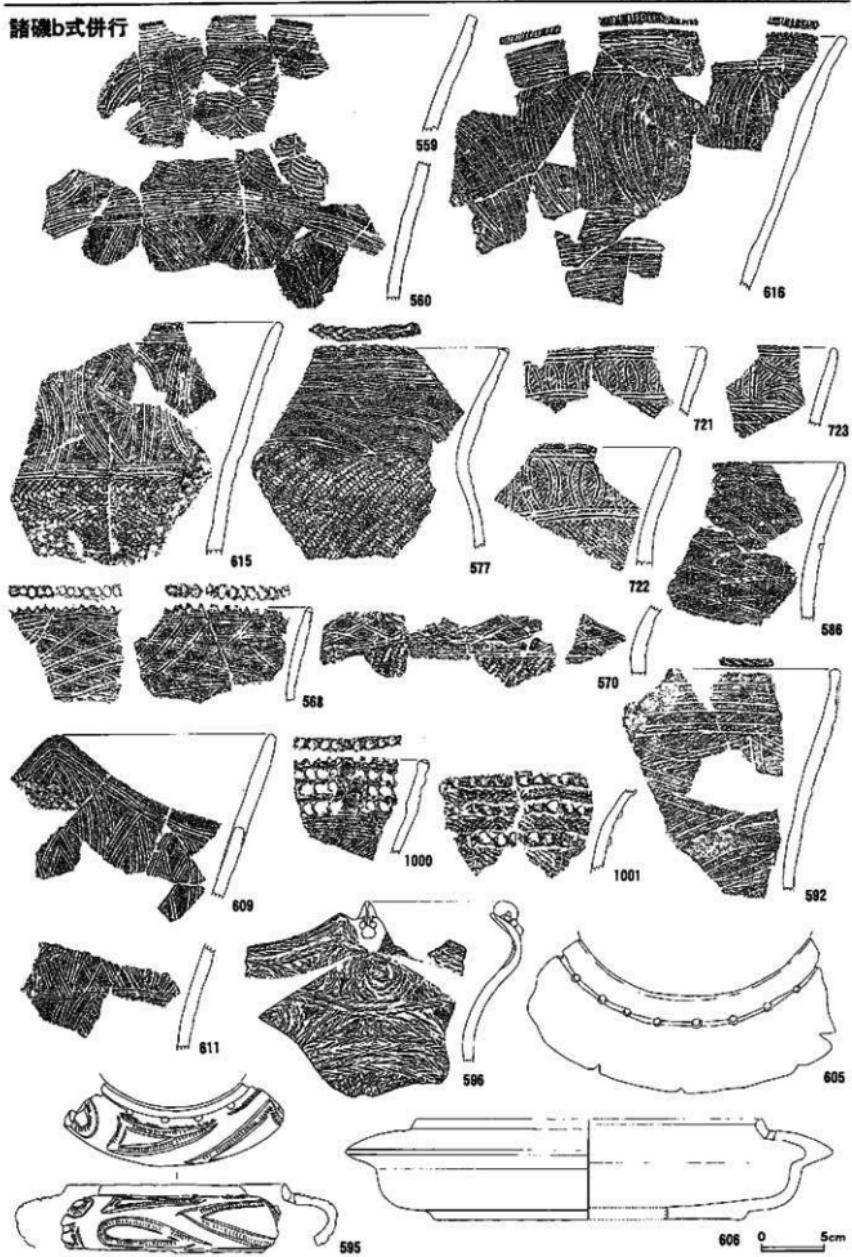


図89 市造遺跡の主な土器(3) 繩文時代前期

諸磯b式併行

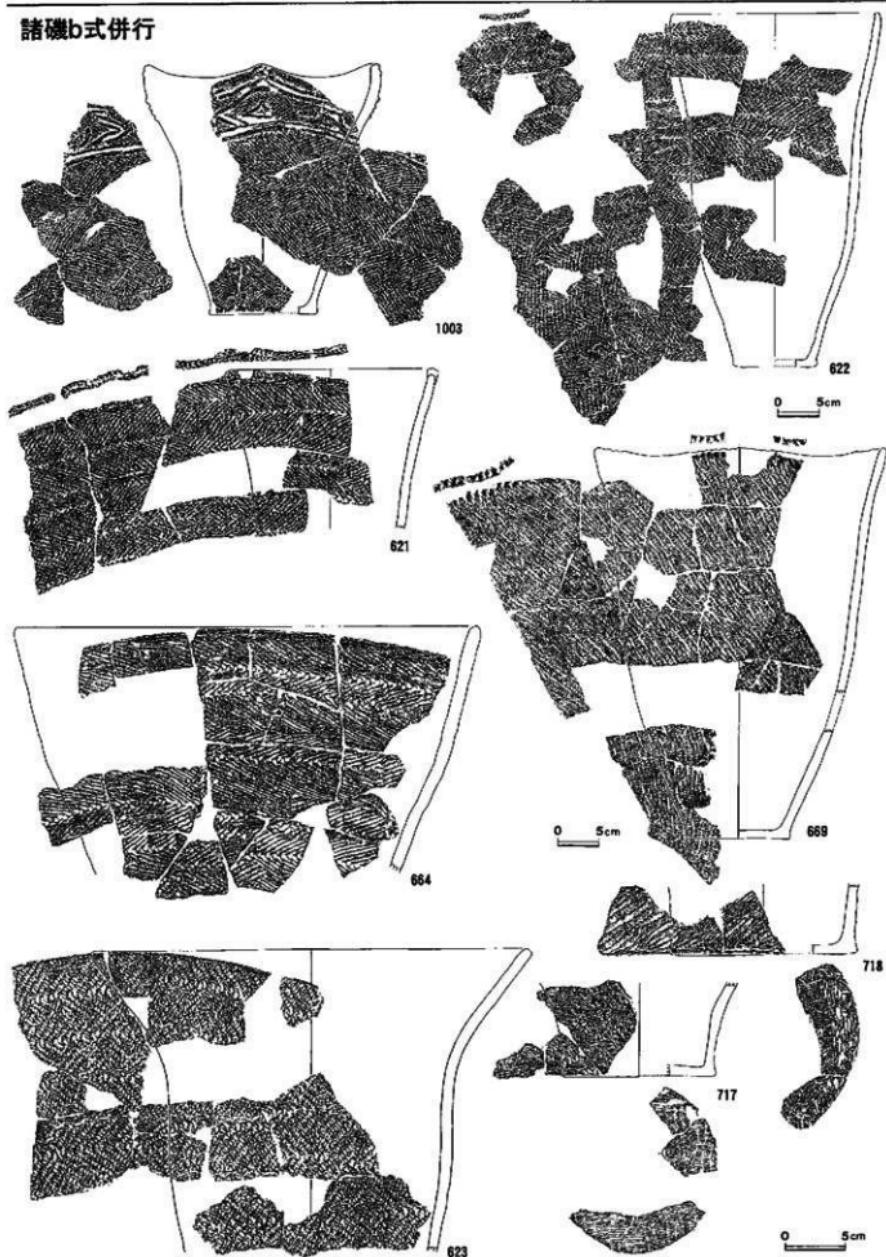


図90 市道遺跡の主な土器(4) 純文時代前期

諸磯c式併行

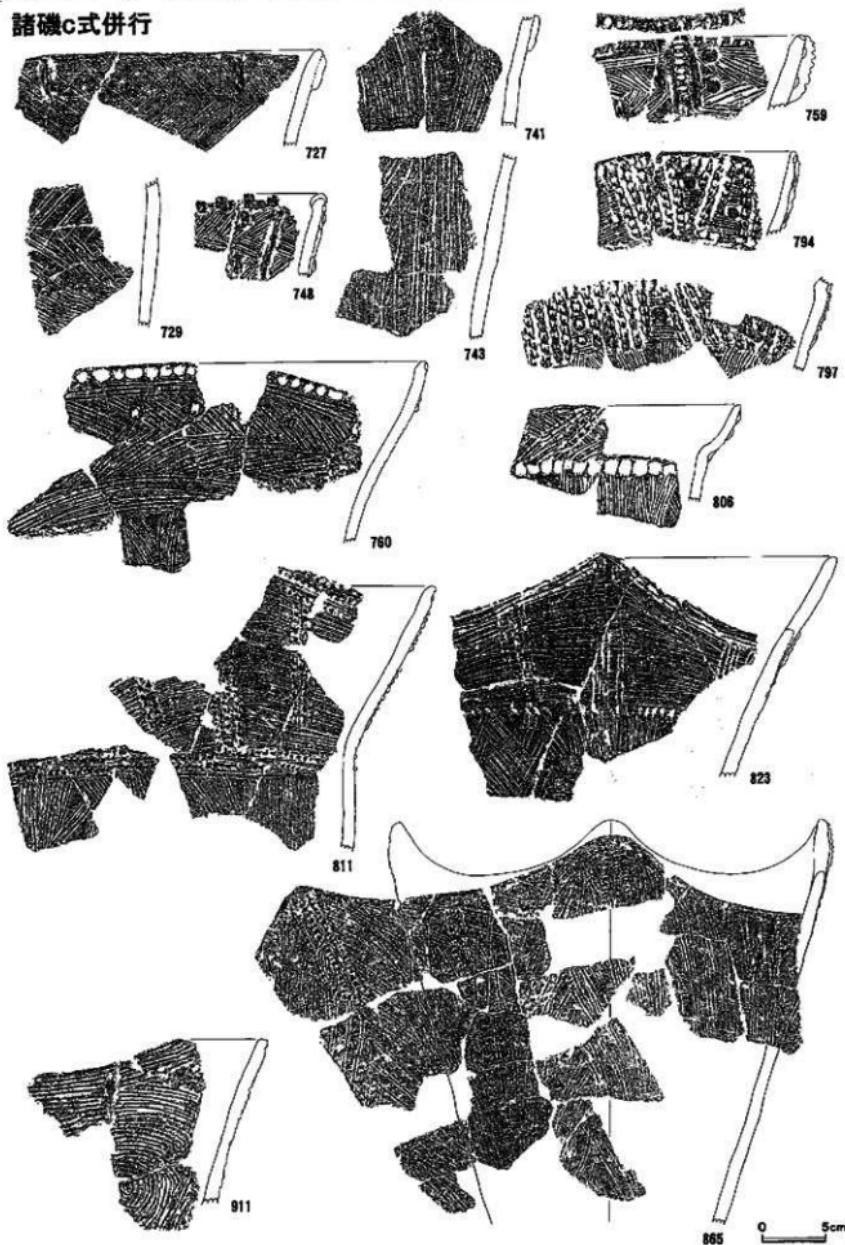
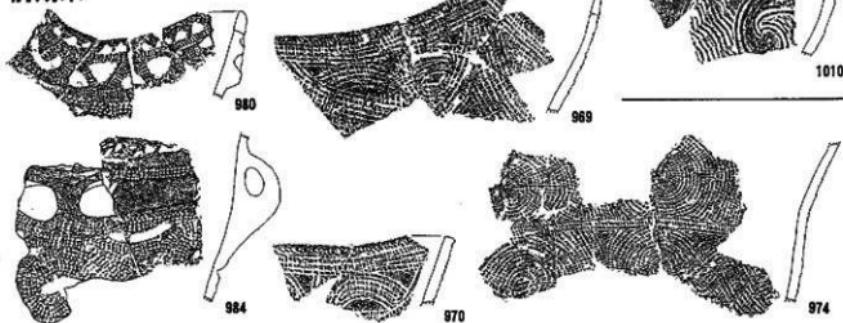


図91 市道遺跡の主な土器(5) 繩文時代前期

中期初頭



前期末



諸磯c式併行

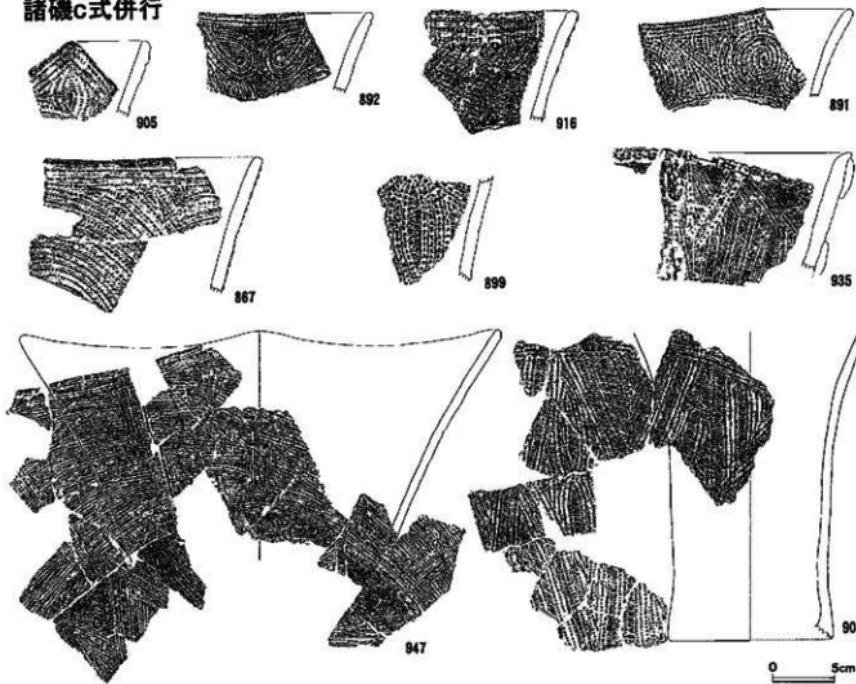


図92 市道遺跡の主な土器(6) 繩文時代前期

棒状貼付文やボタン状貼付文がつけられる土器は、諸磲c式の古段階とされるものである。大きめの棒状貼付文をつけるものは少数である。地文には、集合沈線で口縁文様番には横位に矢羽状文がつけられ、下半部には縱位に集合沈線文がひかれるものが多い。棒状貼付文が細めで長いものは、多く見られる。貼付文にはいづれも半截竹管により刺突がおこなわれている。このタイプのものは、次の結節浮線文との区別が難しく、中間的なものようである。

結節浮線文を用いたものは、この遺跡で最も多く見られるものである。諸磲c式土器の中では新段階とされるものである。このほかのヘラ切り沈線文や結節沈線文、半隆起線文などを用いたものは、量的にはそれほど多くない。

諸磲c式土器としたものは、基本的に美濃型の諸磲c式土器の新段階のものに共通するものが多い。したがって、市道遺跡の諸磲c式土器は古段階の一部と新段階にかけてのものと考えられる。この段階における市道遺跡の土器は、長野県内の土器に調和的であり、関東地方から中部地方にかけて分布の中心をもつ諸磲c式土器（麻生優・白石浩之、1986；今村啓爾、1981；谷口康浩、

1989など）の様相を色濃くもつものである。

### 3) 前期末～中期初頭の土器群

縄文時代前期末以降の土器は、きわめて限られた存在である。前期末におかれた土器は、次のものである。

A ヘラ切り沈線文を用いる土器

1 レンズ状文を描くもの

2 湧巻文を描くもの

B 三角印刻文を用いるもの

C 結節浮線文を用いるもの

D 平行沈線文を用いるもの

これらは、茅野市の晴ヶ峯遺跡を標式とする晴ヶ峯式土器（赤塙仁・三上徹也、1994）に共通するものである。

中期初頭の土器は、次のものである。

A そうめん状の粘土紐を貼り付ける土器

B ヘラ切り沈線文を用いる土器

C 平行沈線文を用いる土器

これらは、岡谷市の梨久保遺跡を標式とする梨久保式土器（伊沢充則ほか、1986）の沈線文系土器に相当するものと考えられる。

## 4 編布圧痕の存在

縄文時代前期の縄文土器の底部に編布圧痕がついた土器が確認された。717の土器で、5個の小破片が見つかっており、2つのやや大きな破片に接合したが、いづれも底部付近のみの破片である。破片は、布の上部のものが横4.4cm、縦7.4cmで、下部が横11.4cm 縦4.2cmで、底部の厚さは8.8～11.0mmである。圧痕は鮮明なもので、大変保存がよくしっかりとしたものである。なお、この土器は推定の底径が13.4cmであるが、布の欠損部をつなげた状態での保存長は、横12.8cm、縦11.9cmである。

編布は、タテ糸の間隔が5.5～7.0mm、平均6.37mmであり、ヨコ糸の間隔は5.0～5.5本/cmと、かなり細かくあまたるものである。編み方は、越後アンギンに用いられる「応用編布」ではなく、出土編布に一般的な「基礎編布」（尾関清子、1996、1997）である。渡辺誠（1984）のスダレ状圧痕、編布圧痕の計測値と比較しても、編み目は細かいものと判断される。

編布圧痕の粘土モデリングを作成し、編布の詳細な状況が観察され、尾関清子氏に鑑定していただいた。その所見にもとづいて以下の観察結果をえた。

①糸の状況をみると、タテ糸は右よりの糸で、左の糸みがある。片撚り糸を2本絡んでいる。やや細い糸を使用している。ヨコ糸は、ほとんど撚ってなく、ちょっとひねっている程度の片撚りの糸である。左右両方向がみられるので、やわらかい撚りを適当に使用していると判断される。編みながら軽く撚ったものと推定される。

②繊維はあまり撚っていないにもかかわらず、比較的そろっていることから、繊維が細いアカソではなく、麻系の繊維で、カラムシの可能性が考えられる。使用によって、大変使い慣れた、なよなよした布になっている。現在、カラムシは信濃町では少ないが、近隣の豊田村や飯山市、また小谷村などによく自生しているとのことである。縄文時代の温帯期には、現在よりも年平均気温が1.5

～2℃程度高かったとされているので、その当時には信濃町でもカラムシが多く自生していた可能性はあると思われる。

③布の上端には、縫み始めの部分がみられる。その一部ではタテ糸が切れていて、横糸がほぐれている。

④下半部の被損部には、横1.0cm、縦1.1cm、深さ1.5cmほどの凹みがあり、この部分にはもとの布の構造の上に別の糸がおかされている様子が認められた。刺し子のような間隔で、あとから切れた部分を繕ったものと思われる。タテ糸を中心に縫い、ヨコ糸で押さえている状態と思われる。

⑤下半部には、ヨコ糸が二股に交差する「応用編布」状になっている部分が観察される。この部分は、縫み間違いが生じたところと考えられる。

なお、この土器の胎上には、特徴的な鉱物等は含まれず、一般的なものである。しかし、スコリアを多く含む点は、重要な特徴といえる。なぜならば、スコリアは中性～塩基性の火山噴出物で、信濃町付近に分布するローム層中には、きわめて多く含まれるからである。市道遺跡の土器胎土を調べると、早期のものなど水晶、石英、角閃石、黒雲母などの信濃町には分布しない比較的に酸性火山灰に多い鉱物がえらんで混入されている。これは、土器の強化を図るためにとくに石英や高温型水晶が入った火山灰をさがして粘土に混ぜていたことを物語っている。

しかし、縫布圧痕のついた土器(717)は、遠くの火山灰の鉱物等を入れないで、この付近に一般的な土をそのまま使っていることがわかる。そのため、この土器は市道遺跡への搬入品ではなく、信濃町の上を使ってここで焼かれたものであると判断される。したがって、圧痕に残された縫布は信濃町にあって、生活に使われていたものと考えられる。この圧痕は、布をしいて土器づくりがおこなわれていたことを示している。目の細かいむしろ状の縫布の痕であり、大へん大事に使用されていた布であったと思われる。

市道遺跡の縫布圧痕土器は、縄文時代前期の後半諸磯式併行期(約5500～5000年前)のものであり、日本列島で縫布が使われはじめた頃の資料である。尾関清子(1996、1997)によれば、縫布の初版の使用例として、縄文時代前期の青森県三内丸山遺跡、山形県押出遺跡、福井県島浜貝塚に実物資料が、そして石川県曾福遺跡に縫布圧痕土器(前期～中期のもの)が報告されているという。市道遺跡のものは、これらにならぶものであり、たいへん重要な出土例である。

長野県では、上高井郡高山村の湯倉洞窟の縄文時代後期の2点の土器底部に、平織の圧痕が残された資料がある(湯倉洞窟遺跡発掘調査団編、2001)。現時点で、実資料にあたって布の存在が確認できたのは、市道遺跡と湯倉洞窟のものだけである。

このほか、上伊那郡箕輪町の上の林遺跡J8号住居址から縄文中期の土器底部に縫布圧痕が確認されているという(箕輪町教育委員会、1982；宮下健司、1988)。また、下高井郡野沢温泉村の蒙平遺跡に縄文時代後期の土器の底部に、スダレ状圧痕が報告されている(渡辺誠、1976)。長野市村東山手遺跡の縄文後期の土器底部に竹のようなかたい機織のスダレ状圧痕が報告されている(鶴田寅昭編、1999)。あの2遺跡のものは、縫み方は縫布と同じスダレ状のものであるが、使用する機織や間隔からみて、布とはいえないものと判断した。長野県ではこの時代の縫布圧痕はほとんど知られていないので、今のところ「長野県最古の布の証拠」といえる資料である。

中部地方をみわたすと、新潟県十日町市から津南町付近を中心とするアンギンが伝承されており(阿部恭平・竹内俊道編、1994)、この近くでは縄文時代中期以降の縫布や平織の圧痕土器はいくつか知られているが、それをさかのばる資料は市道遺跡以外には知られていない。このことから、アンギンの起源をさぐる意味からも、市道遺跡の縫布圧痕の存在はたいへん大きな意義があるといえるだろう。

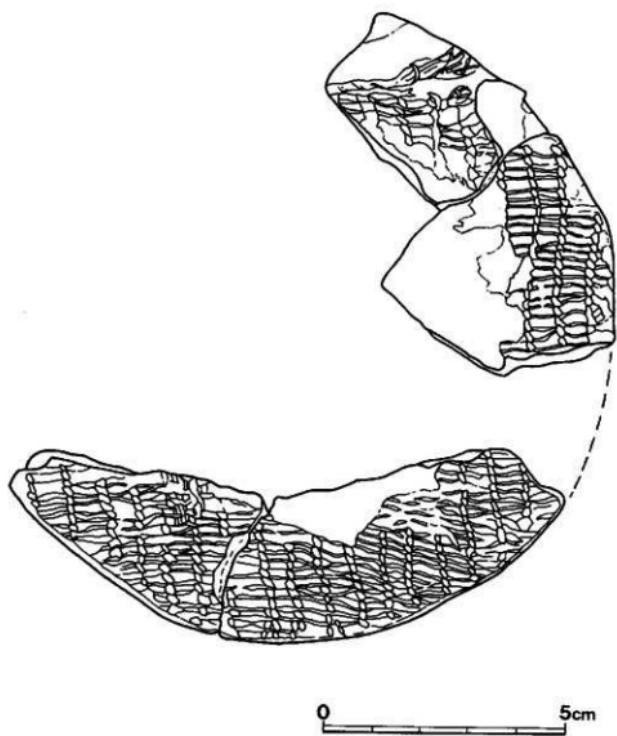
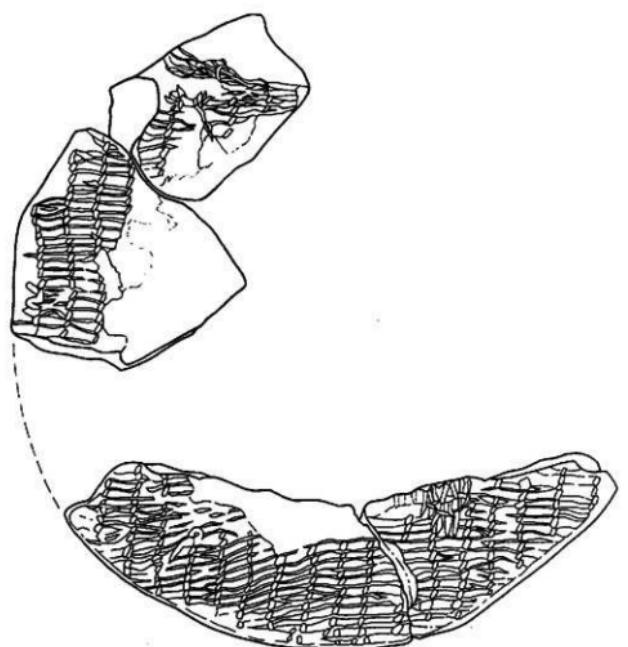
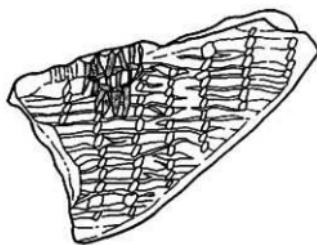


図93 編布压痕の実測図 (717)



0 5cm



0 3cm

図94 布压痕の粘土モデリングの実測図  
下は、綺い部の拡大

# VII まとめ

市道遺跡は、信濃町の南部、富上里地区の稻附に位置し、飯縄山東麓の高原状の丘陵地にあり、主要な発掘地点は標高約707～696mの山の急斜面に位置する。平成6年、7年度にわたる発掘調査では、縄文時代早期と前期に関して大きな成果がえられた。その後、整理・報告書作成に思いのほか多大な時間を要したが、ようやくその大局をまとめ、その詳細を報告できる運びとなった。以下に、本報告書で記載、考察した市道遺跡の発掘調査による成果の概要をまとめる。

## 1) 発掘調査

発掘は平成6年10月3日から平成7年10月3日の1年間にわたりて、野尻レイクサイドリゾート株式会社の委託により、信濃町教育委員会が実施した。

## 2) 出土品

発掘による出土遺物は总数28,921点で、そのうち縄文土器が24,388点、石器が1,663点であった。これらの大半は、縄文時代早期前半の押型文土器期と前期後半の諸磯b式・c式土器併行期のものであった。最も出土品が多かったのは、調整池を造成した山の斜面部分であった。

## 3) 遺物の出土状況と遺構

遺物は急斜面に大量に散在して出土した。最も集中した地点は、5m四方の25m<sup>2</sup>で3,059点の遺物があった。土器はすべて割れて破損した状態のものであった。接合する土器資料が多くあったが、それらの破片は斜面上のかなりの広範囲にはなれて散らばっていた。

また、この遺跡からは斜面下の沢ぞいの低地部で押型文土器期の集石遺構が1基検出された。また、落し穴が中心部では2基、周辺地区で12基検出されたものの、大量の遺物はこれらの遺構とは関係しないものであった。

これらの出土状況から、この遺跡は土器捨て場と判断した。本来の居住の場は、発掘地の上にある細尾根状の平坦面にあった可能性が考えられるが、そこは未発掘区である。

## 4) 縄文時代早期

縄文時代早期の土器は、押型文土器を中心とするものである。長野県で考えられている押型文土器の4時期のもの、すなわち立野式、桶沢式、細久保式、「窓ノ神式」の4群が認められたが、そのうち桶沢式とそれに先行するものは点数が少なく、客体的な存在であった。とりわけ、最も古いと思われる立野式土器、表裏縄文土器などがまとまって出土したのは、長野県北部では数少ない例である。

## 5) 早期土器の胎土の特徴

立野式に伴う土器（市道押型文土器I群）の胎土には、大量に水晶（高溫型石英）、石英などの鉱物が混入されていた。これらは、近隣の三水村でも探取可能な古い火山灰層のものと推定した。

また、沢式土器がわずかにみられたが、胎土には墨鉛（石墨）とともに飛騨片麻岩類の墨雲母片麻岩やアブライト、ベグマタイトなどの砂粒が多く含まれ、これ以外の岩石がみられなかった。このことから、市道遺跡の沢式土器の生産地は岐阜県飛騨地方でも、県北部の富山県との県境付近の産られた範囲のものであると推定した。

## 6) 細久保式土器と「窓ノ神式土器」

市道遺跡において押型文土器後半の細久保式土器と「窓ノ神式土器」は、文様構成、胎土中の繊維の混入量等から分離できた。これまで不明な点が多かった信濃町高瀬の窓ノ神遺跡出土の土器をもとに名付けられたいわゆる「窓ノ神式土器」の再検討が、今後、可能となる資料である。

## 7) 縄文時代前期

縄文時代前期の土器は、後半の諸磯b式併行、諸磯c式併行のものが中心である。諸磯b式併行の土器は、竹管文を用いた集合沈線文土器とともに櫻文のみの土器のものが多くみられた。このような土器様相は、長野県飯山市の大倉塙遺跡で確認されていた諸磯b式（関東・中部地方）と刈羽式（北陸地方）の中間的なタイプのものと考えられる。

一方、諸磲式併行の土器は、関東・中部地方の様相に一致するものがほとんどであった。これ以降の時期のものは、前期末、および中期初頭のものが若干みられたのみである。

#### 8) 石器・石製品

石器については、早期の棒状の特殊磨石、前期の块状耳飾など、時代が特定できるわずかなものを除いて、それ以外の多くのものについては所属時期の決定ができなかった。

#### 9) 繩布压痕土器

縄文時代前期諸磲式併行の縄文土器の底部に、繩布压痕が確認された。基礎アンギンによるもので、布の端部、解れた場所を捲ったところ、編み間違い場所などがみられる大変保存のいい資料である。繩布としては、青森県三内丸山遺跡、山形県押出遺跡、福井県鳥浜貝塚などに次ぐ古いもので、我が国における布の起源を探る上

で重要な資料となるものと思われる。

以上のように縄文時代の中でもごく限られた時代のみの成果ではあるが、信濃町ではこれまでこの時期の土器様相等、十分には知られていなかったので、長野県北部の早期・前期を考える際には欠かせない一群の資料になるものである。遺物の記載、分析等、不十分な点が多くあるものの、この地域の縄文土器の本格的な検討の糸口になることができれば幸いである。

今回、土器胎土からの検討等、土器に関する新しい見方を本報告書中にいくつか提示した。この研究手法が、市道遺跡のみならず、この時期の縄文土器研究に資するところがあるならば、望外の喜びである。今後、各地域の土器との比較研究をおこなって、この研究方法の有効性を実証していきたいと考えている。

最後に、発掘調査から報告書刊行までの間、多くの皆様にお世話になった。これらの方々にお礼申し上げるとともに、本書が多くの方々にご活用いただけることを願う次第である。

# 引用文献

- 会田 進（1988）中部山岳地方押型文文化の様相、長野県を中心に、帝塚山考古学研究所編、「縄文早期を考える、押型文化の諸問題」、344~374 p.
- 会田 進ほか（2000）樋沢遺跡、平成10・11年度県単道路改良事業に伴う樋沢遺跡発掘調査報告書、岡谷市教育委員会・塩尻市教育委員会、184 p.
- 赤堀 仁・三上徹也（1994）下島式・晴ヶ峯式の再提唱とその意義、縄文時代前期末葉土器群の式変化をとおして、「中部高地の考古学IV」、61~102 p.
- 赤羽貞幸・加藤研一・宮澤茂子・金原啓司（1992）中野地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）、地質調査所、106 p.
- 麻生優・白石浩之（1986）縄文土器の知識、I. 考古学シリーズ、14、東京美術、165 p.
- 阿部恭平・竹内俊道編（1994）縄文からのメッセージ、図説アンギン、十日町市博物館、63 p.
- 今村啓爾（1981）諸磯式土器、加藤晋平はか緒、「縄文文化の研究」、3、縄文土器 I、211~223 p.
- 岩田 修（1990）考古学と岩石 V. どっこいし、35号、高山考古学研究会、12 p.
- 宁佐美嘉美・寺崎祐助・田中靖（1987）刈羽貝塚遺跡、「柏崎市史資料集、考古篇」、1、9~16 p.
- 大野政雄・佐藤達夫（1967）岐阜県津濃跡調査予報、考古学雑誌、53卷、2号、98~113 p.
- 尾関清子（1996）縄文の衣、日本最古の布を復元、学生社、249 p.
- 尾関清子（1997）縄文時代の編みと織りの復元、私の試作実験の記録から、秋田県立博物館編、「企画展図録・よみがえる縄文ファッショニ、衣服、髪型、装身具」13~23 p.
- 上条朝宏（1987）第5章特論、樋沢遺跡の押型文土器の胎土分析、戸沢充則・会田進編「樋沢押型文遺跡調査研究報告書」岡谷市教育委員会、129~136 p.
- 神村 透（1966）塩尻市高出遺跡とその周辺、松本諱防地区新産業都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告、
- 神村 透（1999）長野県北安曇郡小谷村林頭遺跡、押型土器の住居址、小谷村教育委員会、72 p.
- 神村 透（松島 透）（1957）長野県立野遺跡の捺型土器、石器時代、4.
- 片岡 雄（1988）異形押型文土器について、京都文化博物館（仮称）研究紀要、第1集、97~119 p.
- 加藤研一・赤羽貞幸（1986）長野地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）、地質調査所、120 p.
- 小林英夫（1962）飛脚片麻岩類、「飛脚山地の地質研究」、14~32 p.
- 小林康男・会田進ほか（1988）第3節、向陽台遺跡、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、279~494 p. 塩尻市教育委員会。
- 小杉 康（1987）第5章、樋沢遺跡押型文土器群の研究、戸沢充則・会田進編「樋沢押型文遺跡調査研究報告書」岡谷市教育委員会、79~128 p.
- 小松 康（1976）柄巻岩陰遺跡の押型文土器、長野県考古学会誌、27、6~15 p.
- 佐沢 浩・小林 卓（1966）長野県上水内郡信濃町案ノ神遺跡出土の押型文土器、信濃、18卷、4号、265~272 p.
- 高橋桂・中島庄一・金井正三（1976）北信濃大倉崎遺跡調査報告、信濃、28卷、4号、331~350 p.
- 高橋桂ほか編（1978）牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書、牟礼村教育委員会、71 p.
- 谷口和人編（1997）西田遺跡、丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）埋蔵文化財発掘調査報告書、岐阜県文化財保護センター。
- 谷口康浩（1989）諸磯式土器様式、小林進雄編、「縄文土器大観、I. 草創期・早期・前期」、小学館、326~328 p.
- 土屋積・中島英子編（2000）上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書、16、信濃町内その2、星光山莊 A・星光山莊 B・西岡 A・貫ノ木・上ノ原・大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平 B・口向林 A・口向林 B・七ツ栗・普光山、縄文時代～近世、長野県埋蔵文化財センター。
- 鶴田典昭編（1999）村東山手遺跡、上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 8、長野県埋蔵文化財センター、267 p.
- 寺崎祐助（1999）新潟県における縄文時代前期の土器、その標識資料と編年、谷藤保彦・間根慎二編「縄文土器論集、縄文セミナー10周年記念論文集」、45~78 p.

- 戸沢充則ほか(1986)梨久保遺跡、中部山岳地の縄文時代集落址。岡谷市教育委員会、990p.
- 戸沢充則・会田進編(1987)橘沢押型文遺跡調査研究報告書。岡谷市教育委員会、216P.
- 中村由克・中村敦子(1994)丸谷地遺跡・大道下遺跡発掘調査報告書。平安時代住居址・押型文土器の遺跡。信濃町教育委員会、78p.
- 中野 純(1998)北陸地方における縄文時代前期後葉の土器様相(上), (下)。柏崎市立博物館館報、(上)11号、69~94p. (下)12号、87~111p.
- 西沢寿見(1982)柳原岩陰遺跡、「長野県史、考古資料編、主要遺跡(北・東信)」、559~584p.
- 野沢 保(1952)飛驒の黒鉛鉛床の形成について。花崗岩化作用による成因的考察。地質調査所月報、3巻、305~311p.
- 野沢 保・河合清雄・河合正虎(1975)飛驒古川地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1図幅)、地質調査所、79 p
- 野村宗作ほか(1998)牛垣内遺跡、丹生川ダム水没地区(五味原遺跡群)埋蔵文化財発掘調査報告書。岐阜県文化財保護センター。
- 八賀哲夫編(2000)上ヶ平遺跡I。岐阜県文化財保護センター調査報告書、62、岐阜県文化財保護センター、91 p
- 花岡邦明・豊野層固体研究グループ(1985)長野盆地北部における中部更新統。日本第四紀学会講演要旨集、15、104~105p.
- 馬場保之・下平博行(1998)美女遺跡、飯田市教育委員会。
- 松沢直生(1957)綿久保遺跡の押型文土器。石器時代、4.
- 箕輪町教育委員会(1982)上の林遺跡(第1次・第2次)緊急発掘調査報告書。箕輪町教育委員会。
- 宮下健司(1988)木製品・竹製品・皮製品・編布・編物。「長野県史、考古資料編、遺構・遺物」、418p.
- 百瀬新治(1993)長野県内の諸鏡b式土器、新資料の整理と編年の検討。長野県埋蔵文化財センター紀要、2, 62~75 p.
- 山下昇ほか編(1988)日本の地質5、中部地方II。共立出版、310 p.
- 山田直利・野沢 保・原山 智・滝沢文教・加藤頼一編(1988)200,000地質図 高山、地質調査所。
- 湯倉洞窟遺跡発掘調査団(関孝一ほか)編(2001)湯倉洞窟、長野県上高井郡高山村湯倉洞窟遺跡調査報告。高山村教育委員会、487 p
- 吉朝則富(1990)はつや遺跡、岐阜県大野郡清見村はつや遺跡発掘調査報告書。清見村教育委員会、134 p
- 渡辺 誠(1976)スダレ状圧痕の研究。物質文化、26、1~23p.
- 渡辺 誠(1984)第5章、昔国の生活文化と縄文文化の伝統、「津南町史、資料編、下巻」847~872p.

## SUMMARY

The Ichimichi site is located at Ichimichi, Fujisato (Ooi), Shinano-machi, in the northern end of Nagano prefecture, Central Japan. It is situated in lat.  $36^{\circ} 45' N.$ , long.  $138^{\circ} 12' E.$ , and is 696 to 707 meters above sea level. The site is on the western steep slope of a small mountain. The excavation was carried out from October 3, 1994 to October 3, 1995, by the Board of Education of Shinano Town, prior to the construction of the Shinano Golf Club. The total excavation area is about 3,000 square meters.

The Late Quaternary sediments are divided into 5 formations as follows; Pumice flow deposite (from Volcano Iizuna-yama ), Shinano-machi Loam Formation, Kamiyama Loam Formation, Nojiri Loam Formation, and Kashiwabara Black Ash Formation, in ascending order.

The remains totaled 28,921 were excavated from the cultural layer in the Kashiwabara Black Ash Formation, Holocene. There were 24,388 pieces of Jomon potteries, 1,663 pieces of lithic artifacts, and 2,870 pieces of pebbles and others.

Most of artifacts from the Ichimichi site belong to the Earliest Jomon Period and the Early Jomon Period. The results of the excavation are as follows.

### 1. Earliest Jomon Period ( about 8,000-7,500 y.B.P.)

Among 6,814 fragments of potteries found, most of them belong to the early half of the Earliest Jomon period. "Oshigata-mon pottery" (Pottery decorated with dowel-impressed patterns) can be divided into 4 groups; Tatsuno type, Hizawa type, Hosokubo type, and Sainokami type.

In particular, Tatsuno type potteries are abundant, consisting of a zigzag pattern, a lattice pattern, a parallel lines pattern, and "Hyori-jomon pottery" (pottery with cord-marking on both internal and external walls). And, this group is characterized by containing much crystals of high temperature quartz in the prepared clay of the potteries.

There also exists a few Sawa type potteries, being contemporary with the Hizawa type. It is made clear that these types pottery were transported from the Hida district in Gifu prefecture, judging by the grains of graphite and gneiss included in the prepared clay of the potteries.

There is one set of arranged cobbles, and 14 pit traps. But most remains have few relations with these features.

### 2 . Early Jomon period ( about 5,500-5,000 y. B.P.)

Most of potteries of this period belong to the late half of the Early Jomon, consisting of 10,563 fragments of Moroiso b type vessels and of 3,754 fragments of Moroiso c type. The former are characterized by the compromised type with those of the Kanto-Chubu region and the Hokuriku region.

The variety of lithic tools includes arrowheads, scrapers, tanged stone scrapers, piece esquillee, stone drills, polished stone axes, chipped stone axes, polishing stones, whetstones, and a slit stone earring.

The impression of Angin ( a type of cloth made of twisted weave) left on the base of pottery is a very important finding, because it is one of the oldest pieces of clothing in Japan.

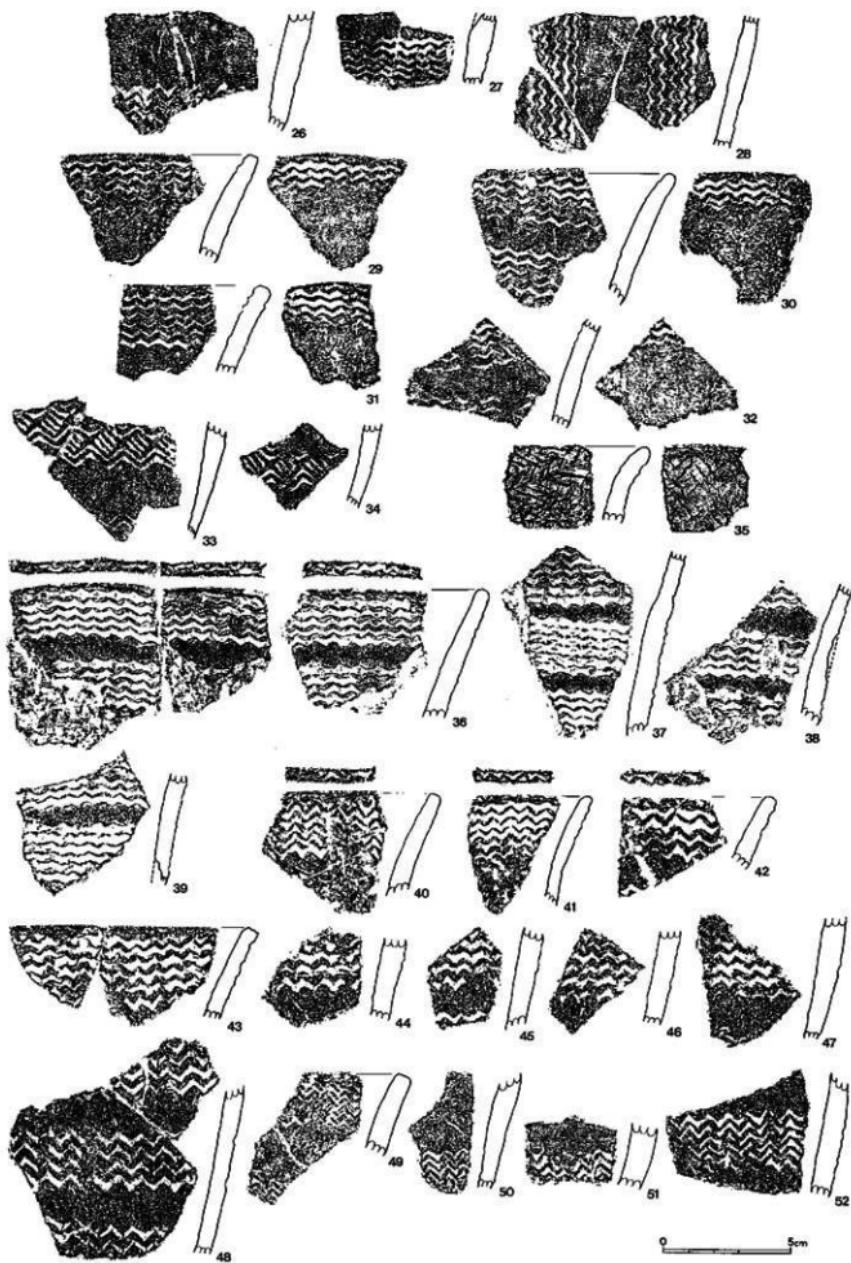
Therefore, the Ichimichi site must be one of the most important sites in Central Japan, although it is a scrap heap of pottery.

(NAKAMURA Yoshikatsu)

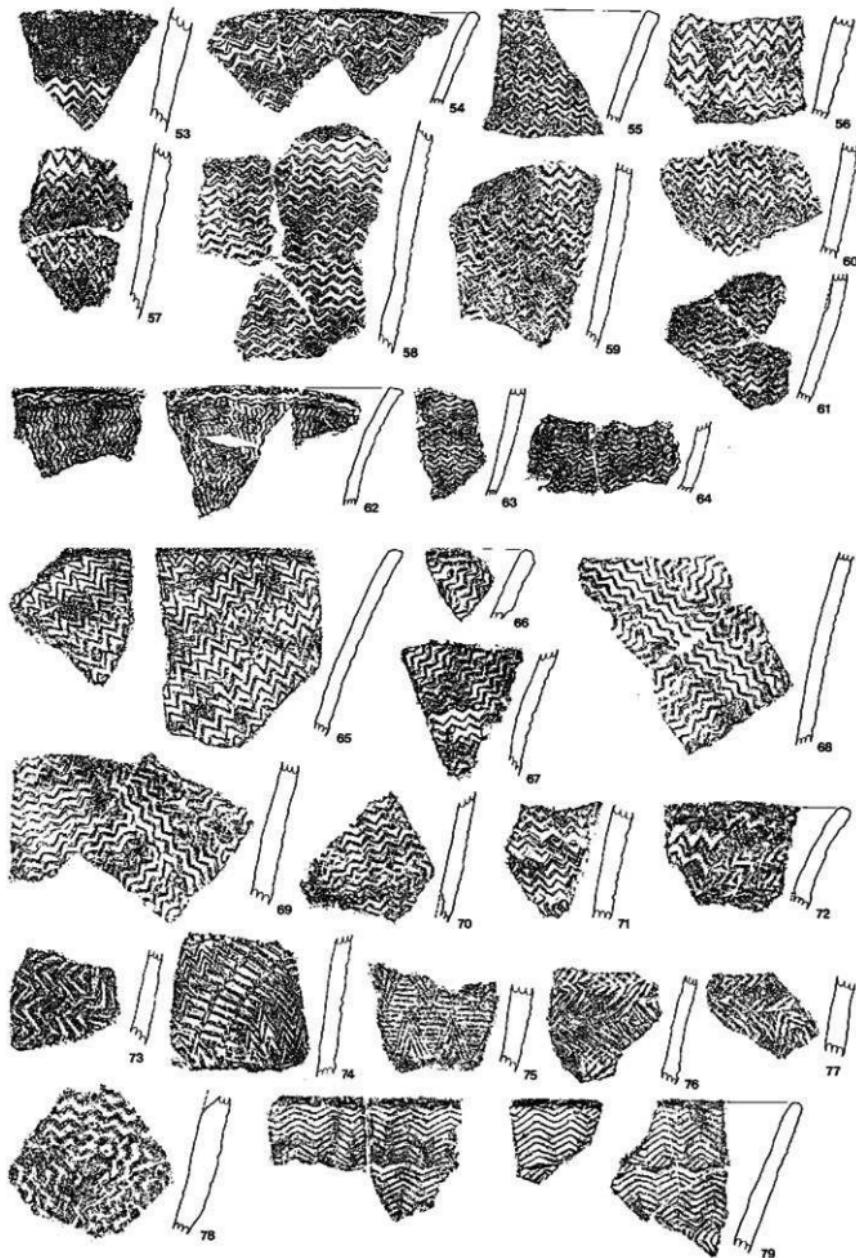
# 図 版



図版1 市道遺跡の縦文土器(1)

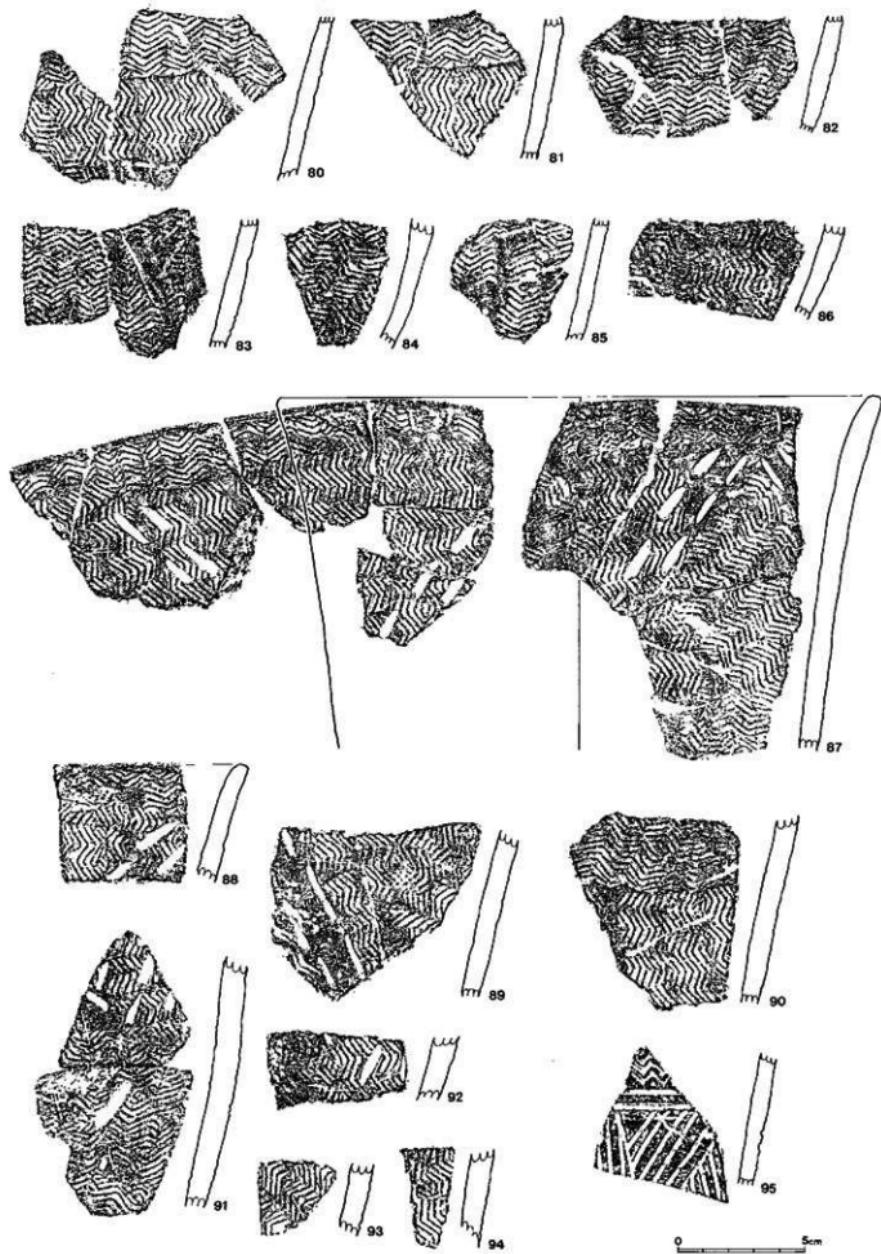


図版2 市道遺跡の縄文土器(2)

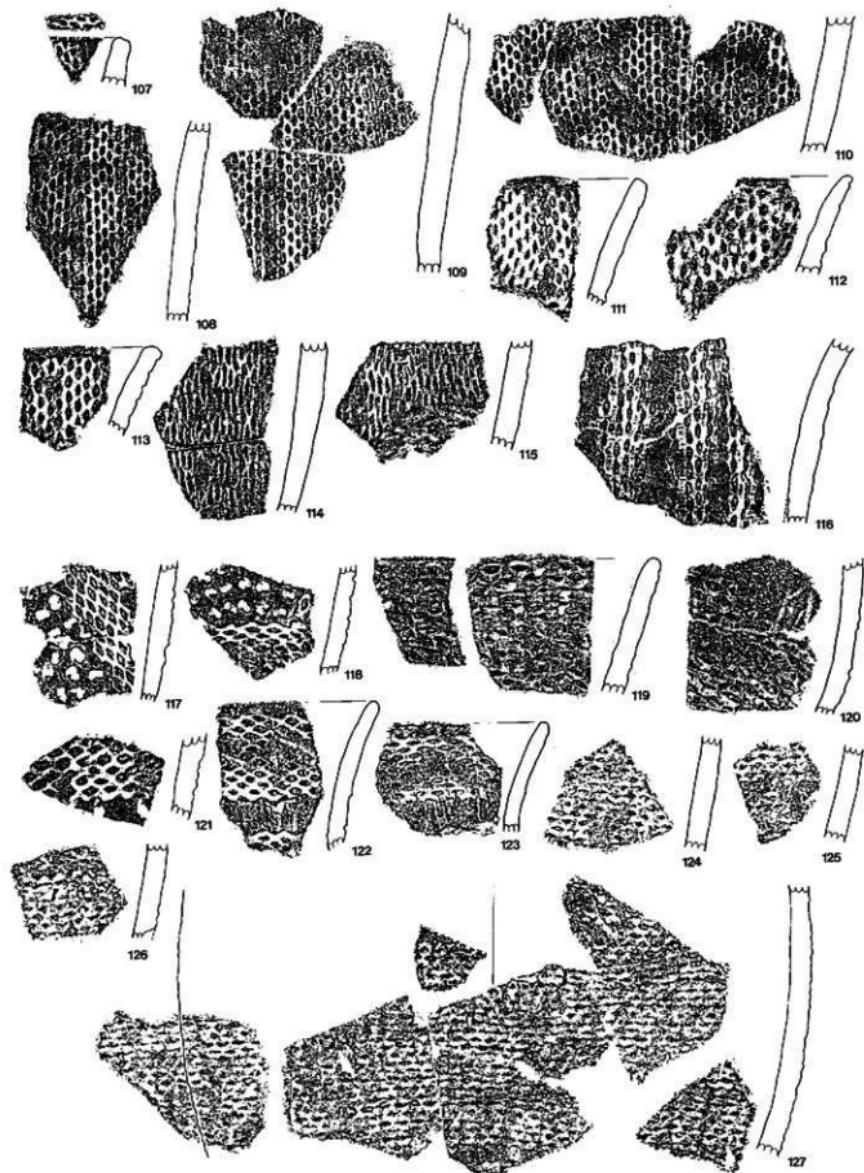


図版3 市道遺跡の縄文土器(3)



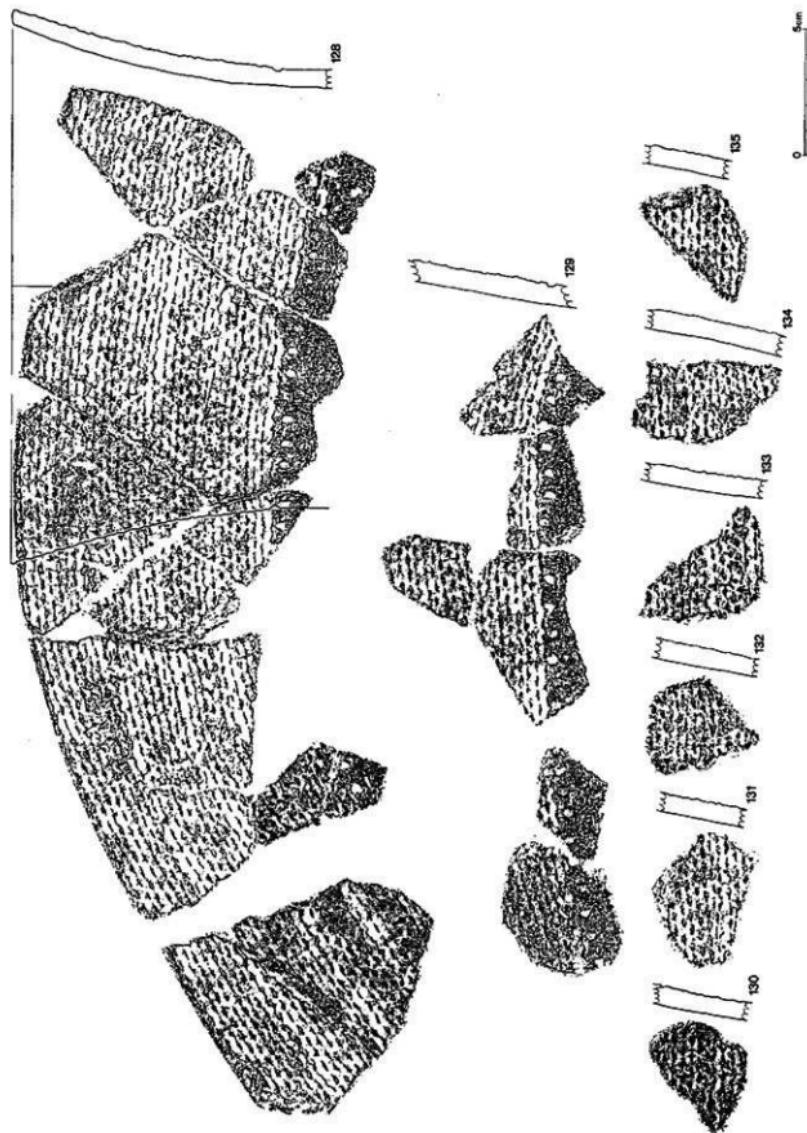


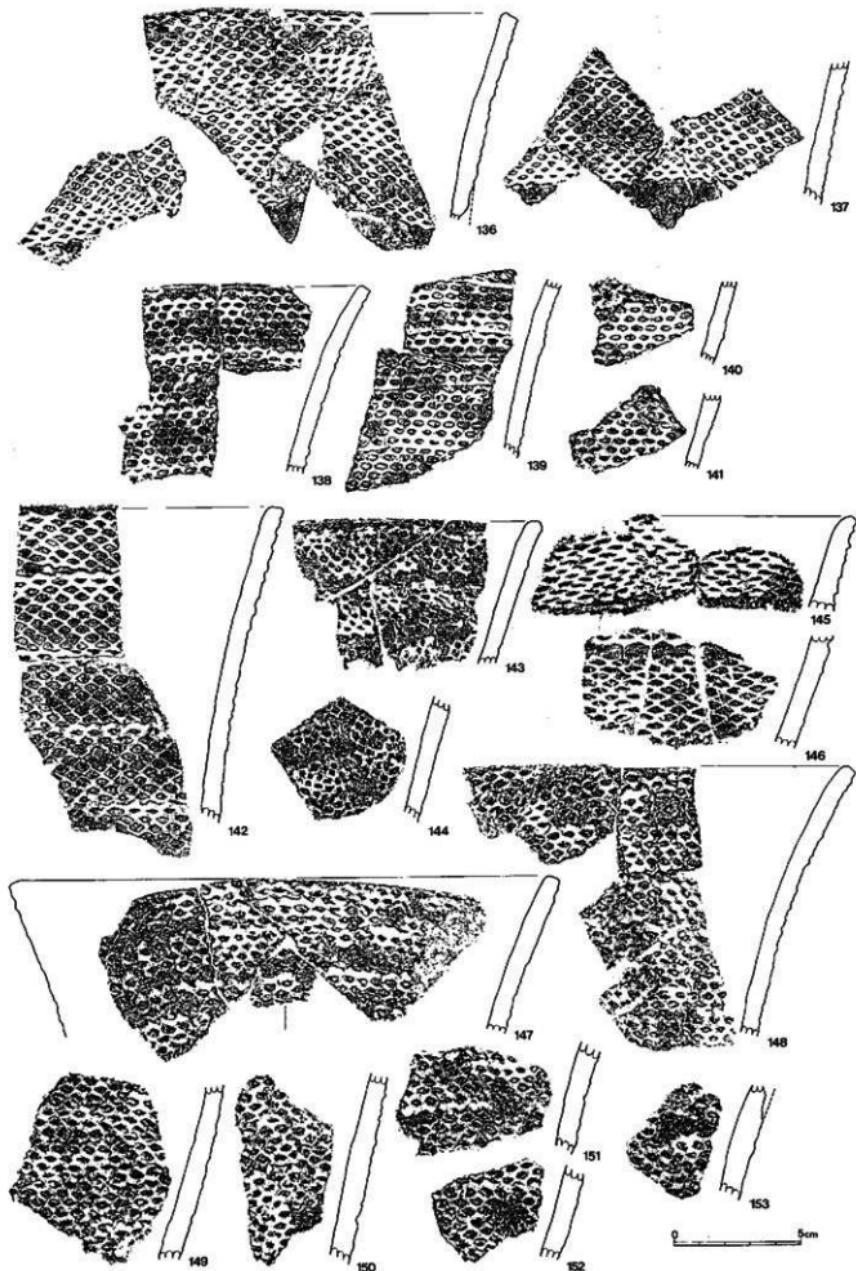
図版4 市道遺跡の縄文土器(4)



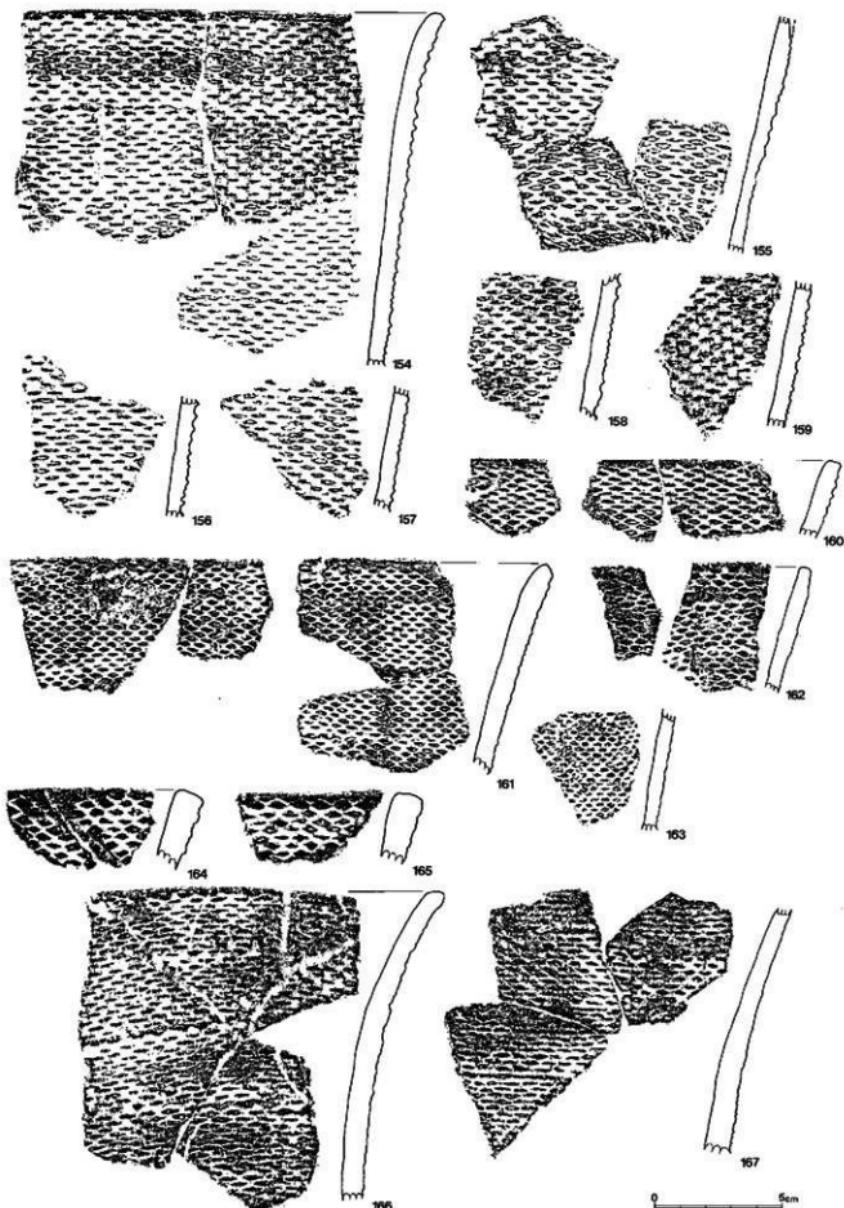
図版 5 古道遺跡の縦文上幕(5)

図版 6 市道遺跡の縄文土器(6)





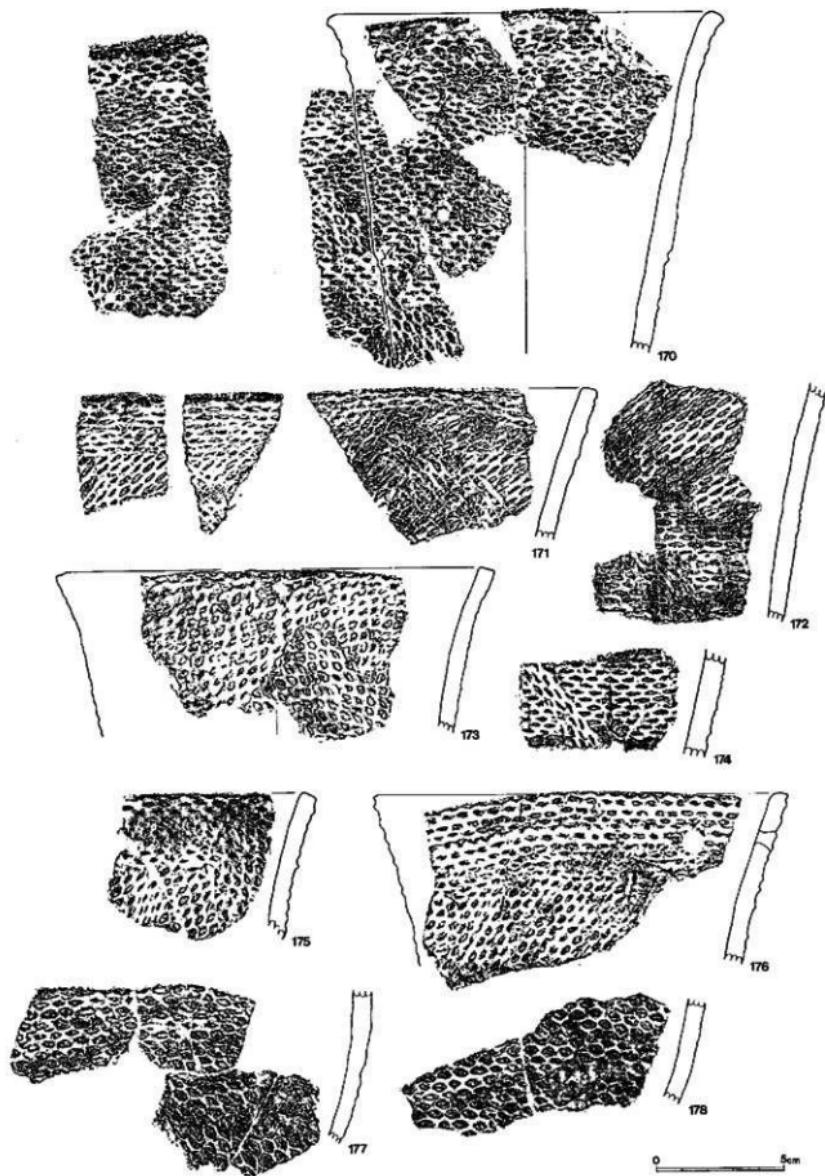
図版7 市道遺跡の縄文土器(?)



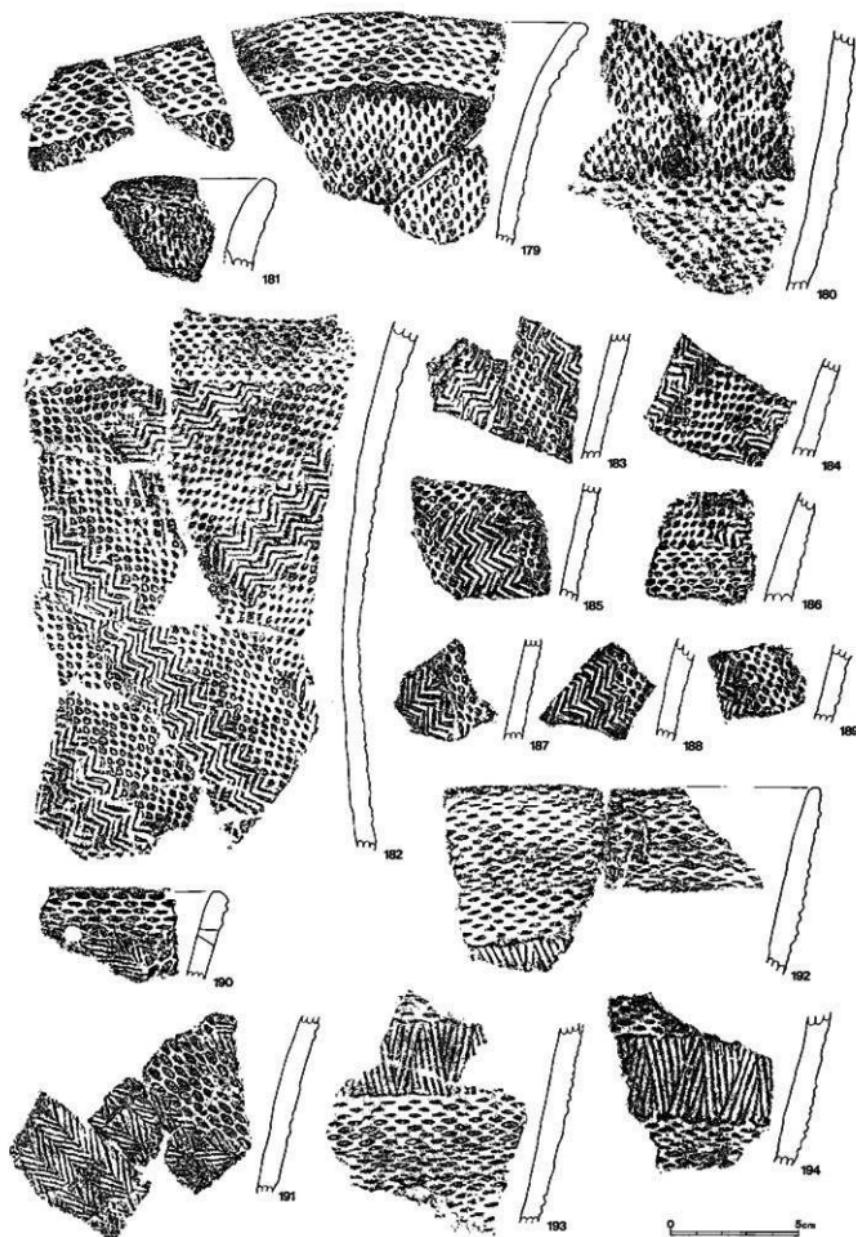
図版 8 市道遺跡の縄文土器(8)

図版 9 市道遺跡の縄文土器(9)

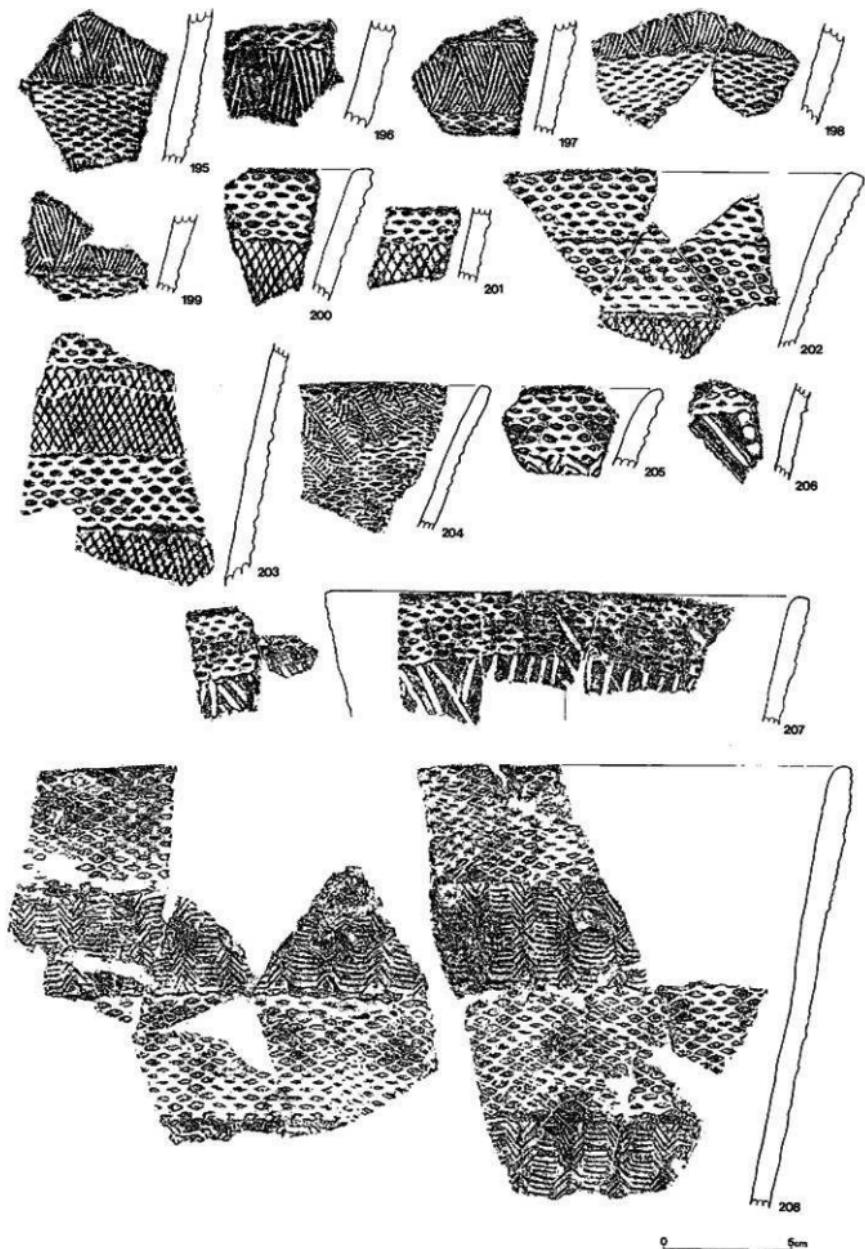




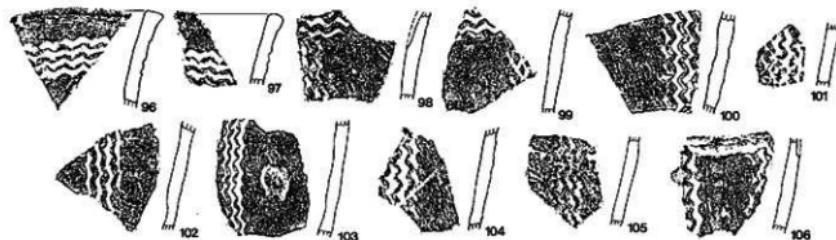
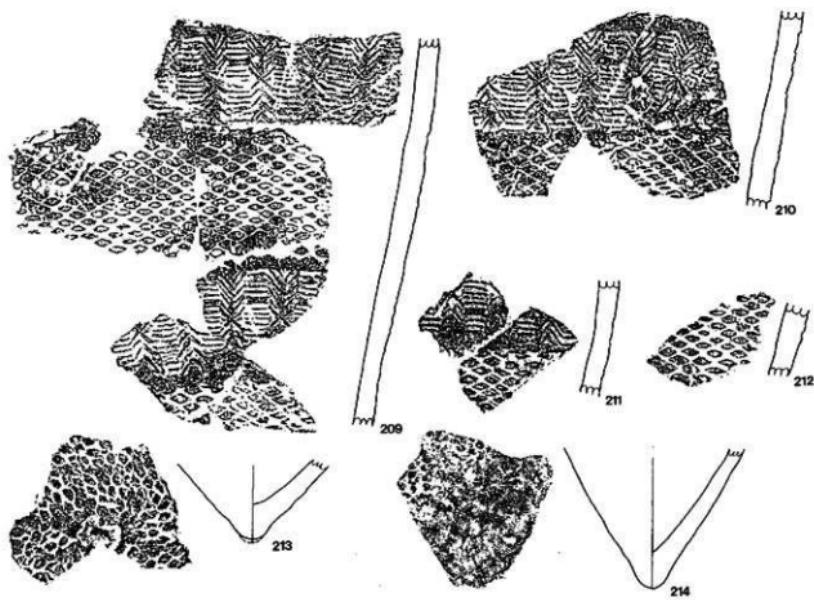
図版10 市道遺跡の縄文土器群



図版11 市道遺跡の陶文土器①

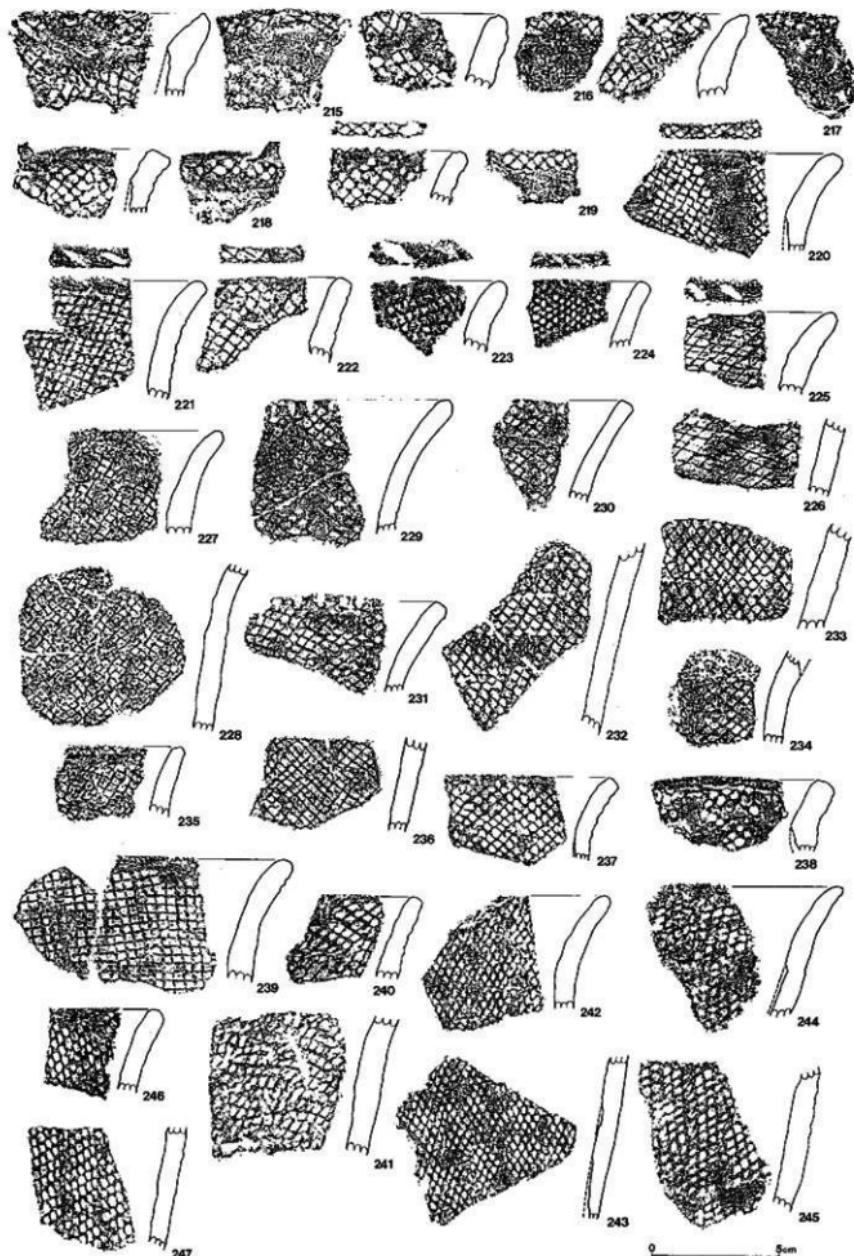


図版12 市道遺跡の縄文土器(1)

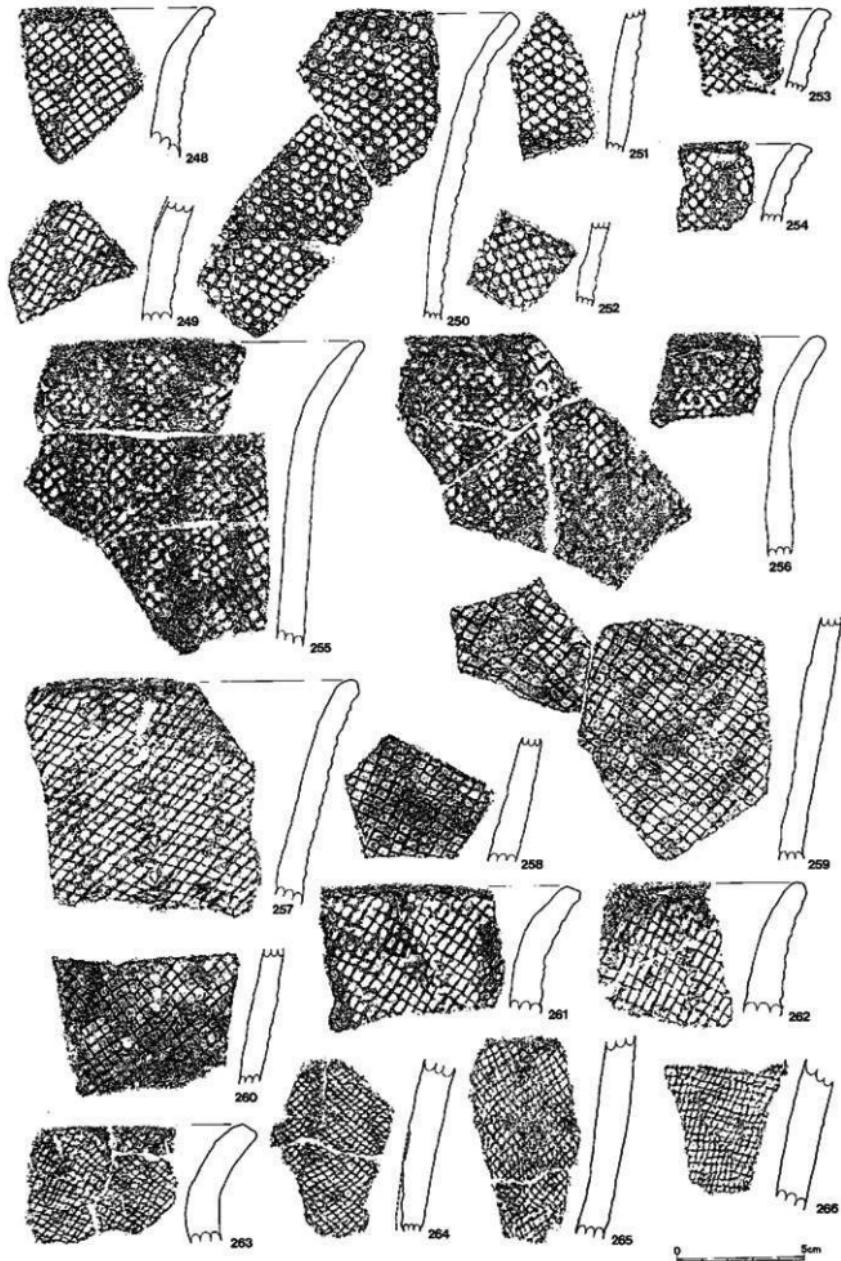


0 5cm

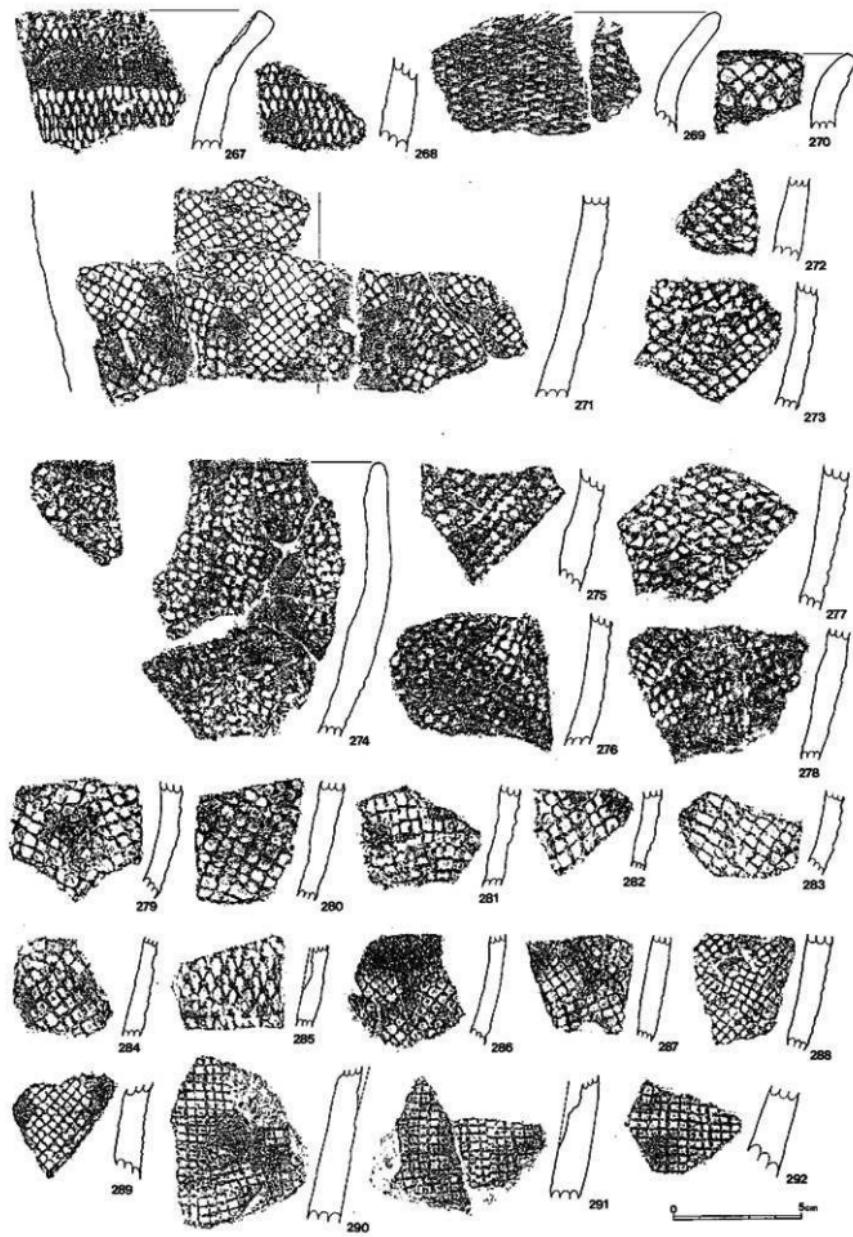
図版13 市道遺跡の縄文上器03



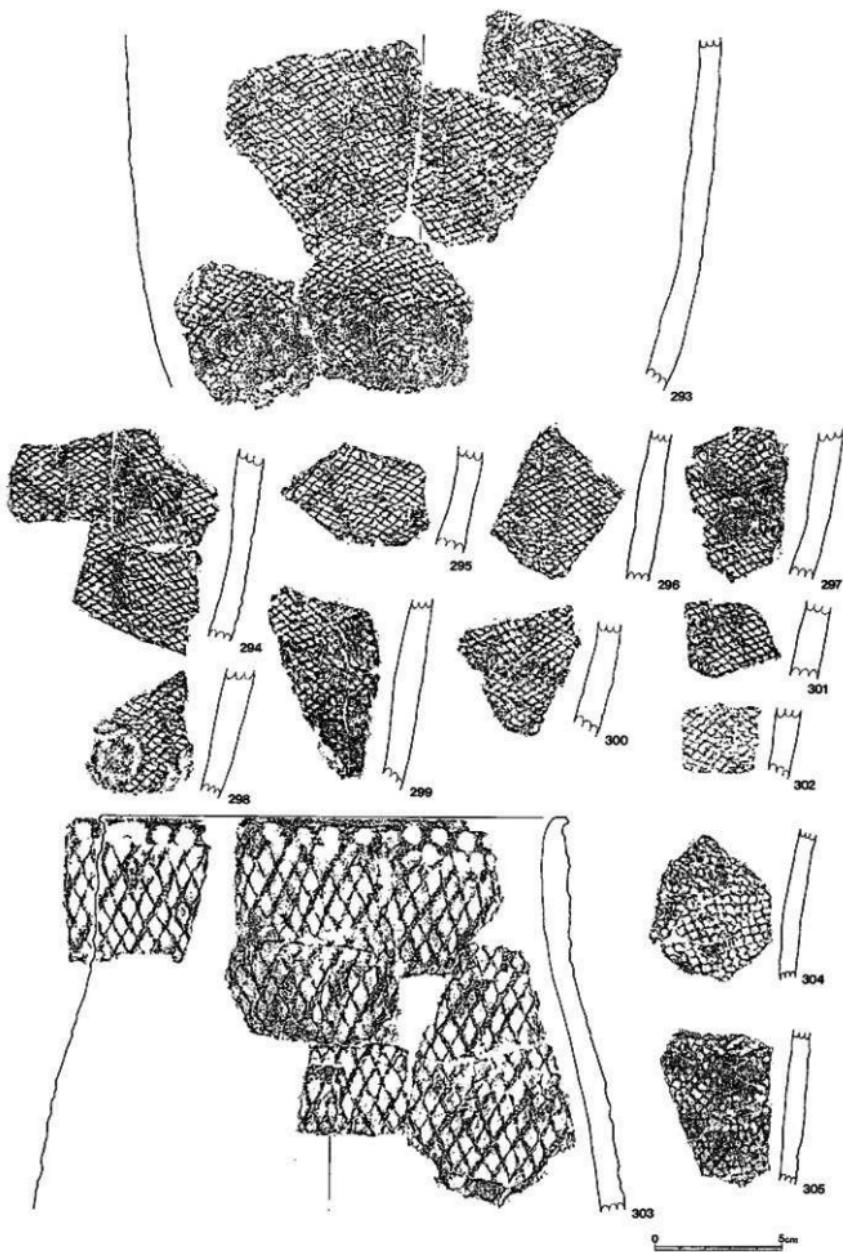
図版14 市道遺跡の縄文上器



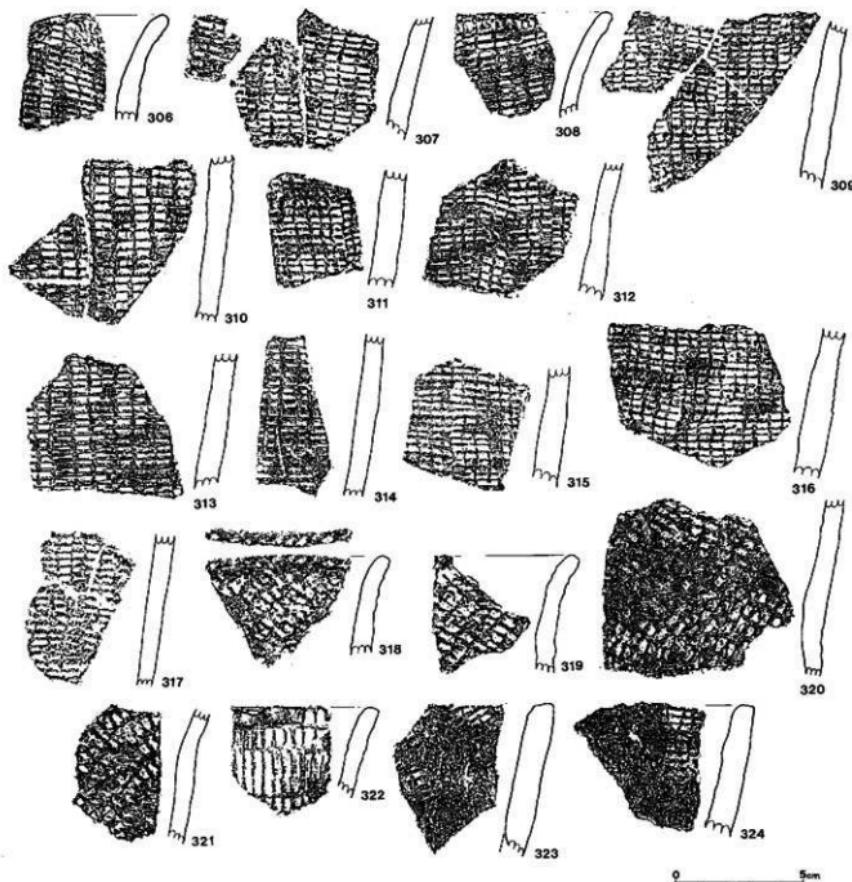
図版15 市道遺跡の綺文上器09



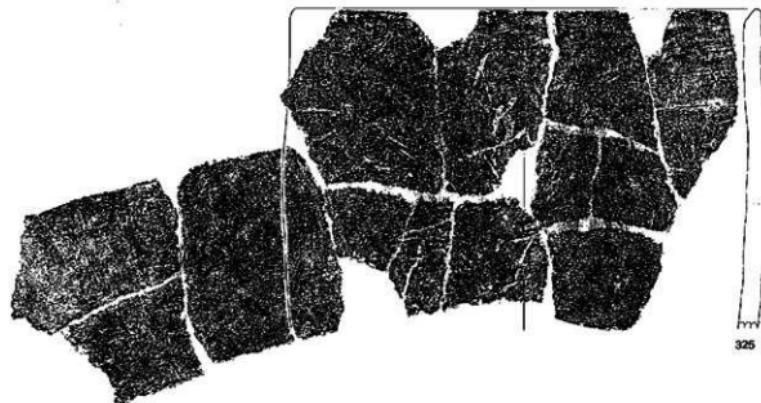
図版16 市道遺跡の縄文土器



図版17 市道遺跡の縞文土器



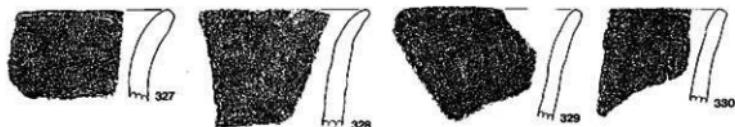
図版18 市道遺跡の縄文土器08



325



326



327

328

329

330

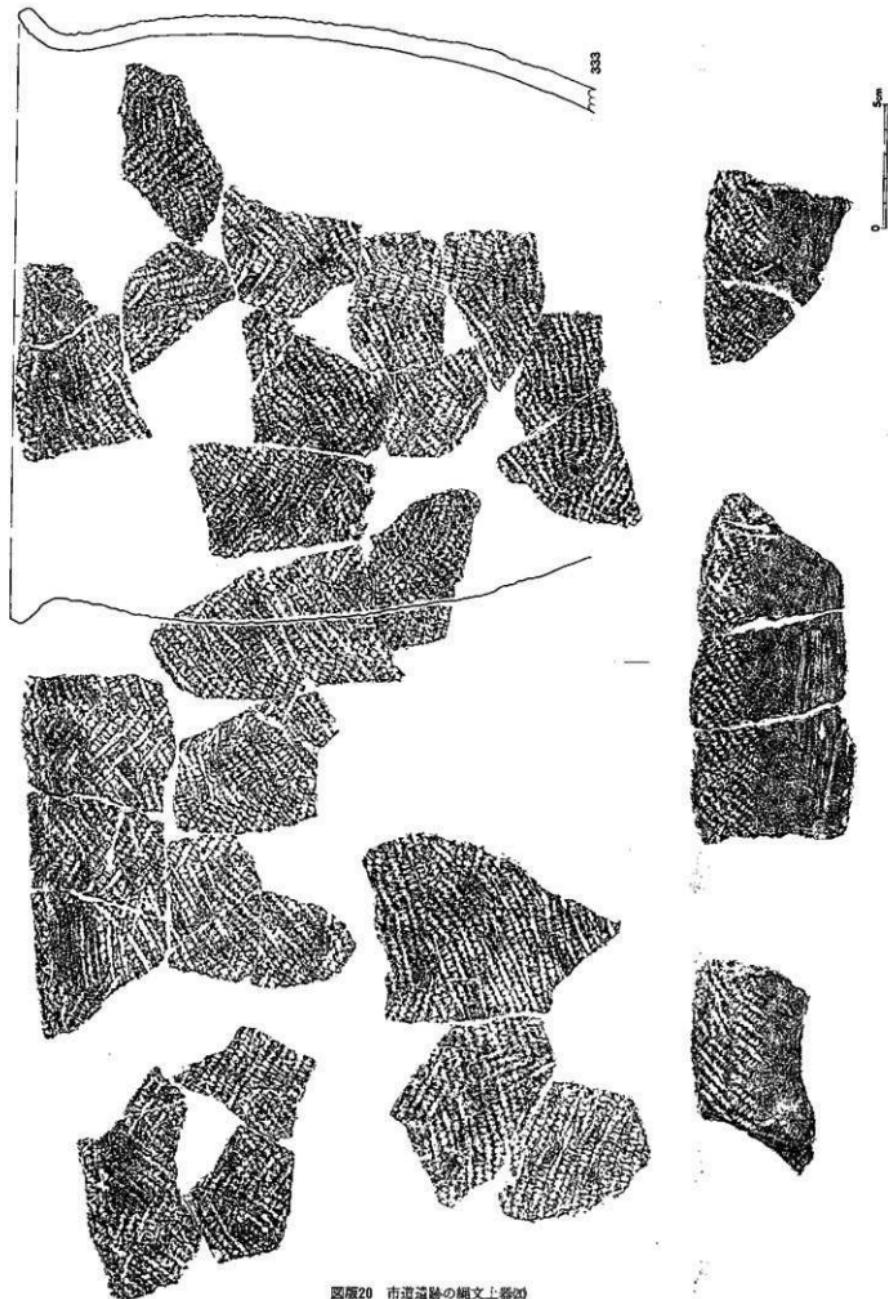


331

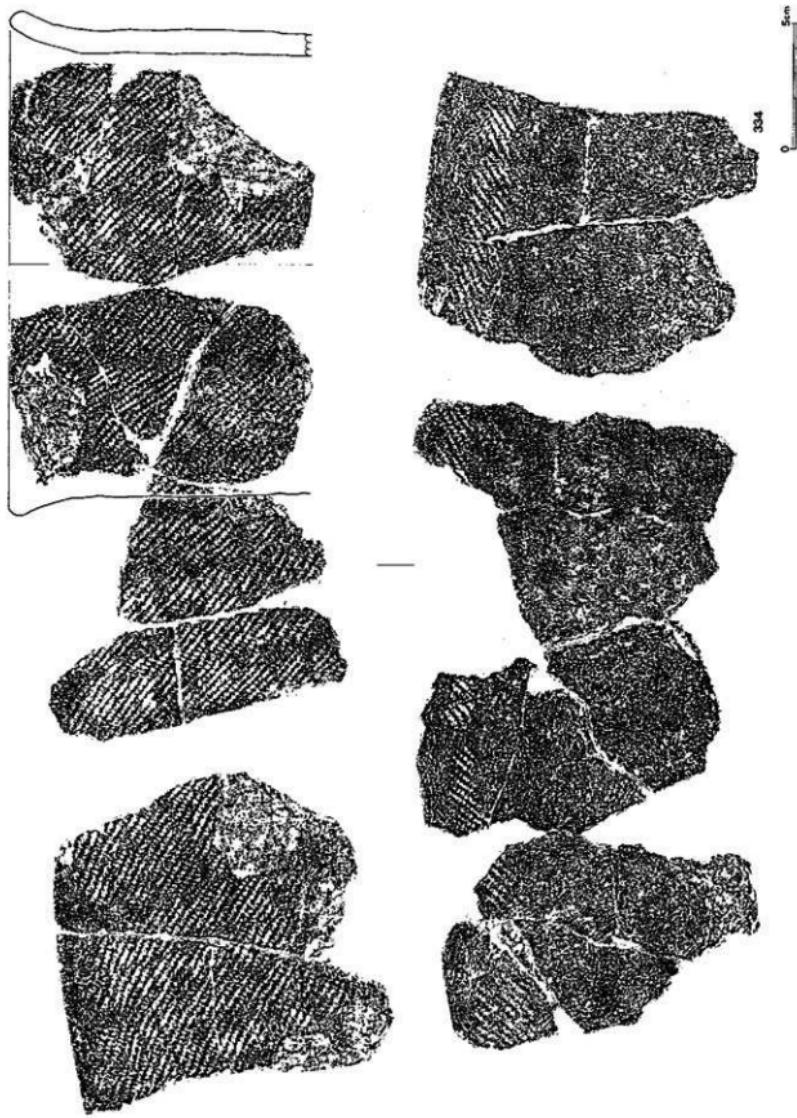
332

0 5cm

図版19 古道遺跡の細文土器

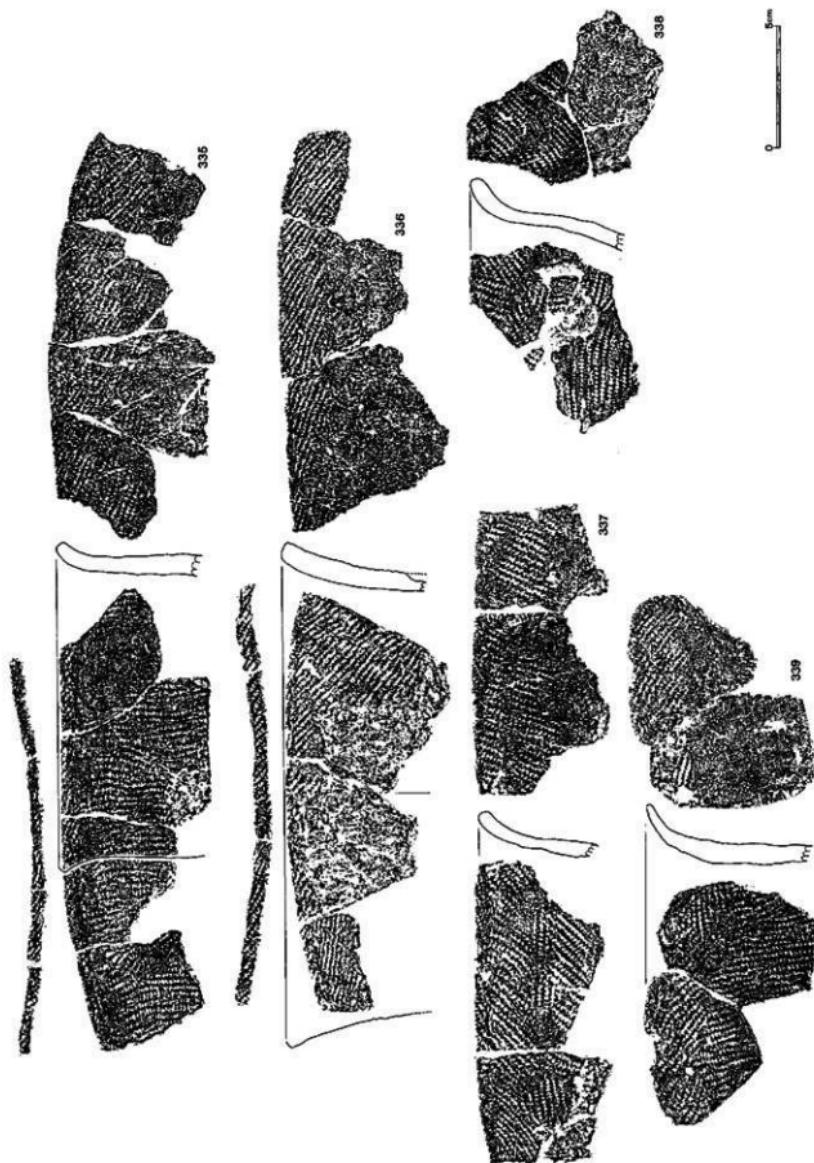


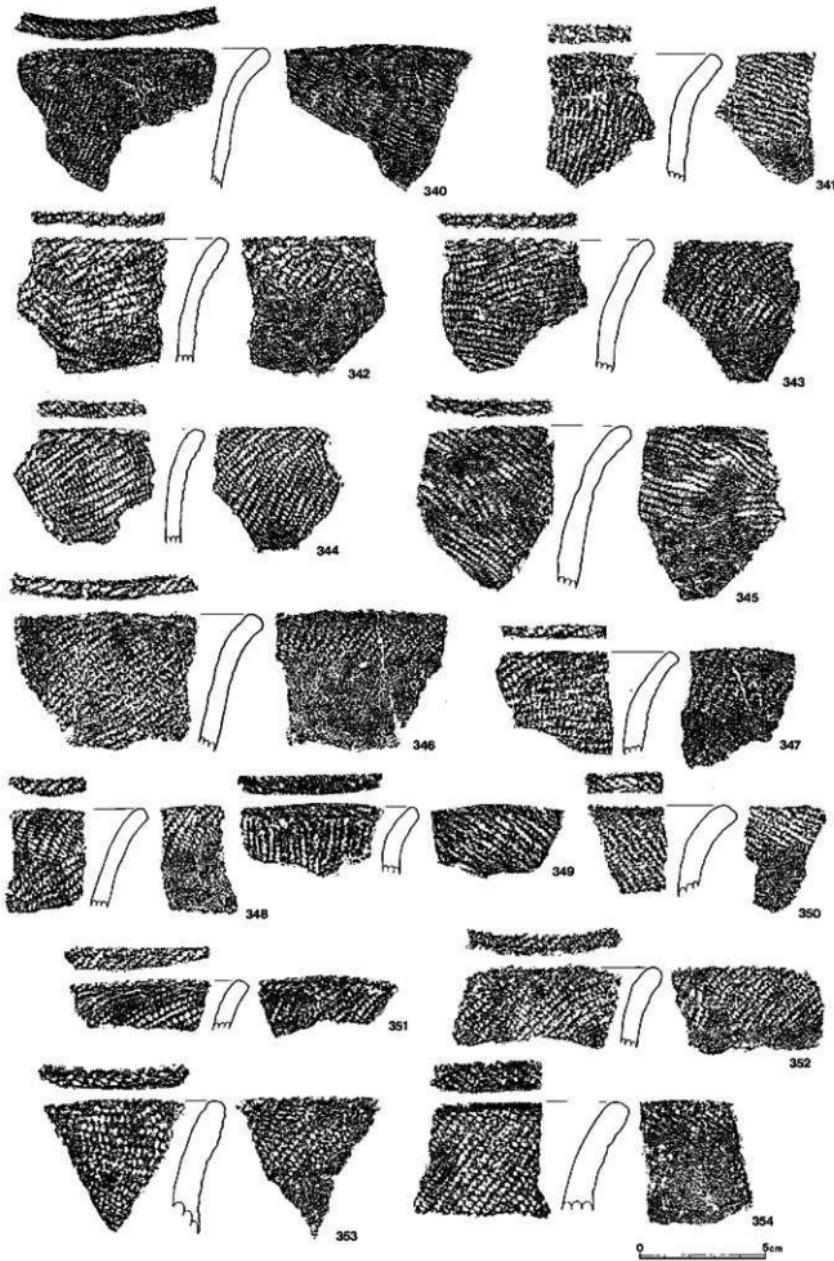
図版20 市道遺跡の縄文上器20



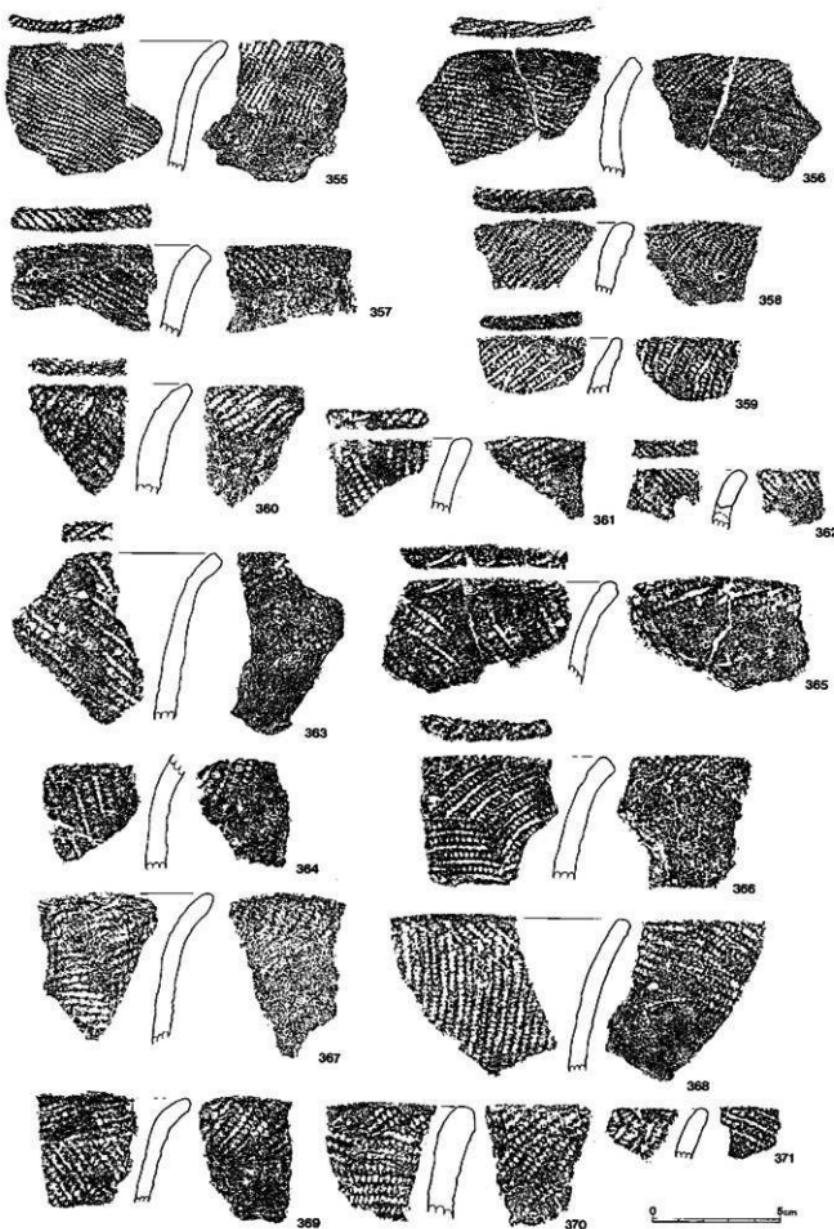
図版21 市道遺跡の縄文土器(21)

図版22 市道遺跡の網文土器(22)

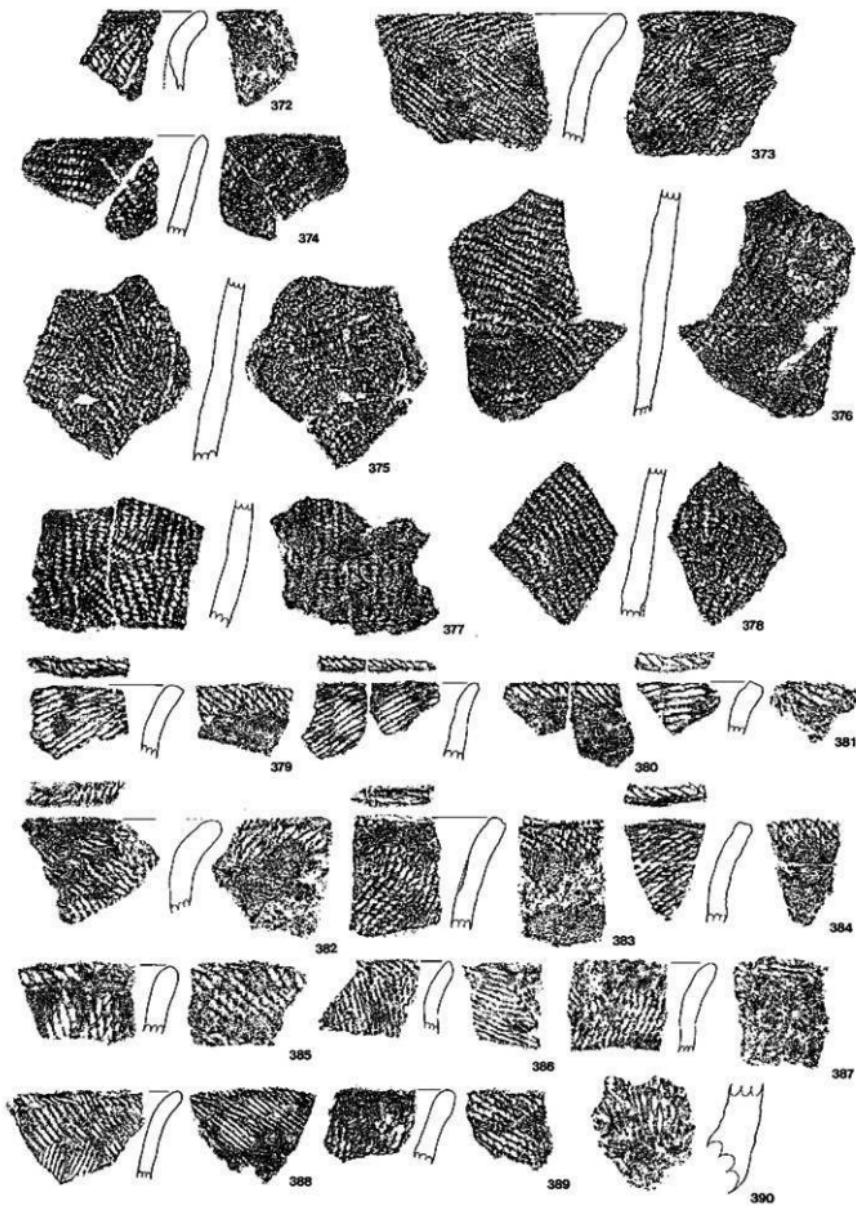




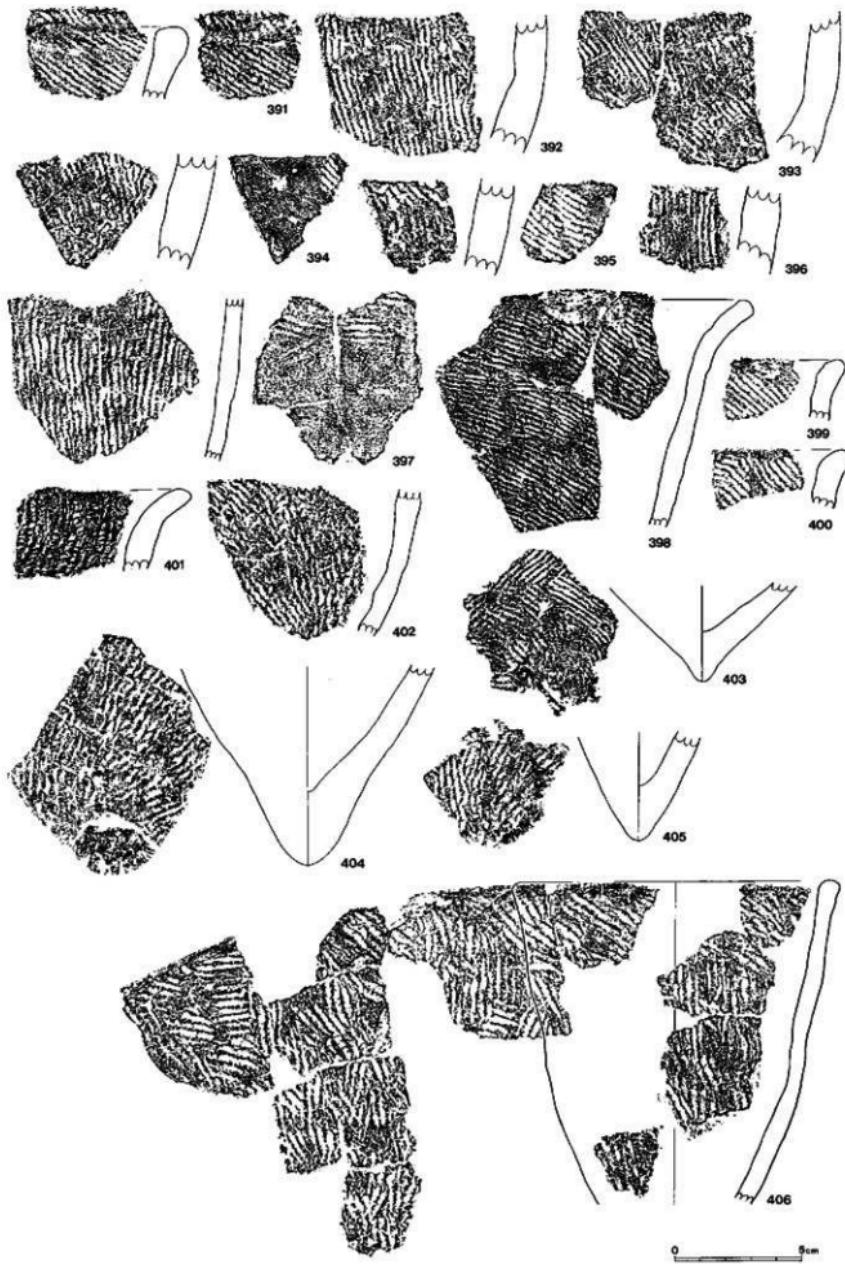
図版23 市道遺跡の織文土器(28)



図版24 市道達跡の網文土器(24)

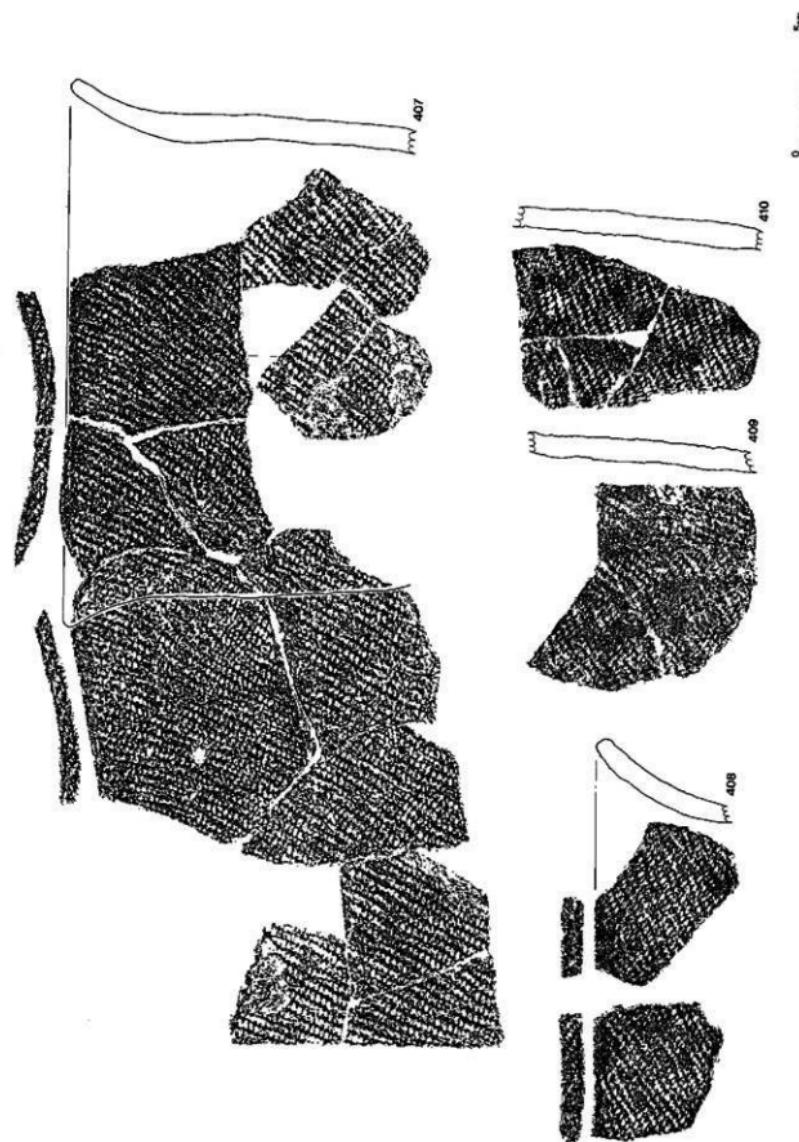


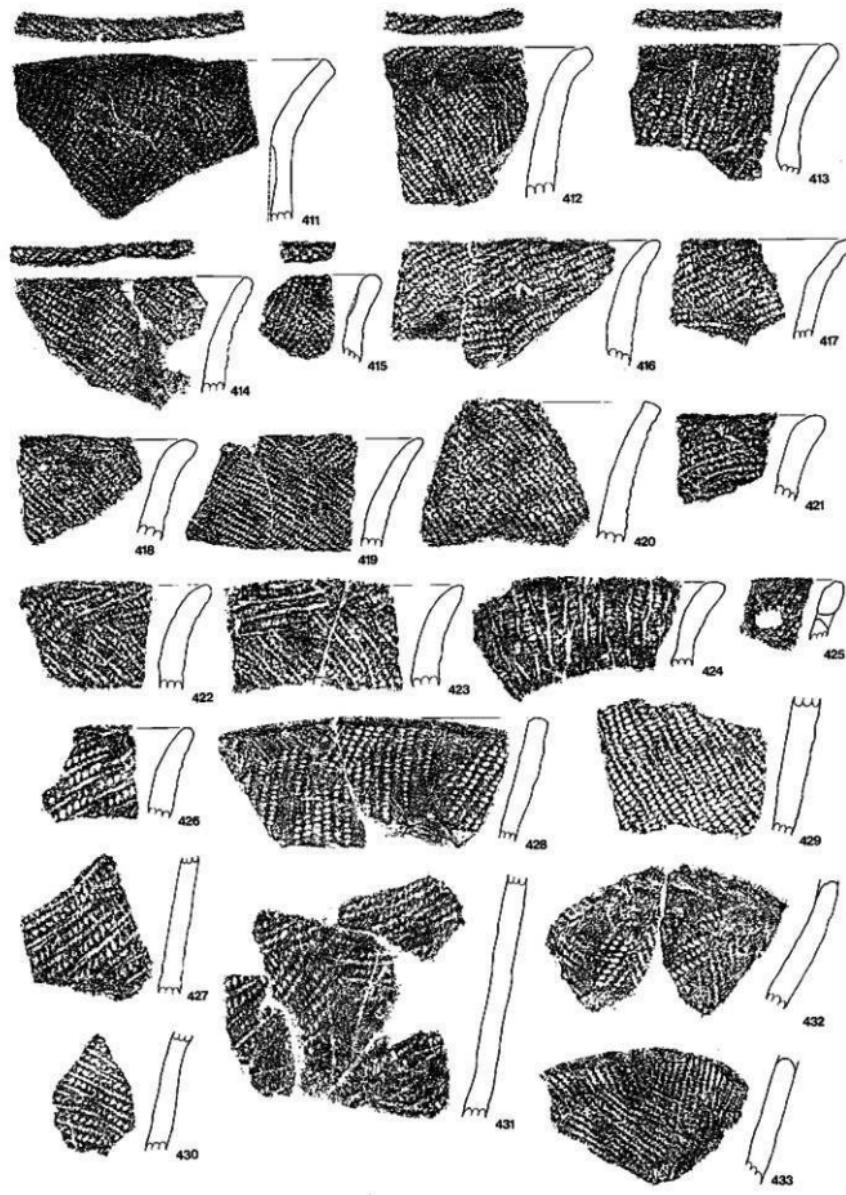
図版25 市道遺跡の網文上層(25)



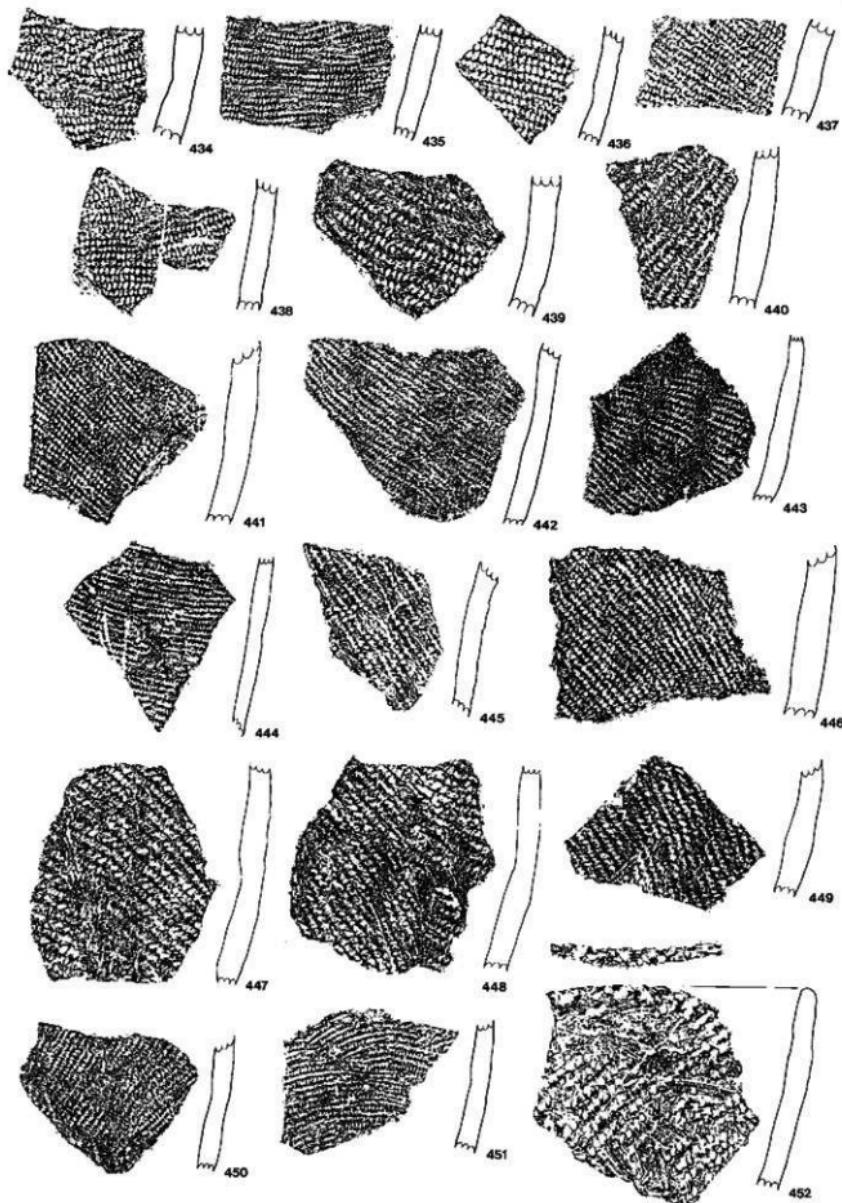
図版26 市道遺跡の縄文土器(26)

図版27 市道遺跡の縄文土器(27)

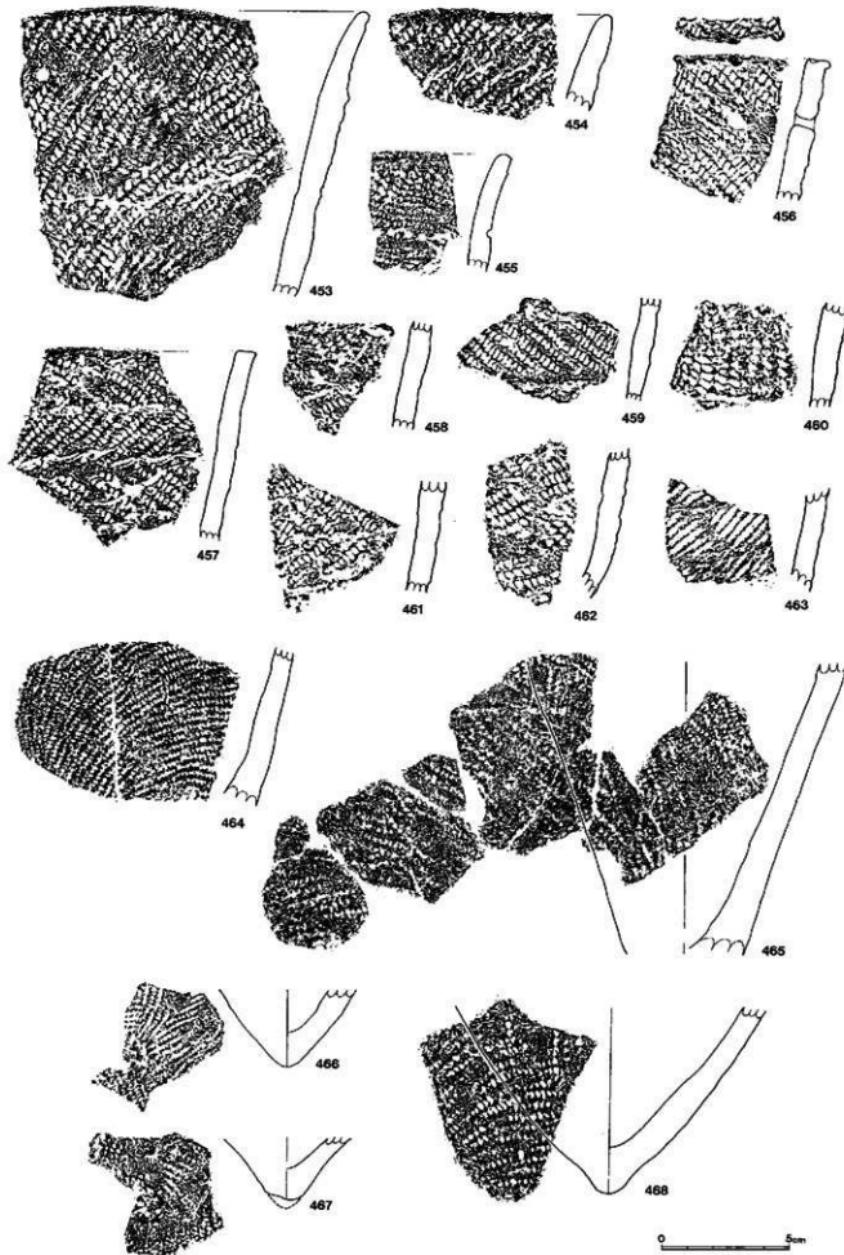




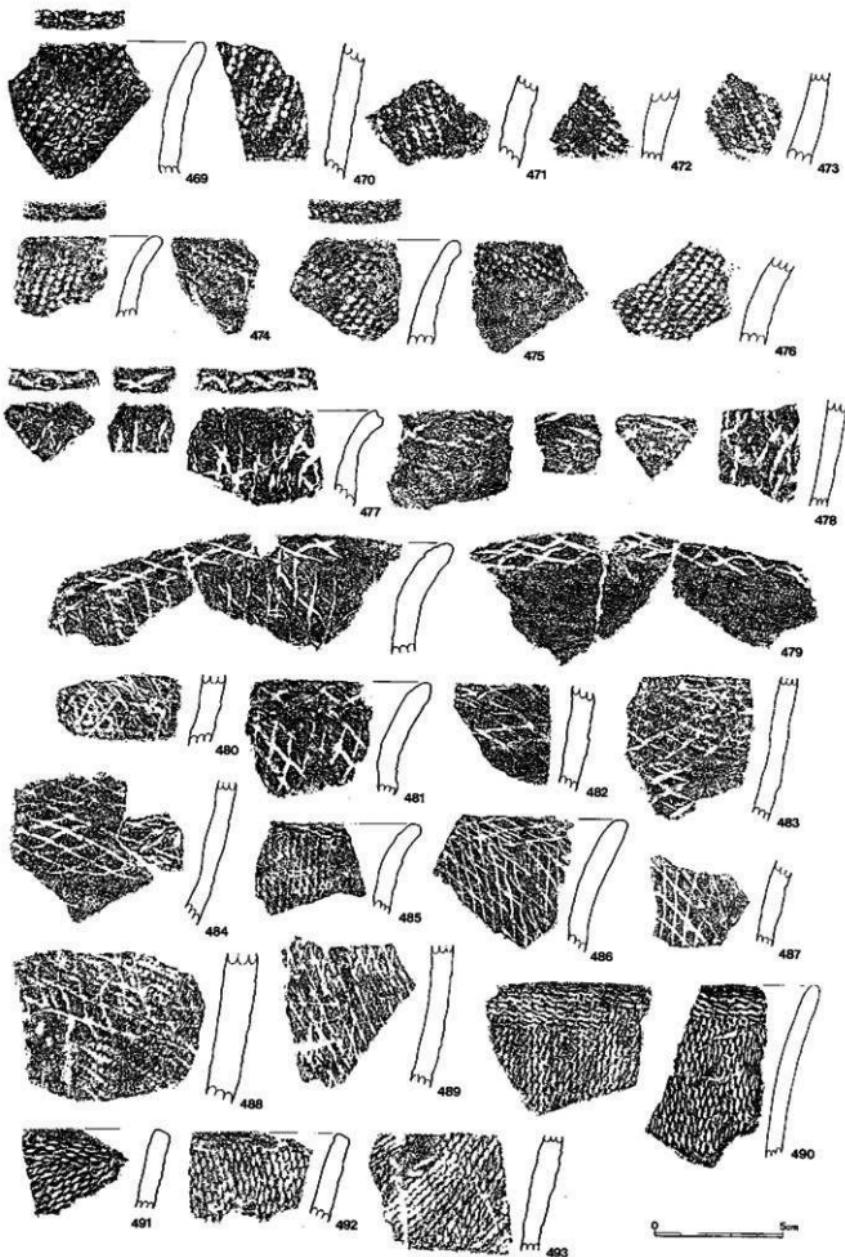
図版28 市道遺跡の網文土器(28)



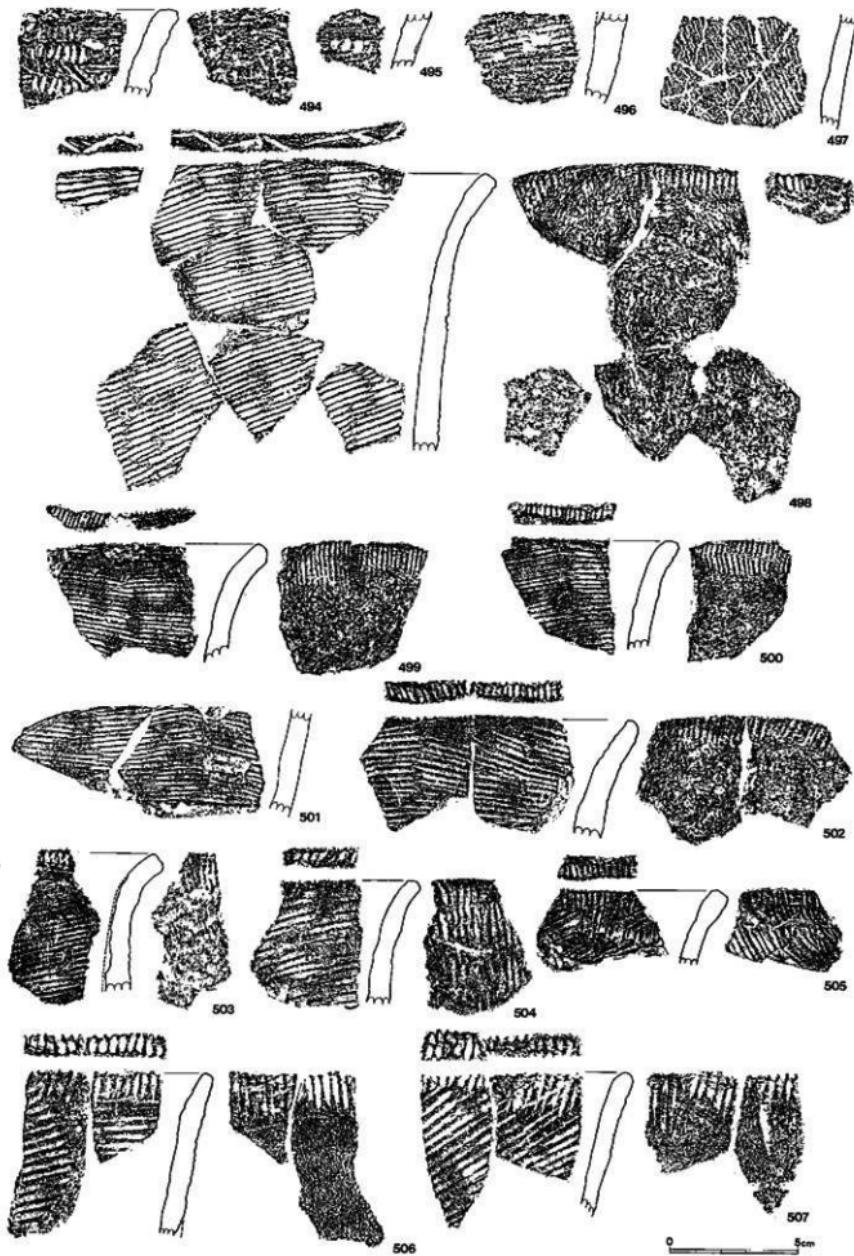
図版29 市道遺跡の縄文土器(29)



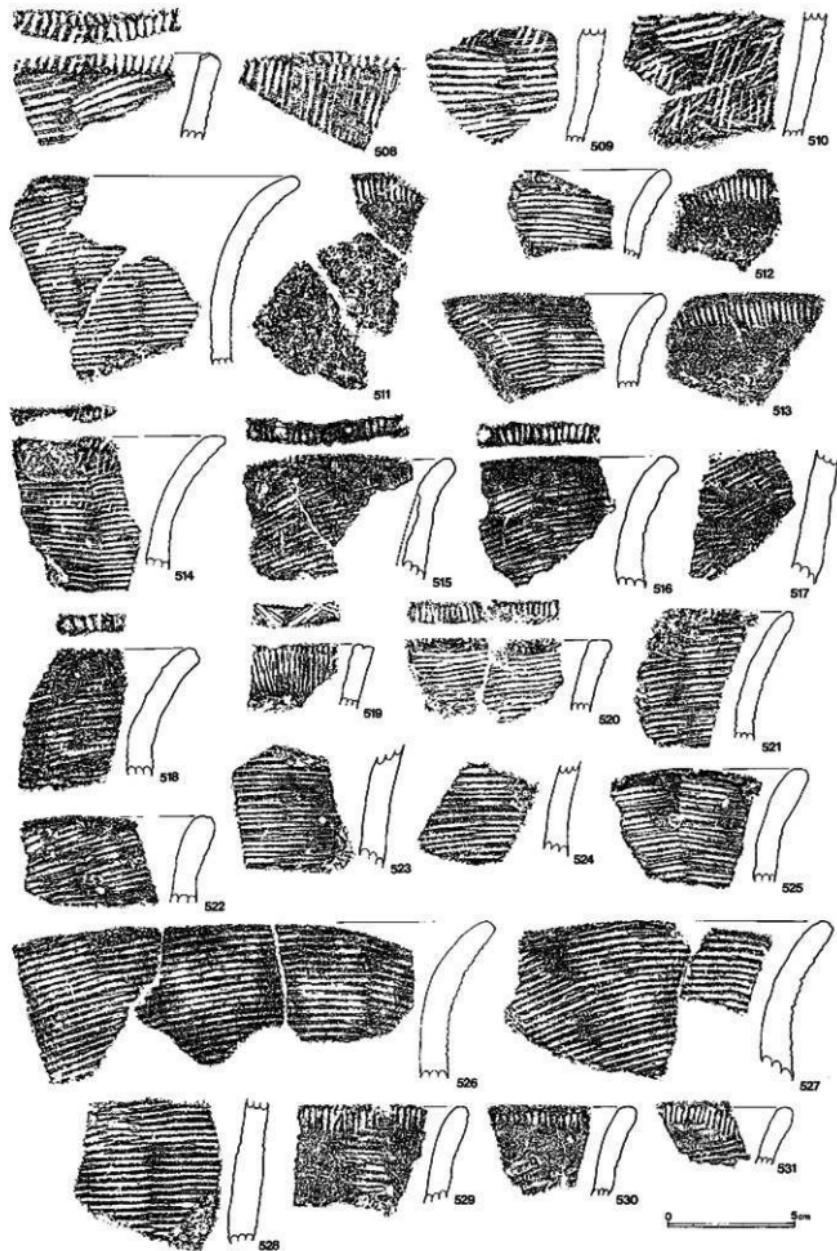
図版30 市道遺跡の構文上器(30)



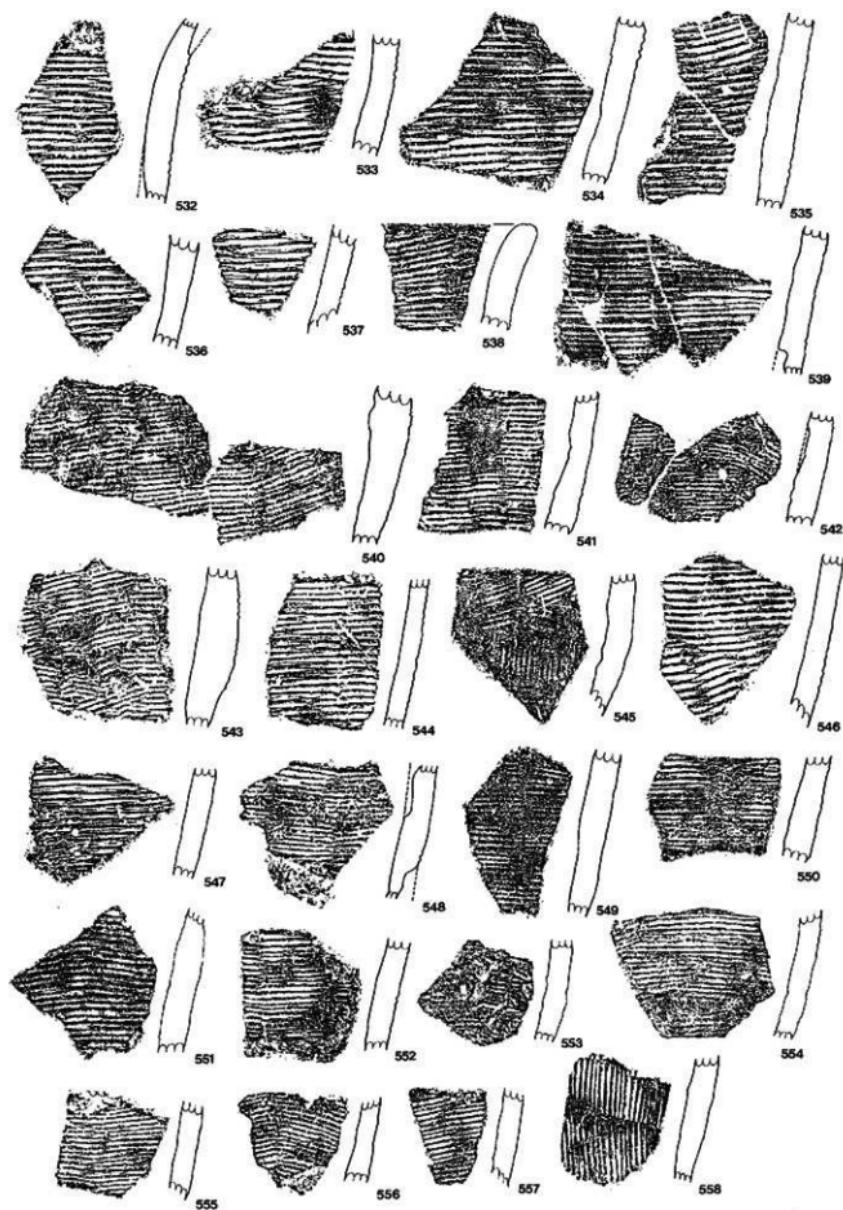
図版31 市道遺跡の楕文土器(31)



図版32 市道遺跡の欄文土器(32)

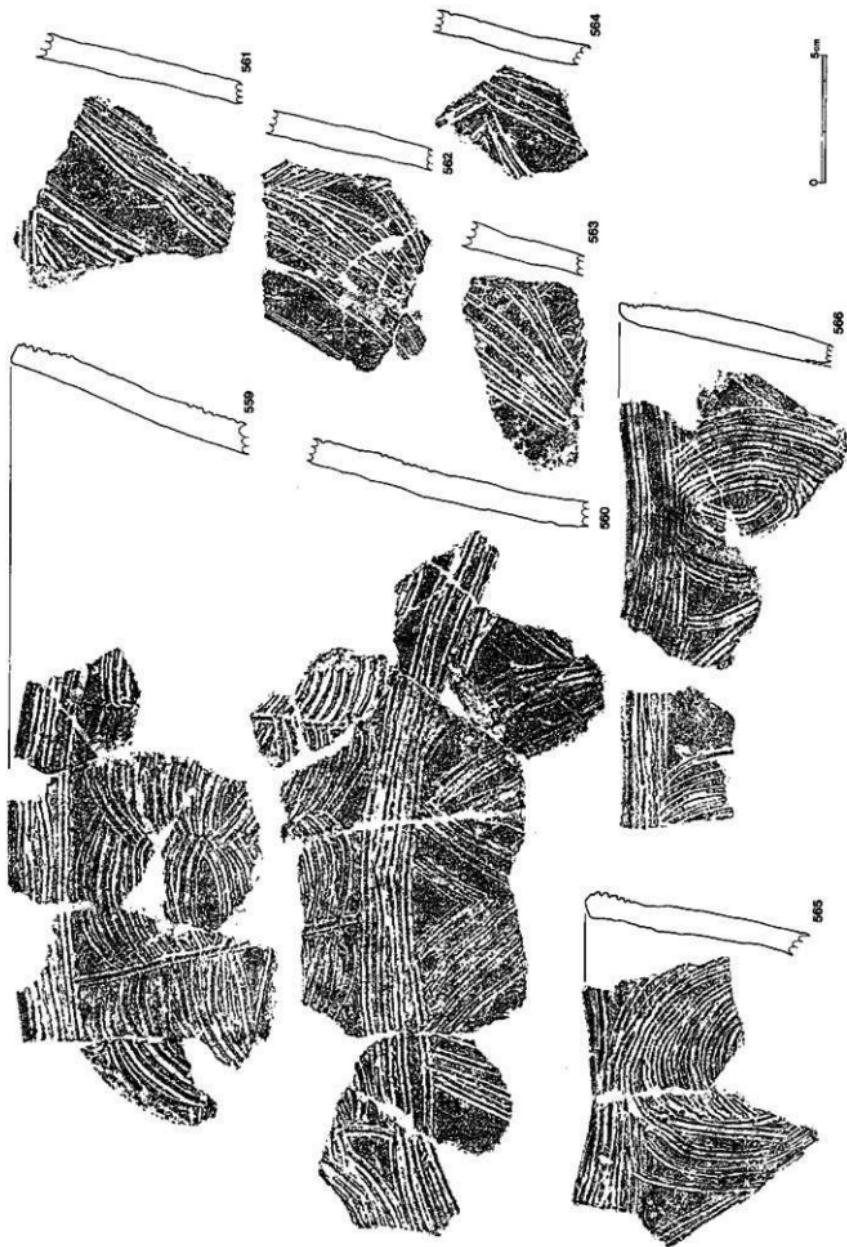


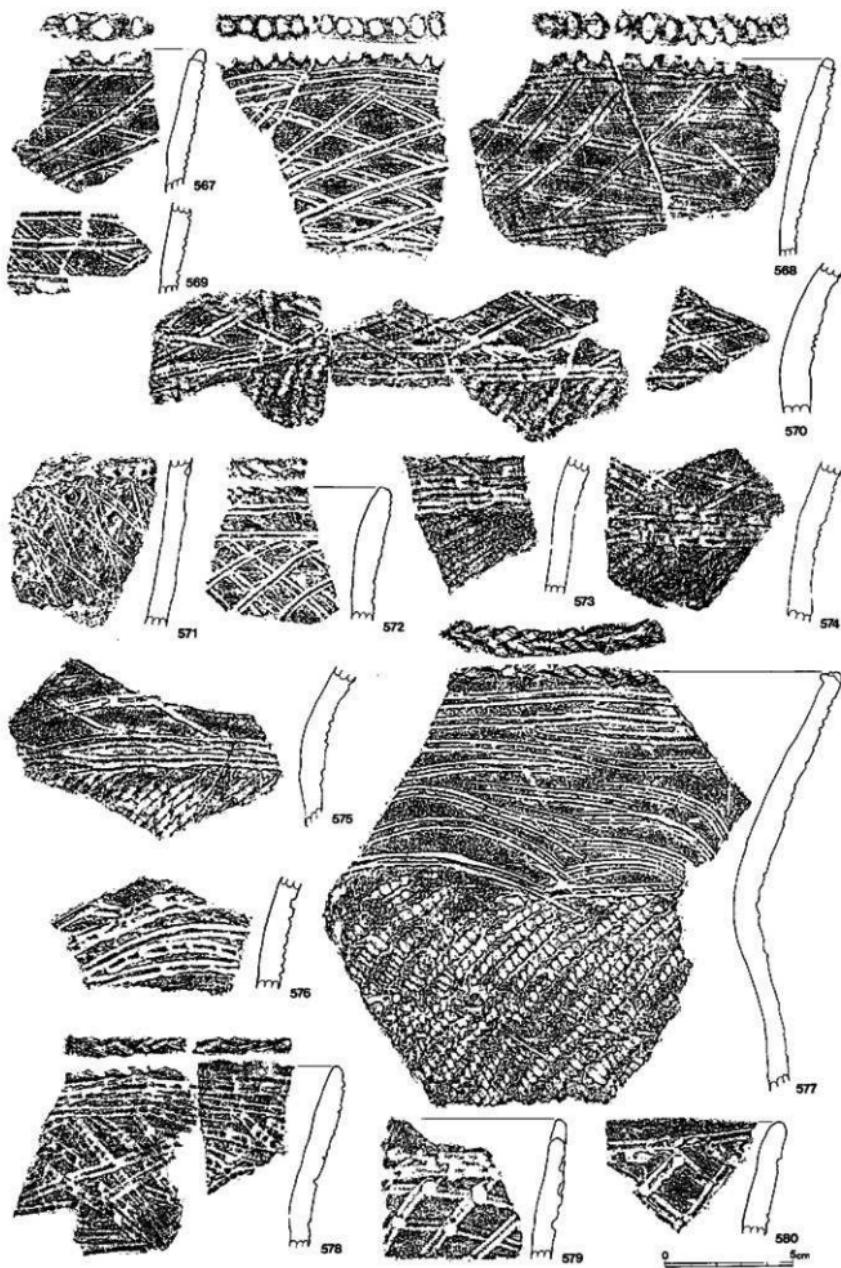
図版33 市道遺跡の撻文上器(33)



図版34 市道遺跡の縄文土器(34)

図版35 市道塗絵の繩文土器(35)

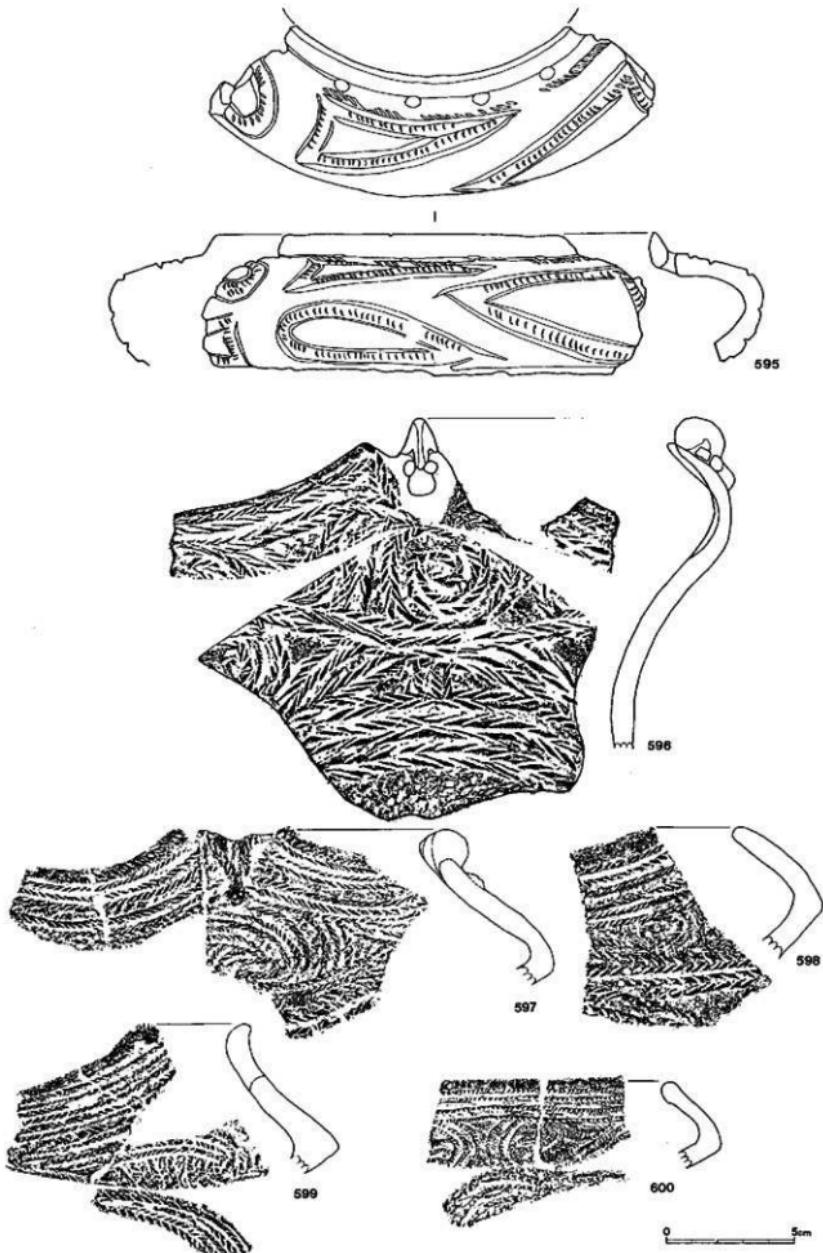




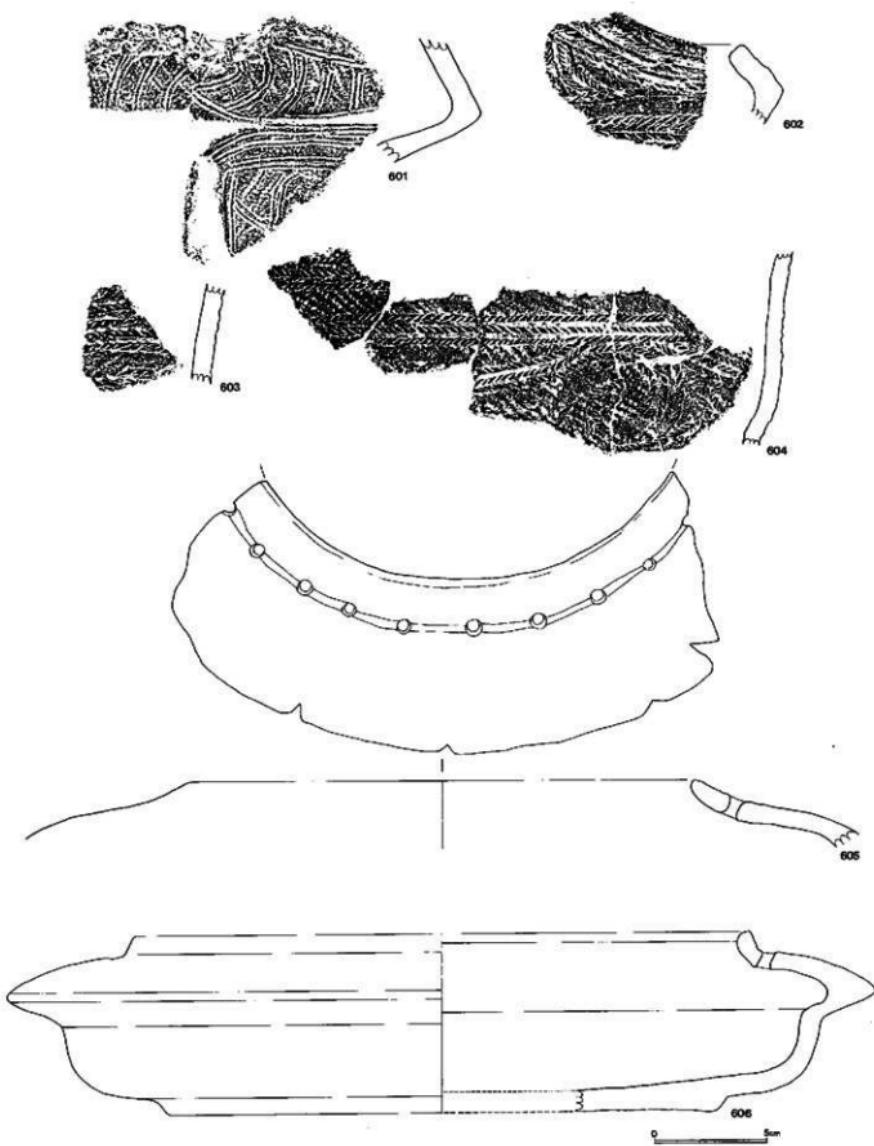
図版36 市道遺跡の繊文上器(36)



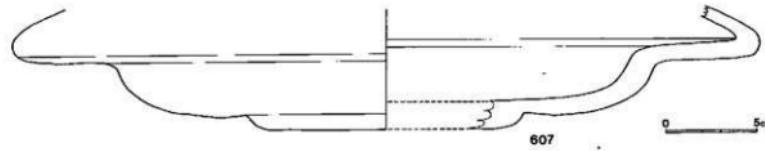
図版37 市道遺跡の縄文土器(37)



図版38 市造遺跡の純文上器(38)

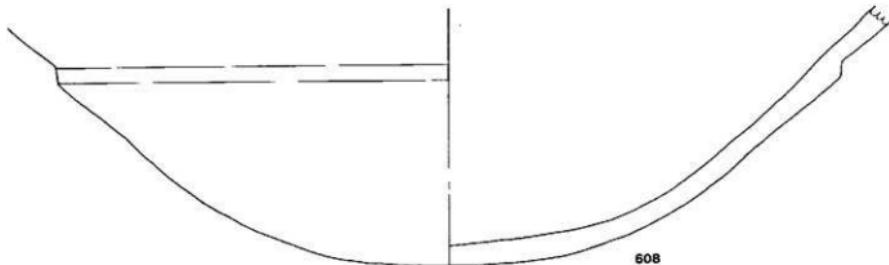


図版39 市道遺跡の縄文土器(39)

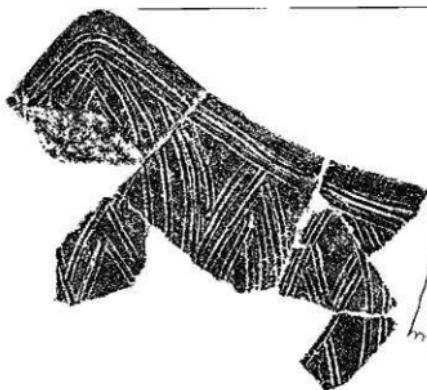


607

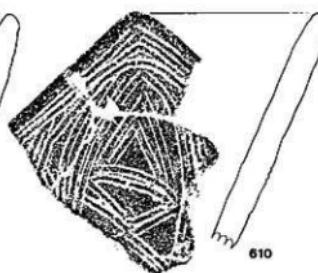
0 5cm



608



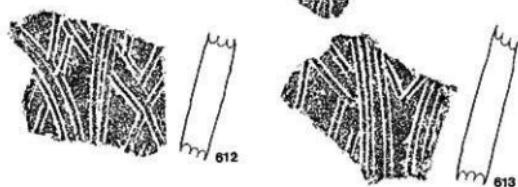
609



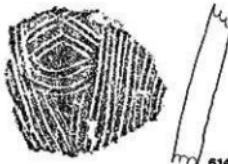
610



611



612

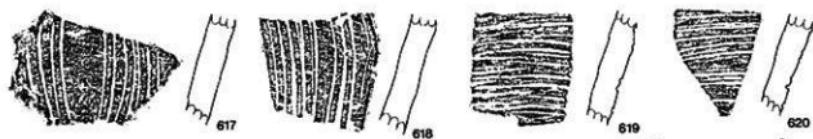
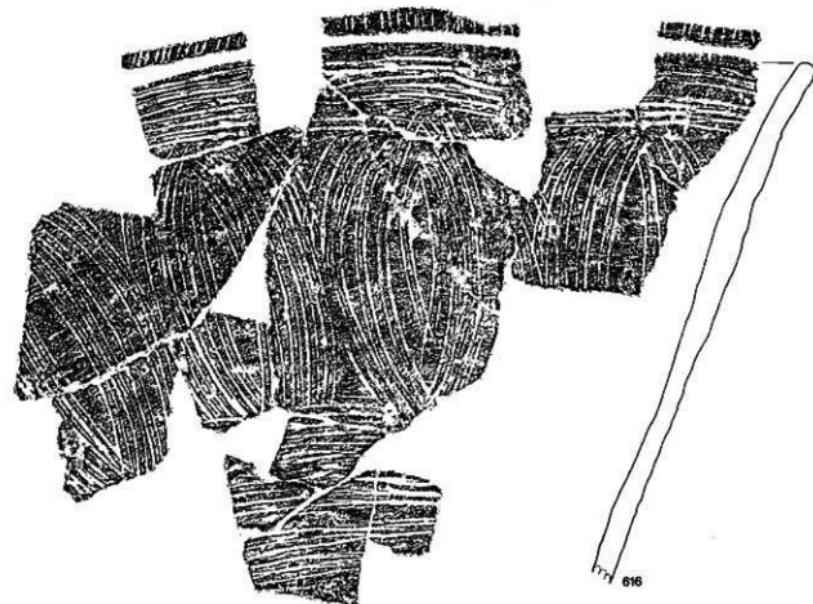


613

614

図版40 市道遺跡の縄文土器(40)

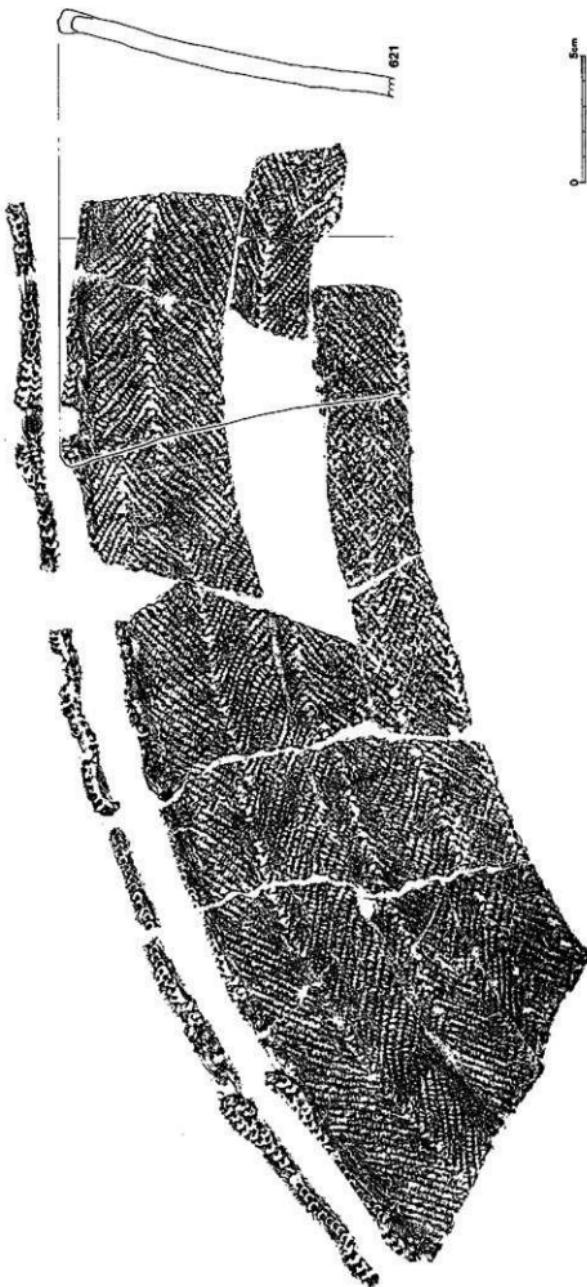
0 5cm



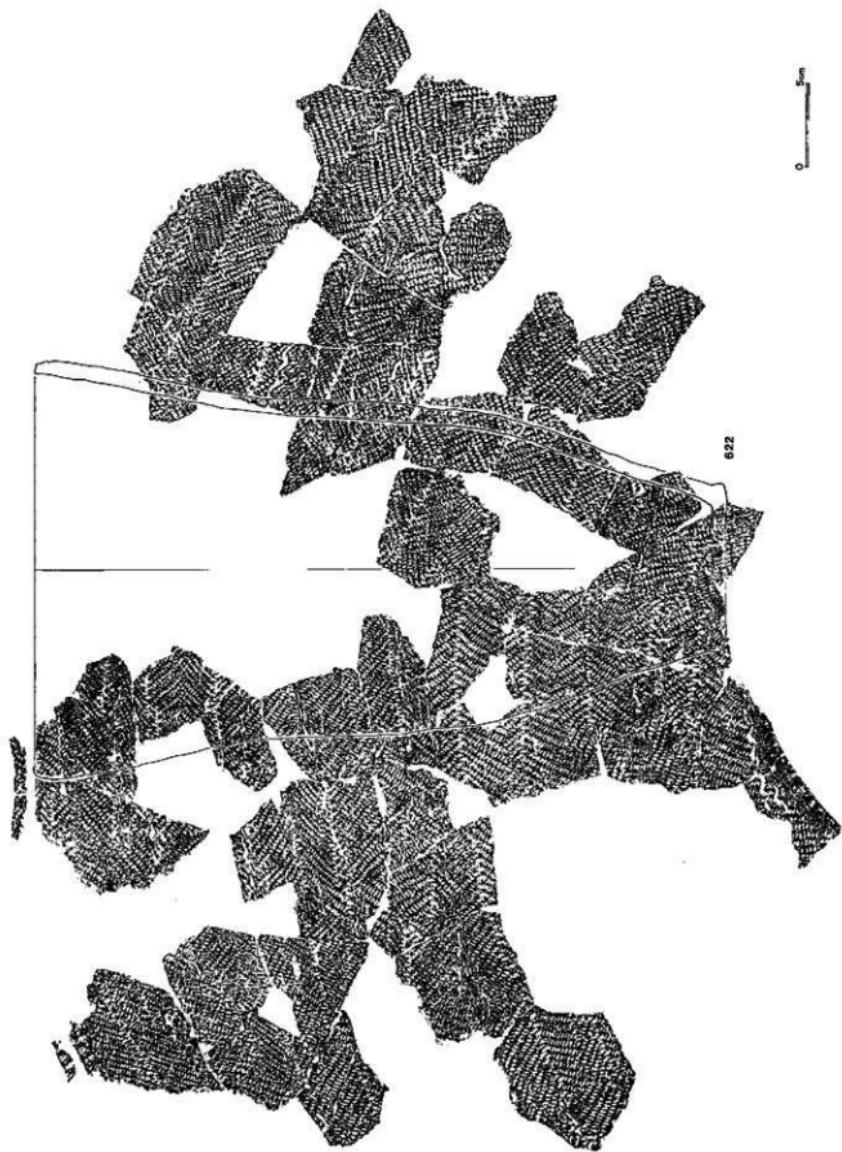
図版41 市道遺跡の網文土器(41)

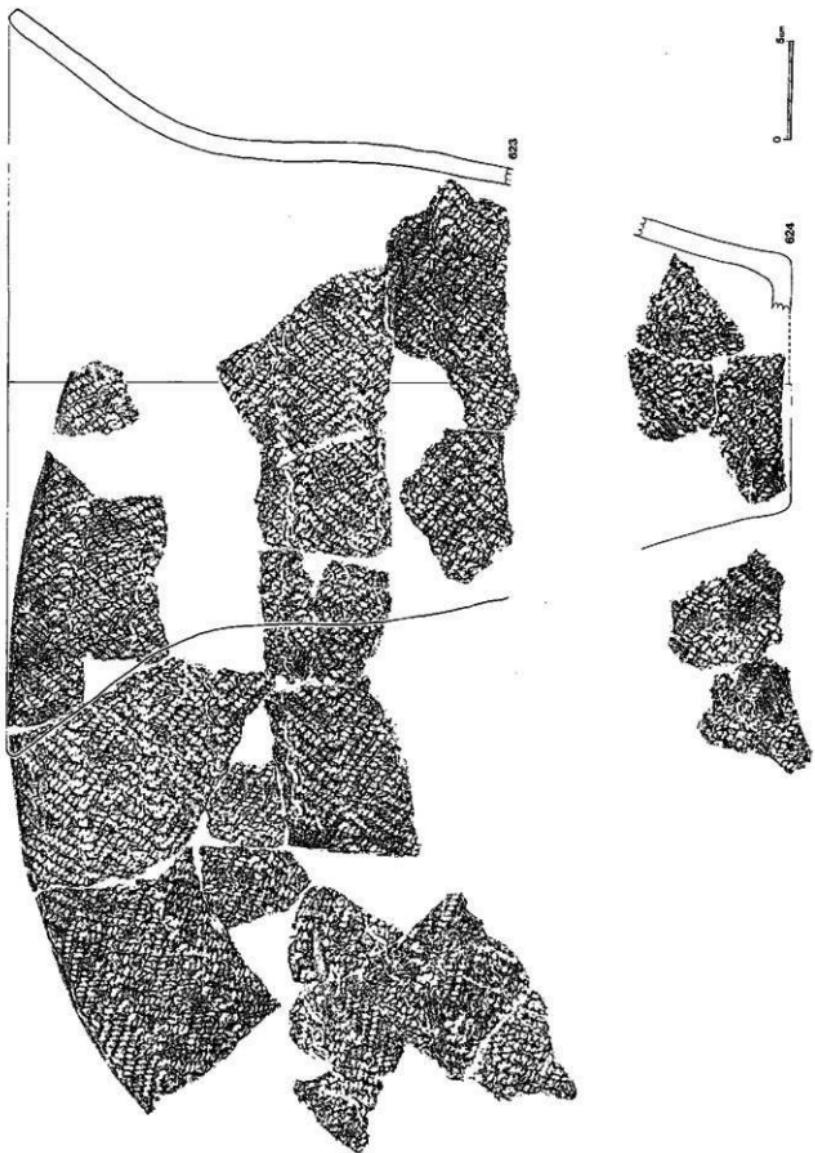
0 5cm

図版42 市道遺跡の縄文土器(42)

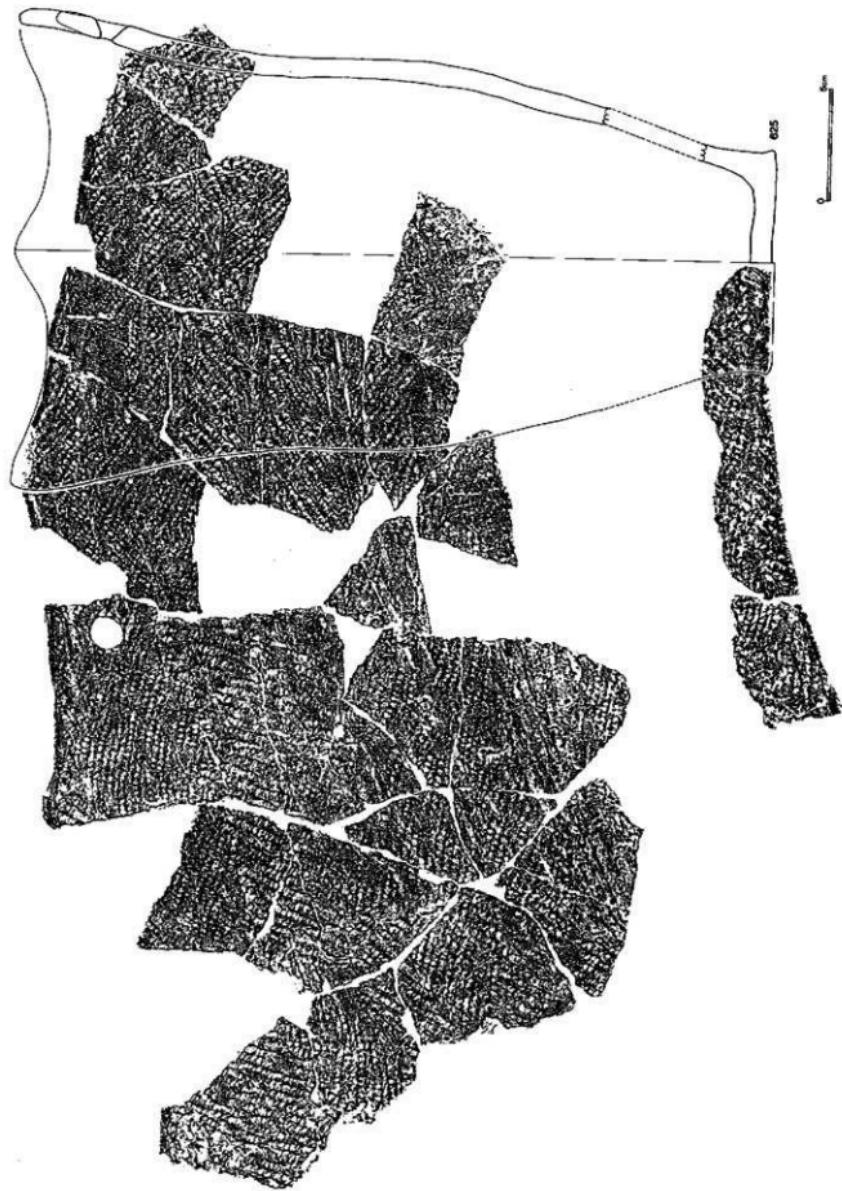


図版43 市道遺跡の編文土器(43)

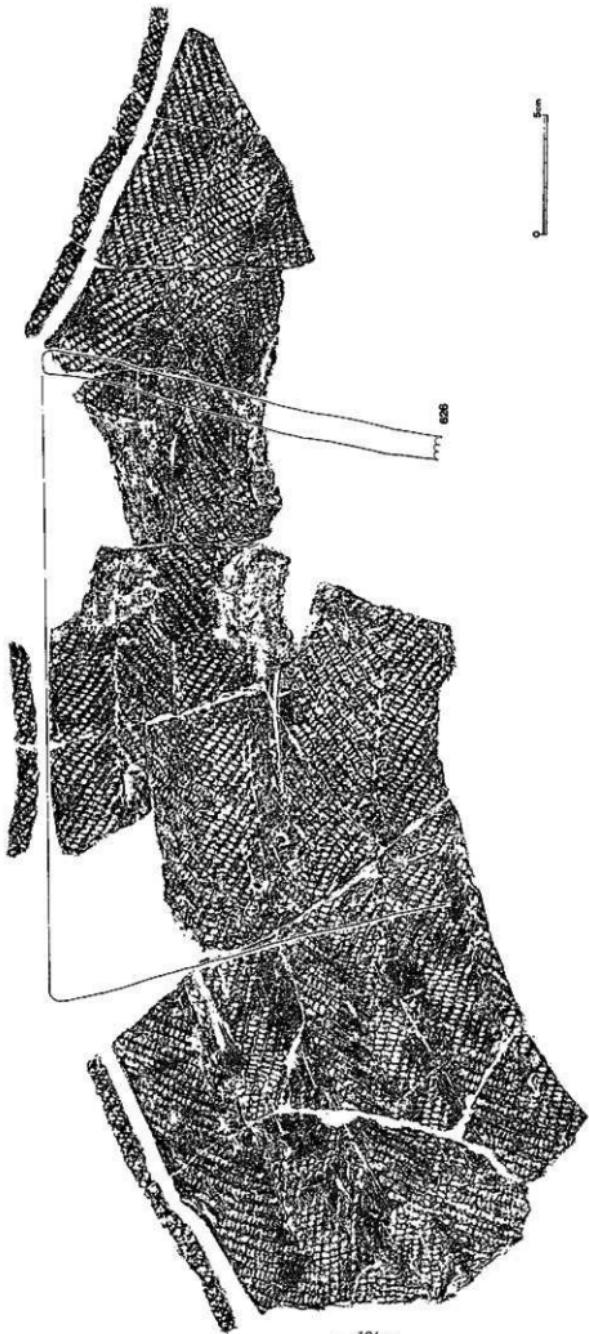




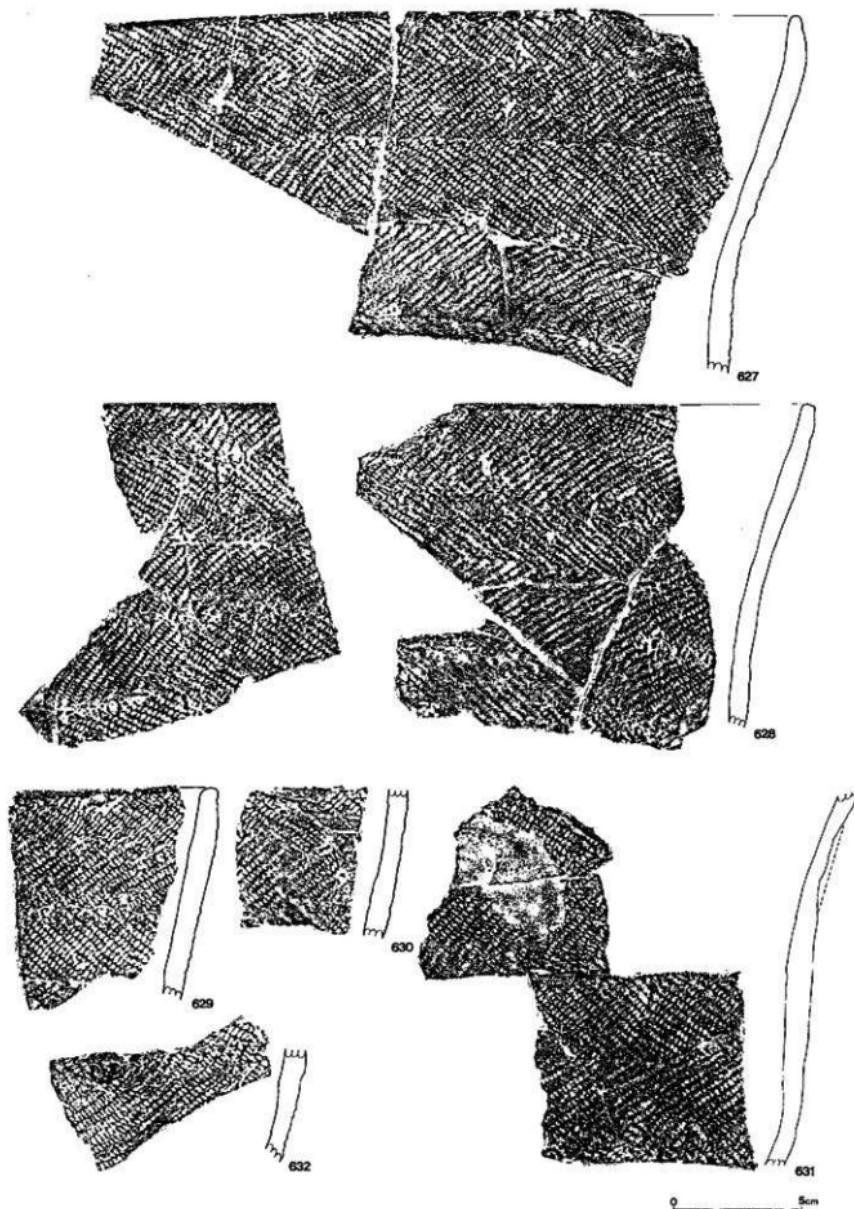
図版44 市道遺跡の縄文土器(44)



図版45 市道塗跡の欄文土器(45)



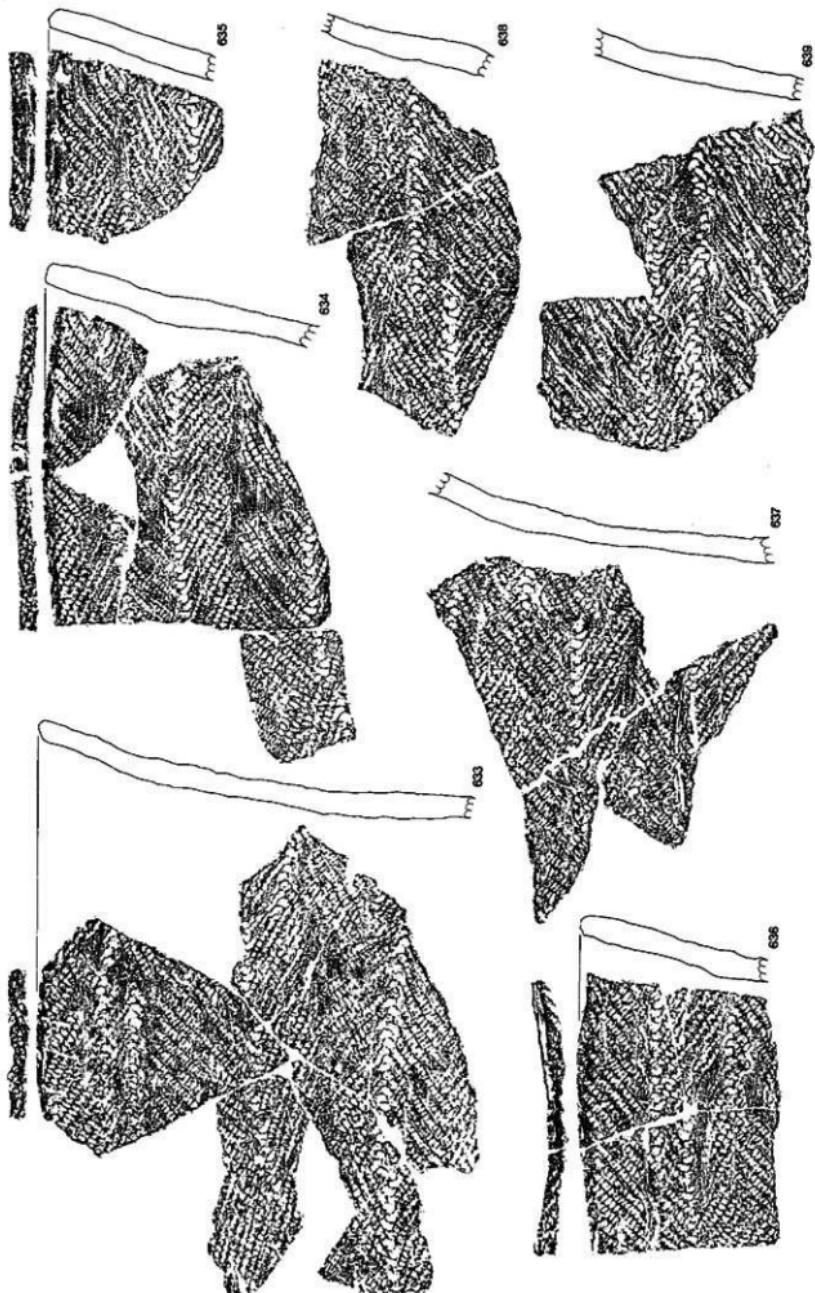
図版46 市道遺跡の縄文土器(46)

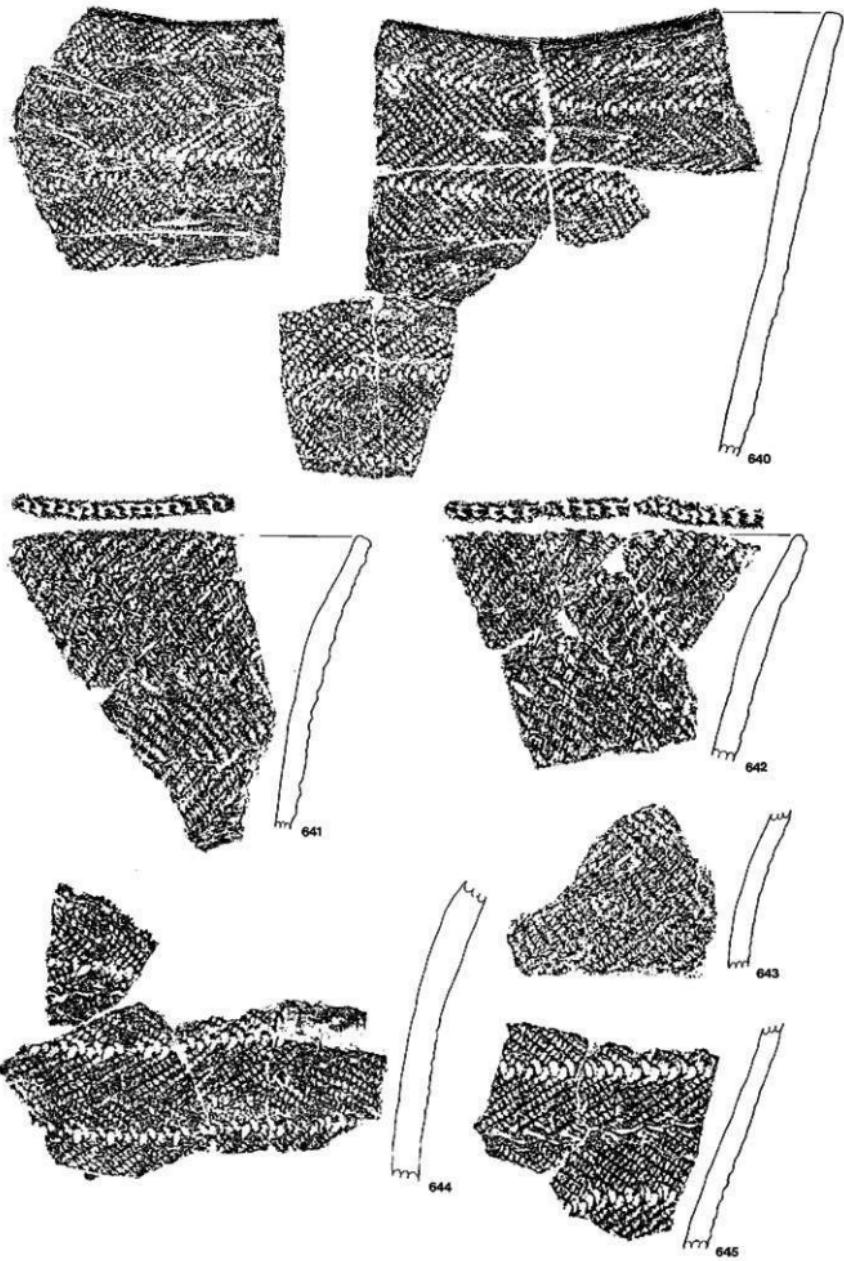


図版47 市道遺跡の純文土器(47)

5mm

図版48 市道遺跡の縄文土器(48)





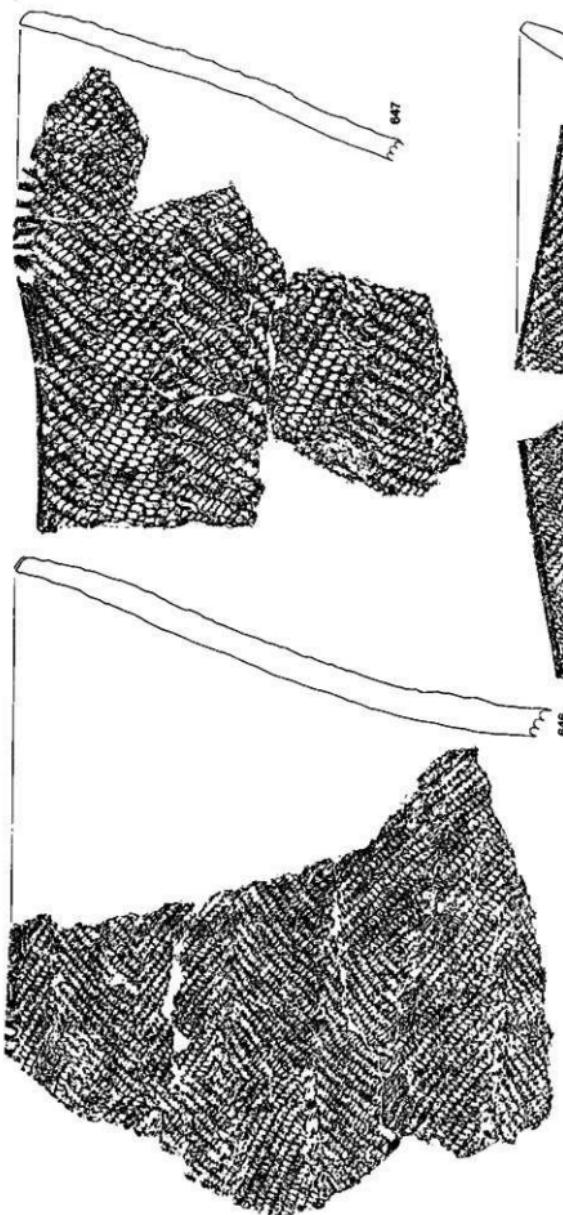
図版49 市道遺跡の縞文土器(49)

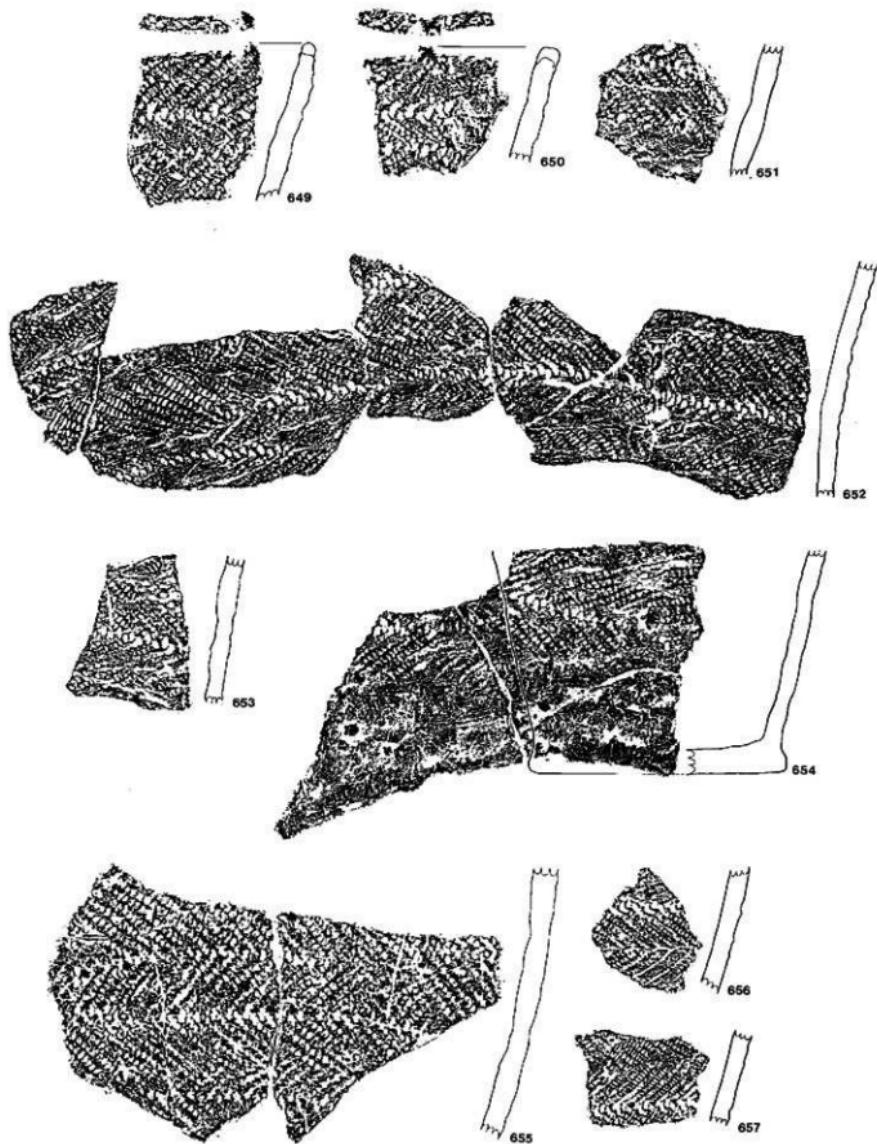
0 5cm

5cm

m

図版50 市道遺跡の縄文土器(50)

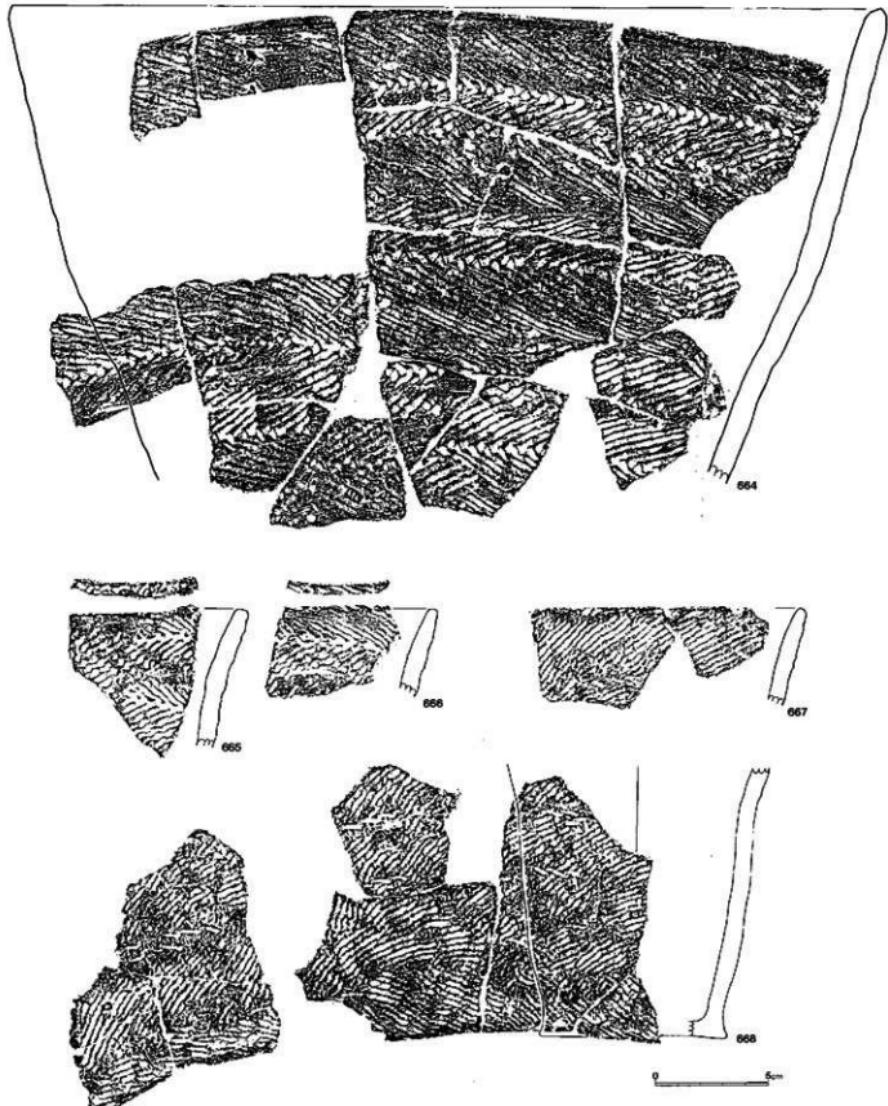




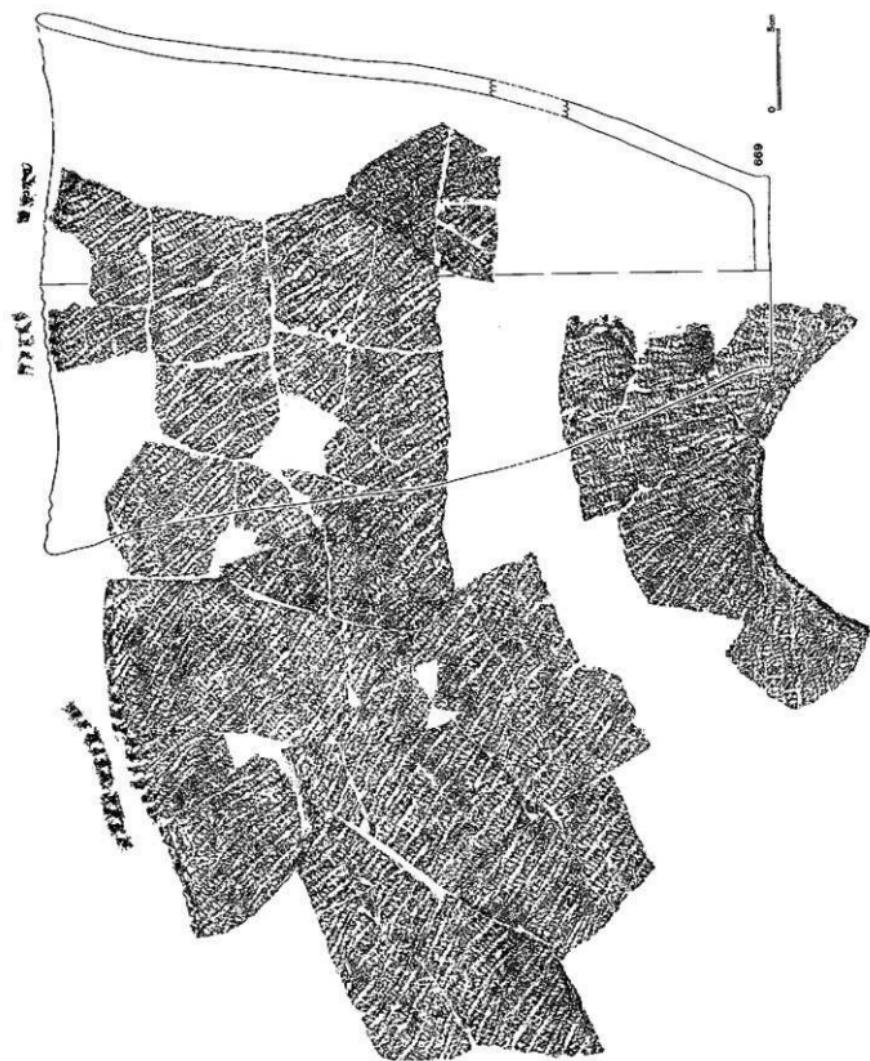
図版51 市道遺跡の縄文土器(51)

図版 52 市道遺跡の縄文土器(52)





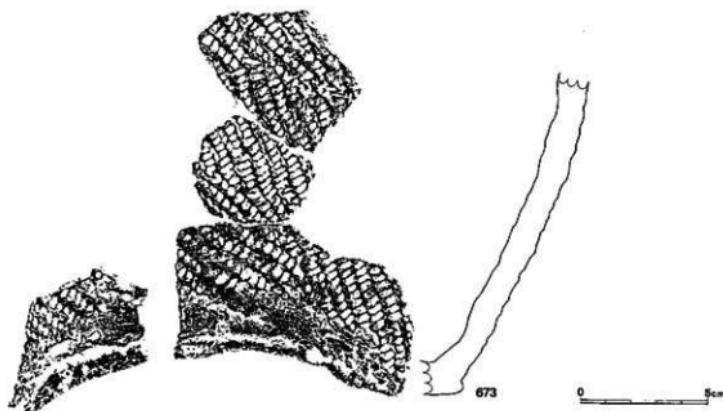
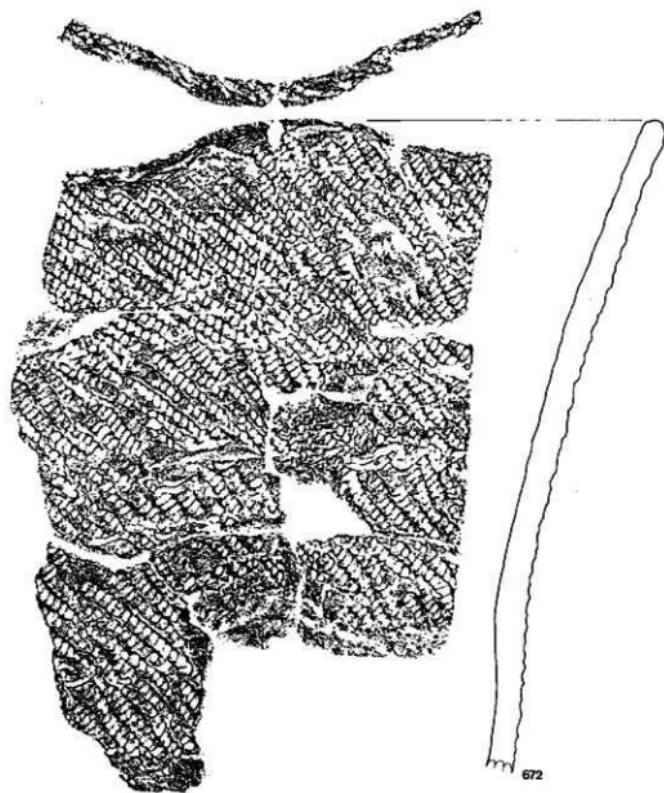
図版53 市道遺跡の縄文土器(53)



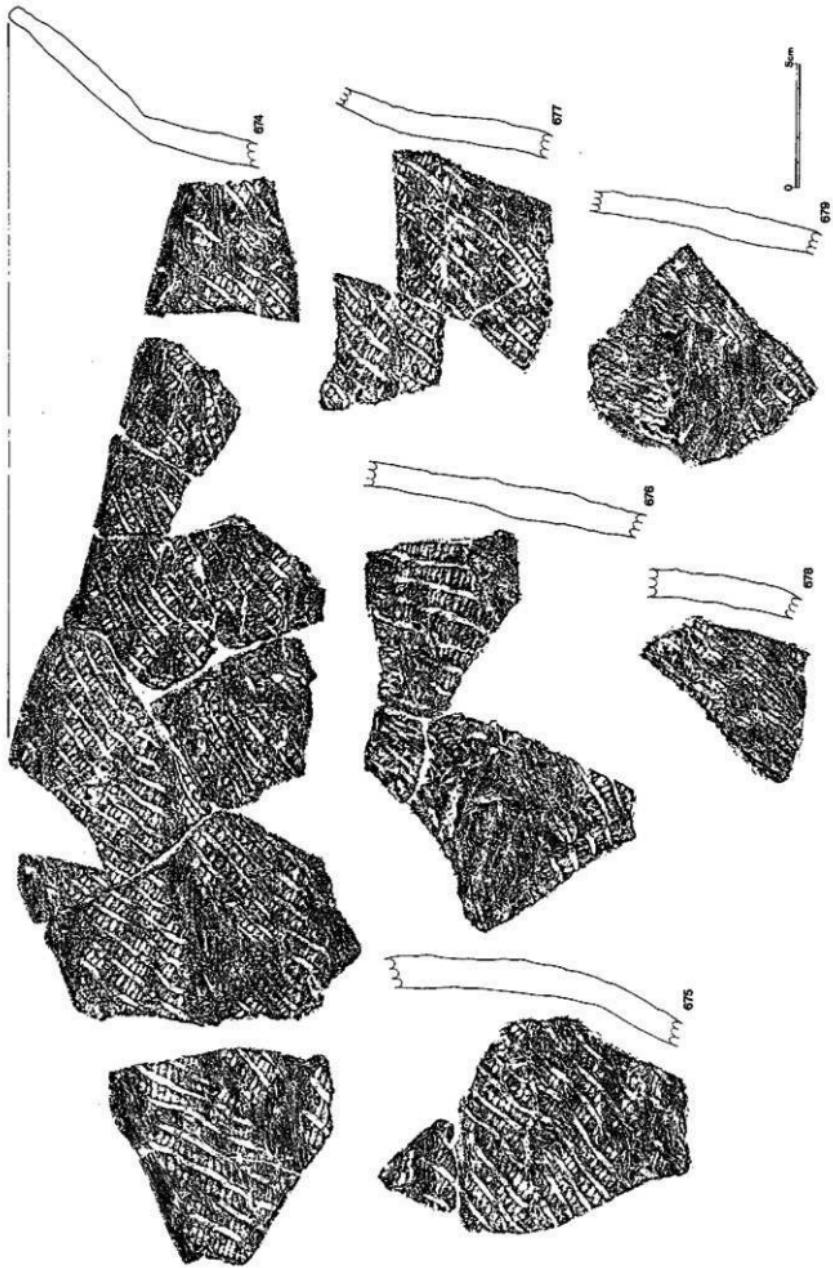
図版54 市道遺跡の縄文土器(54)



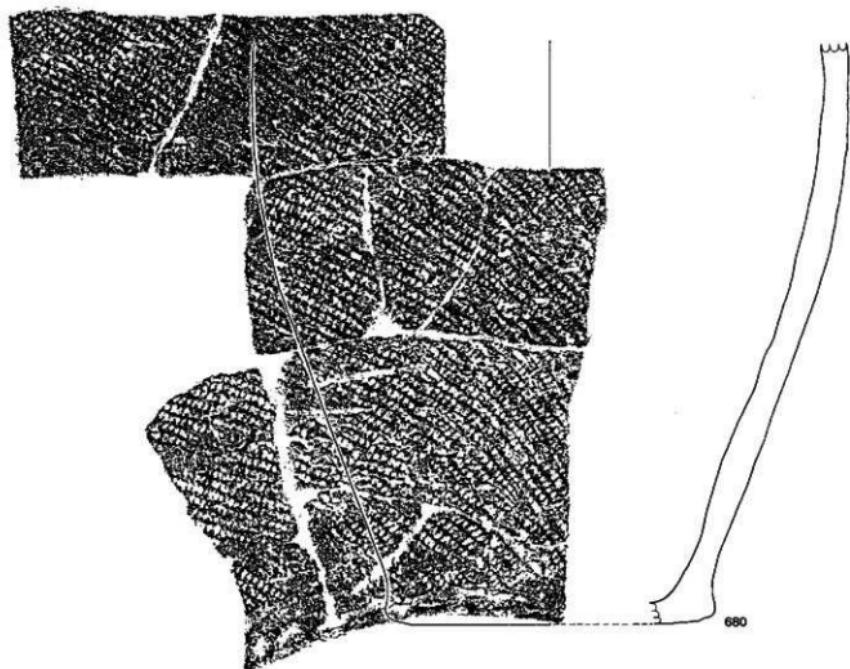
図版55 市道遺跡の縄文土器(55)



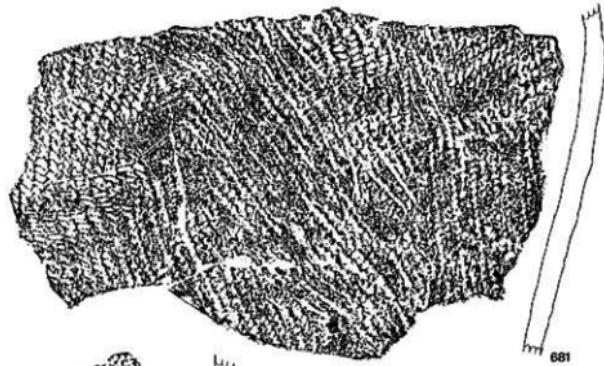
図版56 市道遺跡の構文土器(56)



図版57 市道遺跡の縞文土器(57)



680



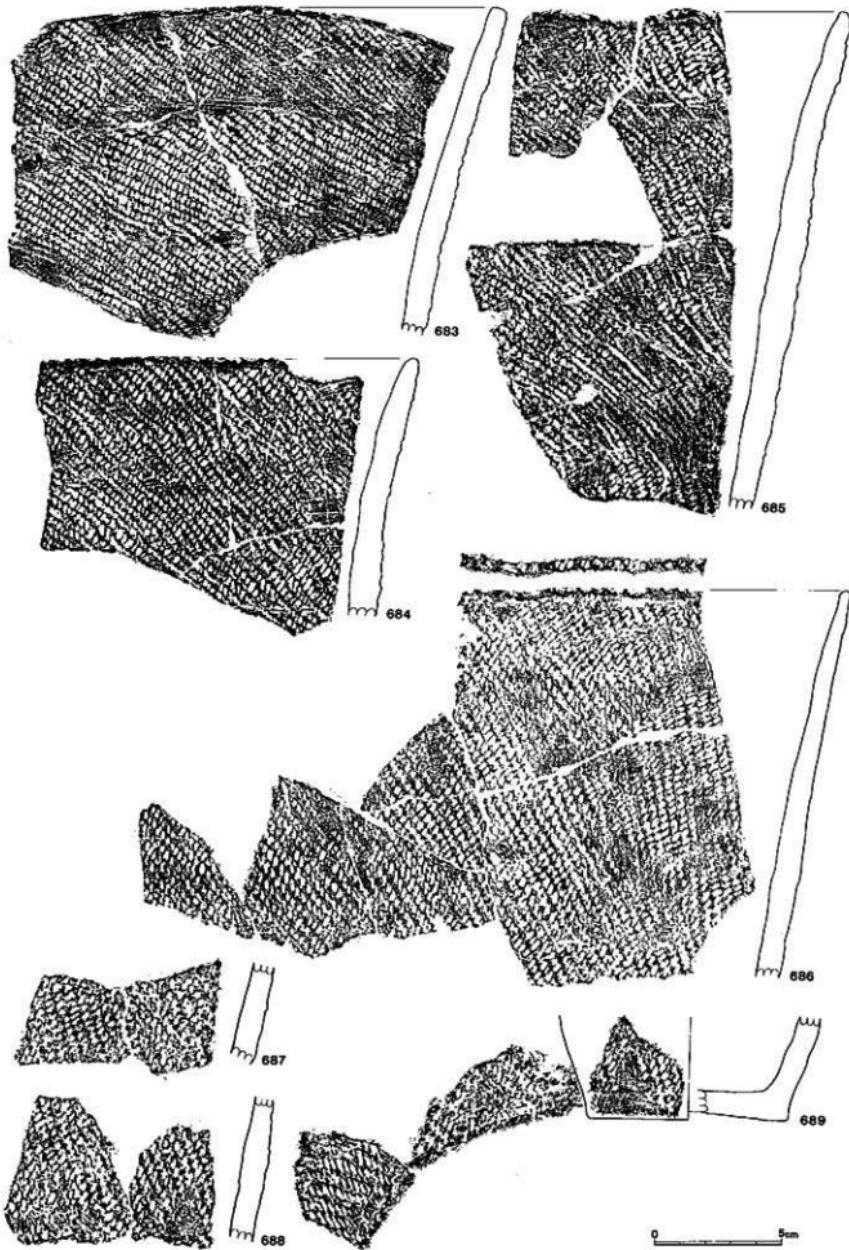
681



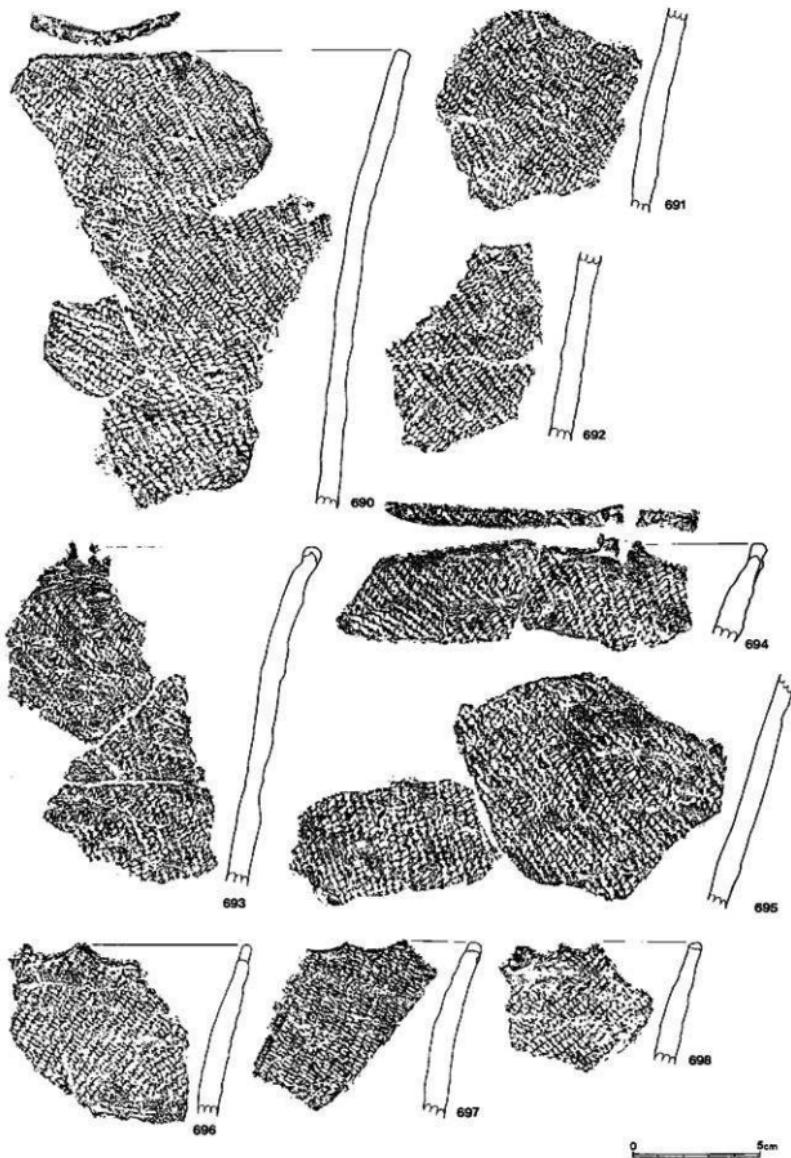
682

0 5cm

図版58 市道遺跡の縄文土器(58)

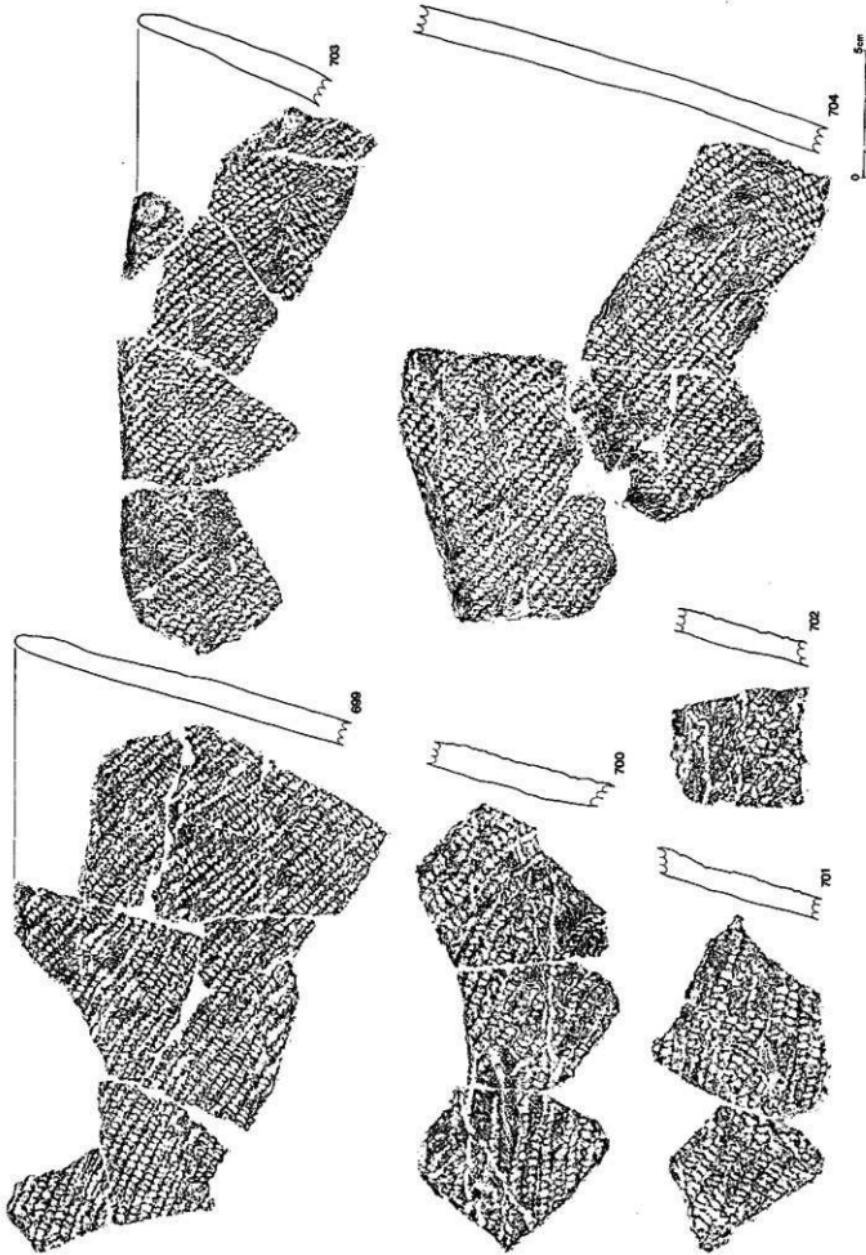


図版59 市道遺跡の網文上器(59)

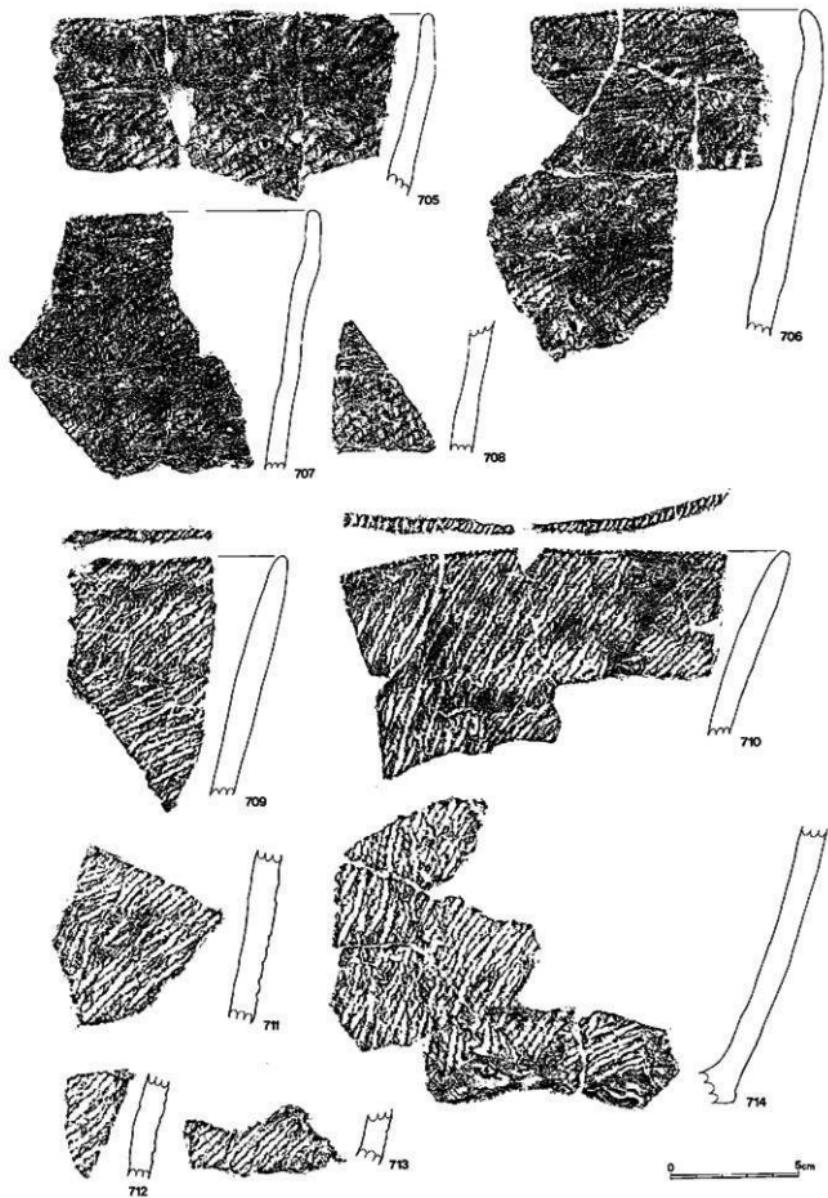


0 5cm

図版60 市道遺跡の縄文土器(60)

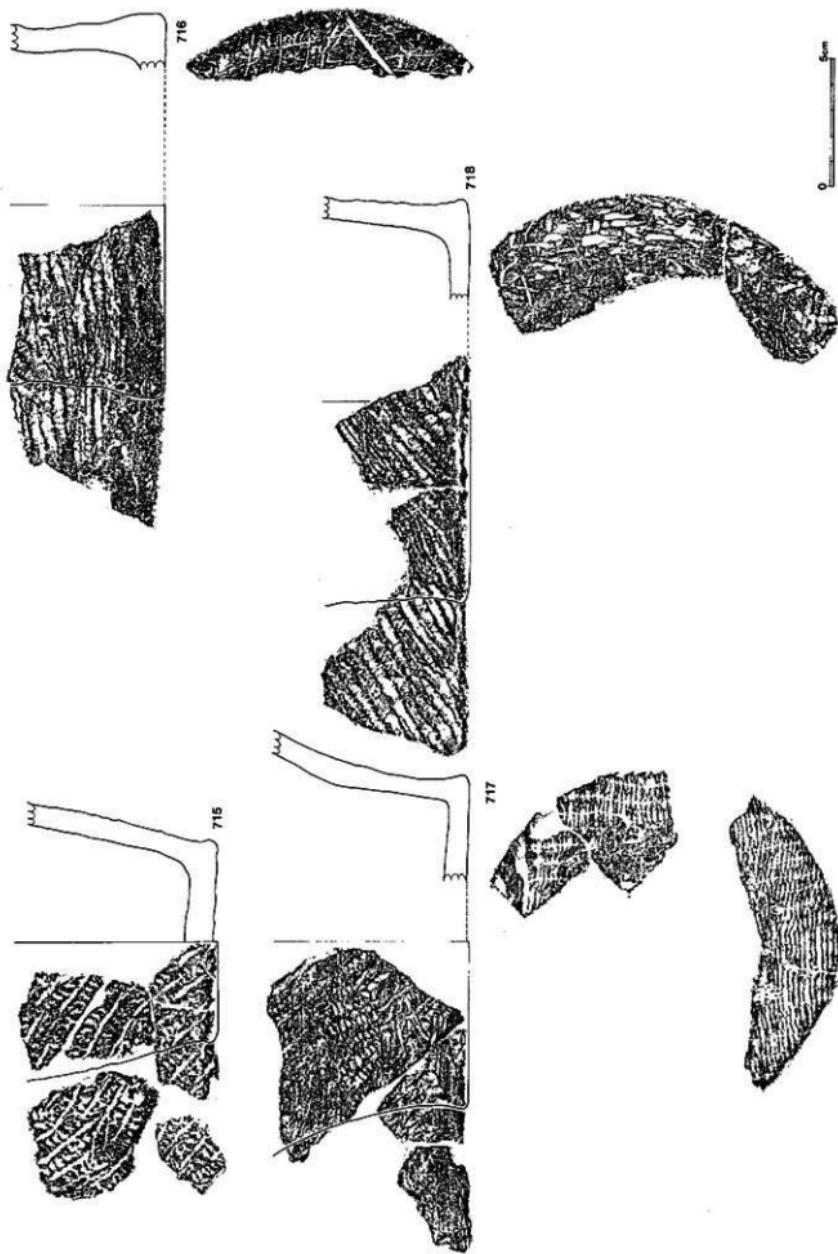


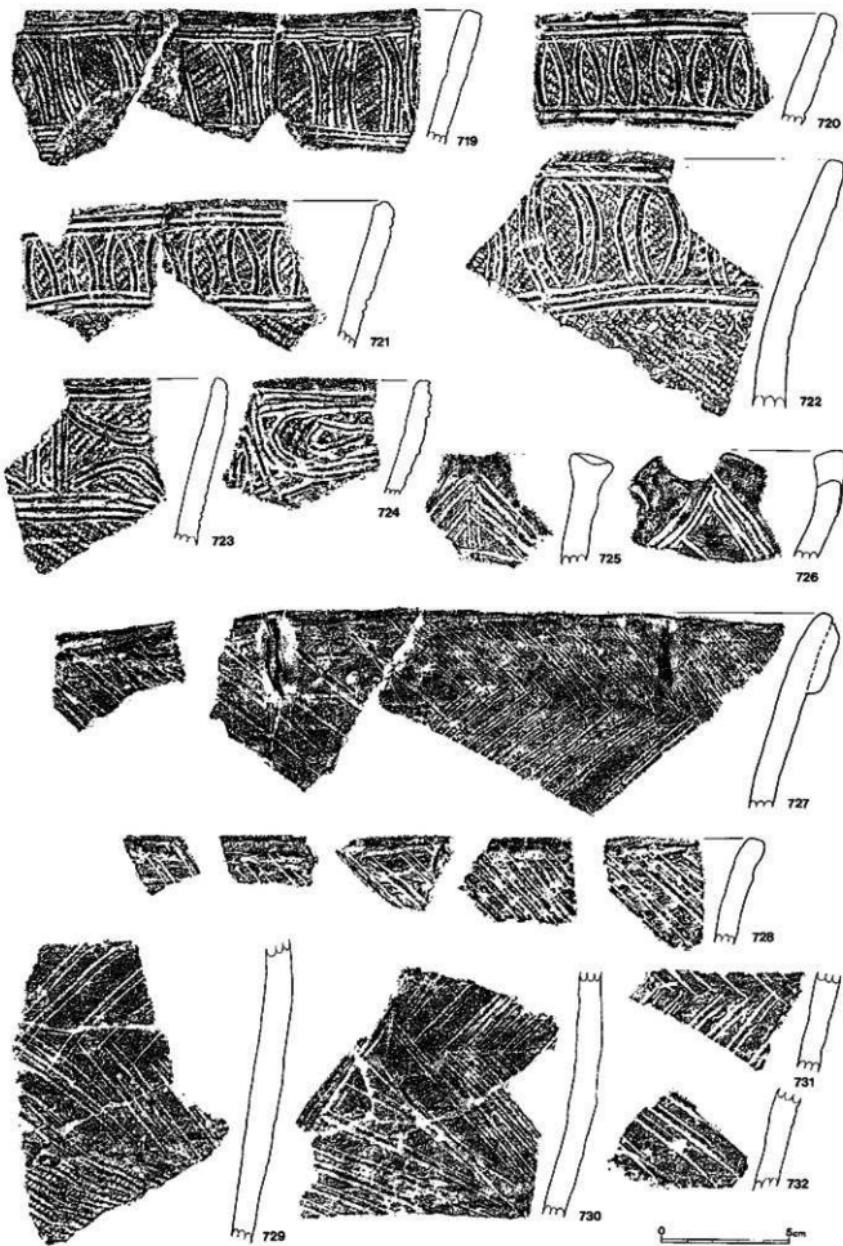
図版60 市道遺跡の縄文土器(60)



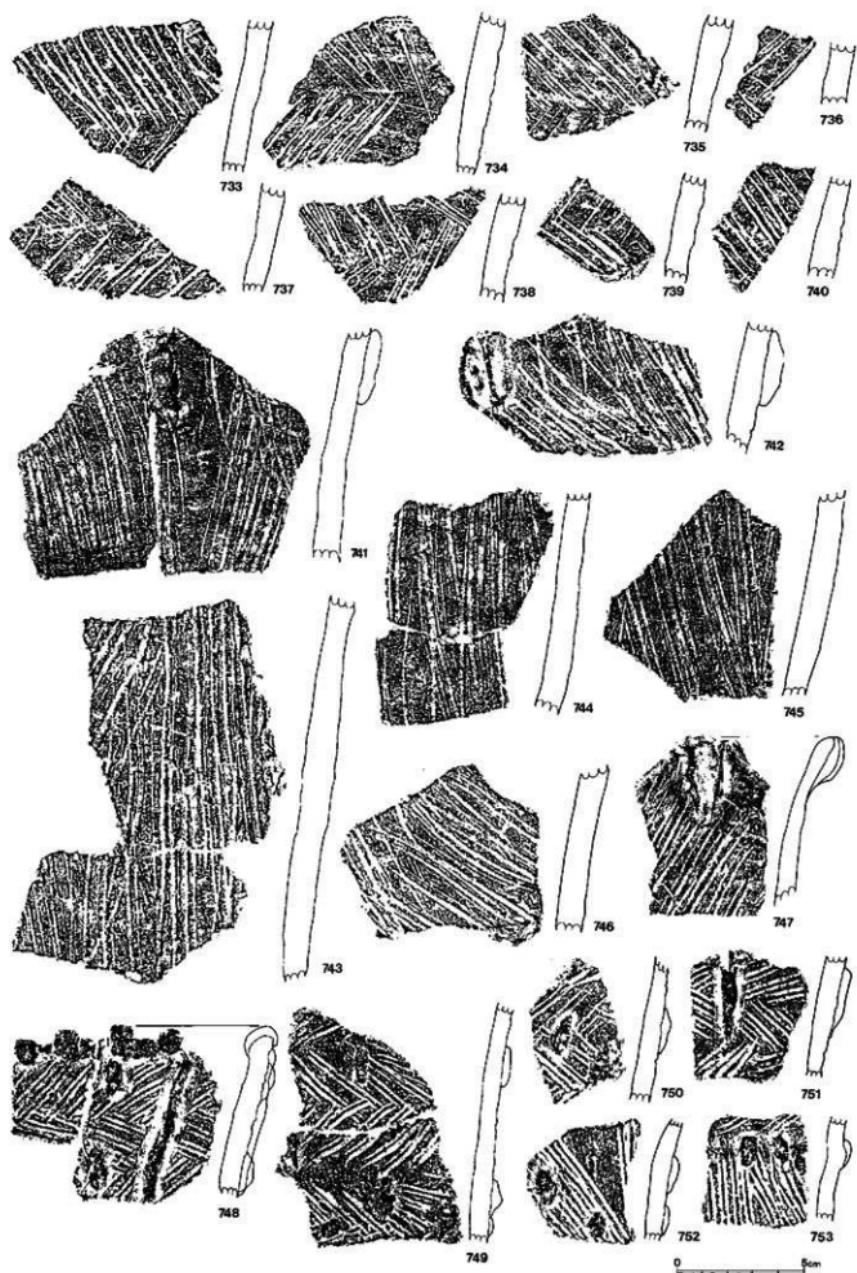
図版62 市道遺跡の縄文土器(62)

図版63 市道遺跡の縄文土器(63)

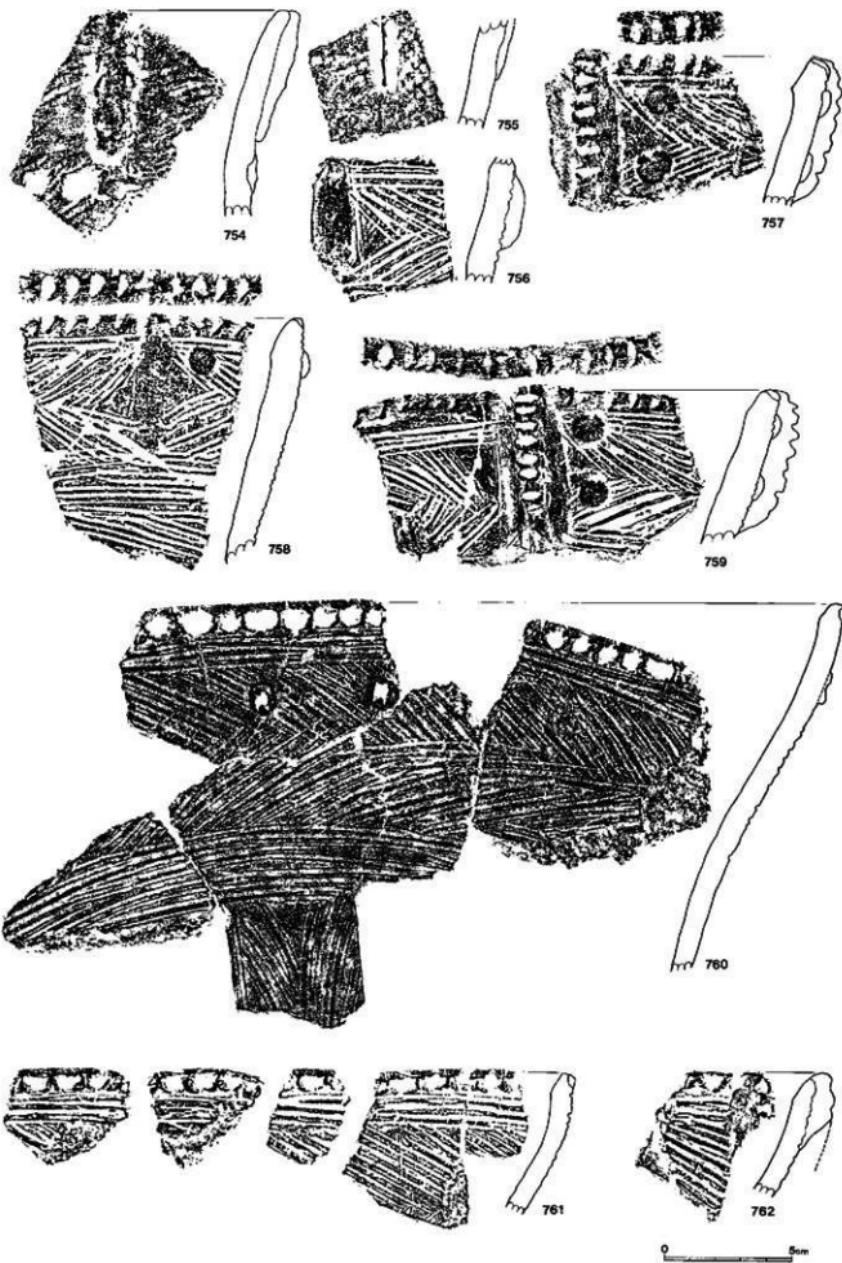




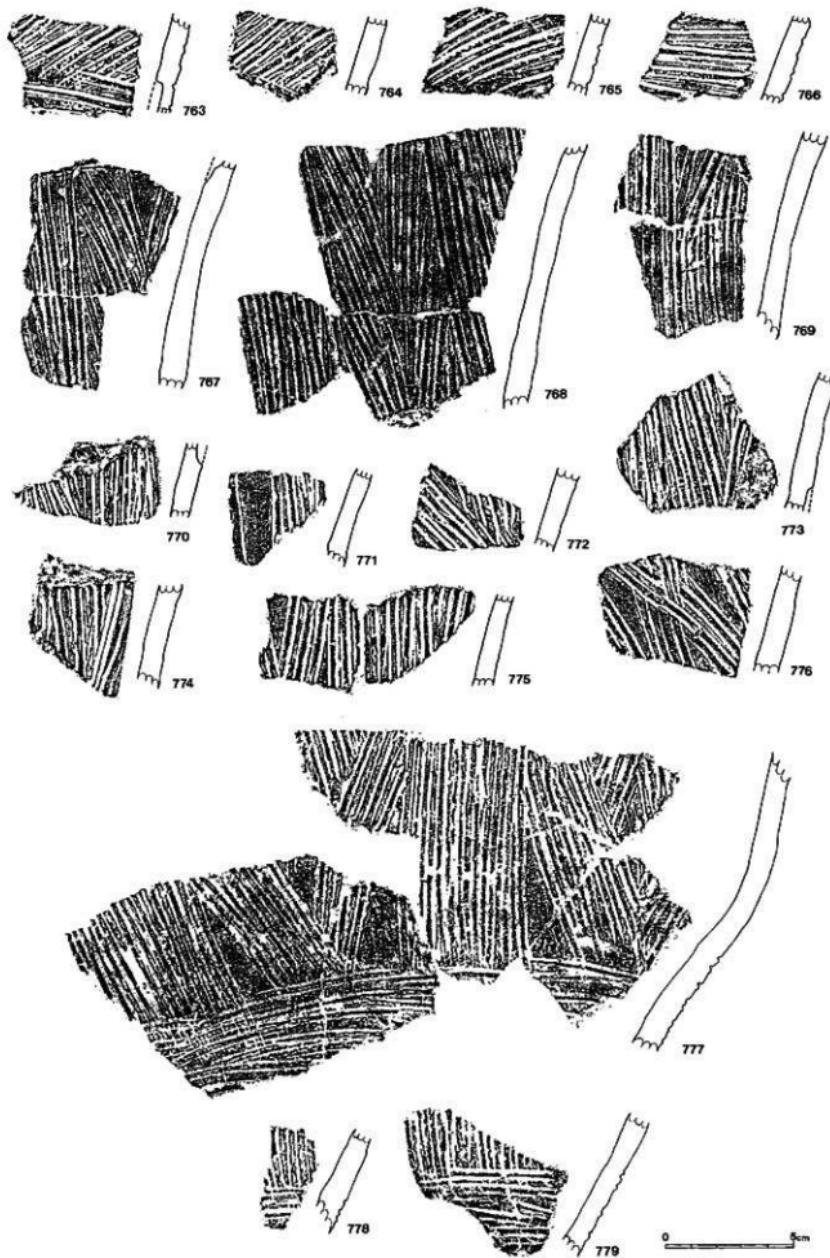
図版64 市道遺跡の縄文土器(64)



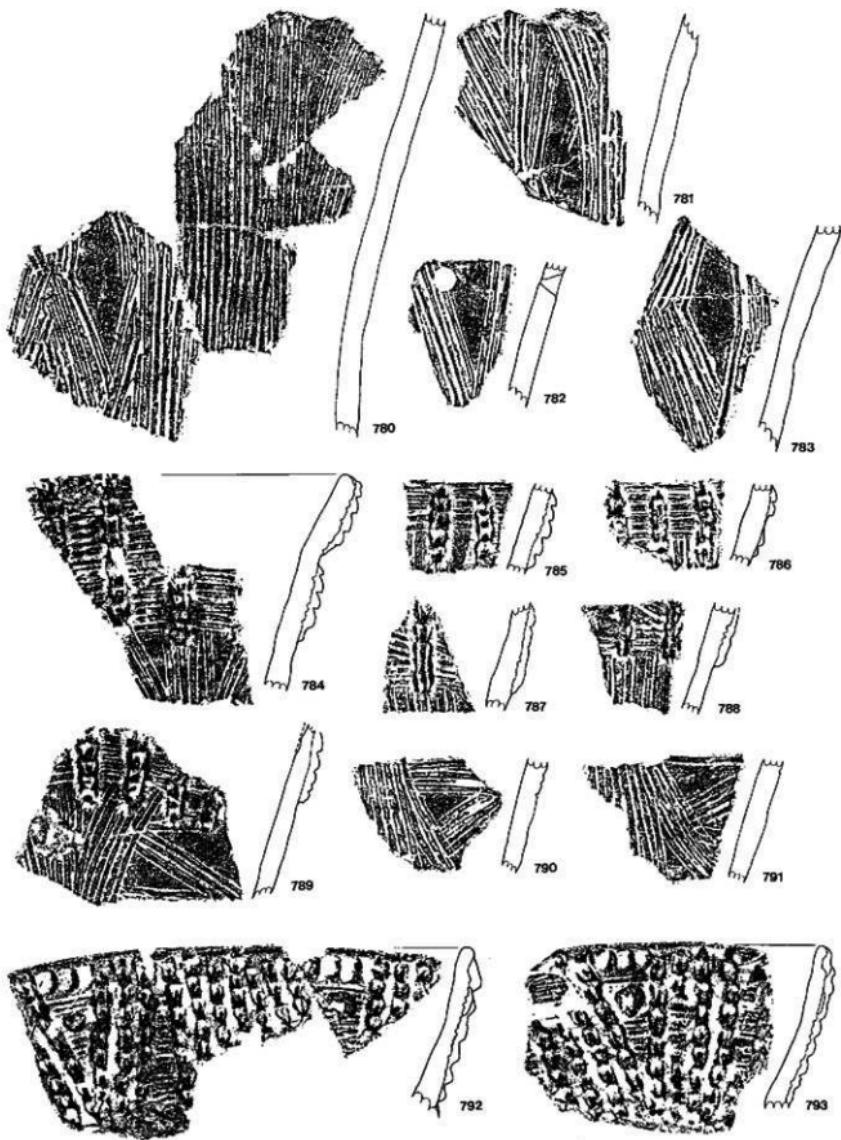
図版65 市道遺跡の縄文土器(65)



図版66 市道遺跡の攢文土器(86)

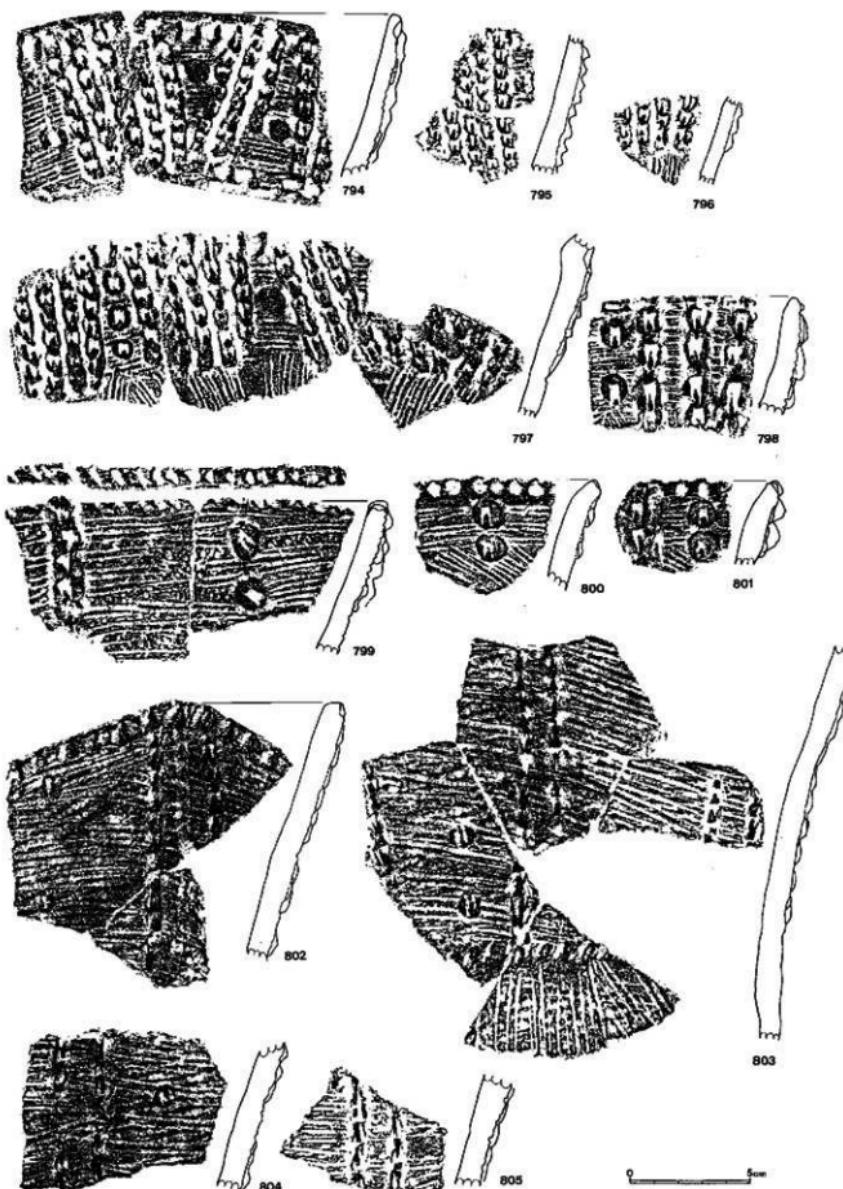


図版67 市道遺跡の網文土器(87)

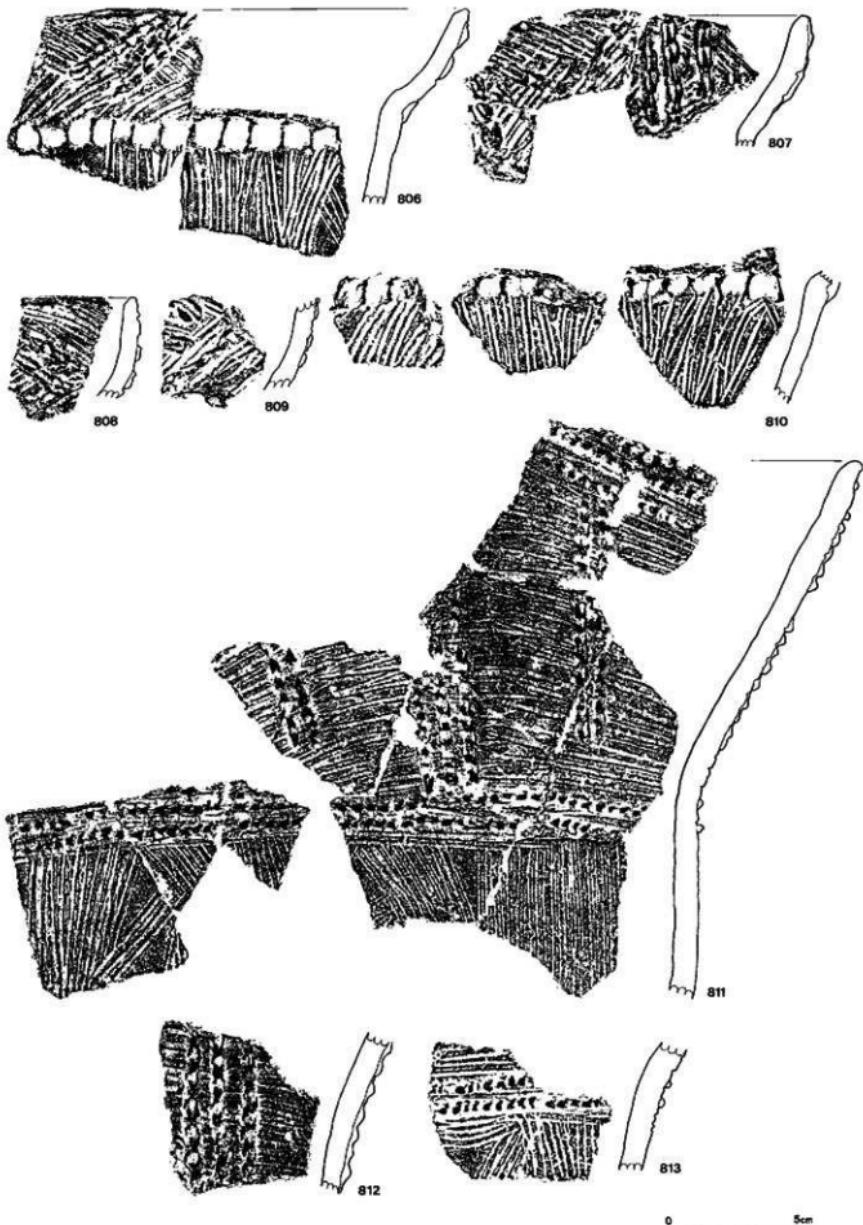


0 5cm

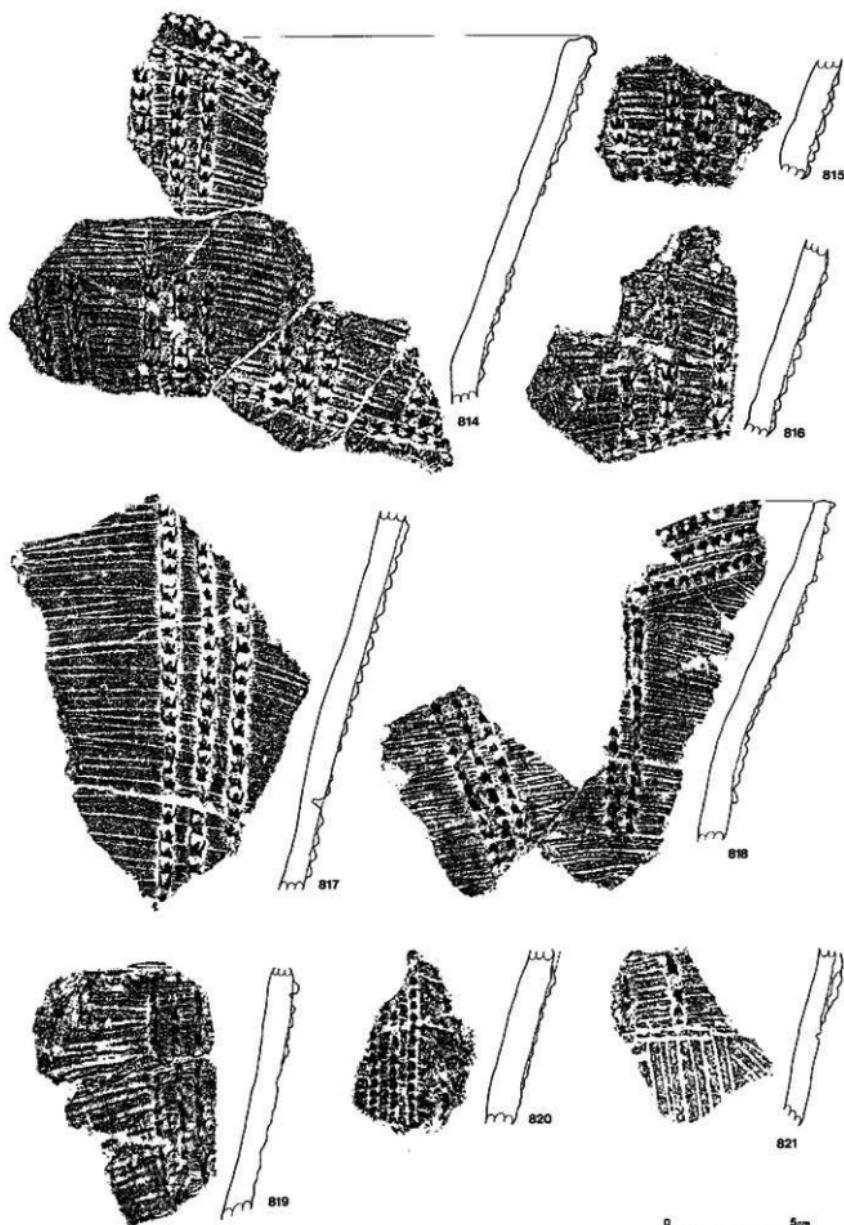
図版68 市道遺跡の縞文土器(68)



図版69 市道遺跡の縄文土器(89)

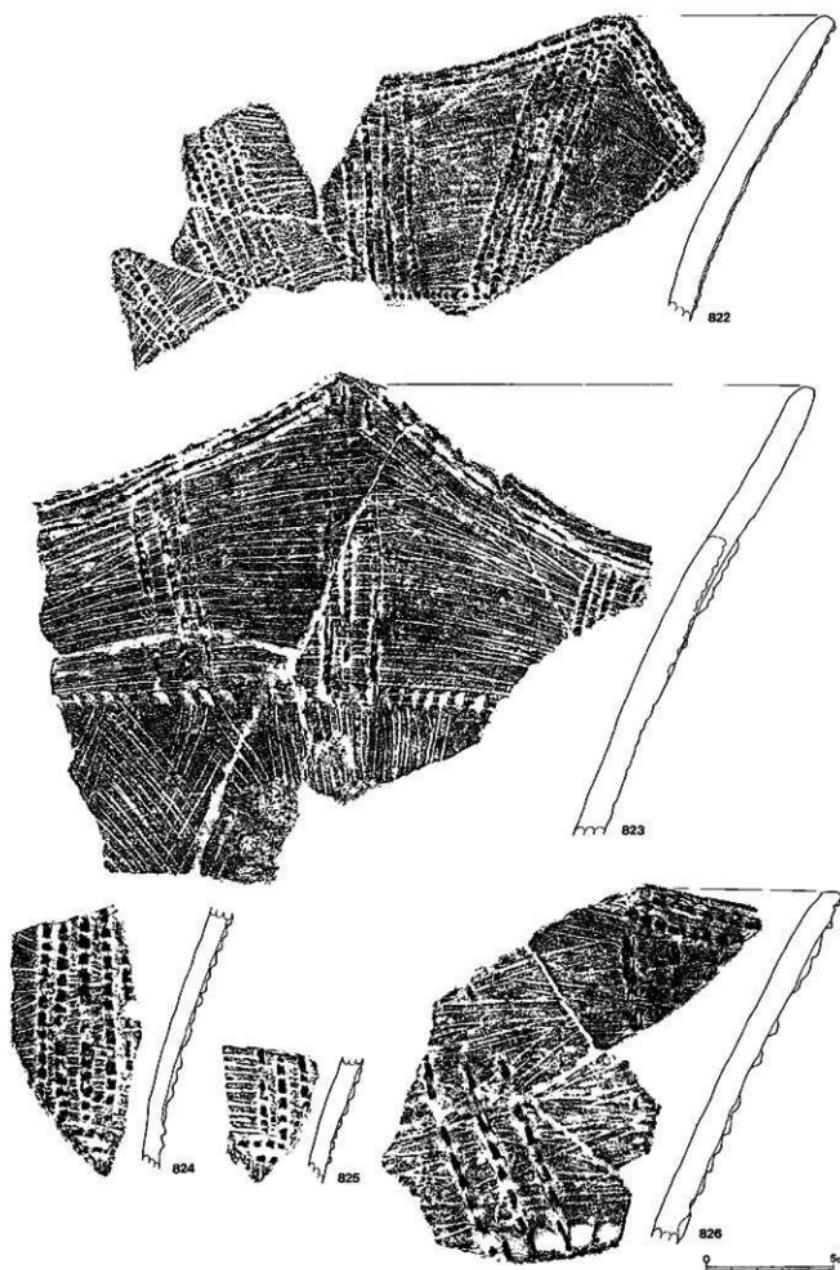


図版70 市道遺跡の縄文土器(70)



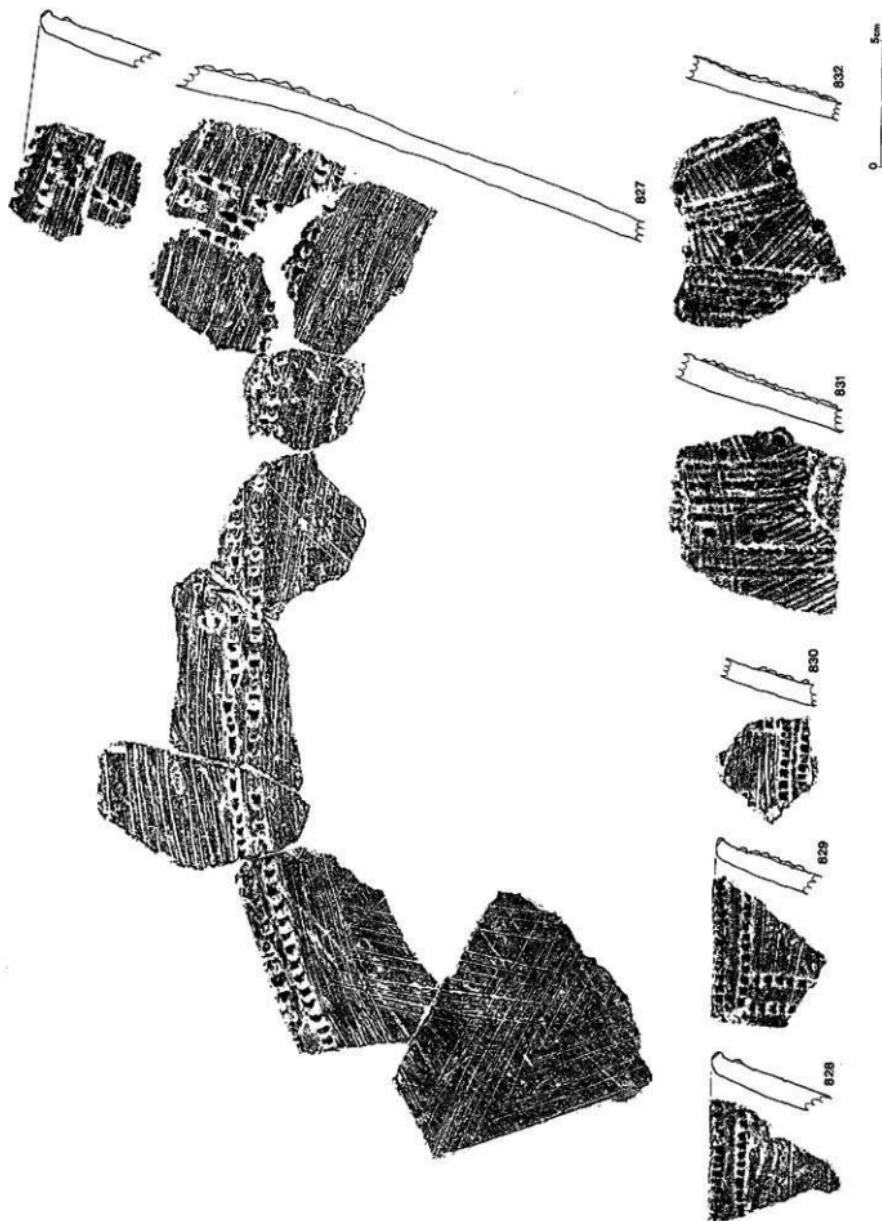
0 5cm

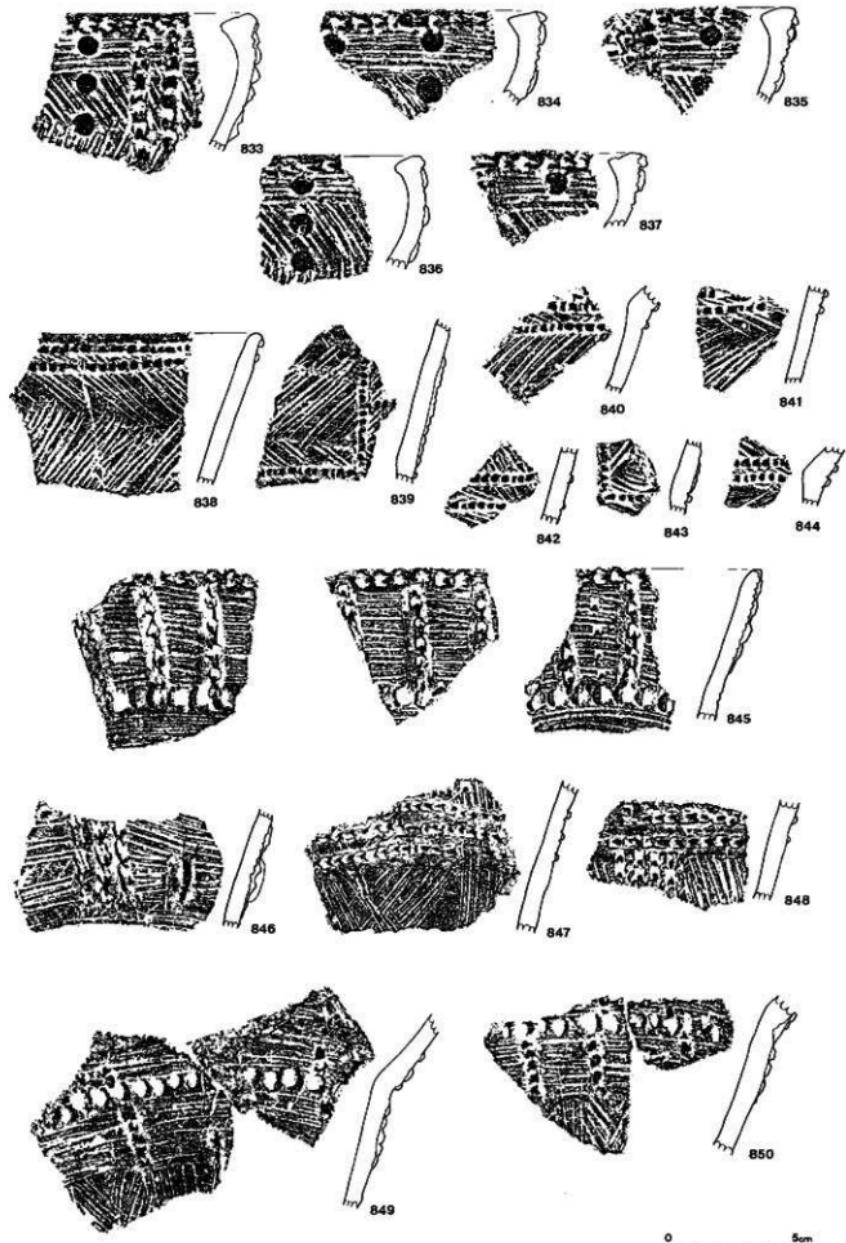
図版71 市道遺跡の縄文土器(71)



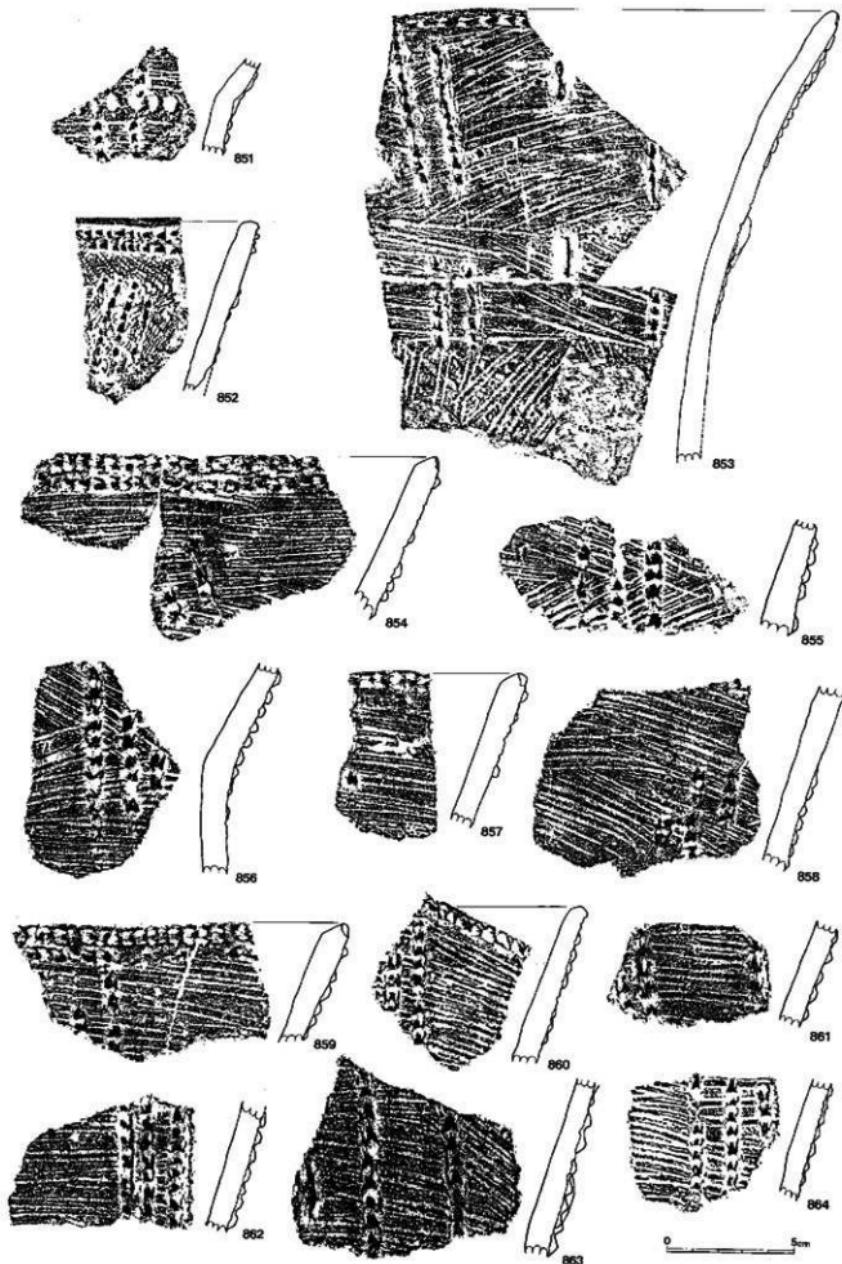
図版72 市道遺跡の純文土器(72)

図版73 市道遺跡の繩文土器(73)





図版74 市道遺跡の網文土器(74)



図版75 市道遺跡の縄文土器(75)



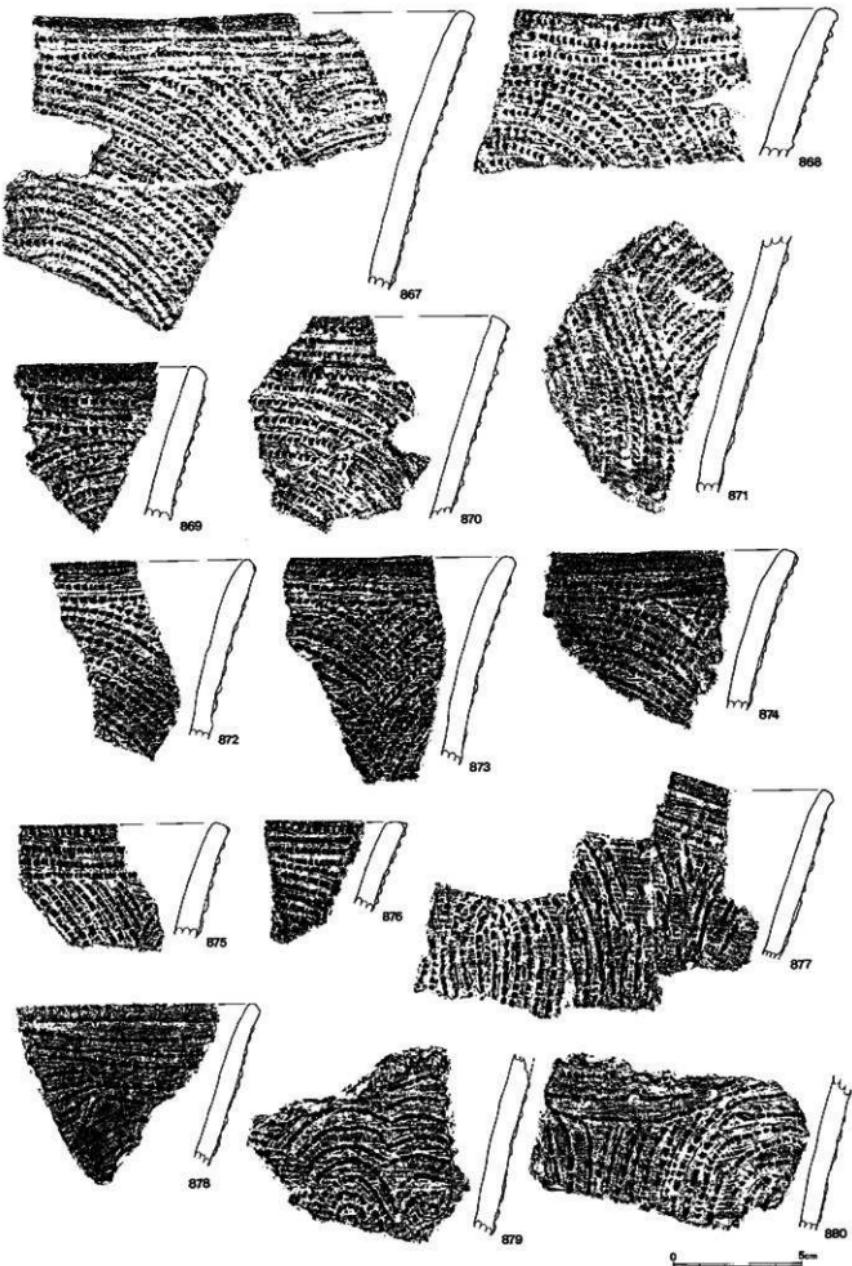
図版76 市道遺跡の陶文土器(76)

5mm

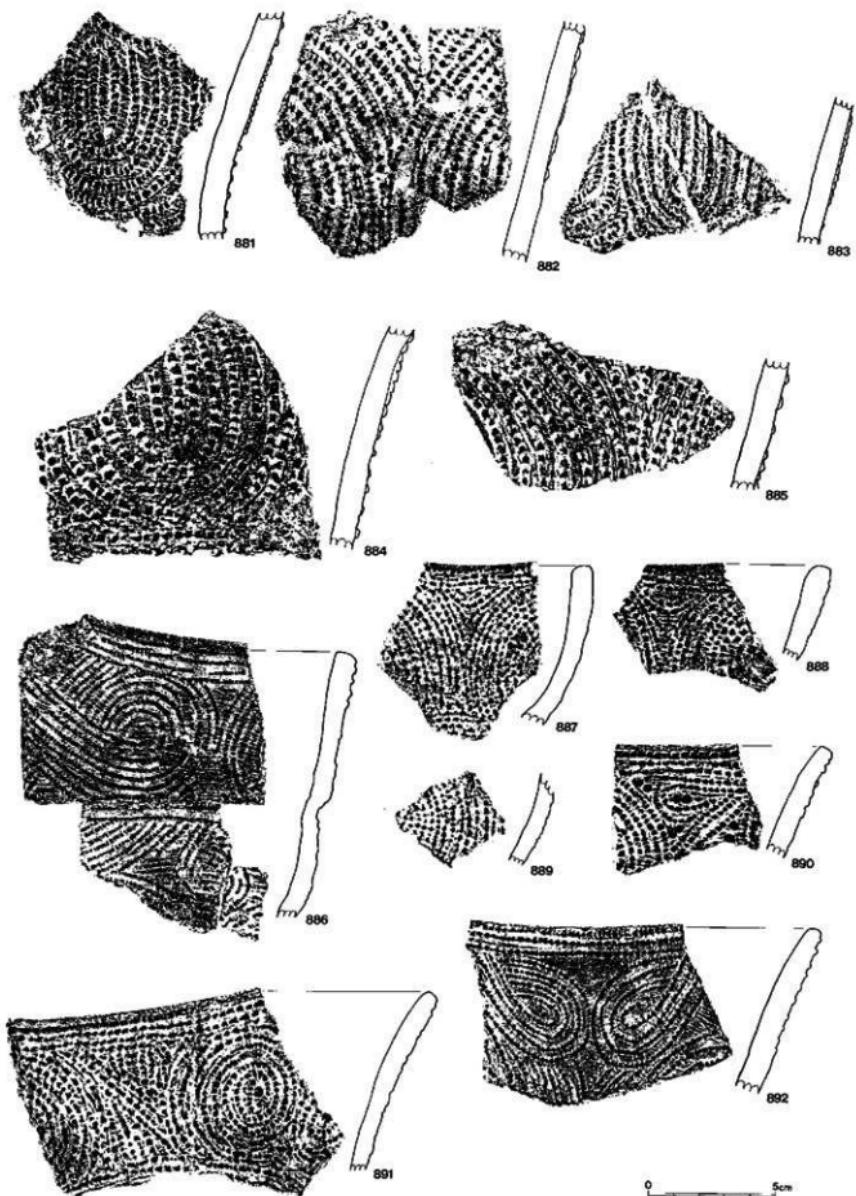
866

図版77 市道墓地の埴文土器(77)

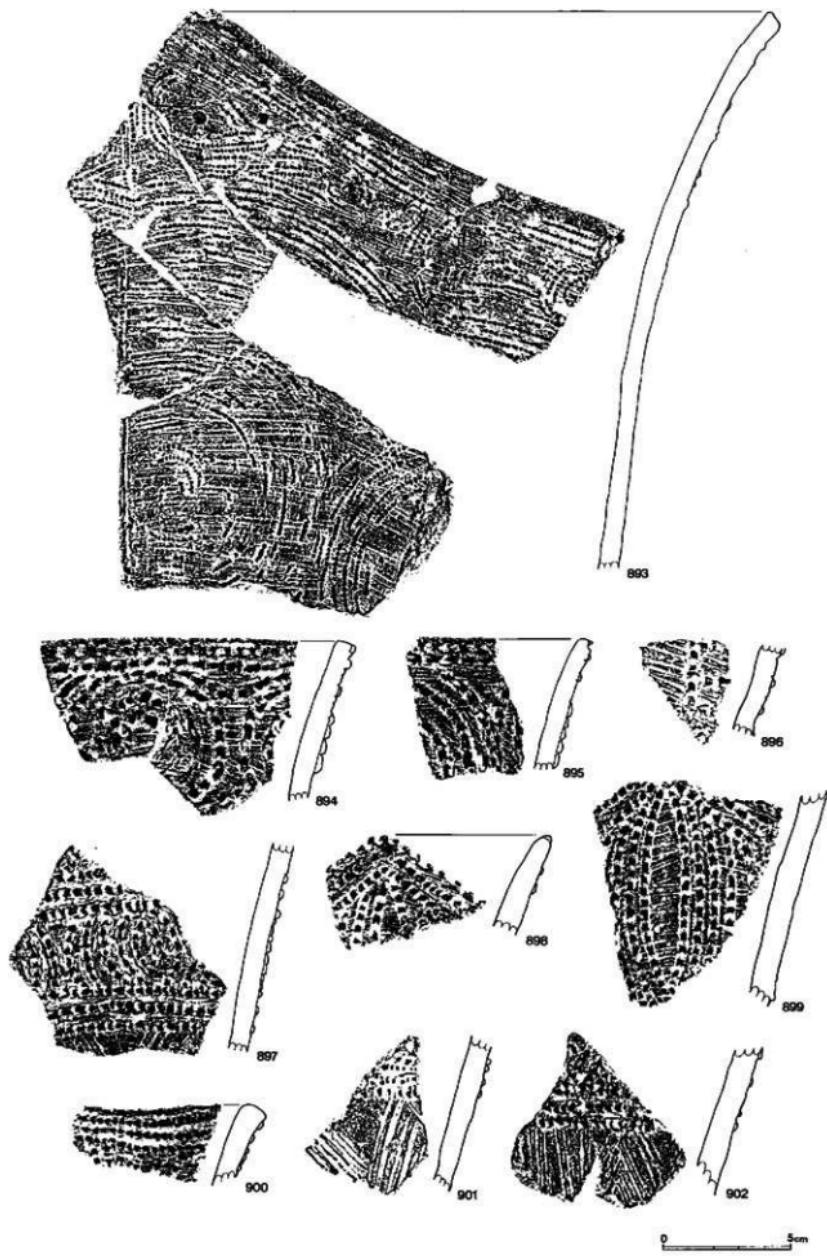




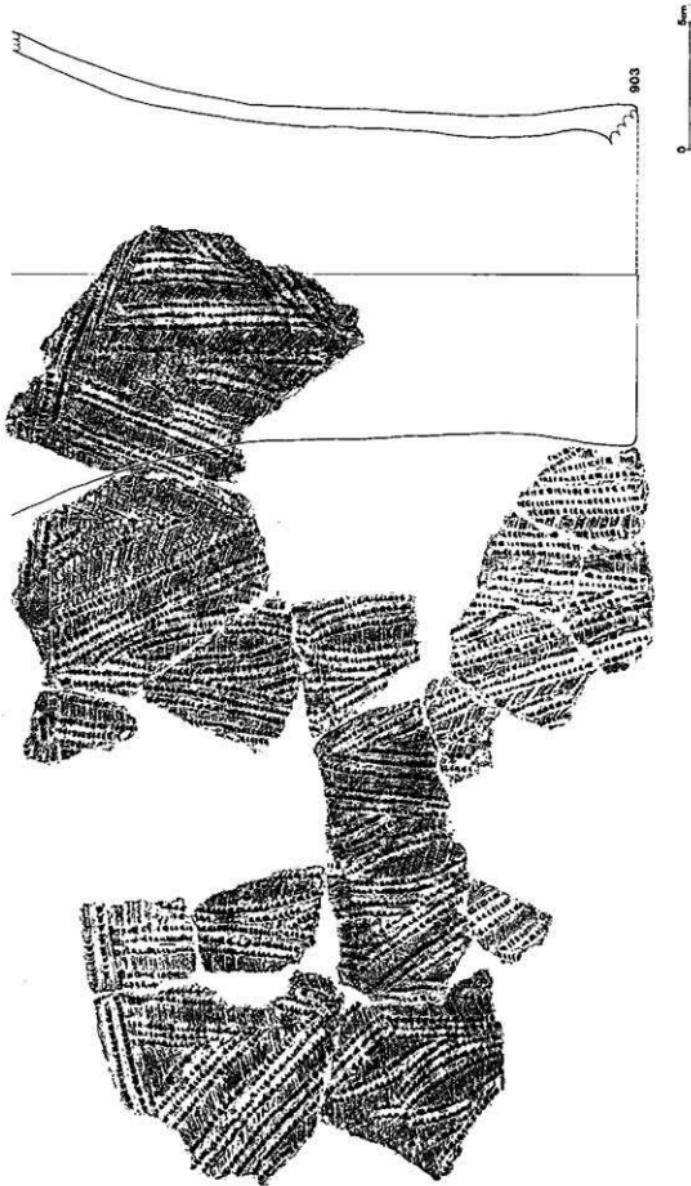
図版78 市道遺跡の縄文土器(78)



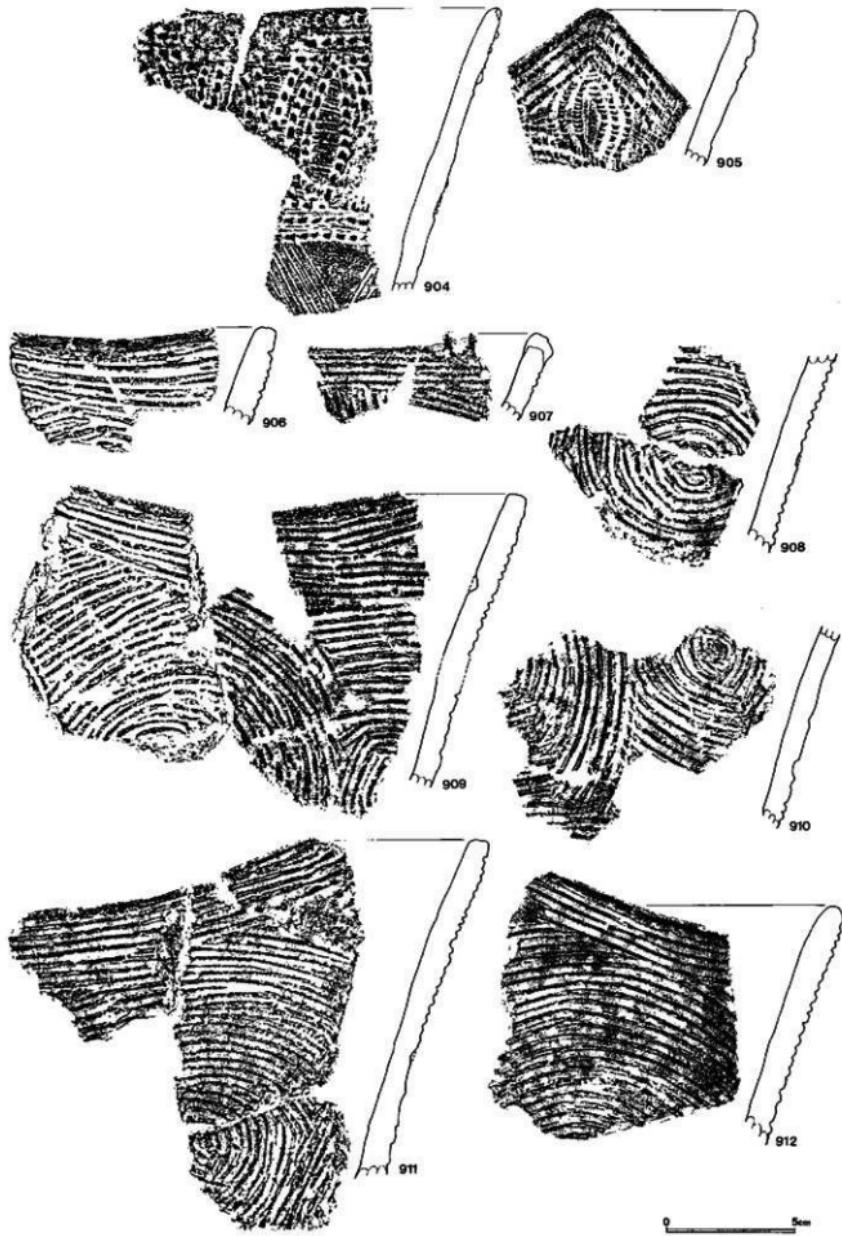
図版79 市道遺跡の縦文上器(79)



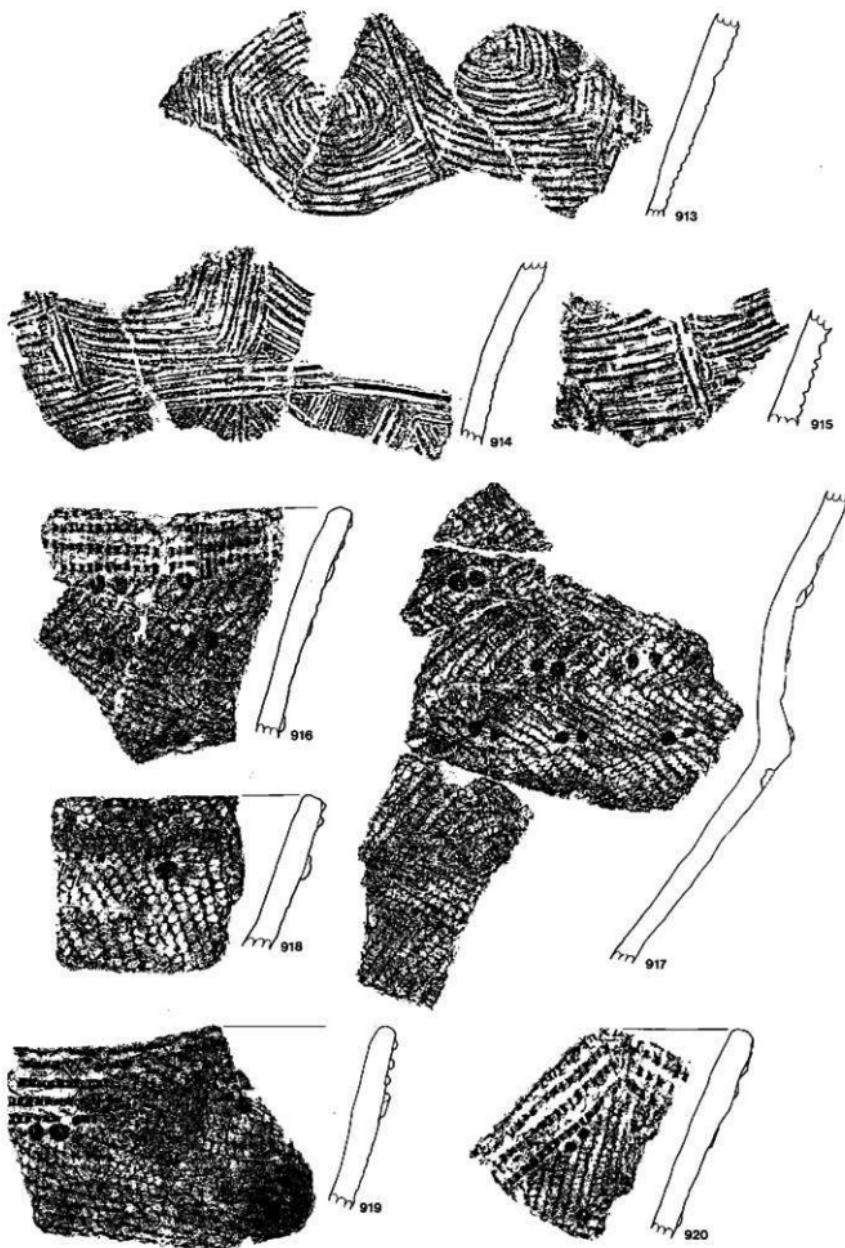
図版80 市造遺跡の縄文土器(80)



図版81 市道遺跡の繩文土器(81)



図版82 市道跡の縦文上器(82)



図版83 市道遺跡の縄文土器(83)

0 5cm